松山市文化財調査報告書 84

福音寺地区の遺跡 III

筋違L・N遺跡

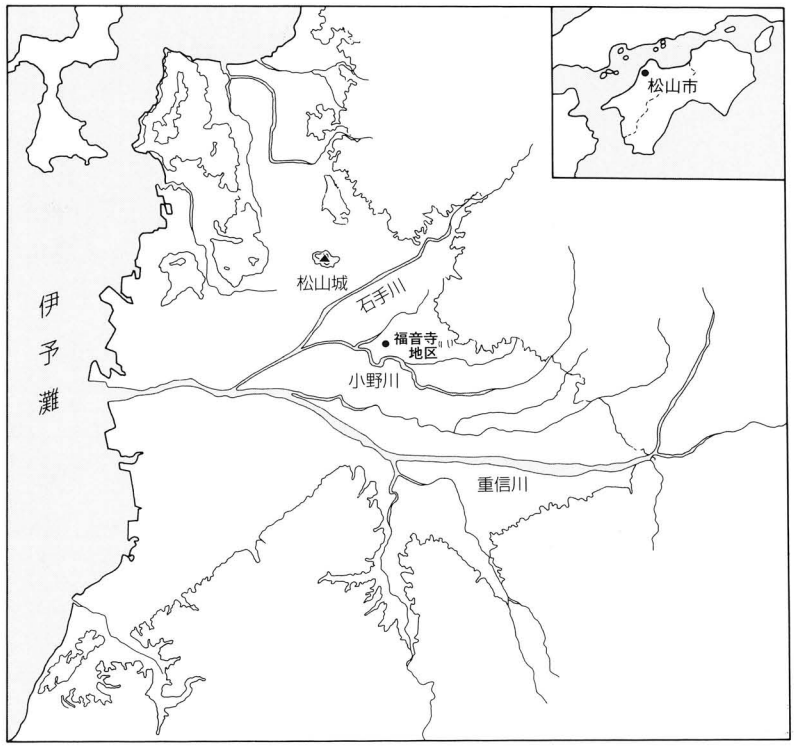
2001

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

福音寺地区の遺跡 III

筋違L・N遺跡



2001

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

巻頭図版　筋違Ｌ遺跡ＳＢ７出土遺物

序

松山平野の南東部に位置する福音寺地区は、昭和40年代の国道11号線の建設以来急激に宅地開発が進み、数多くの貴重な遺跡が発見されています。これまでの埋蔵文化財遺跡発掘調査成果によって、弥生時代から中世にかけて継続的に集落が営まれていたことがわかっています。

今回報告するのは、筋違Ｌ遺跡と筋違Ｎ遺跡の２遺跡で、筋違Ｌ遺跡からは、弥生時代前期から中世にかけての集落関連遺構が確認され、当時の集落構造や変遷を明らかにするための基礎資料となりました。また筋違Ｎ遺跡は、弥生時代後期と古墳時代後半期の遺構と遺物を確認しました。これらも、当時の集落構造を解明する上で欠かせない資料となり、更に今後当該地域において発掘調査が行われる際の基礎資料となるものです。

こうした成果をあげることができましたのも、市民の皆さまの埋蔵文化財に対するご協力とご理解のたまものであり、心から感謝申し上げます。

本書が、文化財保護・教育文化の振興、更には埋蔵文化財の調査・研究の一助となれば幸いです。

平成13年３月31日

財団法人松山市生涯学習振興財団
理事長　中村時広

例　　言

1．本書は、松山市教育委員会と財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが平成９年度と11年度に松山市松末２丁目内、松山市福音寺町内で実施した２遺跡についての埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．遺構は呼称を略号で記述した。竪穴式住居址：ＳＢ、掘立柱建物址：掘立、土坑：ＳＫ、溝：ＳＤ、柵列：ＳＡ、井戸：ＳＥ、柱穴：ＳＰ、性格不明遺構：ＳＸである。

3．遺物の実測・製図、遺構の作図・製図は、山本健一・高尾和長・河野史知・山之内志郎・加島次郎の指示のもと、後藤公克・坪内寛美・都築宇志・尾崎正・藤本数夫・関正子・萩野ちよみ・吉井信枝・仙波千秋・仙波ミリ子・東山里美・金子育代・高尾久子・田崎真理・中村紫・宮内真弓・山下満佐子・平岡直美・大西陽子・日之西美春・西本三枝・平岡華美・泉実希・猪野美喜子・岡本邦栄・安井由起美が行った。

4．写真図版は山之内・加島と大西朋子が協議し、遺物の撮影及び図版作成は大西が行った。

5．遺構の写真撮影は山本・山之内・加島・大西が行った。

6．遺構図と遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。

7．本書に使用した方位は、すべて真北である。

8．本書に関わる遺物や記録類は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。

9．調査及び報告書作成においては、下條信行（愛媛大学）・村上恭通（愛媛大学）・真鍋昭文（財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター）にご指導とご教示を賜った。記して感謝申し上げる。

10．鉄製品分析では財団法人元興寺文化財研究所、土壌分析では株式会社古環境研究所に分析と協力をいただいた。記して感謝申し上げる。

11．本書の執筆は高尾・山之内・加島が分担執筆した。浄書は担当者の指示のもと中村が担当した。

12．本書の編集は高尾の指示のもと山之内が行った。

13．製版　写真図版175線
印刷　オフセット印刷
用紙　カラー写真　本文　マットコート110kg
　　写真図版　　マットコート135kg
製本　アジロ綴り

本　文　目　次

第１章　はじめに …… 〔山之内〕 …… 1
　１．調査に至る経緯
　２．刊行組織
　３．環　境

第２章　筋違Ｌ遺跡 …… 〔山之内〕 …… 5
　１．調査の経過
　２．層　位
　３．遺構と遺物
　４．小　結

第３章　筋違Ｎ遺跡 …… 〔加　島〕 …… 155
　１．調査の経過
　２．層　位
　３．遺構と遺物
　４．小　結

第４章　自然科学分析 …… 〔株式会社　古環境研究所〕… 205

第５章　調査の成果と課題 …… 〔山之内〕 …… 208

附　章　伊予の硯 …… 〔髙　尾〕 …… 217

写真図版 …… 237

挿 図 目 次

第1章　はじめに

第 1 図　福音寺地区と周辺の主要遺跡分布図（縮尺1/50,000）…… 4

第2章　筋違Ｌ遺跡

第 2 図　調査地位置図（縮尺1/4,000）…… 8
第 3 図　筋違遺跡各調査地位置図（縮尺1/1,500）…… 9
第 4 図　遺構配置図・北壁土層図（縮尺1/300、1/80）…… 11
第 5 図　ＳＢ２・ＳＢ２内炉測量図（縮尺1/60、1/20）…… 13
第 6 図　ＳＢ２出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 14
第 7 図　ＳＢ８測量図（縮尺1/60）…… 15
第 8 図　ＳＫ47測量図（縮尺1/40）…… 16
第 9 図　ＳＫ47出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）…… 17
第10図　ＳＫ47出土遺物実測図(2)（縮尺1/4、1/3）…… 18
第11図　ＳＫ51測量図（縮尺1/40）…… 19
第12図　ＳＫ51出土遺物実測図（縮尺1/4、1/3）…… 20
第13図　ＳＫ63測量図（縮尺1/60）…… 21
第14図　ＳＫ63出土遺物実測図（縮尺1/4、1/3）…… 22
第15図　ＳＫ52測量図（縮尺1/40）…… 23
第16図　ＳＫ60測量図・出土遺物実測図（縮尺1/60、1/4）…… 24
第17図　ＳＫ15・11・14・13測量図・出土遺物実測図（縮尺1/40、1/20、1/4）…… 25
第18図　ＳＫ18・19・21・23測量図・出土遺物実測図（縮尺1/40、1/20、1/4、1/3）…… 26
第19図　ＳＫ24・30・32・35・39測量図・出土遺物実測図（縮尺1/20、1/4）…… 28
第20図　ＳＫ40・43・50・54測量図・出土遺物実測図（縮尺1/20、1/4）…… 30
第21図　ＳＫ55・58測量図・出土遺物実測図（縮尺1/20、1/4）…… 31
第22図　ＳＤ14・16・20測量図・出土遺物実測図（縮尺1/60、1/40、1/20、1/4）…… 33
第23図　ＳＢ３・ＳＢ３内炉測量図（縮尺1/60、1/20）…… 34
第24図　ＳＢ３・ＳＢ３内炉出土遺物実測図（縮尺1/4、1/3）…… 35
第25図　ＳＢ５測量図（縮尺1/60）…… 36
第26図　ＳＢ５出土遺物実測図（縮尺1/4、1/3、1/1）…… 37
第27図　ＳＢ５内ＳＫ1・ＳＫ2・ＳＫ3・ＳＤ２出土遺物実測図（縮尺1/4、1/3）…… 38
第28図　ＳＢ７測量図（縮尺1/60）…… 39
第29図　ＳＢ７出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）…… 41
第30図　ＳＢ７出土遺物実測図(2)（縮尺1/4）…… 42
第31図　ＳＢ７出土遺物実測図(3)（縮尺1/4）…… 43
第32図　ＳＢ７出土遺物実測図(4)（縮尺1/4、1/3、1/1）…… 44

第33図　ＳＢ７内ＳＫ１測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/3）…… 45
第34図　ＳＢ７上面検出遺構出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 45
第35図　ＳＢ１測量図（縮尺1/60）…… 46
第36図　ＳＢ４測量図・出土遺物実測図（縮尺1/20、1/3）…… 47
第37図　ＳＢ６測量図・出土遺物実測図（縮尺1/60、1/4、1/3）…… 48
第38図　掘立１測量図（縮尺1/80）…… 50
第39図　掘立４測量図（縮尺1/80）…… 50
第40図　ＳＫ62・ＳＫ62内焼土測量図（縮尺1/60、1/20）…… 51
第41図　ＳＫ62出土遺物実測図（縮尺1/4、1/3、1/1）…… 52
第42図　ＳＫ64測量図・出土遺物実測図（縮尺1/60、1/4、1/3、1/2）…… 53
第43図　ＳＫ44測量図・出土遺物実測図（縮尺1/40、1/3）…… 54
第44図　ＳＫ59測量図・出土遺物実測図（縮尺1/40、1/4、1/3）…… 55
第45図　ＳＫ１・41測量図（縮尺1/30、1/20）…… 56
第46図　ＳＫ45測量図・出土遺物実測図（縮尺1/40、1/4）…… 57
第47図　ＳＫ42測量図（縮尺1/40）…… 58
第48図　ＳＫ46・48測量図・出土遺物実測図（縮尺1/40、1/20、1/4）…… 60
第49図　ＳＫ49・57・53測量図・出土遺物実測図（縮尺1/20、1/4）…… 61
第50図　ＳＤ１測量図・出土遺物実測図（縮尺1/40、1/3）…… 63
第51図　ＳＤ２・10・11測量図（縮尺1/40、1/20）…… 64
第52図　ＳＤ10出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 65
第53図　ＳＤ12出土遺物実測図（縮尺1/4、1/3）…… 65
第54図　ＳＸ３出土遺物実測図(1)（縮尺1/4、1/3）…… 66
第55図　ＳＸ３出土遺物実測図(2)（縮尺1/4）…… 67
第56図　ＳＸ３出土遺物実測図(3)（縮尺1/4、1/3）…… 68
第57図　ＳＸ３出土遺物実測図(4)（縮尺1/3）…… 69
第58図　ＳＸ４出土遺物実測図（縮尺1/4、1/3）…… 71
第59図　ＳＸ５出土遺物実測図(1)（縮尺1/4、1/3）…… 72
第60図　ＳＸ５出土遺物実測図(2)（縮尺1/3）…… 73
第61図　ＳＸ５出土遺物実測図(3)（縮尺1/4、1/3）…… 74
第62図　ＳＡ１測量図（縮尺1/120）…… 75
第63図　ＳＡ１－ＳＰ２・４・６・８・11・14・15・16・28測量図（縮尺1/20）…… 76
第64図　ＳＡ１出土遺物実測図(1)（縮尺1/4、1/3）…… 77
第65図　ＳＡ１出土遺物実測図(2)（縮尺1/3）…… 78
第66図　ＳＫ31・29測量図（縮尺1/20）…… 79
第67図　ＳＫ36・34測量図・出土遺物実測図（縮尺1/40、1/20、1/3）…… 80
第68図　ＳＤ３・４測量図（縮尺1/40）…… 82
第69図　掘立２測量図（縮尺1/80）…… 83
第70図　掘立３測量図（縮尺1/80）…… 84

第71図　ＳＫ２・３・４・５・６測量図・出土遺物実測図（縮尺1/20、1/3）…… 85
第72図　ＳＫ７・９・12・16測量図・出土遺物実測図（縮尺1/40、1/20、1/4）…… 87
第73図　ＳＫ17・20・22測量図・出土遺物実測図（縮尺1/20、1/4）…… 88
第74図　ＳＫ25・27・28測量図・出土遺物実測図（縮尺1/40、1/20、1/4）…… 90
第75図　ＳＫ33測量図・出土遺物実測図（縮尺1/40、1/3）…… 91
第76図　ＳＫ37・38・56・61測量図・出土遺物実測図（縮尺1/40、1/20、1/4、1/3）…… 92
第77図　ＳＤ５測量図（縮尺1/200、1/100）…… 94
第78図　ＳＤ５出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）…… 95
第79図　ＳＤ５出土遺物実測図(2)（縮尺1/4）…… 96
第80図　ＳＤ５出土遺物実測図(3)（縮尺1/4、1/3、1/2）…… 97
第81図　ＳＤ６・７・８測量図・出土遺物実測図（縮尺1/40、1/4）…… 99
第82図　ＳＤ９・15・21・22・23測量図・出土遺物実測図（縮尺1/40、1/20、1/3）…… 100
第83図　ＳＤ18出土遺物実測図（縮尺1/4、1/3）…… 101
第84図　墓１・２・３・４測量図・出土遺物実測図（縮尺1/40、1/20、1/3）…… 103
第85図　ＳＥ１測量図（縮尺1/20）…… 104
第86図　ＳＥ１出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 105
第87図　ＳＫ８・10・26測量図・出土遺物実測図（縮尺1/20、1/4、1/3）…… 107
第88図　ＳＰ出土遺物実測図(1)（縮尺1/4、1/3）…… 109
第89図　ＳＰ出土遺物実測図(2)（縮尺1/4、1/3、1/1）…… 110
第90図　層位不明出土遺物実測図(1)（縮尺1/4、1/3）…… 111
第91図　層位不明出土遺物実測図(2)（縮尺1/4、1/3）…… 112
第92図　層位不明出土遺物実測図(3)（縮尺1/3、1/2、1/1）…… 113

第３章　筋違Ｎ遺跡

第93図　調査地位置図（縮尺1/2,000）…… 158
第94図　調査地区割り図（縮尺1/300）…… 160
第95図　北壁・西壁土層図（縮尺1/40、1/20）…… 161
第96図　遺構配置図（縮尺1/100）…… 163
第97図　ＳＢ３測量図（縮尺1/50）…… 166
第98図　ＳＢ３遺物出土状況測量図（縮尺1/50）…… 167
第99図　ＳＢ３炉測量図（縮尺1/20）…… 168
第100図　ＳＢ３主柱穴Ｐ②測量図（縮尺1/10）…… 169
第101図　ＳＢ３出土遺物実測図(1)（縮尺1/4）…… 170
第102図　ＳＢ３出土遺物実測図(2)（縮尺1/4）…… 171
第103図　ＳＢ３出土遺物実測図(3)（縮尺1/4）…… 172
第104図　ＳＢ３出土遺物実測図(4)（縮尺1/4）…… 173
第105図　ＳＢ３出土遺物実測図(5)（縮尺1/4）…… 174
第106図　ＳＢ３出土遺物実測図(6)（縮尺1/3、2/3）…… 175

第107図　ＳＢ３出土遺物実測図(7)（縮尺1/3）…… 176
第108図　ＳＢ３出土遺物実測図(8)（縮尺1/3、2/3）…… 177
第109図　ＳＢ３出土遺物実測図(9)（縮尺1/2）…… 178
第110図　ＳＫ３測量図及び出土遺物実測図（縮尺1/20、2/3）…… 179
第111図　ＳＫ４測量図及び出土遺物実測図（縮尺1/20、1/4、2/3）…… 179
第112図　ＳＫ５測量図（縮尺1/20）…… 180
第113図　ＳＫ６測量図（縮尺1/20）…… 181
第114図　ＳＫ12測量図（縮尺1/20）…… 181
第115図　ＳＢ１測量図及び出土遺物実測図（縮尺1/50、1/3）…… 183
第116図　ＳＢ４測量図（縮尺1/50）…… 184
第117図　ＳＢ４遺物出土状況測量図及び出土遺物実測図（縮尺1/50、1/3）…… 185
第118図　掘立１測量図及び出土遺物実測図（縮尺1/50、1/3）…… 186
第119図　掘立２測量図及び出土遺物実測図（縮尺1/50、1/4）…… 187
第120図　掘立３測量図及び出土遺物実測図（縮尺1/50、1/4）…… 188
第121図　ＳＫ２測量図及び出土遺物実測図（縮尺1/40、1/4、1/3、1/2）…… 189
第122図　ＳＫ14測量図及び出土遺物実測図（縮尺1/20、1/4）…… 190
第123図　ＳＰ100測量図及び出土遺物実測図（縮尺1/10、1/3）…… 191
第124図　ＳＫ１測量図（縮尺1/20）…… 192
第125図　ＳＫ７測量図（縮尺1/20）…… 192
第126図　ＳＫ８測量図（縮尺1/20）…… 193

第４章　自然科学分析

第127図　筋違Ｌ遺跡の花粉顕微鏡写真 …… 207

第５章　調査の成果と課題

第128図　集落の変遷図(1)（縮尺1/1,500）…… 210
第129図　集落の変遷図(2)（縮尺1/1,500）…… 211
第130図　朝鮮半島系遺物実測図（縮尺1/4）…… 213

附　章　伊予の硯

第131図　伊予出土硯の遺跡分布図（縮尺1/1,000,000）…… 218
第132図　伊予出土硯実測図(1)（縮尺1/4）…… 223
第133図　伊予出土硯実測図(2)（縮尺1/4）…… 224
第134図　脚分類模式図 …… 225
第135図　変遷表（縮尺1/6）…… 233

表　目　次

第１章　はじめに

表 1　調査地一覧 …… 1

第２章　筋違Ｌ遺跡

表 2　竪穴式住居址一覧 …… 116
表 3　竪穴式住居址の炉・カマド一覧 …… 116
表 4　掘立柱建物址一覧 …… 116
表 5　土坑一覧 …… 116
表 6　溝一覧 …… 119
表 7　墓一覧 …… 119
表 8　井戸一覧 …… 119
表 9　性格不明遺構一覧 …… 120
表 10　ＳＢ２出土遺物観察表　土製品 …… 120
表 11　ＳＫ47出土遺物観察表　土製品 …… 120
表 12　ＳＫ47出土遺物観察表　石製品 …… 121
表 13　ＳＫ51出土遺物観察表　土製品 …… 121
表 14　ＳＫ51出土遺物観察表　石製品 …… 122
表 15　ＳＫ63出土遺物観察表　土製品 …… 122
表 16　ＳＫ60出土遺物観察表　土製品 …… 123
表 17　ＳＫ14出土遺物観察表　土製品 …… 123
表 18　ＳＫ18出土遺物観察表　土製品 …… 123
表 19　ＳＫ19出土遺物観察表　土製品 …… 123
表 20　ＳＫ39出土遺物観察表　土製品 …… 124
表 21　ＳＫ43出土遺物観察表　土製品 …… 124
表 22　ＳＫ55出土遺物観察表　土製品 …… 124
表 23　ＳＤ16出土遺物観察表　土製品 …… 124
表 24　ＳＢ３出土遺物観察表　土製品 …… 124
表 25　ＳＢ３出土遺物観察表　石製品 …… 124
表 26　ＳＢ３内炉出土遺物観察表　土製品 …… 125
表 27　ＳＢ５出土遺物観察表　土製品 …… 125
表 28　ＳＢ５出土遺物観察表　石製品 …… 125
表 29　ＳＢ５出土遺物観察表　装身具 …… 126
表 30　ＳＢ５内ＳＫ１出土遺物観察表　土製品 …… 126
表 31　ＳＢ５内ＳＫ２出土遺物観察表　土製品 …… 126
表 32　ＳＢ５内ＳＫ３出土遺物観察表　土製品 …… 126

表 33　ＳＢ５内ＳＤ２出土遺物観察表　石製品 …… 126
表 34　ＳＢ７出土遺物観察表　土製品 …… 126
表 35　ＳＢ７出土遺物観察表　石製品 …… 130
表 36　ＳＢ７出土遺物観察表　装身具 …… 131
表 37　ＳＢ７内ＳＫ１出土遺物観察表　土製品 …… 131
表 38　ＳＢ７上面検出遺構出土遺物観察表　土製品 …… 131
表 39　ＳＢ４出土遺物観察表　土製品 …… 131
表 40　ＳＢ６出土遺物観察表　土製品 …… 131
表 41　ＳＢ６出土遺物観察表　石製品 …… 132
表 42　ＳＫ62出土遺物観察表　土製品 …… 132
表 43　ＳＫ62出土遺物観察表　石製品 …… 132
表 44　ＳＫ62出土遺物観察表　装身具 …… 132
表 45　ＳＫ64出土遺物観察表　土製品 …… 133
表 46　ＳＫ64出土遺物観察表　金属製品 …… 133
表 47　ＳＫ44出土遺物観察表　土製品 …… 133
表 48　ＳＫ44出土遺物観察表　石製品 …… 134
表 49　ＳＫ59出土遺物観察表　土製品 …… 134
表 50　ＳＫ45出土遺物観察表　土製品 …… 134
表 51　ＳＫ46出土遺物観察表　土製品 …… 135
表 52　ＳＫ48出土遺物観察表　土製品 …… 135
表 53　ＳＫ53出土遺物観察表　土製品 …… 135
表 54　ＳＤ１出土遺物観察表　土製品 …… 135
表 55　ＳＤ１出土遺物観察表　石製品 …… 135
表 56　ＳＤ10出土遺物観察表　土製品 …… 135
表 57　ＳＤ12出土遺物観察表　土製品 …… 135
表 58　ＳＤ12出土遺物観察表　石製品 …… 135
表 59　ＳＸ３出土遺物観察表　土製品 …… 136
表 60　ＳＸ３出土遺物観察表　石製品 …… 137
表 61　ＳＸ４出土遺物観察表　土製品 …… 138
表 62　ＳＸ５出土遺物観察表　土製品 …… 140
表 63　ＳＸ５出土遺物観察表　石製品 …… 142
表 64　ＳＡ１出土遺物観察表　土製品 …… 142
表 65　ＳＡ１出土遺物観察表　石製品 …… 143
表 66　ＳＫ36出土遺物観察表　石製品 …… 143
表 67　ＳＫ６出土遺物観察表　石製品 …… 143
表 68　ＳＫ16出土遺物観察表　土製品 …… 143
表 69　ＳＫ22出土遺物観察表　土製品 …… 144
表 70　ＳＫ28出土遺物観察表　土製品 …… 144

表 71　ＳＫ33出土遺物観察表　石製品 …… 144
表 72　ＳＫ37出土遺物観察表　土製品 …… 144
表 73　ＳＫ56出土遺物観察表　土製品 …… 144
表 74　ＳＤ５出土遺物観察表　土製品 …… 144
表 75　ＳＤ５出土遺物観察表　石製品 …… 146
表 76　ＳＤ５出土遺物観察表　金属製品 …… 147
表 77　ＳＤ７出土遺物観察表　土製品 …… 147
表 78　ＳＤ15出土遺物観察表　土製品 …… 147
表 79　ＳＤ18出土遺物観察表　土製品 …… 147
表 80　墓１出土遺物観察表　土製品 …… 147
表 81　墓２出土遺物観察表　土製品 …… 148
表 82　ＳＥ１出土遺物観察表　石製品 …… 148
表 83　ＳＫ８出土遺物観察表　土製品 …… 148
表 84　ＳＫ10出土遺物観察表　土製品 …… 148
表 85　ＳＰ出土遺物観察表　土製品 …… 149
表 86　ＳＰ出土遺物観察表　石製品 …… 150
表 87　ＳＰ出土遺物観察表　装身具 …… 151
表 88　層位不明出土遺物観察表　土製品 …… 151
表 89　層位不明出土遺物観察表　石製品 …… 153
表 90　層位不明出土遺物観察表　装身具 …… 154
表 91　層位不明出土遺物観察表　金属製品 …… 154

第３章　筋違Ｎ遺跡

表 92　竪穴式住居址一覧 …… 196
表 93　竪穴式住居址の炉・カマド一覧 …… 196
表 94　掘立柱建物址一覧 …… 196
表 95　土坑一覧 …… 197
表 96　ＳＢ３出土遺物観察表　土製品 …… 197
表 97　ＳＢ３出土遺物観察表　石製品 …… 201
表 98　ＳＢ３出土遺物観察表　鉄製品 …… 202
表 99　ＳＫ３出土遺物観察表　石製品 …… 202
表100　ＳＫ４出土遺物観察表　土製品 …… 202
表101　ＳＫ４出土遺物観察表　石製品 …… 202
表102　ＳＢ１出土遺物観察表　土製品 …… 202
表103　ＳＢ４出土遺物観察表　土製品 …… 202
表104　掘立１出土遺物観察表　土製品 …… 203
表105　掘立１出土遺物観察表　石製品 …… 203
表106　掘立２出土遺物観察表　土製品 …… 203

表107　掘立３出土遺物観察表　土製品 …… 203
表108　ＳＫ２出土遺物観察表　土製品 …… 203
表109　ＳＫ２出土遺物観察表　石製品 …… 204
表110　ＳＫ14出土遺物観察表　土製品 …… 204
表111　ＳＰ100出土遺物観察表　土製品 …… 204

第４章　自然科学分析

表112　筋違Ｌ遺跡における寄生虫卵分析結果 …… 206

第５章　調査の成果と課題

表113　福音寺地区の竪穴式住居址一覧 …… 215
表114　福音寺地区の掘立柱建物址一覧 …… 216

附　章　伊予の硯

表115　年代表 …… 217
表116　伊予出土硯一覧表 …… 220
表117　脚部形状と時期との関係 …… 226
表118　装飾種と時期(1) …… 227
表119　装飾種と時期(2) …… 228
表120　脚部形状と装飾種と時期 …… 228
表121　硯部・脚部・硯面高 …… 229
表122　法量と出土地分類 …… 230
表123　法量・脚部形状と時期 …… 231

図　版　目　次

巻頭図版　　筋違Ｌ遺跡ＳＢ７出土遺物

第２章　筋違Ｌ遺跡

図版１　１．調査地遠景（北西より）
　　２．調査前風景（南東より）
図版２　１．３区完掘状況（東より）
　　２．１区完掘状況（西より）
図版３　１．２区完掘状況（東より）
　　２．４区完掘状況（北より）

図版４　１．ＳＢ７遺物出土状況①（東より）
２．ＳＢ７遺物出土状況②（南より）
３．ＳＢ７遺物出土状況③（南より）
図版５　１．ＳＢ７出土遺物①
図版６　１．ＳＢ７出土遺物②
図版７　１．ＳＫ47完掘状況（北東より）
２．ＳＫ47出土遺物
図版８　１．ＳＢ３完掘状況（南西より）
２．ＳＢ３出土遺物
図版９　１．ＳＢ２（奥）・ＳＡ１完掘状況（南東より）
２．ＳＡ１完掘状況（北東より）
３．ＳＥ１完掘状況（北西より）
図版10　１．鉄製品　ＳＫ64・ＳＤ５・層位不明

第３章　筋違Ｎ遺跡

図版11　１．調査前（南より）
２．西壁土層
図版12　１．遺構検出状況（南より）
２．遺構完掘状況（南より）
図版13　１．ＳＢ３遺物出土状況（南より）
２．ＳＢ３炉における支脚出土状況（南東より）
３．ＳＢ３主柱穴Ｐ②における遺物出土状況（南より）
図版14　１．ＳＢ３完掘状況（南より）
２．土坑群完掘状況（北西より）
図版15　１．掘立１完掘状況（南より）
２．掘立３完掘状況（南より）
図版16　１．Ｔ５～８遺構完掘状況（東より）
２．ＳＰ100坏蓋出土状況（西より）
図版17　１．ＳＢ３出土遺物①
図版18　１．ＳＢ３出土遺物②・ＳＢ４出土遺物・ＳＫ３出土遺物・ＳＫ２出土遺物

第1章　はじめに

1．調査に至る経緯

平成9年から12年に松山市松末2丁目及び福音寺町の2か所の地点について、埋蔵文化財の確認願いが開発業者より松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

申請地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「No114 松末遺物包含地」内にあり、周知の遺跡として知られている。

また申請地周辺の福音寺地区は福音寺遺跡と呼称され、弥生時代～古墳時代の集落地帯であったことがこれまでの発掘調査により明らかになっている（森1983、梅木1996、河野1998、西尾1999、重松2000）。

よって文化教育課では、確認願いが提出された両地点についての埋蔵文化財の有無と遺跡の範囲や性格を確認するため、試掘調査を実施した。その結果、両地点で弥生時代から中世に至る遺構と遺物を確認した。

試掘調査の結果を受け、文化教育課と申請者及び関係者は遺跡の取扱いについての協議を行った。その結果、遺跡が消滅する地点に対し、当該地域における弥生時代から中世にわたる集落構造の解明を主目的に本格調査を実施するものとした。調査は文化教育課及び財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）が主体となり、申請者及び関係者各位の協力のもと、平成9年から12年の間に行われた（表1）。

なお、屋外調査終了後は埋文センターが主体となり、屋内調査及び報告書刊行事業を実施した。

〔参考文献〕

森　光晴ほか　1983『国道11号バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』松山市教育委員会

梅木謙一ほか　1996『福音寺地区の遺跡』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

河野史知ほか　1998『福音寺地区の遺跡Ⅱ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

西尾幸則ほか　1999「筋違M遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報11』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

重松佳久ほか　2000「筋違O遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報12』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

表1　調査地一覧

遺跡名	所在地	面積（㎡）	期間	調査担当
筋違L遺跡	松山市松末2丁目22－2外2筆 福音寺町407－4外9筆	5,404	1997（平成9）年7月7日 ～同年11月29日	山本　健一 山之内志郎
筋違N遺跡	松山市福音寺423－1	572	1999（平成11）年11月1日 ～2000（平成12）年1月14日	河野　史知 加島　次郎

2．刊行組織（平成13年３月31日現在）

松山市教育委員会	教育長	中矢　陽三
事務局	局長	圍上　和敬
	局長付参事	森脇　　將
	次長	赤星　忠男
文化教育課	課長	馬場　　洋
財団法人松山市生涯学習振興財団	理事長	中村　時広
	事務局長	二宮　正昌
	事務局次長	江戸　　孝
		森　　和朋
埋蔵文化財センター	所長	中川　　隆
	専門監	野本　　力
	調査係長	田城　武志
	調査主任	栗田　正芳（文化教育課職員）
	担当	山本　健一・河野　史知・
		山之内志郎・加島　次郎・大西　朋子

3．環　境

(1)遺跡の立地

松山平野は、愛媛県のほぼ中央に位置する県下最大の平野であり、高縄山に源を発した河川により形成された沖積平野である。筋違遺跡が立地する福音寺地区は、平野の中央に位置し、川附川や小野川、堀越川などの大小河川に挟まれた微高地となっている。さらに南西方向には「伊予三山」と呼ばれる天山・東山・星ノ岡のほか土甕山などの分離独立丘陵が連なっている。

福音寺地区内の主要な遺跡としては、北西部から中央部には本遺跡と福音小学校構内遺跡、南東部には北久米浄蓮寺遺跡がある。

(2)歴史的環境（第１図）

近年の発掘調査によって、当遺跡周辺には数多くの遺跡が存在していることが明らかとなった。ここでは福音寺地区の遺跡の展開を周辺遺跡を含めて時代順に概説していく。

旧石器時代～縄文時代

遺構は、束本遺跡４次調査の第Ⅵ層（ＡＴ火山灰層）上面においてピットを１基検出している。また、第Ⅳ層（ＡＴ火山灰降下以降、アカホヤ火山灰降下以前の堆積層）中では焼土を検出した。

遺物は、束本遺跡４次調査において旧石器時代末から縄文時代の早期の石器が10点出土している。なかには第Ⅲ②層（アカホヤ火山灰）に伴って出土しているものもある。その他には、いずれも遺構に伴ったものではないが、筋違Ｆ・Ｈ遺跡でサヌカイト製ナイフ形石器１点、東山鳶ケ森古墳群でサヌカイト製ナイフ形石器１点、天山天王が森遺跡で安山岩製ナイフ形石器１点、釜ノ口遺跡でチャート製ナイフ形石器１点、尖頭器１点が出土している。

弥生時代

福音寺地区では主に前期と後期の遺構を検出している。前期では筋違Ｆ遺跡の土坑２基から土器片が出土していることから、周辺地域において集落が存在したことが推定される。福音小学校構内遺跡においては中～後期の竪穴式住居や中期後半の土坑を検出している。当該地区における中期の遺構・遺物は出土例が少なく、貴重な資料である。後期の遺物は筋違Ｆ遺跡ＳＢ５内から多量に出土している。また福音小学校構内遺跡においても後期の土器を多量に含む土器溜り、区画溝、５基の壺棺などを検出した。

周辺の遺跡では、束本遺跡・中村松田遺跡・釜ノ口遺跡でも竪穴式住居・土坑などが検出され、弥生時代後期の集落の様相が明らかになりつつある。また久米高畑遺跡23・25次調査では中期前半の大溝が２条並列で確認されており、環濠集落の可能性も指摘されている。

古墳時代

福音寺地区における集落はこれまでの検出例から３つの大きなブロックに分けることができる。第１に北久米浄蓮寺遺跡において５世紀前半～７世紀に至る竪穴式住居や掘立柱建物、第２に筋違Ａ～Ｃ・Ｅ～Ｈ・Ｋ遺跡において５世紀後半～６世紀前半の竪穴式住居、第３に福音小学校構内遺跡において検出された100棟以上の竪穴式住居と掘立柱建物がある。

古墳は天山・東山・星ノ岡の分離独立丘陵上に小規模な古墳が点在している。なかでも天山神社北古墳からは半円方形帯神獣鏡や鉄剣が出土している。

古　代

福音寺地区の南東に位置する来住台地には、近年全国的に注目されている久米官衙遺跡群があり、７世紀における重要施設が集中する政治の中心地であった可能性が考えられる。同時に、白鳳期の寺院である来住廃寺についてもその全容解明に向けて調査が行われている。

中・近世

中世の遺構としては来住廃寺21次調査において検出した大規模な総柱建物群があげられる。近年では来住廃寺15次調査において土坑墓群が検出されている。

〔参考文献〕

梅木謙一ほか　1995『福音小学校構内遺跡－弥生時代編－』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

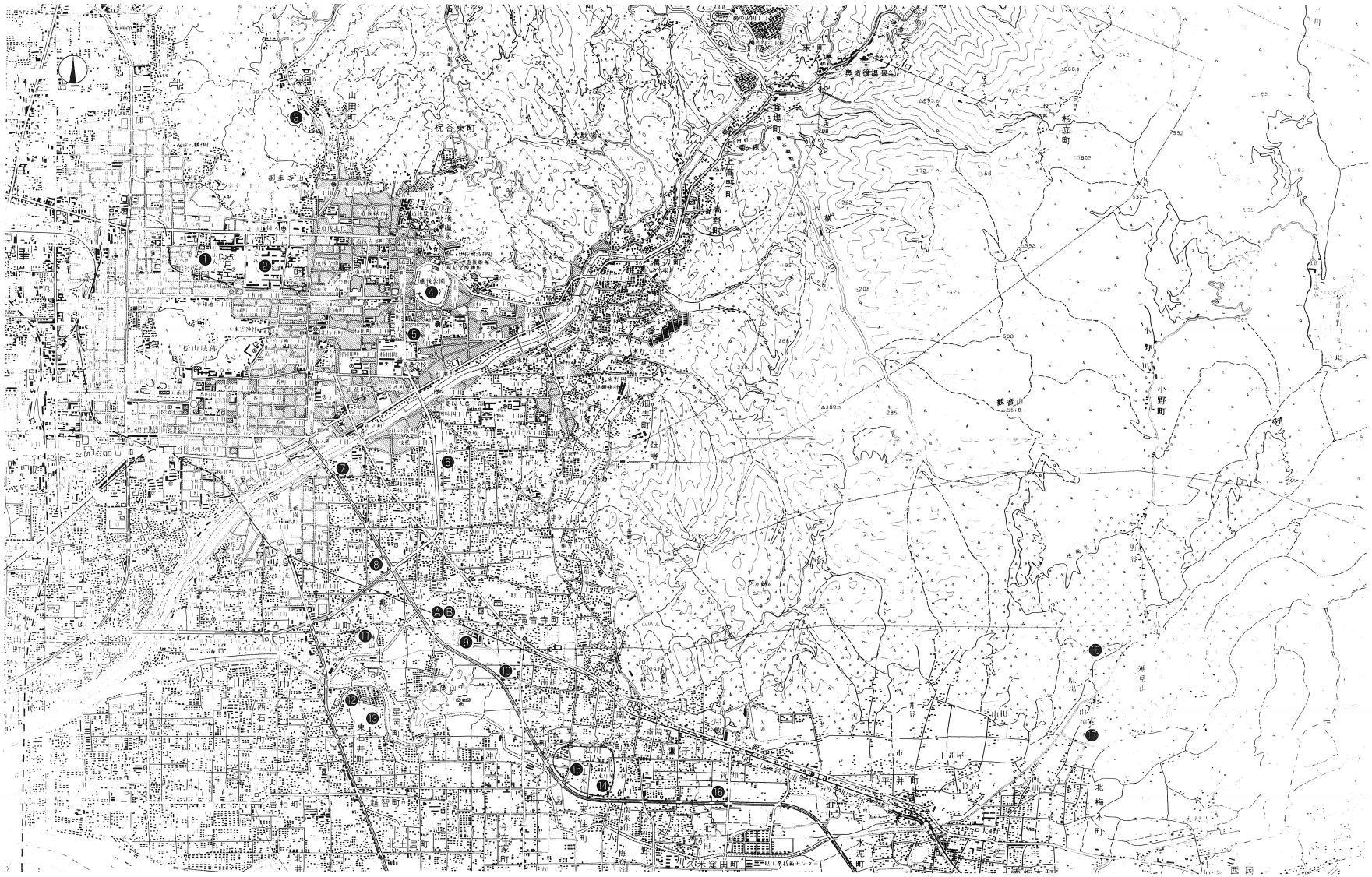
1996『福音寺地区の遺跡』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

河野史知ほか　1998『福音寺地区の遺跡Ⅱ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

髙尾和長ほか　1996『束本遺跡４次調査・枝松遺跡４次調査』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

1996「久米高畑遺跡25次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

橋本雄一ほか　1994『北久米浄蓮寺遺跡３次調査地』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター



Ⓐ 筋違Ｌ遺跡　Ⓑ 筋違Ｎ遺跡　❶ 松山大学構内遺跡　❷ 文京遺跡　❸ 祝谷六丁場遺跡　❹ 湯築城址　❺ 岩崎遺跡　❻ 枝松遺跡4次調査地･東本遺跡4次調査地
❼ 中村松田遺跡　❽ 釜ノ口遺跡　❾ 福音小学校構内遺跡　❿ 北久米浄蓮寺遺跡　⓫ 天山神社北古墳　⓬ 東山鳶ヶ森古墳群　⓭ 東山古墳群　⓮ 来住廃寺跡
⓯ 久米高畑遺跡・久米官衙遺跡群　⓰ 久米窪田森元遺跡　⓱ 葉佐池古墳　⓲ 駄馬姥ヶ懐窯址

第１図　福音寺地区と周辺の主要遺跡分布図（縮尺１/ 50,000）

第２章

筋違（すじかい）Ｌ遺跡

第2章　筋違Ｌ遺跡

１．調査の経過

(1)調査に至る経緯

1996（平成８）年５月、越智住宅産業株式会社（以下、申請者）より、松山市松末２丁目22－２外３筆、福音寺町407－４外８筆における宅地開発に伴う埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

当該地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地「No.114 松末遺物包含地」に含まれ、南東約300mには弥生時代後期の溝、土器溜り、祭祀遺構をはじめとする弥生～飛鳥時代の大集落である福音小学校構内遺跡、また南西から東には筋違Ｅ～Ｏ遺跡が所在し、弥生時代～中世の集落関連遺構を中心として近・現代までの遺構を確認している（第２・３図）。

文化教育課では、確認願いが提出された地点についての埋蔵文化財の有無と遺跡の範囲や性格を確認するため、同年７月試掘調査を実施した。その結果、弥生時代～中世の遺構と遺物を確認した。

試掘調査の結果を受け、文化教育課と申請者、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）の３者は遺跡の取扱いについて協議を行い、開発によって失われる遺跡について記録保存のため発掘調査を実施することとなった。発掘調査は弥生時代～中世の集落関連遺構の広がりの解明を主目的に、埋文センターが主体となり平成９年７月７日より本格調査を開始した。

(2)調査の経緯

1997（平成９）年７月７日に調査区を設定し、重機による掘削を開始する。７月15日に１区の遺構検出状況の写真撮影を行う。７月23日に２区、31日に３区の調査をそれぞれ開始する。９月30日に１区、10月16日に３区、11月６日に２区の完掘状況の写真撮影を行う。10月１日に４区と５区の掘削を重機により開始する。10月21日に４区、11月７日に５区の調査を開始する。11月10日に４区ＳＢ７の遺物出土状況の写真撮影を行う。11月19日に４・５区の完掘状況の写真撮影を行う。11月27日に全ての測量が完了する。11月29日に一般市民対象の現地説明会を開催する。12月１日～25日の間、屋内調査を実施する。

(3)調査組織

調　査　地　松山市松末２丁目22－２、23－２、24－１、24－２、福音寺町407－４、408－11、416、417－１の一部、419－３の一部、420の一部、421、422、423－２

遺　跡　名　筋違Ｌ遺跡

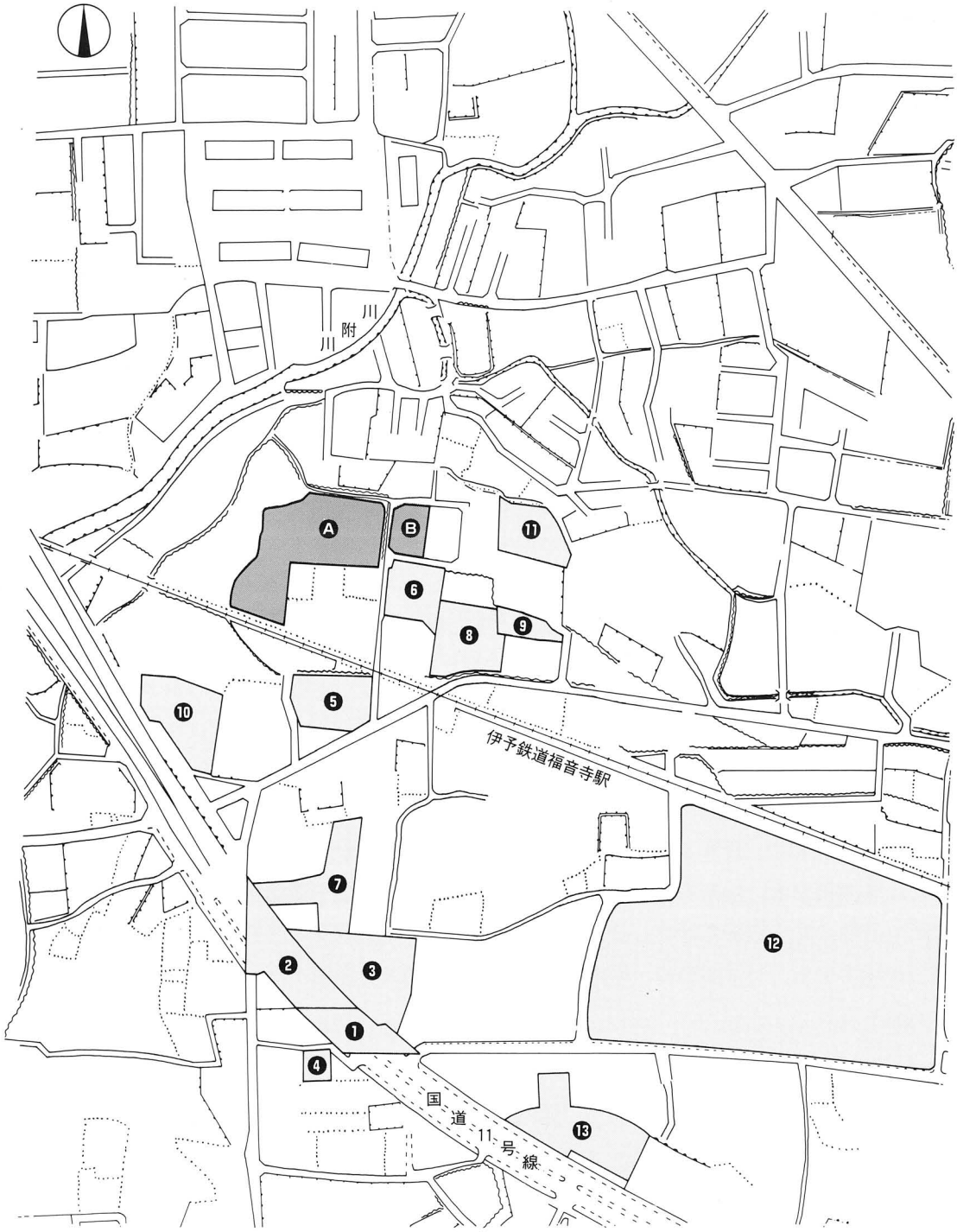
調査期間　1997（平成９）年 ７月７日～同年~~12~~11月~~25~~29日

調査面積　5,404.04㎡

調査委託　仙波　求・仙波佑造・河渕喜太郎・松本如正

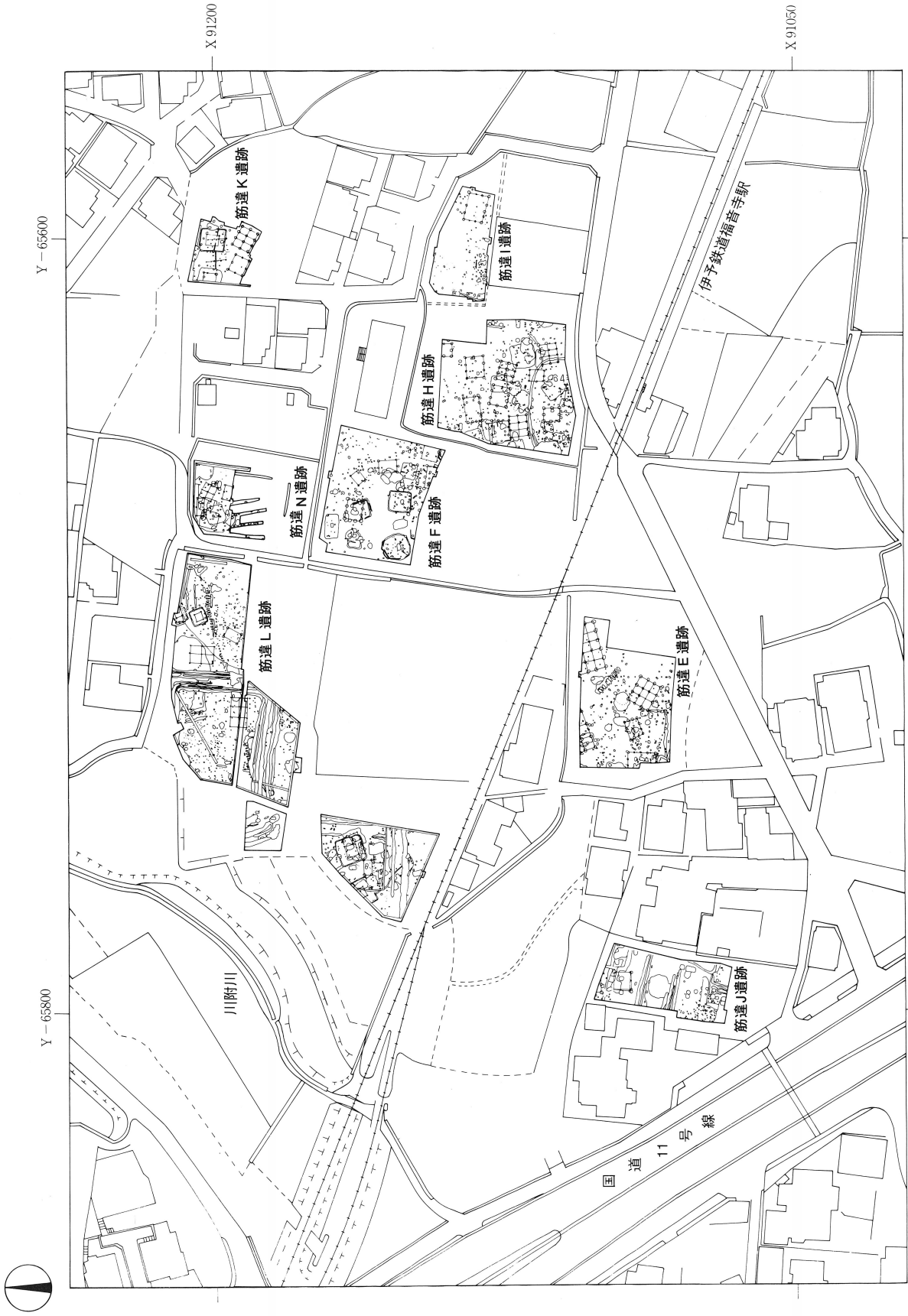
調査担当　山本　健一・山之内志郎

調査作業員　相原　勇・後藤　公克・重松　吉雄・坪内　寛美・都築　宇志・松田　常義・
宮内　徹・好川昇三郎・渡辺　常信・丹生谷智之・藤本　清志・松川　栄治・
関　正子・萩野ちよみ・吉井　信枝



Ⓐ 筋違Ｌ遺跡　Ⓑ 筋違Ｎ遺跡　❶ 筋違Ａ遺跡　❷ 筋違Ｂ遺跡　❸ 筋違Ｃ遺跡
❹ 筋違Ｄ遺跡　❺ 筋違Ｅ遺跡　❻ 筋違Ｆ遺跡　❼ 筋違Ｇ遺跡　❽ 筋違Ｈ遺跡
❾ 筋違Ｉ遺跡　❿ 筋違Ｊ遺跡　⓫ 筋違Ｋ遺跡　⓬ 福音小学校構内遺跡
⓭ 乃万の裏遺跡２次調査地

第２図　調査地位置図（縮尺１/４,000）



第３図　筋違遺跡各調査地位置図（縮尺１/１,500）

２．層　位（第４図）

基本層位は第Ⅰ層耕作土、第Ⅱ層床土、第Ⅲ①層旧耕作土、第Ⅲ②層造成土、第Ⅲ③層旧床土、第Ⅳ①層明灰褐色土、第Ⅳ②層黄色混じりの明灰褐色土、第Ⅴ層暗灰褐色土、第Ⅵ層黒色土、第Ⅶ層橙色砂質土（地山）である。なお、本調査地の旧地形は川附川の浸食によって南東から西へ傾斜している。

第Ⅰ層：灰色粘質土である。調査地全域にわたり８～26cmの厚さで堆積する。

第Ⅱ層：橙色シルトである。ほぼ全域に４～12cmの厚さで堆積する。

第Ⅲ①層：黄灰色粘質土である。ほぼ全域に堆積し、特に３・４区に10～26cmの厚さで厚く堆積する。

第Ⅲ②層：黄色混じりの灰褐色土である。２区の西半部から４区の北部、５区の西部などの旧地形の段落ち部分に８～23cmの厚さで堆積する。

第Ⅲ③層：橙灰色砂質土である。３・４・５区の一部に４～12cmの厚さで堆積する。

第Ⅳ①層：明灰褐色土で、４～20cmの厚さで１・４・５区に広く堆積する。

第Ⅳ②層：黄色混じりの明灰褐色土である。10～20cmの厚さで１・４・５区に広く堆積する。

第Ⅴ層：暗灰褐色土で遺物包含層である。２区の北東部及び南東部、３区の北西部の落込み部分に厚く堆積する。

第Ⅵ層：黒色土で遺物包含層である。第Ⅴ層同様、２区の北東部及び南東部、３区の北西部の落込み部分に厚く堆積する。

第Ⅶ層：橙色砂質土で地山である。

なお、調査にあたり調査区内を４ｍ四方のグリッドに分けた。グリッドは北から南へＡ・Ｂ…Ｓ・Ｔとし、東から西へ１・２…25・26と設定した。

３．遺構と遺物

本調査では、弥生時代・古墳時代・中世以前・中世・現代の遺構と遺物を検出した。検出した遺構は、竪穴式住居址８棟、掘立柱建物址４棟、土坑64基、溝23条、柵列２条、墓４基、井戸１基、柱穴1,024基、性格不明遺構６基である（第４図）。遺物は、土製品（弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器・韓式系土器・瓦）、石製品（石鏃・ナイフ形石器・細石刃・石核・石庖丁・石斧・砥石・敲石・石鍋・台石・管玉・臼玉）、ガラス小玉、鉄製品（鉄鏃・鉇・鉄板・釘・鉄塊）である。

以下、主要な遺構について時代ごとに概説を行う。なお整理作業の都合上、遺構名称及び数量が年報Ｘ（注１）・現地説明会資料とは若干変更がある。

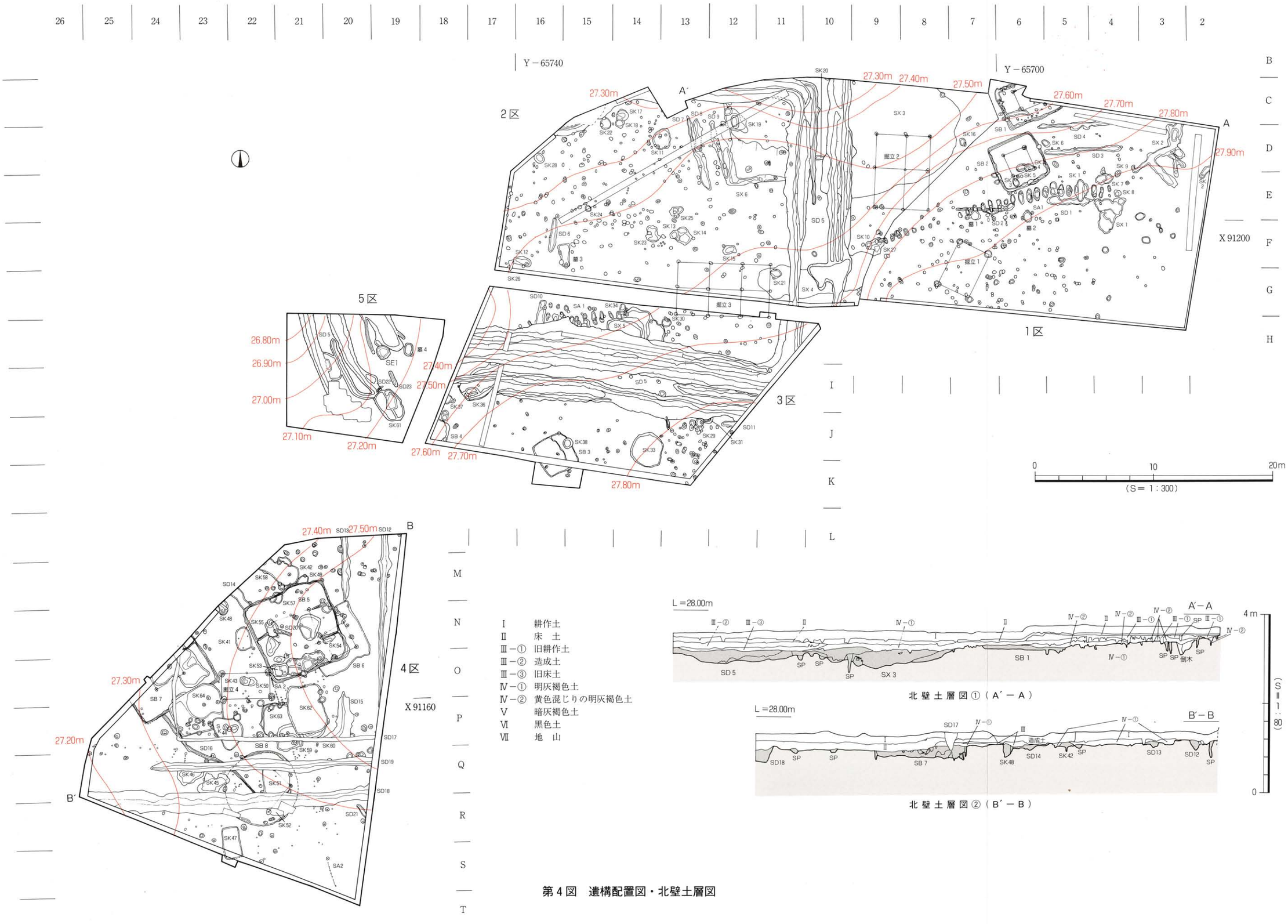
（注１）山本健一・山之内志郎　1998　「筋違Ｌ遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ｘ』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

〔１〕弥生時代

当該期の遺構は、竪穴式住居址２棟・土坑24基・溝３条・柱穴がある。

(1)竪穴式住居址（ＳＢ）

検出した２棟の住居址のうちＳＢ２は後期、ＳＢ８は切り合い関係と平面形態から弥生時代と推定される。平面形態は円形（１棟）と方形（１棟）である。

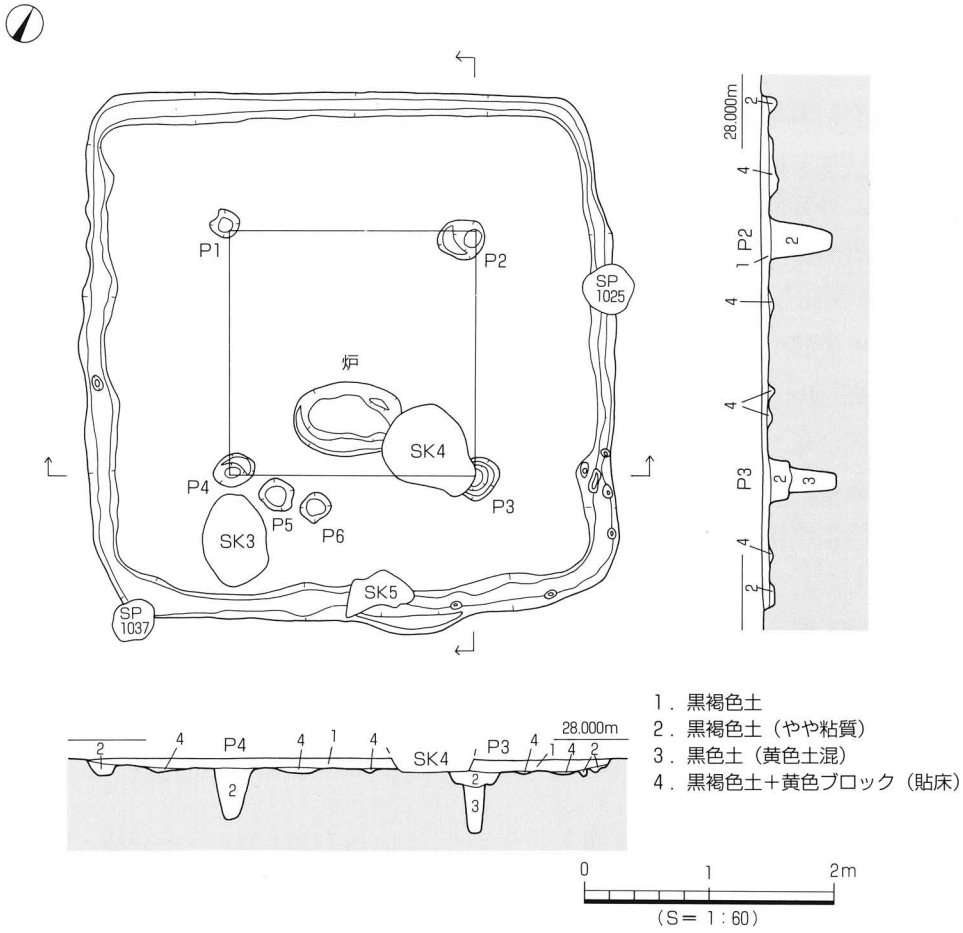


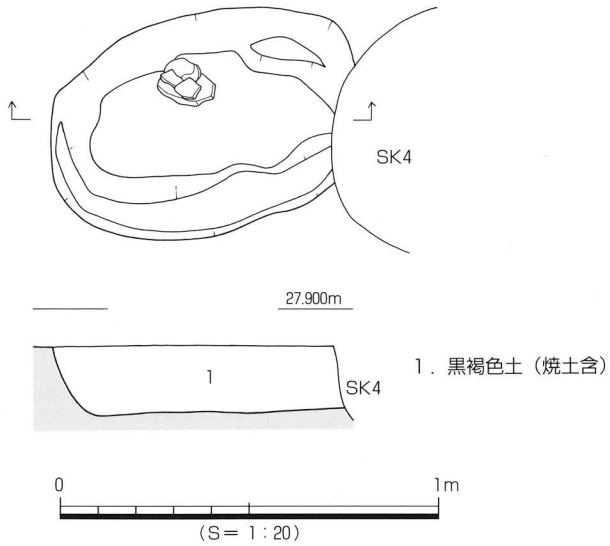
Ⅰ	耕作土
Ⅱ	床　土
Ⅲ－①	旧耕作土
Ⅲ－②	造成土
Ⅲ－③	旧床土
Ⅳ－①	明灰褐色土
Ⅳ－②	黄色混じりの明灰褐色土
Ⅴ	暗灰褐色土
Ⅵ	黒色土
Ⅶ	地　山

北壁土層図①（A´－A）

北壁土層図②（B´－B）

第４図　遺構配置図・北壁土層図





第5図　ＳＢ２・ＳＢ２内炉測量図

ＳＢ２（第５図）

調査区北東部のＤ６～Ｅ７区に位置し、ＳＫ３・４・５、ＳＰ1025・1037に切られる。平面形態は隅丸方形である。規模は長軸4.24m、短軸4.20m、深さ12cmを測る。埋土は４層に分かれ、１層は黒褐色土、２層はやや粘質の黒褐色土、３層は黄色土混じりの黒色土、４層は黒褐色土＋黄色ブロック（貼床）である。内部施設には主柱穴・炉・周壁溝・貼床がある。主柱穴は４本を検出した。柱穴の平面形態は楕円形と円形である。規模は径20～46cm、深さ42～51cmを測る。埋土は黒褐色土及び黒色土である。なお図化していないが、貼床を剝がした床面には多数の小ピットを確認することができた。

炉は住居址中央部やや南側に位置する。平面形態は楕円形を呈し内部は二段掘りである。規模は長軸0.75m、短軸0.59m、深さ19cmを測る。埋土は焼土を含む黒褐色土である。周壁溝は壁体に沿って巡り、部分的に小ピットを検出した。規模は残存良好な部分で幅13～30cm、深さ８cmを測る。断面形態はＵ字状である。周壁溝は住居址検出当初は四辺で確認していたが、度重なる降雨と精査の繰り返しにより完掘時には住居址北辺の周壁溝は消滅していた。出土遺物は炉内から弥生土器と埋土中よりこね鉢が出土した。

出土遺物（第６図）

１は弥生土器の甕形土器である。小さな平底の底部である。２はこね鉢の口縁部である。

時期：炉内出土の甕形土器の形態より弥生時代後期末と考えられる。

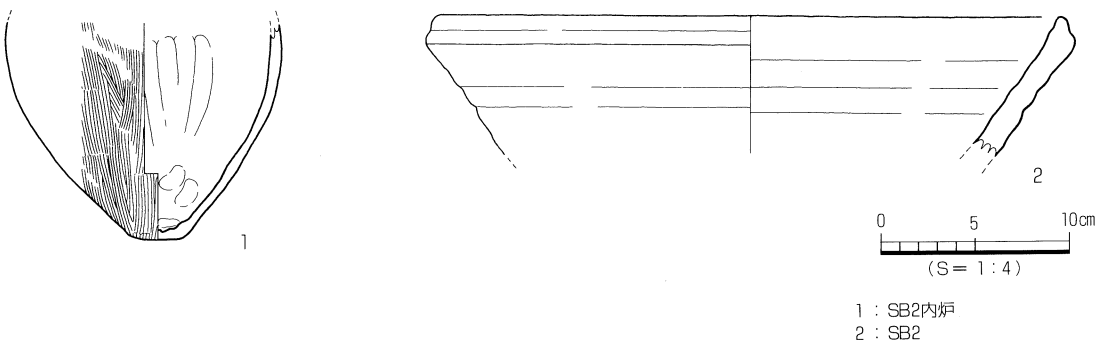
ＳＢ８（第７図）

調査区南西部のＱ21～Ｒ22区に位置し、ＳＫ51・52、ＳＤ16を切り、ＳＤ18・19とＳＰに切られている。平面形態は円形で、規模は長軸6.20m、残存短軸6.00m、深さ８cmを測る。埋土は２層に分かれ、１層は黄色土混じりの黒褐色土、２層は黒褐色土である。内部施設は柱穴と周壁溝がある。主柱穴は３本確認できたが、本来５～６本あったものと推定される。周壁溝は南部で一部途切れるものの壁体に沿って巡る。規模は幅10～25cm、深さ10cmを測る。断面形態はＵ字状である。出土遺物は弥生土器が出土したが、小片のため図化するには至らなかった。

時期：詳細な時期決定は避けるが、切り合い関係と平面形態から弥生時代と考えられる。

⑵土坑（ＳＫ）

検出した24基の土坑のうち、明確に前期に比定できるのはＳＫ47・51・63・52の４基である。いずれも平面形態は隅丸長方形または長方形で、断面形態は逆台形状を呈する。また中期に比定できるのはＳＫ18・39・43・55・58の５基、後期に比定できるのはＳＫ14の１基である。

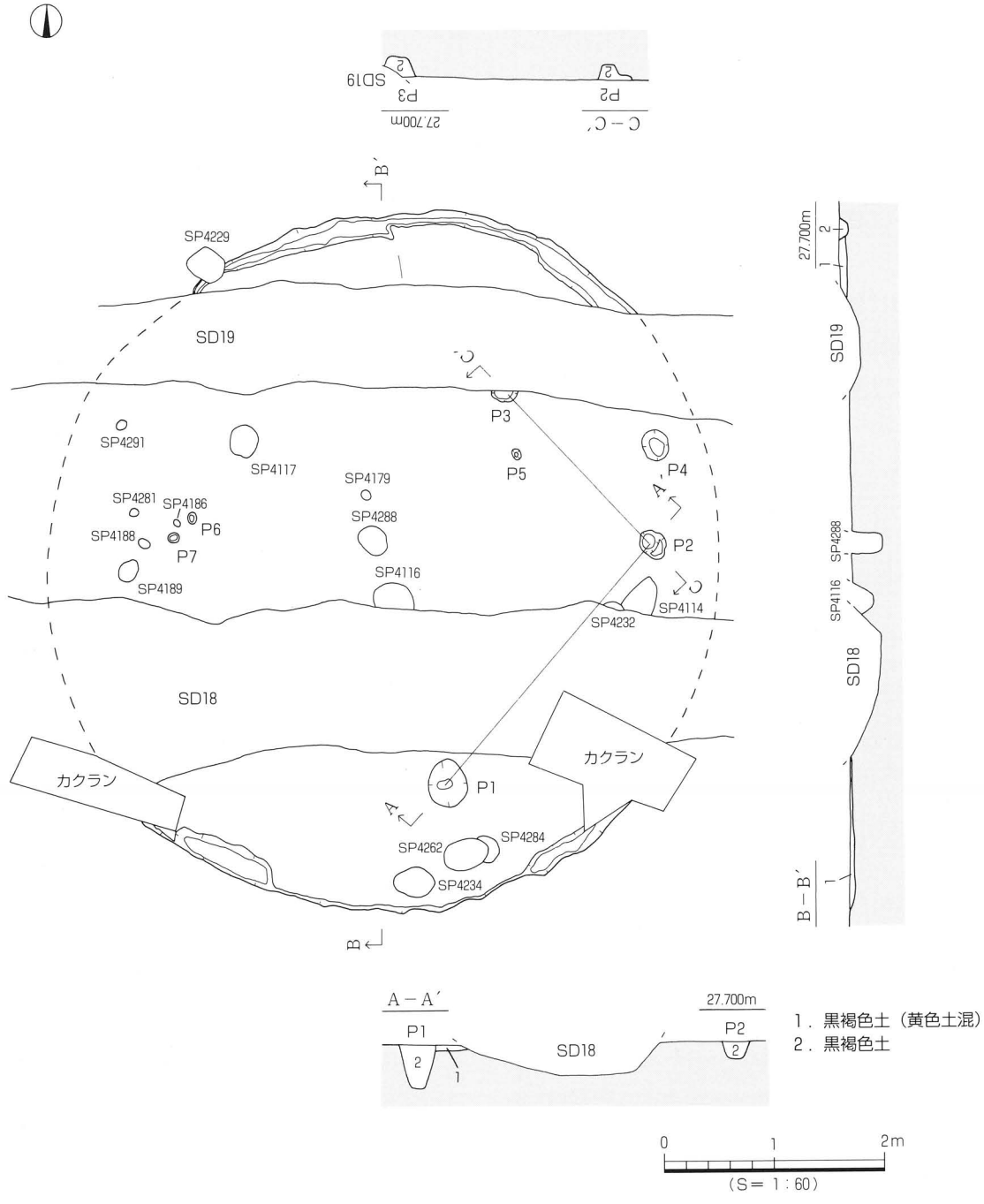


1：SB2内炉
2：SB2

第６図　ＳＢ２出土遺物実測図

ＳＫ47（第８図、図版７）

調査区南西端のＲ22～Ｓ23区に位置し、南部をトレンチに切られる。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸3.50m、短軸1.89m、深さ50cmを測る。断面形態は上面よりほぼ垂直の逆台形状を呈し、床は北から南へやや傾斜がみられる。埋土は６層に分かれ、１層は褐色土（やや砂質）、２層は灰褐色土（焼土）、３層は暗灰褐色土、４層は灰褐色土、５層は黄褐色土、６層は灰褐色土（粘質土）である。出土遺物は弥生土器と石製品がある。



第７図　ＳＢ８測量図

出土遺物（第９・10図、図版７）

３～13は甕形土器である。３～７は如意形口縁である。３～６は口唇部に刻目を施す。８は胴部に段を有し刻目を施す。９は口縁部下に刻目突帯を貼り付ける。10～13は平底の底部である。14～20は壺形土器である。14・15は外反する口縁部である。16は胴部に沈線文と重弧文を施す。17は胴部に沈線文を施す。18は上げ底の底部である。19・20は高台付きの底部である。21～24は鉢形土器である。21・22は外反する口縁部である。23・24は深鉢の如意形口縁である。胴部に段を有する。25は支脚形土器の脚部である。26は甕形土器である。口縁部を「く」の字状に折り曲げ、端部に凹線文を施す。27は太形蛤刃石斧である。28は扁平片刃石斧である。

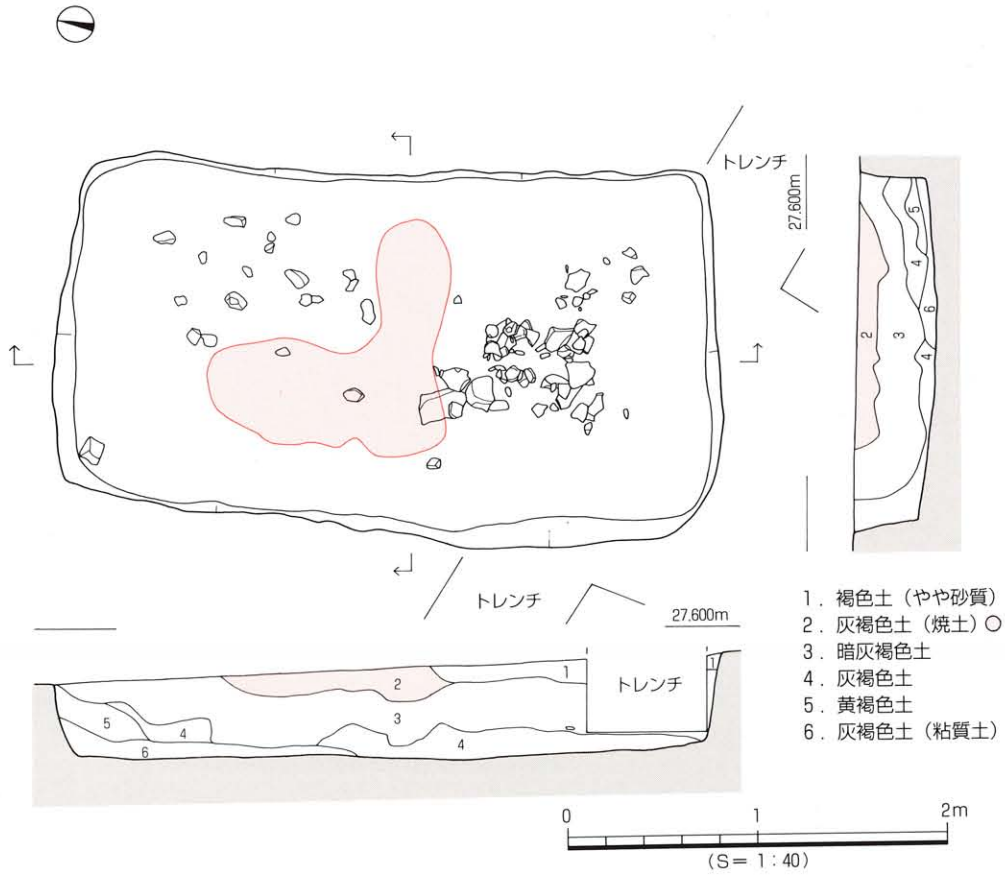
時期：26は混入品と考えられ、それ以外の出土遺物の形態から弥生時代前期前半と考えられる。

ＳＫ51（第11図）

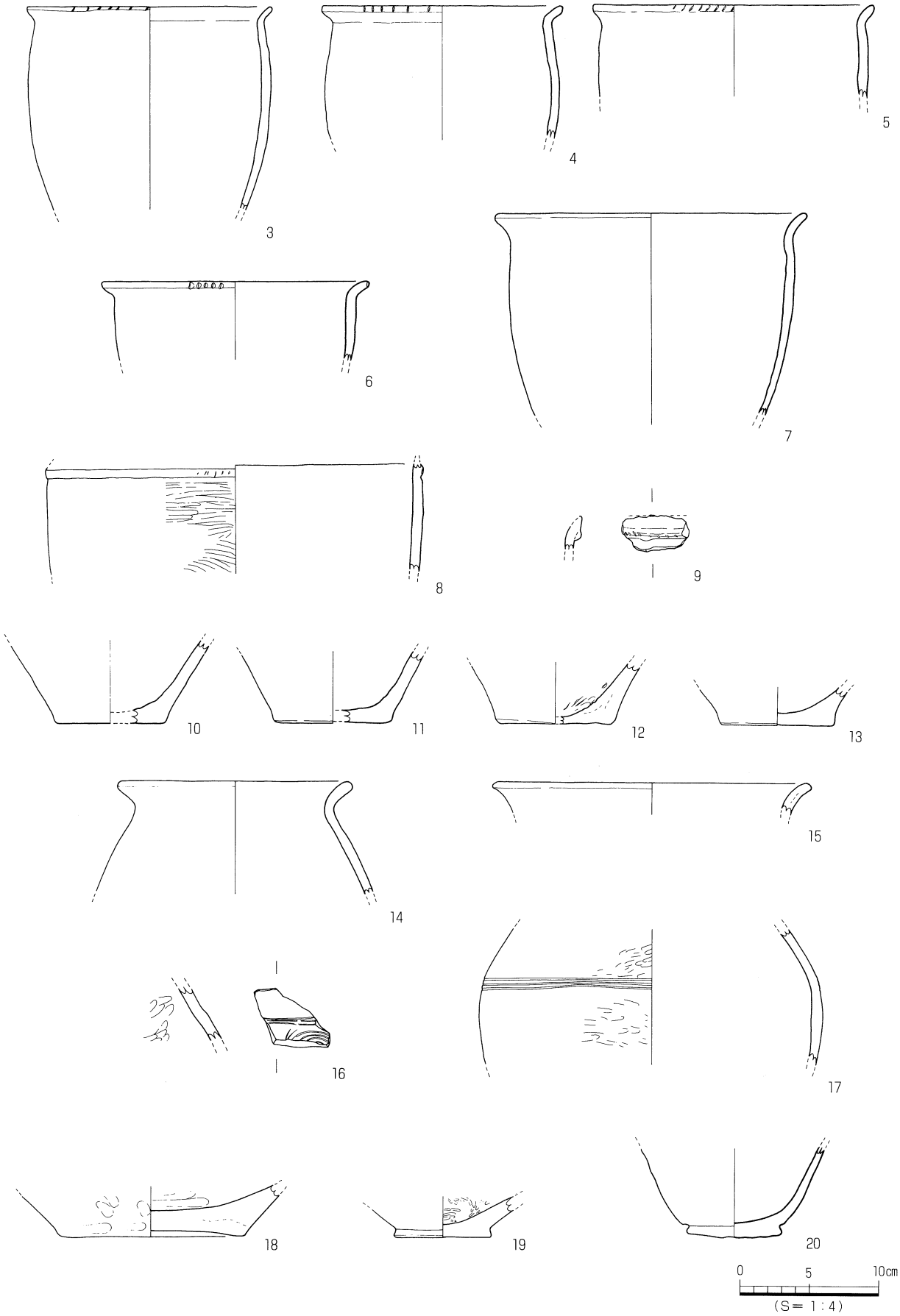
調査区南西部のＱ21・22区に位置し、ＳＢ８、ＳＤ18・19、ＳＰ4112～4114・4214・4215・4232に切られる。平面形態は長方形を呈し、規模は長軸2.33m、短軸2.19m、深さ30cmを測る。断面形態は上面よりほぼ垂直の逆台形状を呈し、床はほぼ平坦である。埋土は５層に分かれ、１層は褐色土、２層は橙色シルト（焼土、やや砂質）、３層は暗灰色土、４層は黒色粘質土、５層は灰色粘質土である。出土遺物は弥生土器と石製品がある。

出土遺物（第12図）

29～31は甕形土器である。29は口唇部に刻目を施す。30と31は口縁部下に突帯を貼り付け刻目を施



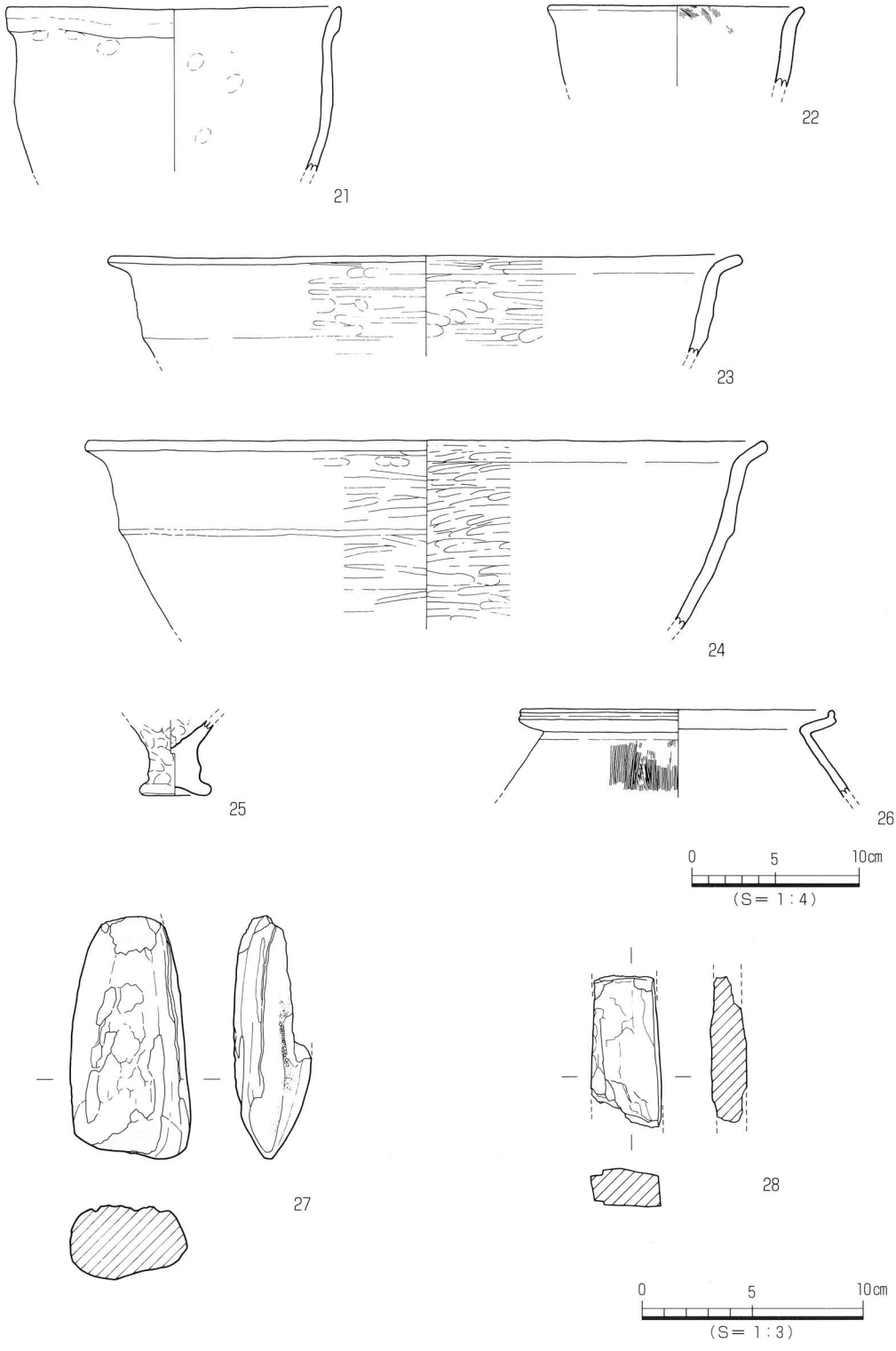
第８図　ＳＫ47測量図



第９図　ＳＫ47出土遺物実測図(1)

す。32は壺形土器の外反する口縁部である。33は細石刃である。34は太形蛤刃石斧である。35は台石である。

時期：出土遺物の形態から弥生時代前期前半と考えられる。



第10図　ＳＫ47出土遺物実測図(2)

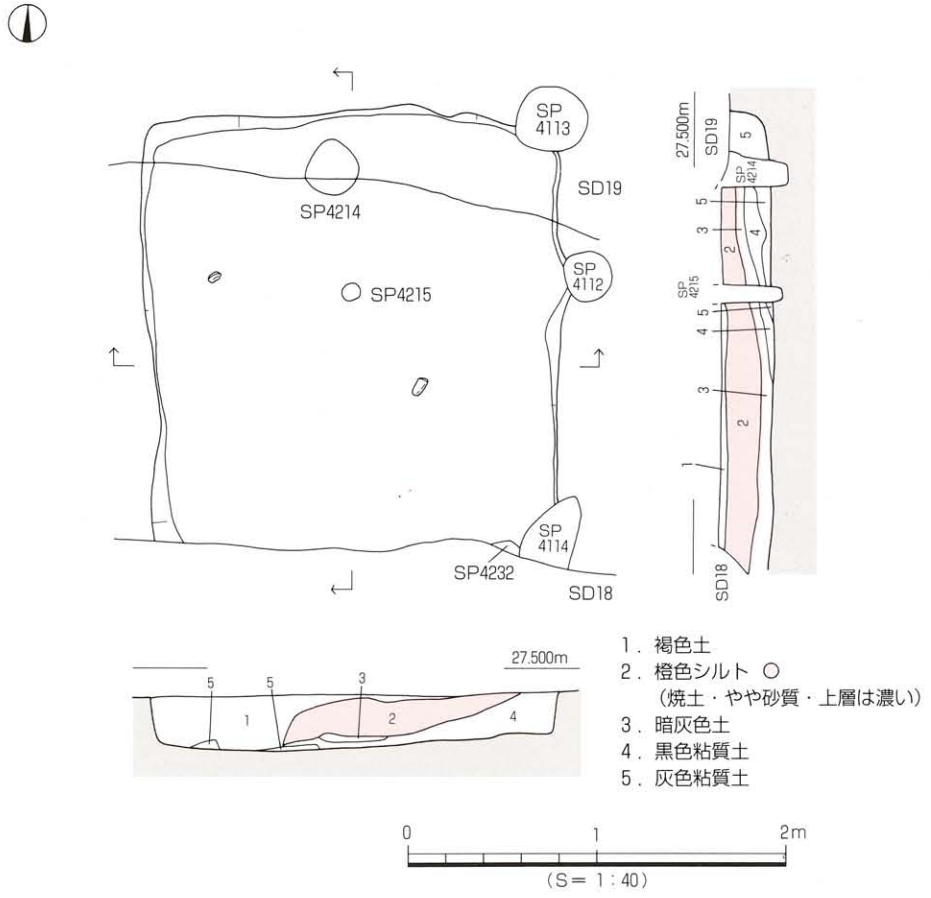
ＳＫ63（第13図）

調査区南西部のＰ21・22区に位置し、ＳＫ59・60・62、ＳＰ4219～4221・4223・4236に切られる。平面形態は長方形を呈し、規模は長軸3.72m、短軸2.72m、深さ42cmを測る。断面形態は逆台形状で、西壁及び北壁では二段掘りを呈し、床は中央部がやや凹むがほぼ平坦である。埋土は３層に分かれ、１層が暗茶褐色土、３層が黄色粒状土が混じる暗茶褐色土である。なお、中央部やや東寄りの位置で、３層上面にて２層焼土を検出した。出土遺物は弥生土器・土師器・須恵器がある。

出土遺物（第14図）

36～50は弥生土器である。36～43は甕形土器である。36と37は如意形口縁である。37は口唇端部に刻目を施す。38は胴部の段上に刻目を施す。39～43は平底の底部である。44～49は壺形土器である。44～46は外反する口縁部である。44は頸部に一条の沈線を施す。口縁内外面に丹塗りを施す。47は肩部に沈線文と重弧文を施す。48と49は平底の底部である。50は鉢形土器で口縁部は短く屈曲する。51～53は土師器で外反する口縁部をもつ甕形土器である。54は須恵器で直立する立ち上がりをもつ坏身である。51～54は混入品と考えられる。

時期：出土遺物の36～50の年代から弥生時代前期前半と推定される。



第11図　ＳＫ51測量図

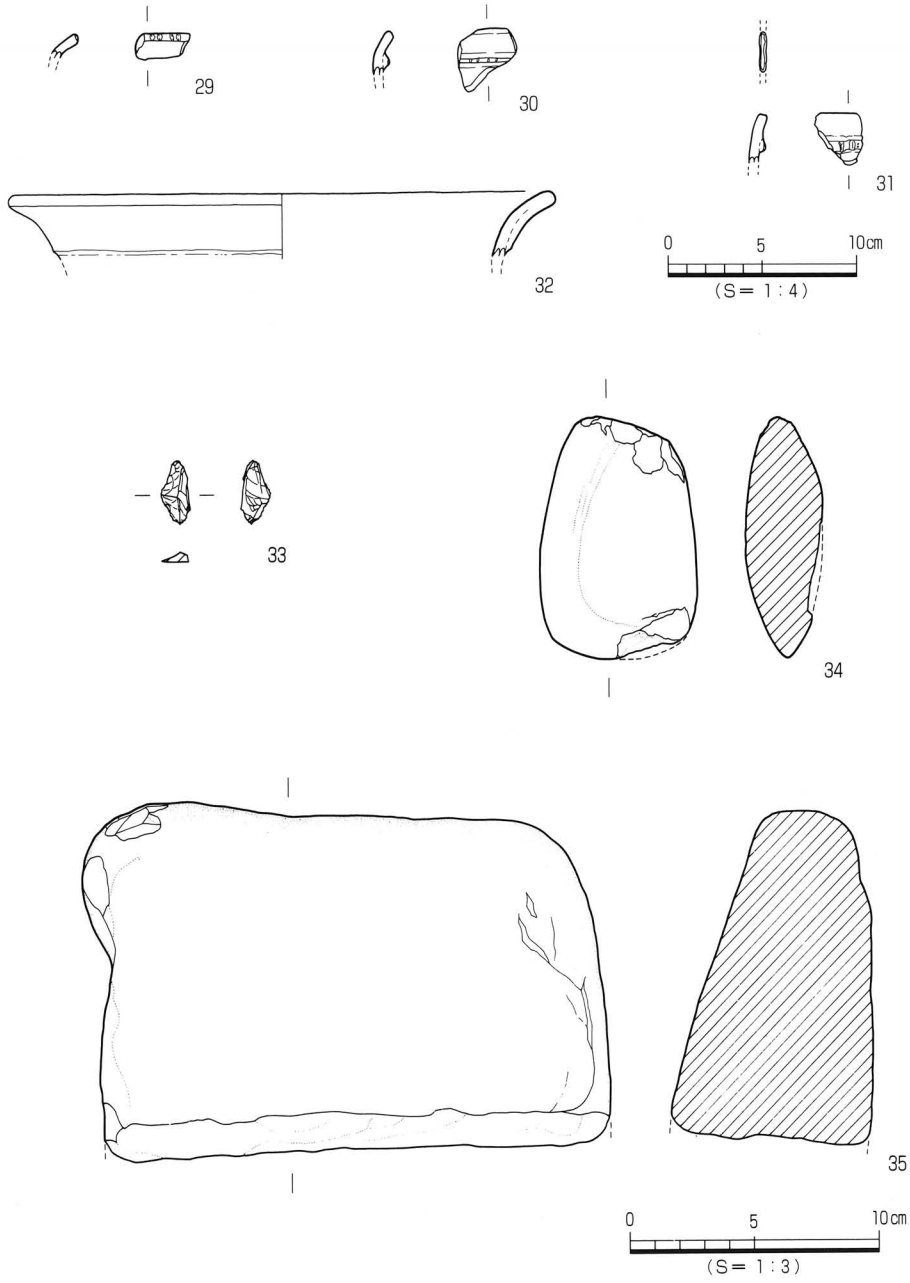
ＳＫ52（第15図）

調査区南西部のＲ21・22区に位置し、ＳＢ８、ＳＤ18、ＳＰ4233に切られる。平面形態は長方形を呈し、規模は長軸1.35m、短軸0.76m、深さ18cmを測る。断面形態は上面よりほぼ垂直の逆台形状を呈し、床はほぼ平坦である。埋土は褐色土である。遺物は出土していない。

時期：遺物は出土していないが、埋土と断面形態が隣接するＳＫ51と同じであるため、弥生時代前期前半と考えられる。

ＳＫ60（第16図）

調査区南西部のＰ20・21区に位置し、ＳＫ63を切り、ＳＫ62に遺構のほぼ全面を切られる。平面形



第12図　ＳＫ51出土遺物実測図

態は不整形を呈し、規模は長軸3.40m、短軸2.20m、深さ20cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は2層に分かれ、1層が黒褐色土、2層が黄色土混じりの黒褐色土である。出土遺物には弥生土器がある。

出土遺物（第16図）

55は甕形土器である。平底の底部である。

時期：弥生時代前期のＳＫ63を切り古墳時代中期のＳＫ62に切られていることから、弥生時代前期以降で古墳時代中期以前と考えられる。

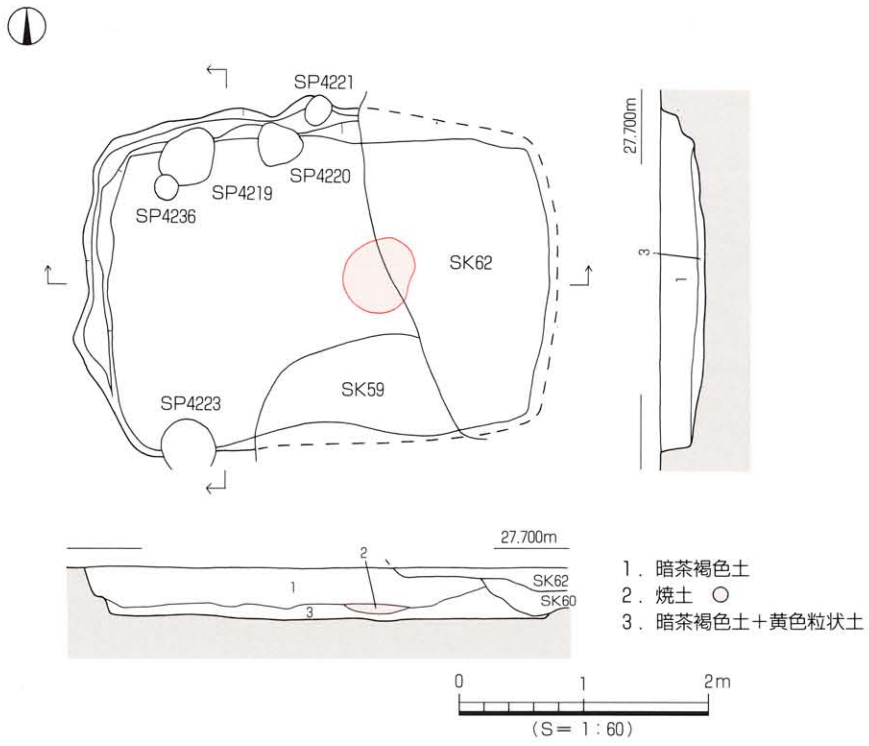
ＳＫ15（第17図）

調査区中央部北のＦ12区に位置する。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸1.10m、短軸0.71m、深さ6cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は炭混じりの黒褐色土である。遺物は弥生土器が出土したが、小片のため図化するには至らなかった。

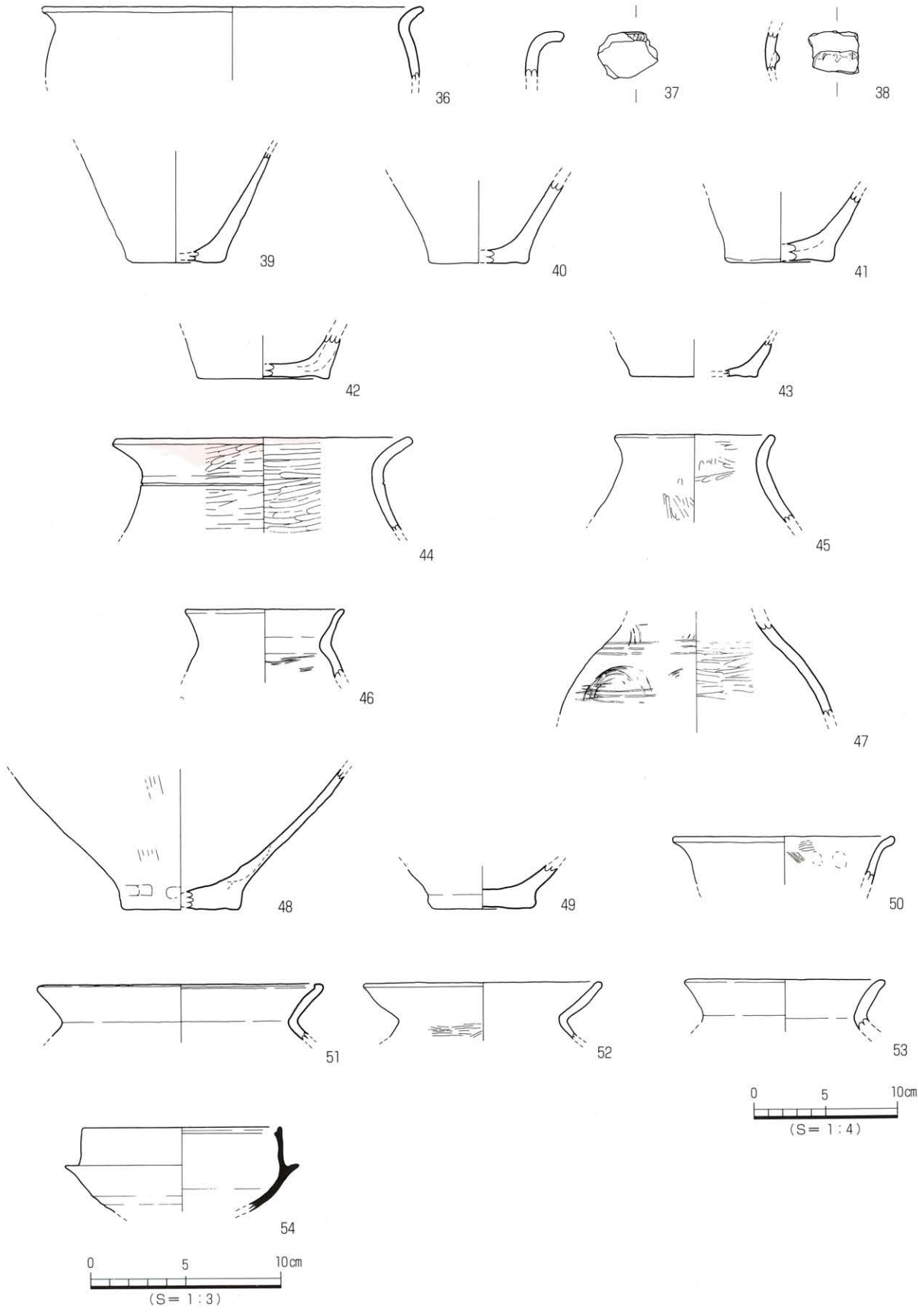
時期：埋土がＳＫ60と同じであり、出土した土器から弥生時代と考えられる。

ＳＫ11（第17図）

調査区北西部のＤ13・14区に位置し、ＳＰ2207・2208・2212～2214・2221に切られる。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸1.75m、短軸1.52m、深さ10cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は3層に分かれ、1層が明褐色シルト、2層が黄褐色シルト、3層が黒褐色土である。遺物は弥生土器が出土したが、小片のため図化するには至らなかった。



第13図　ＳＫ63測量図



第14図　ＳＫ63出土遺物実測図

時期：埋土の３層がＳＫ60と同じであり、出土した土器から弥生時代と考えられる。

ＳＫ14（第17図）

調査区中央部北のＦ13区に位置し、ＳＫ13に切られる。平面形態は不整形を呈し、規模は東西1.39ｍ、南北1.39ｍ、深さ12㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層は黒色土、２層は灰褐色土である。出土遺物は弥生土器がある。

出土遺物（第17図）

56は甕形土器である。平底の底部である。

時期：出土した土器の形態から弥生時代後期と考えられる。

ＳＫ13（第17図）

調査区中央部北のＦ13区に位置し、ＳＫ14を切る。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸0.70ｍ、短軸0.62ｍ、深さ11㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は黄色土混じりの黒褐色土である。遺物は弥生土器が出土したが、小片のため図化するには至らなかった。

時期：ＳＫ14を切っていることから弥生時代後期以降と考えられる。

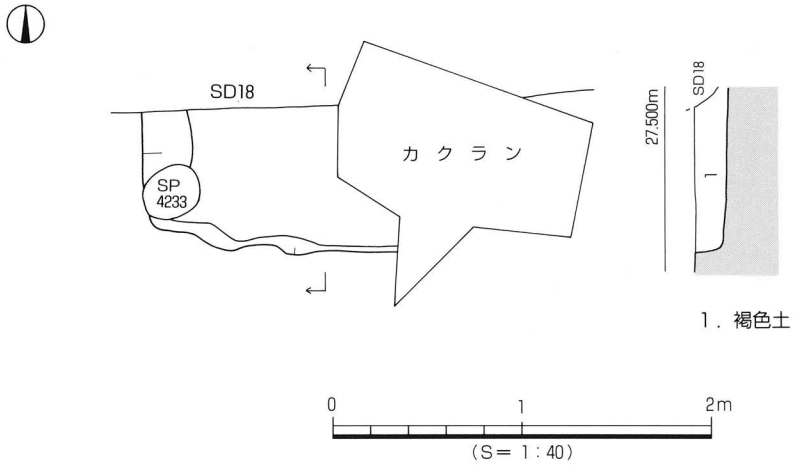
ＳＫ18（第18図）

調査区北西部のＣ14～Ｄ14区に位置し、北部をＳＫ17に切られる。平面形態は突出部をもつ楕円形を呈し、規模は長軸0.70ｍ、短軸0.61ｍ、深さ15㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈し、突出部は二段掘りである。埋土は３層に分かれ、１層は黄色土混じりの黒褐色土、２層は黒褐色土、３層は地山混じりの黒褐色土である。出土遺物は弥生土器がある。

出土遺物（第18図）

57は壺形土器である。肩部に「ノ」の字状の木口押圧痕が残る。

時期：出土した土器の形態から弥生時代中期と考えられる。



第15図　ＳＫ52測量図

ＳＫ19（第18図）

調査区北部のＣ12～Ｄ12区に位置し、ＳＸ６を切り、ＳＰ2228・2313とトレンチに切られる。平面形態は不整形で、規模は長軸2.38m、短軸1.55m、深さ48cmを測る。断面形態は緩やかなレンズ状を呈する。埋土は黄色土混じりの黒褐色土である。遺物は弥生土器とこね鉢が出土したが、図示できたのはこね鉢１点である。

出土遺物（第18図）

58はこね鉢である。

時期：埋土がＳＫ60と同じであるため図示したこね鉢は混入品と考え、遺構の時期は弥生時代と考えられる。

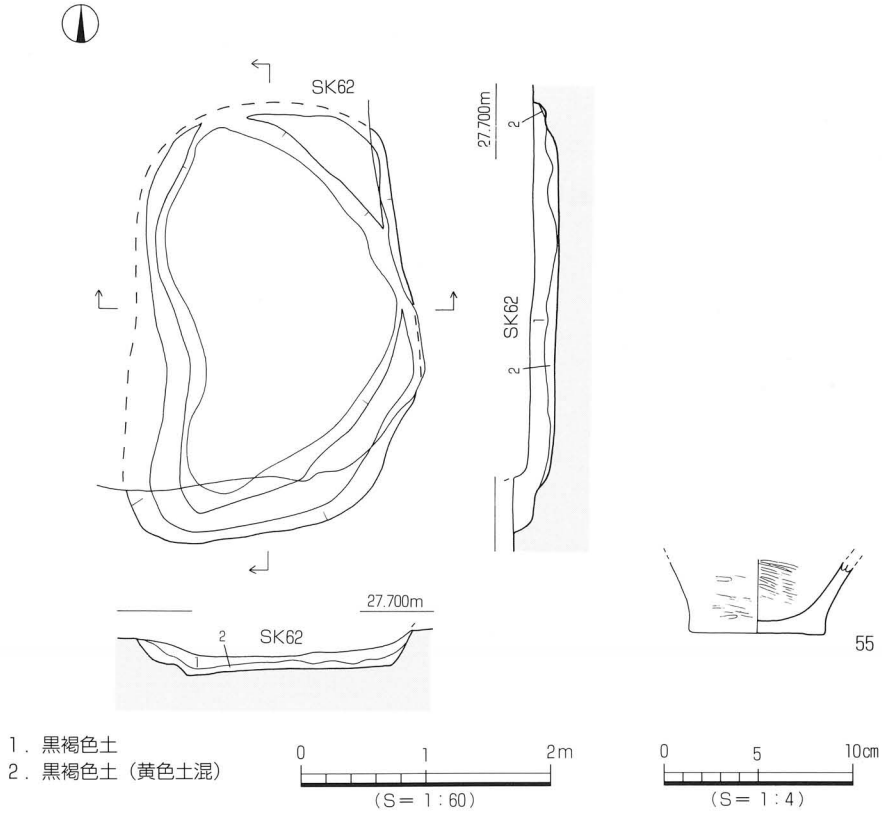
ＳＫ21（第18図）

調査区中央部のＧ11区に位置し、ＳＸ４に切られる。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸0.97m、短軸0.87m、深さ６cmを測る。断面形態は皿状を呈し、南北に一段浅い部分がある。埋土は黒褐色土である。遺物は弥生土器が出土したが、小片のため図化するには至らなかった。

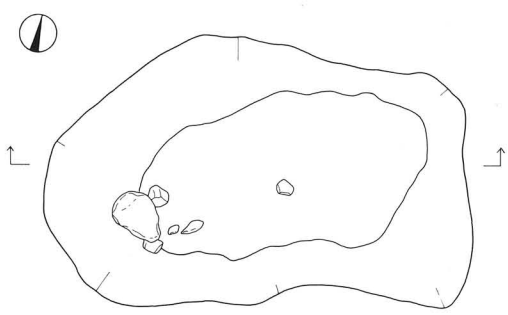
時期：埋土がＳＫ60と同じであるため、弥生時代と考えられる。

ＳＫ23（第18図）

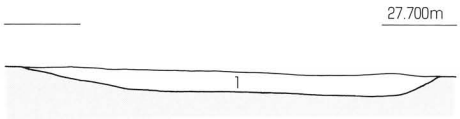
調査区北西部のＦ14区に位置し、ＳＰ2148に切られる。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸1.34



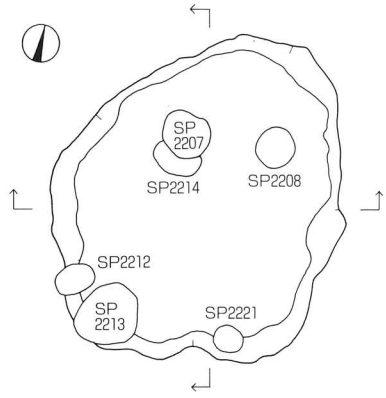
第16図　ＳＫ60測量図・出土遺物実測図



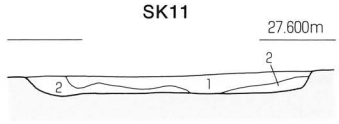
SK15



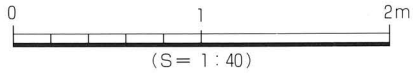
1．黒褐色土（炭混）



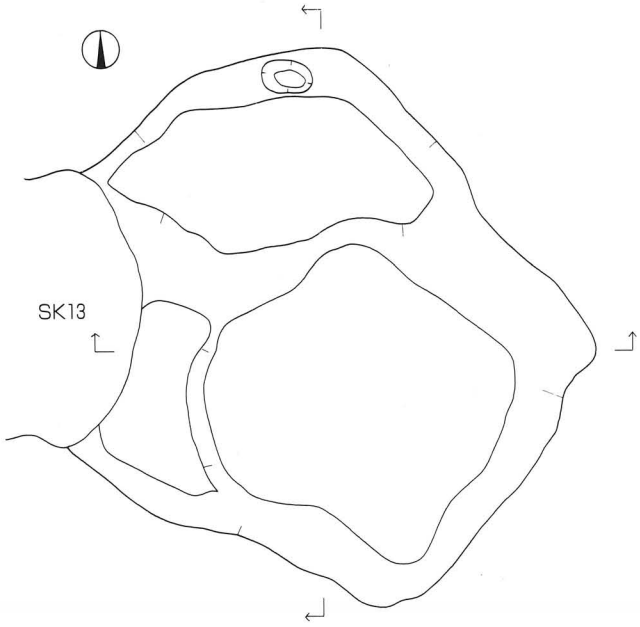
SK11



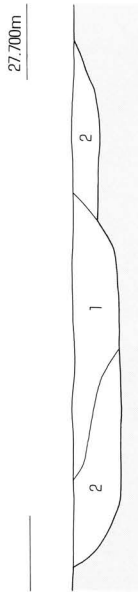
1．明褐色シルト
（やや砂質）
2．黄褐色シルト
3．黒褐色土

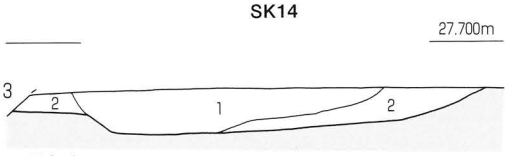


（S＝1：40）

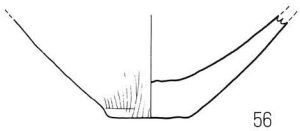


SK14

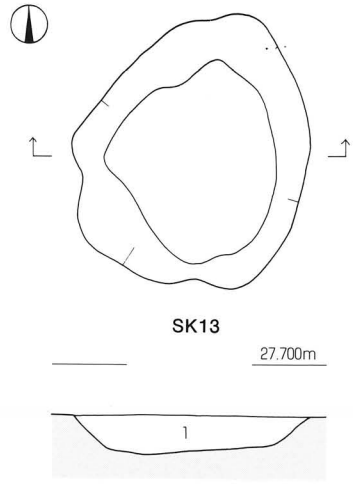




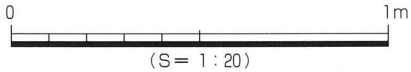
1．黒色土
2．灰褐色土



（S＝1：4）

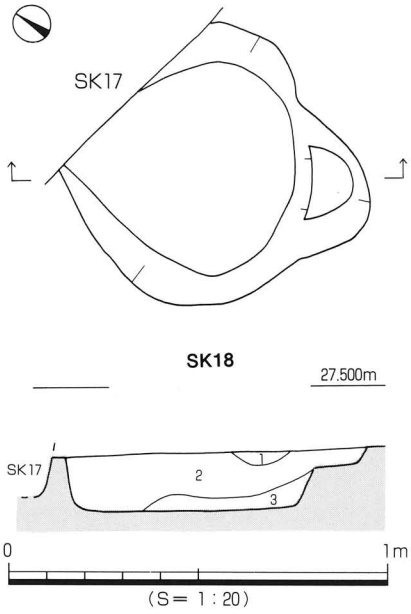


1．黒褐色土（黄色土混）

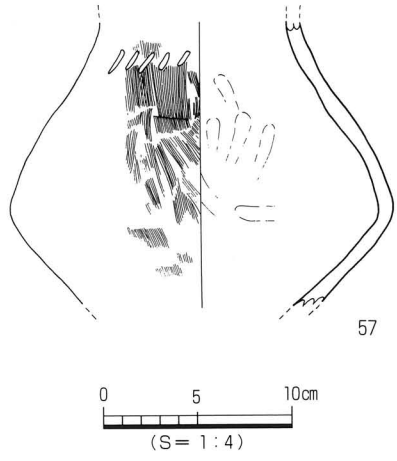


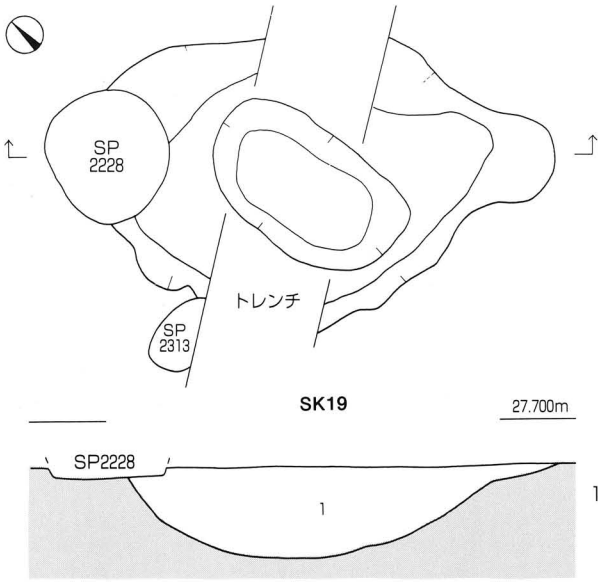
（S＝1：20）

第17図　ＳＫ15・11・14・13測量図・出土遺物実測図

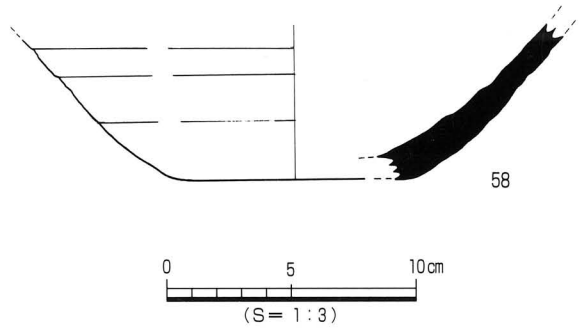


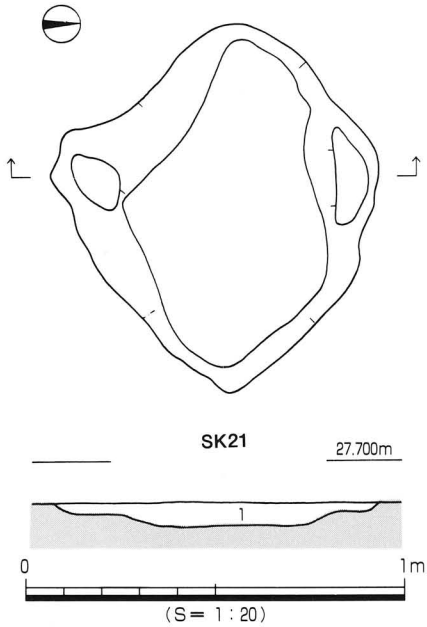
1．黒褐色土（黄色土混）
2．黒褐色土
3．黒褐色土＋地山



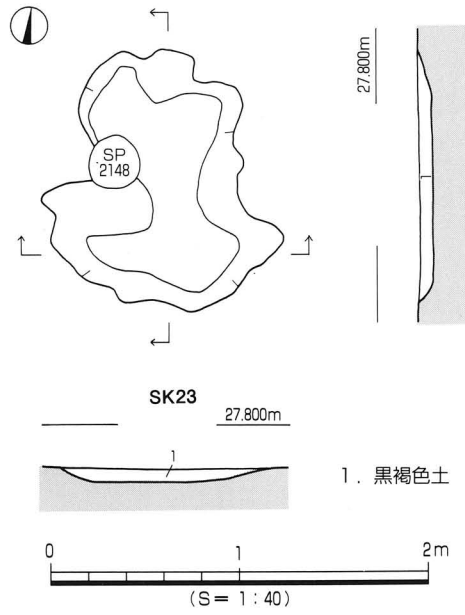


1．黒褐色土（黄色土混）





1．黒褐色土



1．黒褐色土

第18図　ＳＫ18・19・21・23測量図・出土遺物実測図

m、短軸1.22m、深さ８cmを測る。断面形態は浅い皿状を呈し、埋土は黒褐色土である。遺物は出土していない。

時期：埋土がＳＫ60と同じであるため、弥生時代と考えられる。

ＳＫ24（第19図）

調査区北西部のＥ15区に位置し、北側をトレンチに切られる。平面形態は楕円形を呈する。規模は長軸0.58m、短軸0.48m、深さ20cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色土である。遺物は出土していない。

時期：埋土がＳＫ60と同じであるため、弥生時代と考えられる。

ＳＫ30（第19図）

調査区中央部のＨ13区に位置し、ＳＰ3063に切られる。平面形態は円形を呈し、内部の北壁近くに柱穴（ＳＰ１）が存在する。規模は長軸0.76m、短軸0.69m、深さ25cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、底部中央部付近で若干凹みをもつ。埋土は２層に分かれ、１層は黄色土混じりの黒褐色土、２層は黒褐色土である。遺物は出土していない。

時期：埋土がＳＫ60と同じであるため、弥生時代と考えられる。

ＳＫ32（第19図）

調査区中央部のＩ15区に位置し、ＳＤ５、ＳＰ3079・3080に切られる。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸1.10m、短軸0.46m、深さ３cmを測る。断面形態は浅い皿状を呈する。埋土は黒褐色土である。遺物は出土していない。

時期：埋土がＳＫ60と同じであるため、弥生時代と考えられる。

ＳＫ35（第19図）

調査区中央部のＨ14区に位置し、ＳＤ５に切られる。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸1.18m、短軸0.42m、深さ13cmを測る。断面形態は長軸方向に２か所深く凹んでいる。埋土は２層に分かれ、１層は黄色土混じりの黒褐色土、２層は凹んだ部分に堆積する黒褐色土である。遺物は出土していない。

時期：埋土がＳＫ60と同じであるため、弥生時代と考えられる。

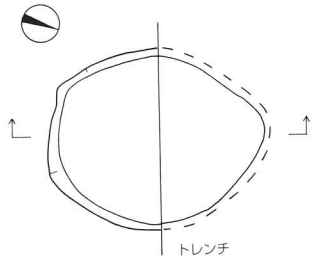
ＳＫ39（第19図）

調査区中央部のＨ13区に位置し、ＳＤ５に切られる。平面形態は楕円形を呈しており、規模は長軸0.72m、短軸0.37m、深さ21cmを測る。断面形態は二段掘りになっており、西側は浅く平らで東側は深い逆台形状を呈す。埋土は２層に分かれ、１層は黄色土混じりの黒色土、２層は黒色土である。出土遺物は弥生土器がある。

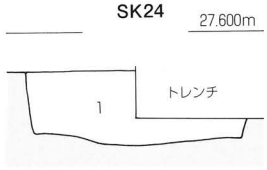
出土遺物（第19図）

59は甕形土器である。やや上げ底の底部である。

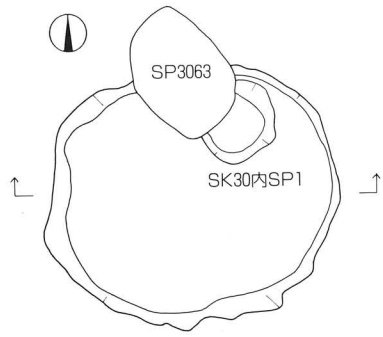
時期：出土した土器の形態から弥生時代中期と考えられる。



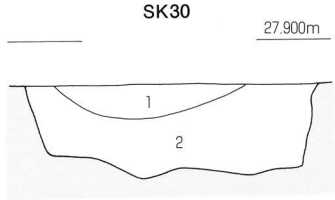
SK24



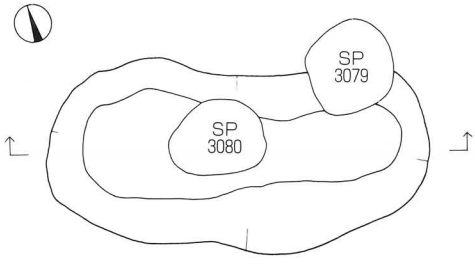
1．黒褐色土



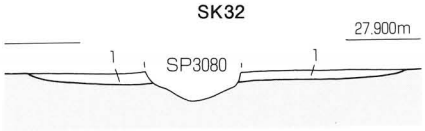
SK30



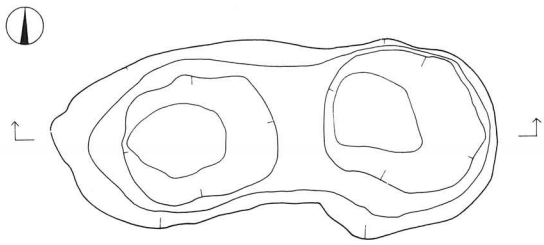
1．黒褐色土（黄色土混）
2．黒褐色土



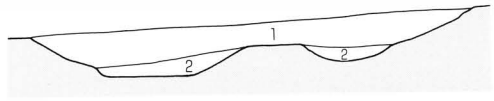
SK32



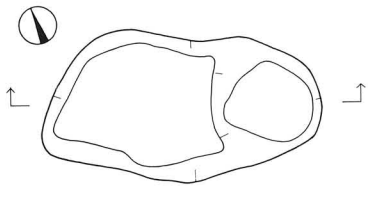
1．黒褐色土



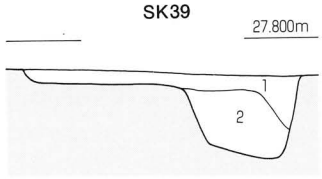
SK35



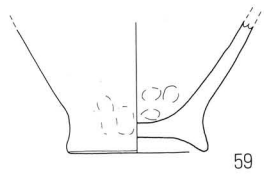
1．黒褐色土（黄色土混）
2．黒褐色土

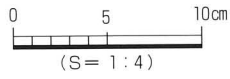


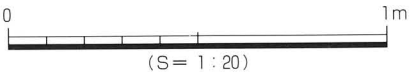
SK39



1．黒色土（黄色土混）
2．黒色土







第19図　ＳＫ24・30・32・35・39測量図・出土遺物実測図

ＳＫ40（第20図）

調査区中央部のＩ17区に位置し、ＳＤ５に切られる。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸1.07m、短軸0.72m、深さ23cmを測る。断面形態は北側が緩やかに傾斜する逆台形状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層は黒褐色土、２層はやや粘質の黒褐色土である。遺物は出土していない。

時期：埋土がＳＫ60と同じであるため、弥生時代と考えられる。

ＳＫ43（第20図）

調査区南西部のＯ22区に位置し、ＳＫ50を切り、掘立４に切られる。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸0.82m、短軸0.71m、深さ20cmを測る。断面形態は二段掘りの逆台形状を呈する。埋土はやや粘質の黒褐色土である。遺物は弥生土器が出土した。

出土遺物（第20図）

60・61は甕形土器である。平底の底部である。

時期：出土した土器の形態から弥生時代中期と考えられる。

ＳＫ50（第20図）

調査区南西部のＯ22区に位置し、掘立４、ＳＫ43に切られる。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸0.74m、短軸0.72m、深さ17cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土はやや砂質の明褐色シルトである。遺物は出土していない。

時期：ＳＫ43に切られていることから、弥生時代中期以前と考えられる。

ＳＫ54（第20図）

調査区南西部のＮ21～Ｏ21区に位置し、ＳＢ５に切られる。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸1.05m、短軸0.49m、深さ15cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は３層に分かれ、１層が黒色粘質土、２層が黒色粘質土（黄色混）、３層が黄灰色粘質土である。遺物は出土していない。

時期：ＳＢ５に切られていることから古墳時代中期以前で、埋土から弥生時代と考えられる。

ＳＫ55（第21図）

調査区南西部のＮ21・22区に位置し、ＳＢ５とＳＤ20に切られる。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸1.42m、短軸0.93m、深さ14cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層はやや粘質の黒色土、２層は黄色土混じりの黒色土である。遺物は弥生土器が出土した。

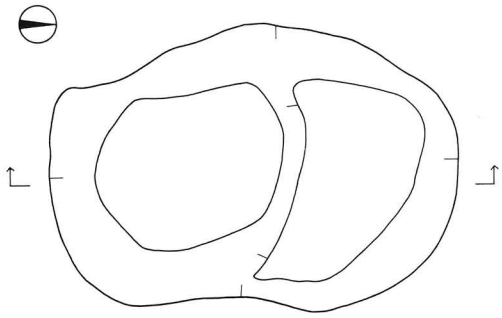
出土遺物（第21図）

62は甕形土器である。平底の底部である。

時期：出土した土器の形態から弥生時代中期と考えられる。

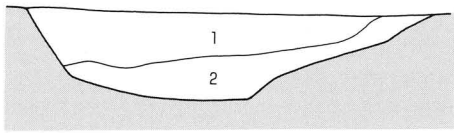
ＳＫ58（第21図）

調査区南西部のＭ22区に位置し、ＳＫ42とＳＰ4235に切られる。平面形態は円形を呈し、規模は長軸1.06m、短軸0.94m、深さ29cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、中央部に１か所凹みをもつ。埋土は２層に分かれ、１層は黒色土（黄色土混・硬い）、２層は黒色土（黄色土混・軟らかい）であ

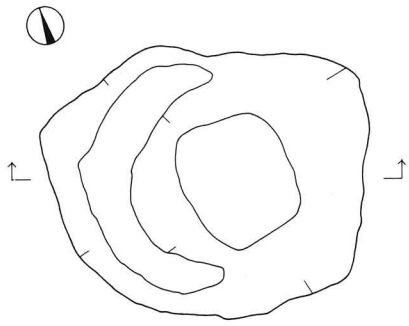


SK40

27.700m

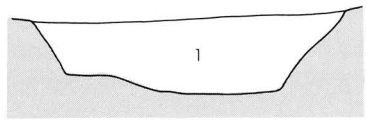


1．黒褐色土
2．黒褐色土（やや粘質）

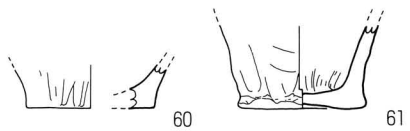


SK43

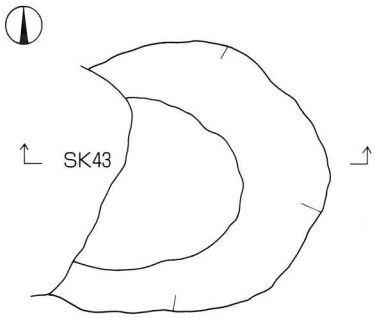
27.600m



1．黒褐色土（やや粘質）

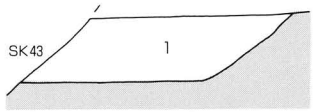


0　5　10cm
（S＝1：4）

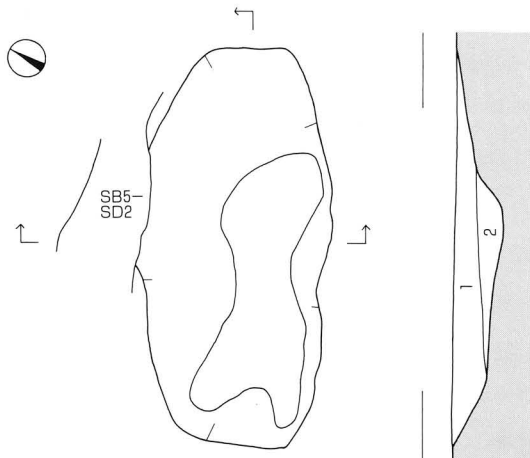


SK50

27.600m

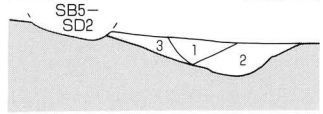


1．明褐色シルト（やや砂質）



SK54

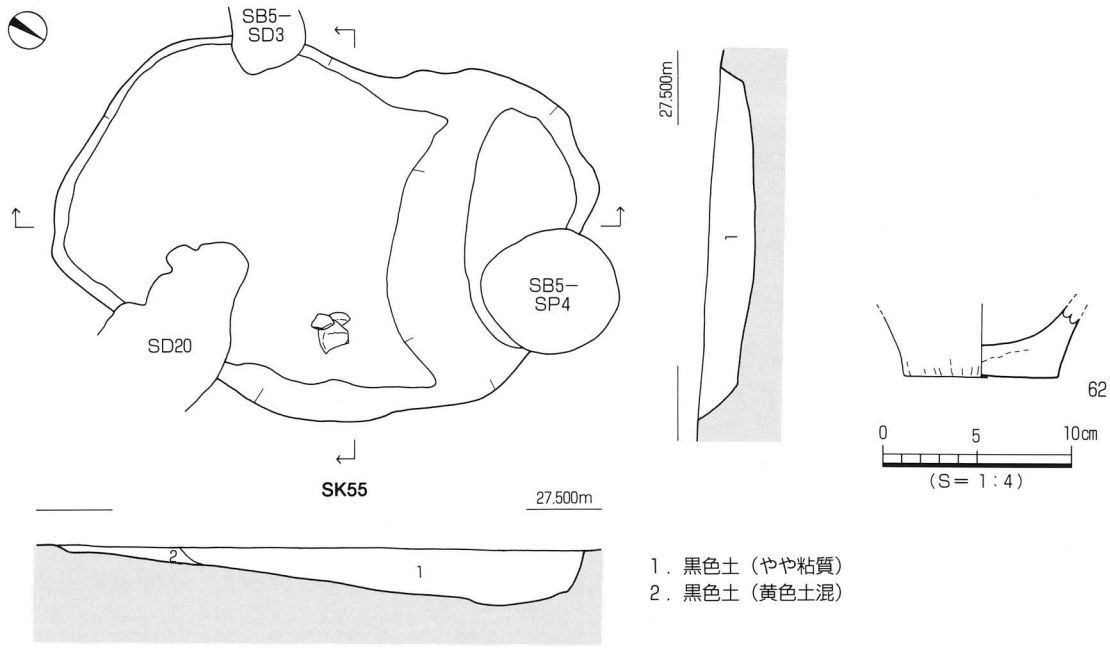
27.500m

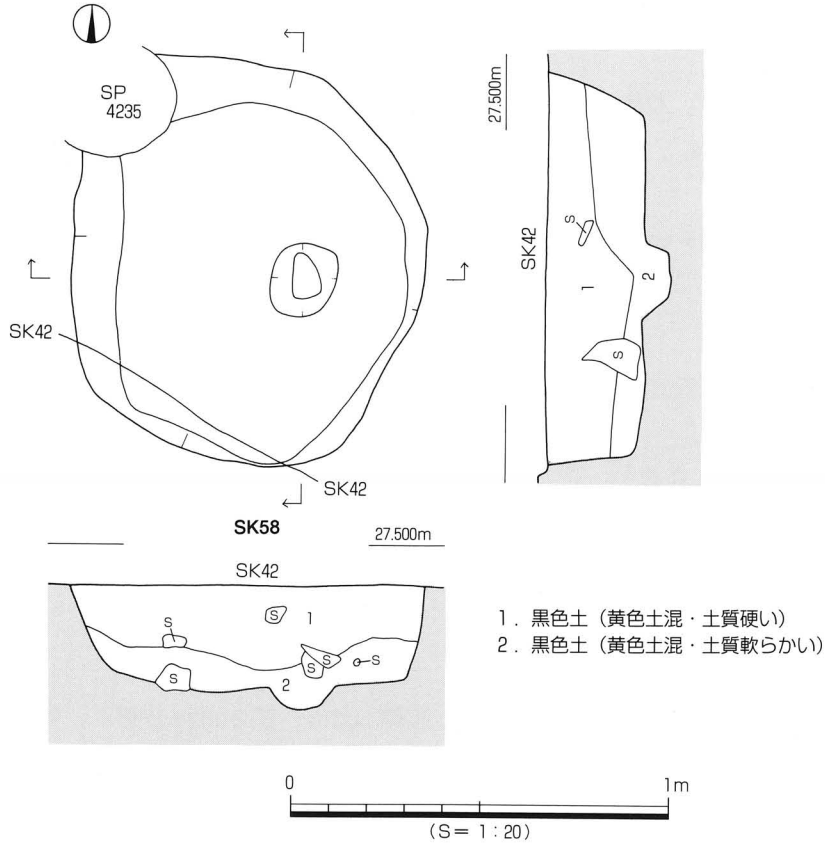


1．黒色粘質土
2．黒色粘質土（黄色混）
3．黄灰色粘質土

0　1m
（S＝1：20）

第20図　ＳＫ40・43・50・54測量図・出土遺物実測図





第21図　ＳＫ55・58測量図・出土遺物実測図

る。遺物は弥生土器が出土したが、小片のため図化するには至らなかった。

時期：埋土がＳＫ55と同じであるため、弥生時代中期と考えられる。

⑶溝（ＳＤ）

検出した３条の溝はいずれも弥生時代中期と考えられる。

ＳＤ14（第22図）

調査区南西部のM22～N22区に位置し、ＳＢ５に切られる。規模は検出長1.68m、幅0.88m、深さ5cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は暗褐色土である。遺物は弥生土器が出土したが、小片のため図化するには至らなかった。

時期：埋土がＳＫ60と類似しているため、弥生時代中期と考えられる。

ＳＤ16（第22図）

調査区南西部のＰ24～Q22区に位置し、ＳＢ７・８、ＳＤ17～19に切られる。規模は検出長7.22m、幅0.36m、深さ26cmを測る。断面形態は舟底状を呈する。埋土は４層に分かれ、１層は褐色土、２層は黄褐色粗砂、３層は黄色粗砂、４層は黄灰色粘質土である。遺物は弥生土器が出土した。

出土遺物（第22図）

63は甕形土器である。平底の底部である。

時期：出土した甕形土器の形態から弥生時代中期と考えられる。

ＳＤ20（第22図）

調査区南西部のN21・22区に位置し、ＳＫ55を切り、ＳＢ５に切られる。規模は検出長1.53m、幅0.32m、深さ４cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は黒色土（やや粘質）である。遺物は出土していない。

時期：埋土がＳＫ55と同じであるため大きな時期差はないものと考え、弥生時代中期と考えられる。

〔２〕古墳時代

当該期の遺構は、竪穴式住居址６棟・掘立柱建物址２棟・土坑13基・溝５条・性格不明遺構３基・柵列１条・柱穴がある。

⑴竪穴式住居址（ＳＢ）

検出した６棟の住居址のうちＳＢ６は中期中葉以前、１・３・５・７は中期中葉と推定される。平面形態は方形（４棟）・長方形（１棟）の２種類がある。

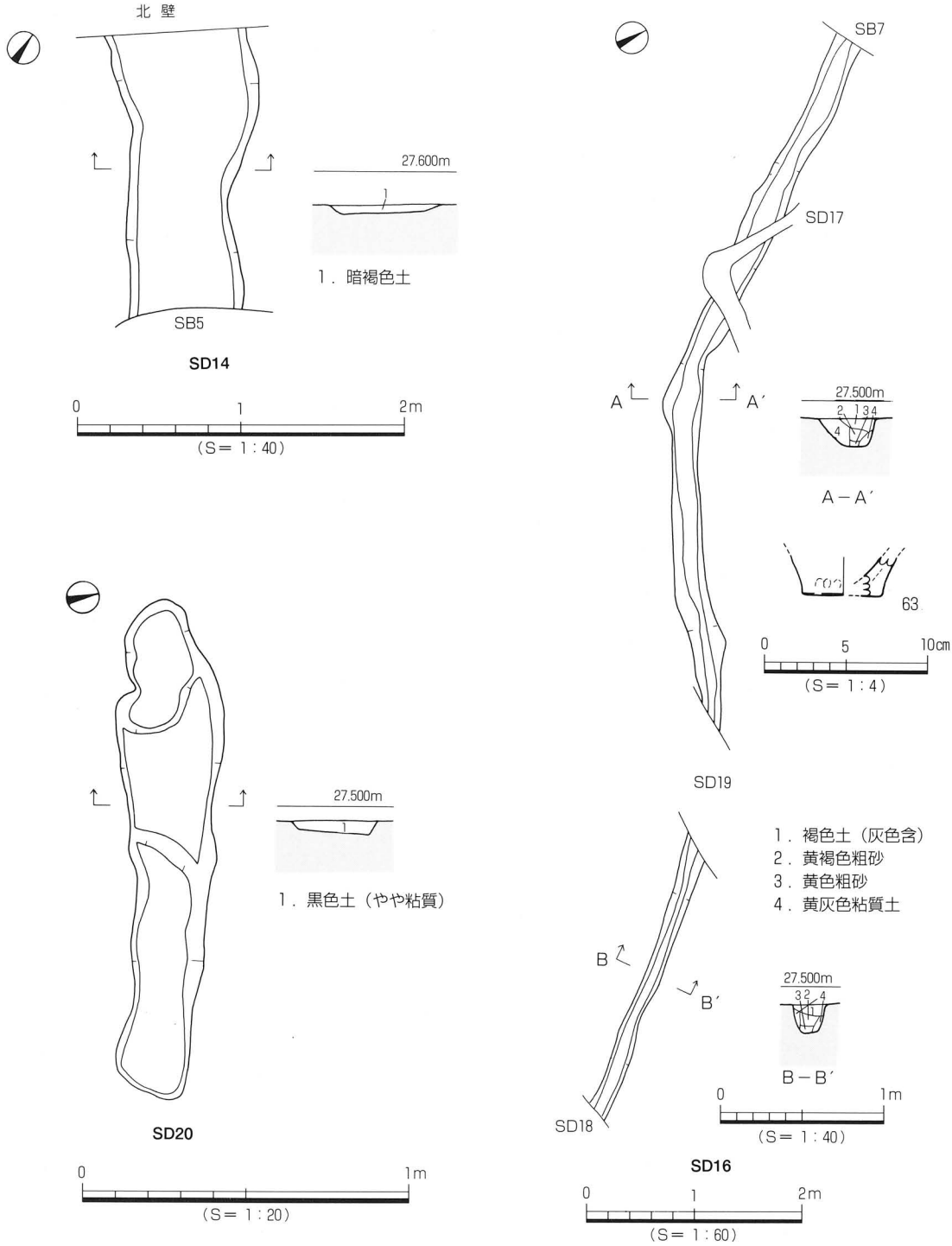
ＳＢ３（第23図、図版８）

調査区中央南部のＪ15～K16区に位置し、ＳＫ38、ＳＰ3120・3122・3123とトレンチに切られる。平面形態は方形である。規模は長軸3.20m、短軸3.02m、深さ14cmを測る。埋土は２層に分かれ、１層は暗褐色土、２層は黄色ブロックが混じる暗褐色土（貼床）である。内部施設には炉がある。外部施設には主柱穴がある。炉の平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸0.77m、短軸0.61m、深さ15cmを測る。屋内では主柱穴は検出されず、北西辺と南東辺中央より約20cm離れた位置で主柱穴と思われる柱穴を確認した。各柱穴の平面形態は楕円形または円形を呈する。規模は径22～28cm、深さ15～26cm

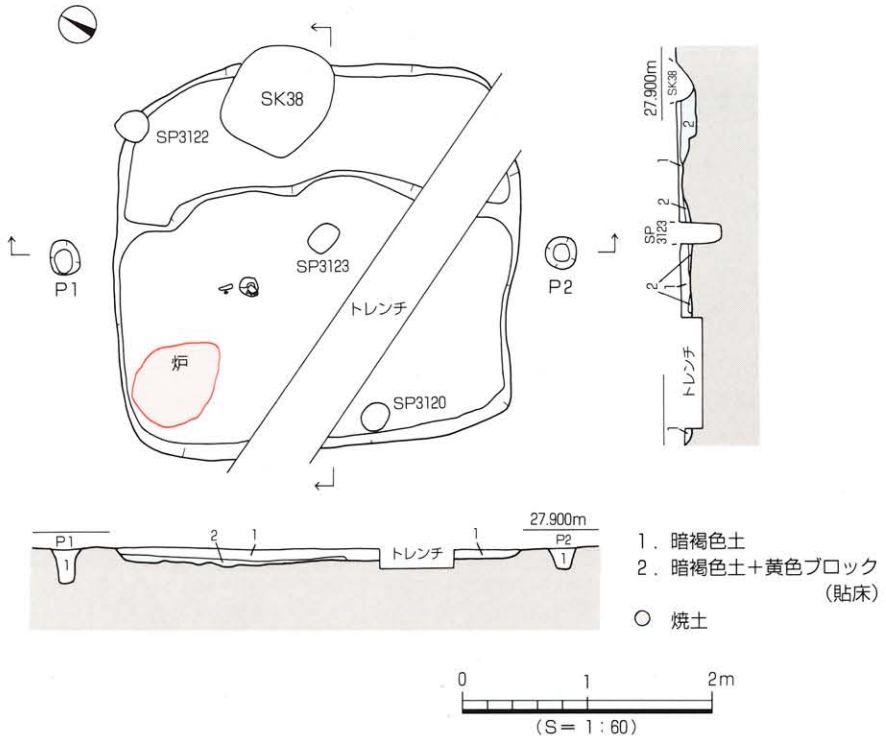
を測る。埋土は１層で暗褐色土である。遺物は土師器・弥生土器・ナイフ形石器が出土した。炉からは土師器の高坏３点（69～71）を坏部を俯せに重ねた状態で検出した。また住居中央付近では土師器壺（64）が据え置かれた状態で出土した。

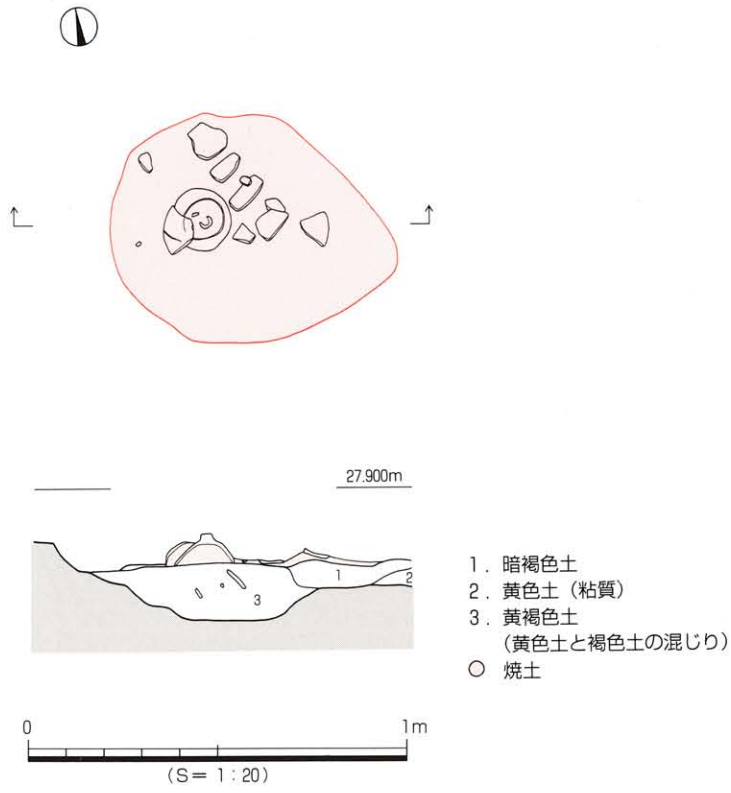
出土遺物（第24図、図版８）

64～66・69～71は土師器である。64は壺形土器である。球形の胴部に直立気味に立ち上がる口縁部



第22図　ＳＤ14・16・20測量図・出土遺物実測図





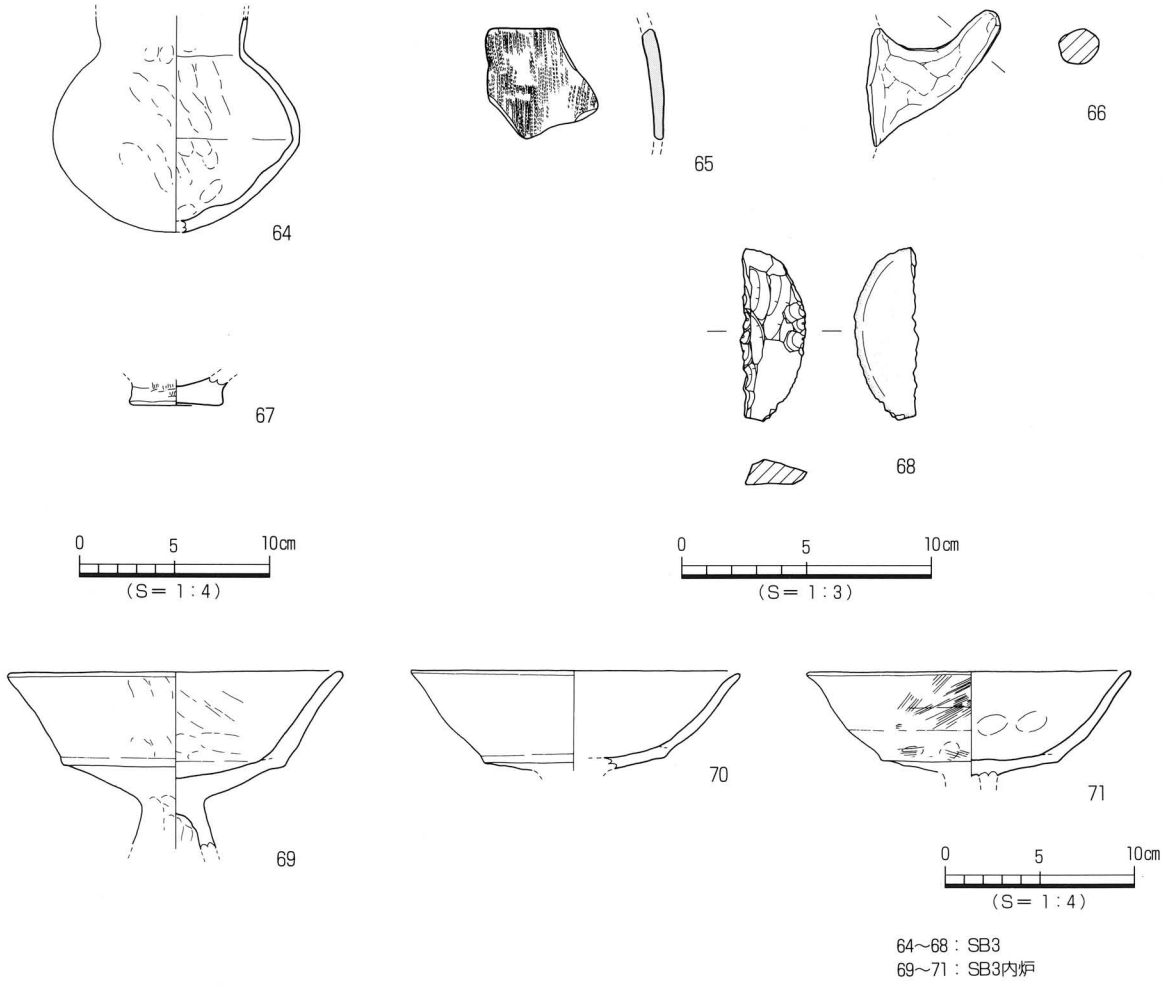
第23図　ＳＢ３・ＳＢ３内炉測量図

をもつ直口壺である。65は縄蓆文タタキを施す甕形土器の胴部片である。甑形土器の可能性もある。66は上外方に伸びる甑形土器の把手である。67は弥生土器である。甕形土器の底部である。68はナイフ形石器である。69～71は高坏形土器である。69はやや外反気味に、70・71は内湾気味に立ち上がる坏部である。

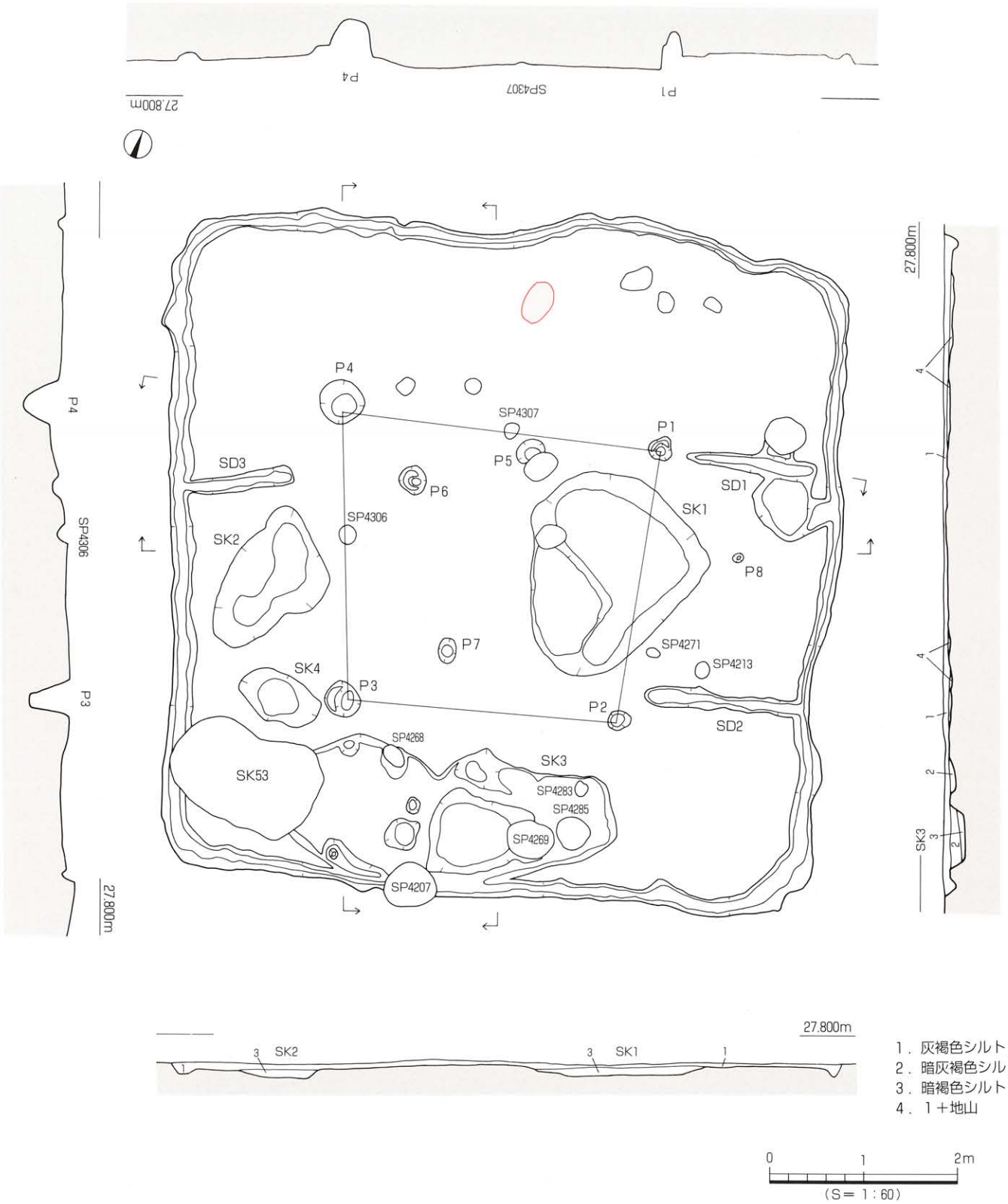
時期：出土した土師器の形態から古墳時代中期中葉と考えられる。

ＳＢ５（第25図）

調査区南西部のM20～O22区に位置し、ＳＢ６、掘立４、ＳＫ49・54・55・57、ＳＤ14・20を切り、ＳＫ53に切られる。平面形態は方形を呈し、規模は長軸7.02m、短軸6.96m、深さ14cmを測る。埋土は４層に分かれ、１層は灰褐色シルト、２層は暗灰褐色シルト、３層は暗褐色シルト、４層は地山を含む灰褐色シルトである。内部施設は主柱穴と周壁溝、土坑４基（ＳＫ１～４）と溝３条（ＳＤ１～３）を検出した。主柱穴は４本検出し、各柱穴の平面形態は楕円形または円形を呈する。柱穴埋土はいずれも灰褐色シルトである。周壁溝は全周し、規模は幅15～25cm、深さ12cmを測る。断面形態はU字状である。埋土は灰褐色シルトである。ＳＫ１～４の埋土は暗褐色シルトである。また周壁溝から住居中央へ向かって伸びるＳＤ１～３は、長さ1.1～1.6m、幅12～20cm、深さ15cmを測る。断面形態



第24図　ＳＢ３・ＳＢ３内炉出土遺物実測図

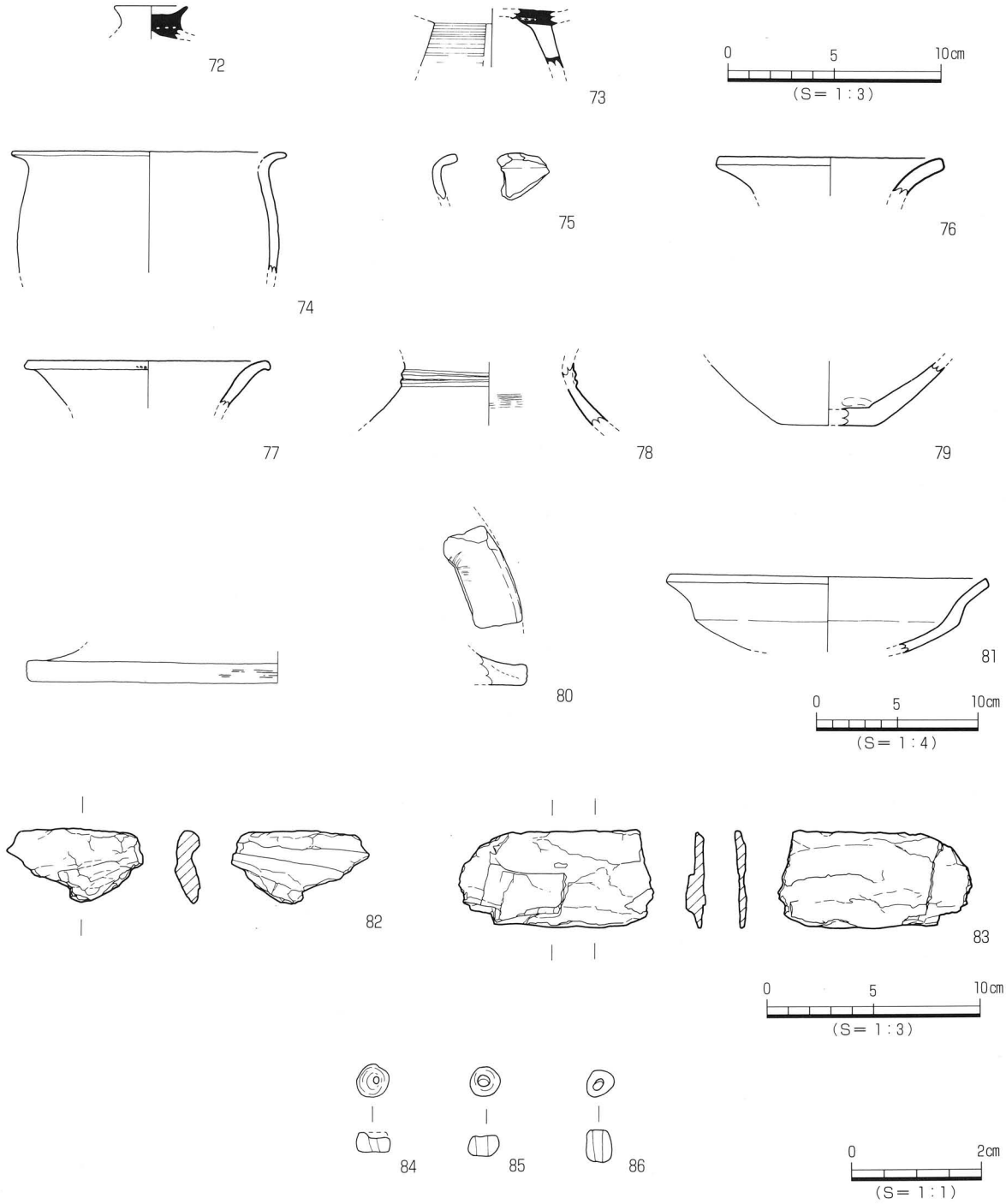

P4
SP4307
P1
27.800m
P4
SP4306
P3
27.800m
P4
SP4307
P1
P5
P6
SD3
SD1
SK1
SP4306
SK2
P8
P7
SP4271
SP4213
SK4
P3
P2
SD2
SP4268
SK3
SK53
SP4283
SP4285
SP4269
SP4207
27.800m
SK3
SK2
SK1
1．灰褐色シルト
2．暗灰褐色シルト
3．暗褐色シルト
4．1＋地山
0
1
2m
(S＝1：60)

第25図　ＳＢ５測量図

はU字状である。埋土は灰褐色シルトである。また住居中央北部で第１層上面にて焼土を検出した。遺物は住居址埋土から須恵器・弥生土器・石器・臼玉・ガラス玉が出土し、内部施設より土師器・石錘が出土した。

出土遺物（第26・27図）

72・73は須恵器である。72は坏蓋のつまみである。73は高坏の脚部である。透かしを施す。74～81



第26図　ＳＢ５出土遺物実測図

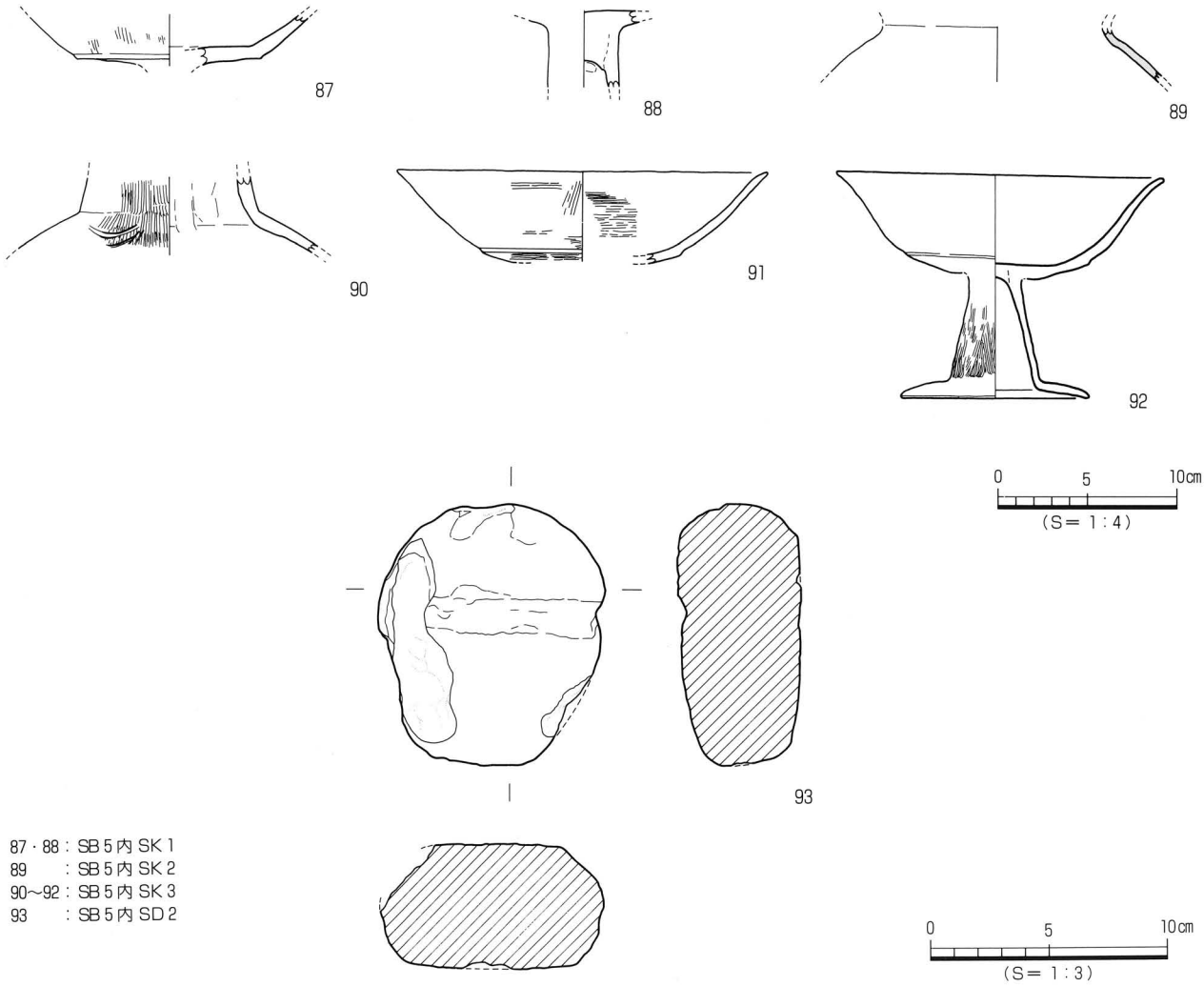
は弥生土器である。74・75は甕形土器である。74は口縁部から胴部片である。75は口縁部片である。76～80は壺形土器である。76・77は外反する口縁部、78は突帯を貼りつけた頸部、79は平底の底部である。80は複合口縁壺で２次口縁部に波状文を施す。81は高坏形土器の坏部である。口端部は面をなす。82は石庖丁未製品である。83は石庖丁である。84は臼玉、84・85はガラス製小玉である。

87～92は土師器である。87・88はＳＢ５内ＳＫ１出土の高坏形土器である。87は坏部である。88は柱部である。89はＳＢ５内ＳＫ２出土の壺形土器である。肩部外面に格子タタキを施す朝鮮系軟質土器である。90～92はＳＢ５内ＳＫ３出土である。90は壺形土器の頸部である。肩部外面に線刻を施す。91・92は高坏形土器の坏部である。93はＳＢ５内ＳＤ２出土の有溝石錘である。

時期：出土した土器の形態から古墳時代中期中葉と考えられる。

ＳＢ７（第28・33図、図版４）

調査区南西部のＮ23～Ｐ24区に位置し、ＳＤ16を切り、ＳＫ64とＳＤ17に切られる。北西側半分は調査区外につづく。平面形態は方形を呈し、規模は長軸7.38m、短軸残存長4.40m、深さ32cmを測る。



87・88：SB5内SK1
89　：SB5内SK2
90～92：SB5内SK3
93　：SB5内SD2

第27図　ＳＢ５内ＳＫ１・ＳＫ２・ＳＫ３・ＳＤ２出土遺物実測図

埋土は５層に分かれ、１層は暗茶褐色土、２層は黄褐色土、３層は黒褐色土、４層は灰色粘質土、５層は黒色土である。

内部施設には主柱穴・周壁溝・ＳＫ１・ＳＤ１を確認した。主柱穴は２本確認し、各柱穴の平面形態は円形を呈する。径19～25cm、深さ29～43cmを測り、埋土は黒褐色土である。周壁溝の規模は幅10～31cm、深さ32cmを測る。断面形態はＵ字状である。ＳＫ１は住居址南東辺の中央付近で検出した。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.42m、短軸0.62m、深さ14cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土はやや粘質の黄褐色土である。ＳＤ1は周壁溝から住居中央へ向かって伸びる。規模は長さ1.2m、幅8～12cm、深さ15cmを測る。断面形態はＶ字状である。また住居址北東部で１層上面にて焼土を検出した。

遺物は住居址埋土より土師器・弥生土器・石鏃・敲石・玉類が出土した。またＳＫ１からは土師器が出土した。遺物の出土状況は住居の東部から中央付近にかけての落ち込んだ部分に集中しており、その規模は南北3.4m、東西４mを測る。器種別での分布の傾向として、北東方向から中央部にかけて高坏・小型丸底壺が、南東部に大型甕がまとまりをもって検出された。

第28図　ＳＢ７測量図

出土遺物（第29～33図、図版５・６）

94～154は土師器である。94～96は甕形土器である。94はやや肩の張る胴部である。口縁部内外面に丹塗痕跡が残る。95・96は外傾する口縁部である。97～119は壺形土器である。97はほぼ球形の胴部に直立気味に立ち上がる頸部をもつ。完形品。98は中型品。99は球形の胴部に外反する口縁部である。100は口縁部内外面にナデ痕跡が強く残る。101は頸部のくびれが弱くほぼ直立気味に立ち上がる。102は球形の胴部に丸底の底部である。103～119は小型丸底壺である。114～118は扁球形の胴部である。119は脚部をもつ小型丸底壺である。完形品。120は小型の鉢形土器である。粗製。121～142は高坏形土器である。139は３方向からの円孔を施す。内面に３条の沈線を施す。140は坏部内面に突帯を貼りつけている。完形品。141・142は器台形の高坏形土器である。大型品。143～148は甑形土器である。149～151は朝鮮系軟質土器である。149・150は甕形土器または甑形土器である。151は壺形土器である。149・150には格子タタキ、151は上半部に縄蓆文タタキが施される。152～154はミニチュア土製品である。152は壺形土器（完形品）、153は壺形土器底部、154は甑形土器である。155～167は弥生土器である。155～158は甕形土器底部である。159～165は壺形土器底部である。166は支脚形土器である。167は絵画土器である。口縁部下に線刻を施す。168・169は石鏃である。170は敲石である。171は碧玉製管玉である。172はガラス製小玉である。173はＳＢ７内ＳＫ１出土の土師器の壺形土器である。丸底の底部である。

時期：出土した土師器の形態から古墳時代中期中葉と考えられる。

なおＳＢ７を掘り下げる途中で、住居址中央付近で北東から南西方向に長楕円形状に長さ2.4m、幅0.85mにわたり須恵器が分布していた。その出土状態と埋土がＳＢ７とは異なる灰色微砂質土である ため溝状遺構の存在が推定されたが、その掘り方は明確につかむことができなかった。そのため「ＳＢ７上面検出遺構」として報告する。遺物は須恵器の坏身・坏蓋・高坏・壺が出土した。

出土遺物（第34図）

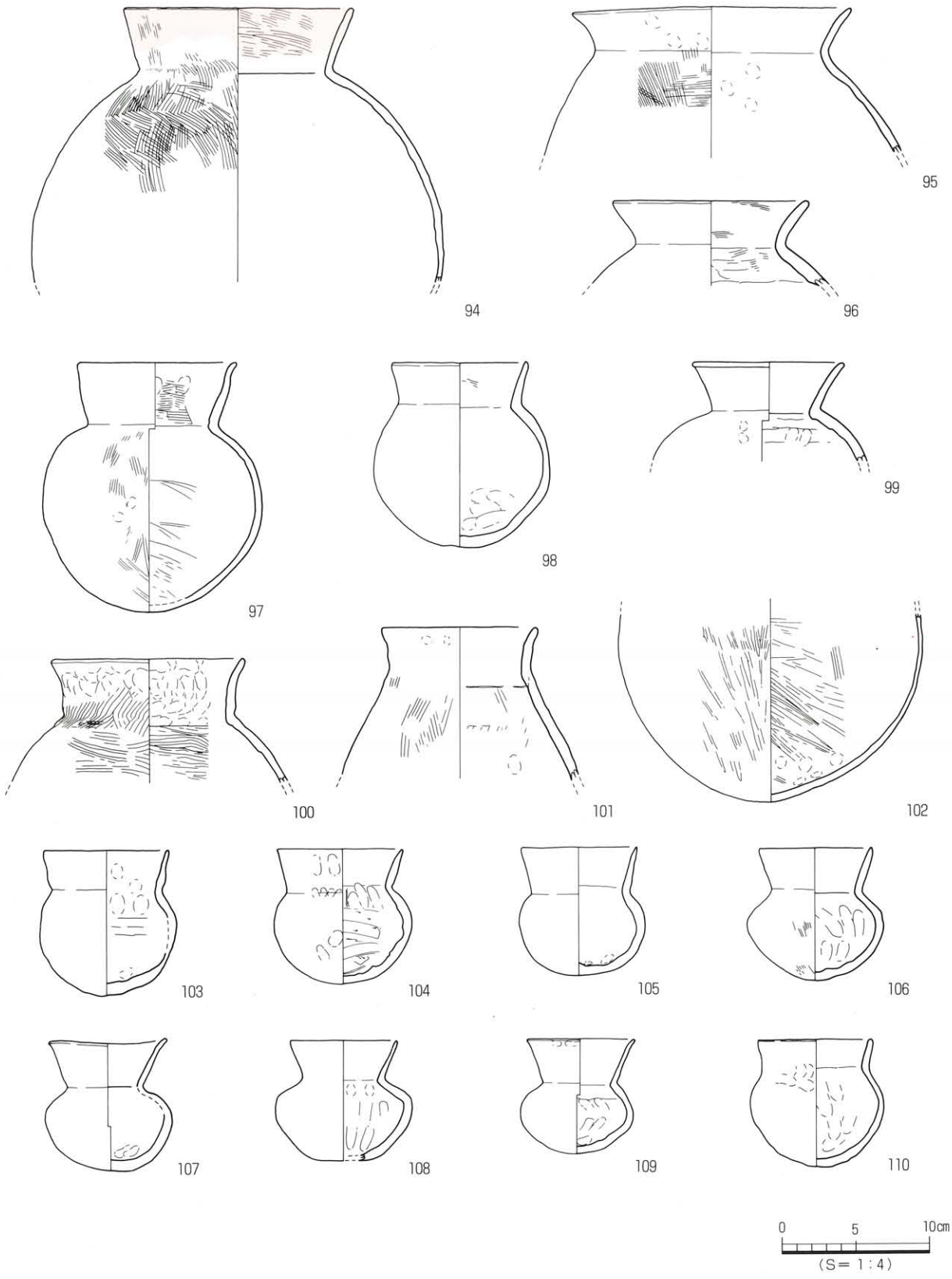
174～182は須恵器である。174は坏蓋である。175～179は坏身である。180・181は有蓋高坏である。三方に透かしを施す。182は広口壺の口縁部である。

時期：出土遺物から５世紀末と考えられる。

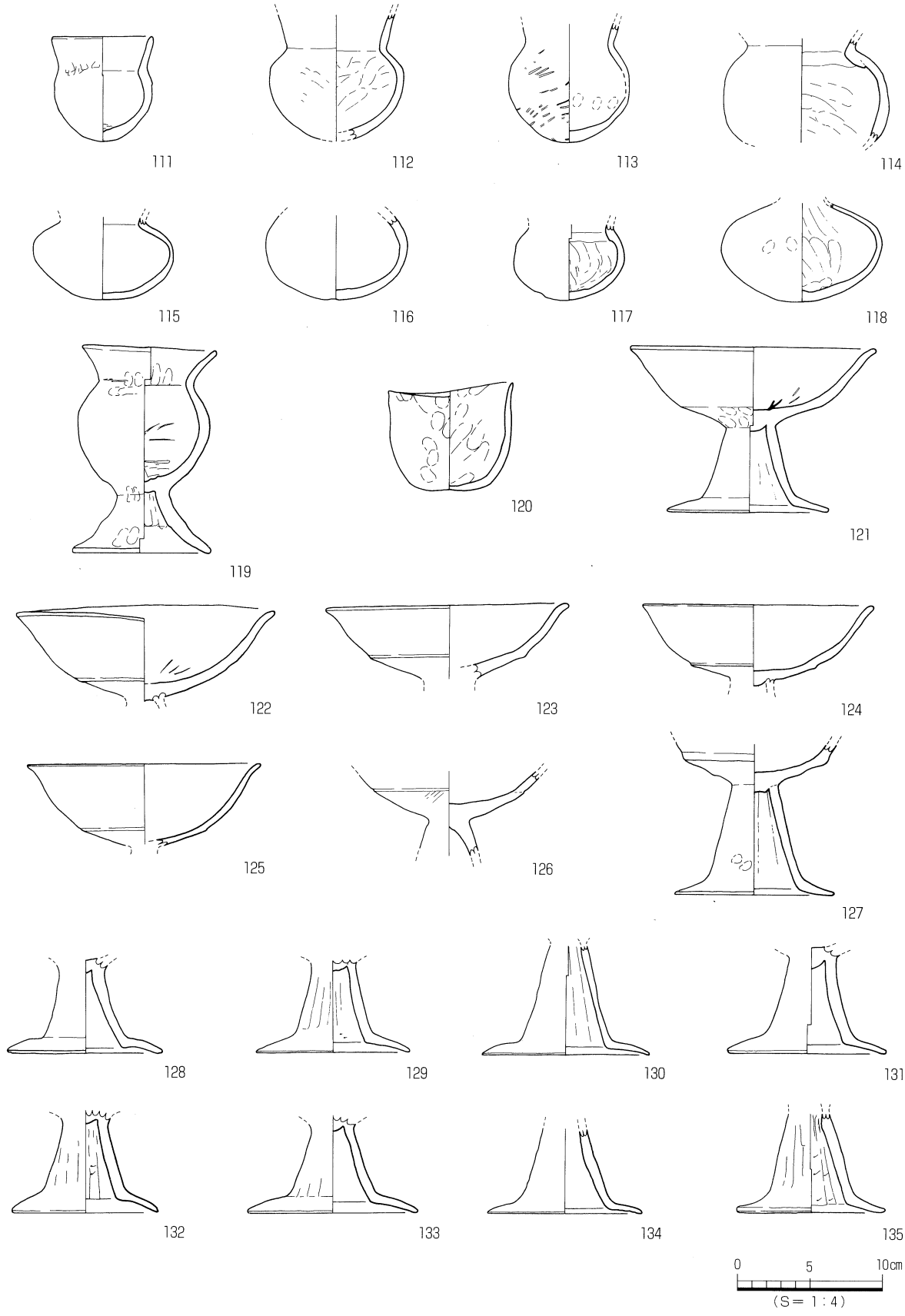
ＳＢ１（第35図）

調査区北東部のＣ５～Ｃ６区に位置し、ＳＰ2261・2262に切られ、北東部は調査区外につづく。平面形態は長方形を呈し、規模は長軸残存長5.34m、短軸3.62m、深さ８cmを測る。住居址埋土は２層に分かれ、１層は暗灰褐色土、２層は暗褐色土である。内部施設には主柱穴と周壁溝がある。主柱穴は３本検出し、平面形態は楕円形を呈する。埋土は暗褐色土である。周壁溝は壁体に沿って巡り、部分的に小ピットを検出した。周壁溝の規模は幅15～45cm、深さ17cmを測る。断面形態はＵ字状である。柱穴以外にも、多数の小ピットを確認した。遺物は土師器と須恵器が出土したが、小片のため図化するには至らなかった。

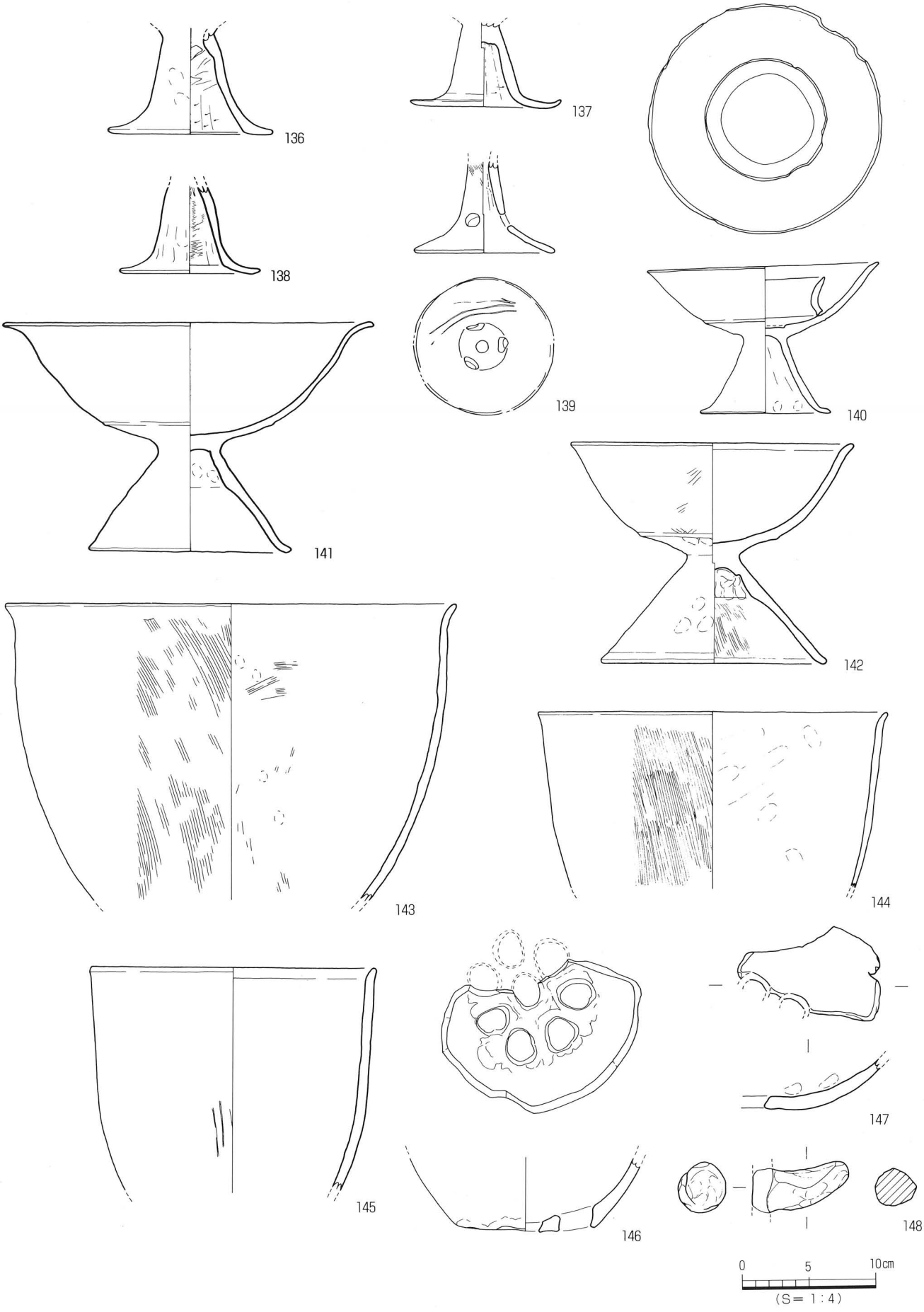
時期：詳細な時期決定は避けるが、埋土がＳＢ５と類似しているため古墳時代中期中葉と考えられる。



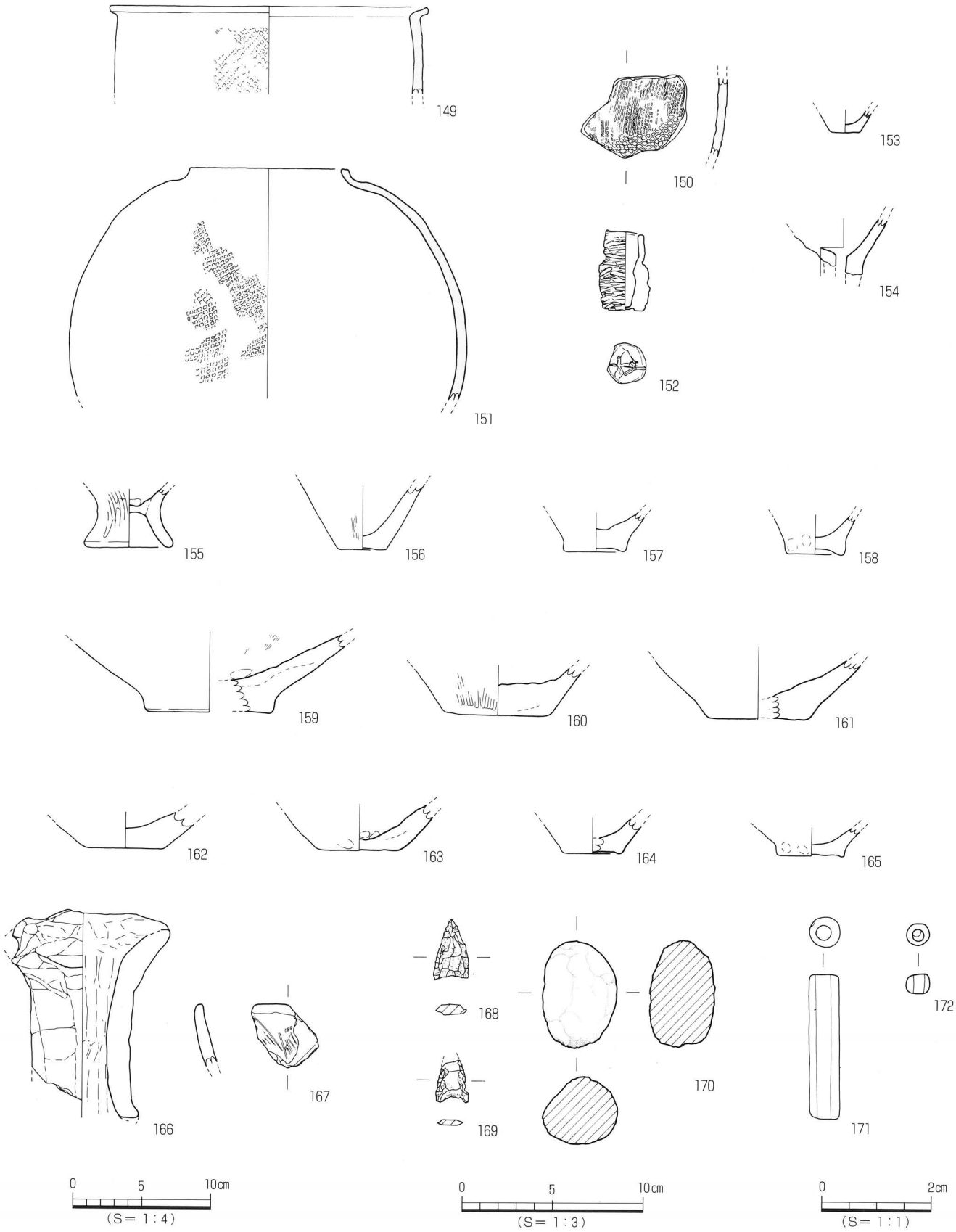
第29図　ＳＢ７出土遺物実測図(1)



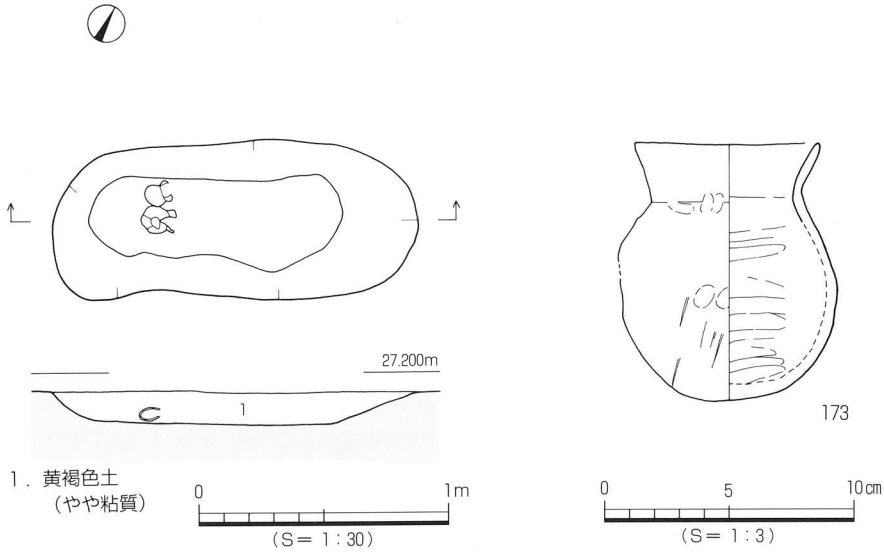
第30図　ＳＢ７出土遺物実測図(2)



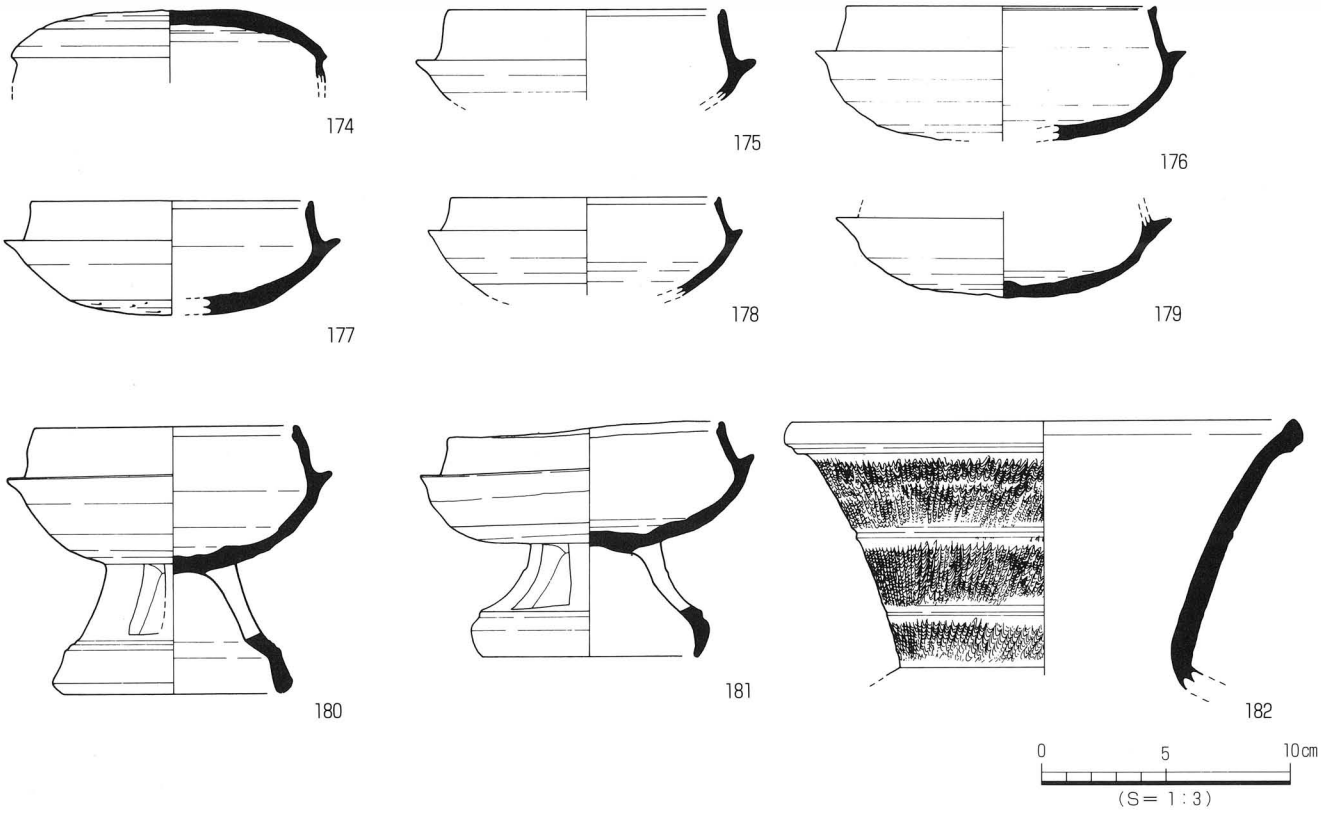
第31図　ＳＢ７出土遺物実測図(3)



第32図　ＳＢ７出土遺物実測図(4)



第33図　ＳＢ７内ＳＫ１測量図・出土遺物実測図



第34図　ＳＢ７上面検出遺構出土遺物実測図

ＳＢ４（第36図）

調査区中央西部のＪ18区に位置する。平面形態は北東隅のみの検出であるため不明である。規模は長軸残存長0.97m、短軸残存長0.76m、深さ10cmを測る。埋土は２層に分かれ、１層は黒褐色土、２層は黄色土混じりの黒褐色土である。主柱穴や内部施設は確認していない。遺物は須恵器が出土した。

出土遺物（第36図）

183は甕の口縁部である。

時期：出土遺物から６世紀初頭と考えられる。

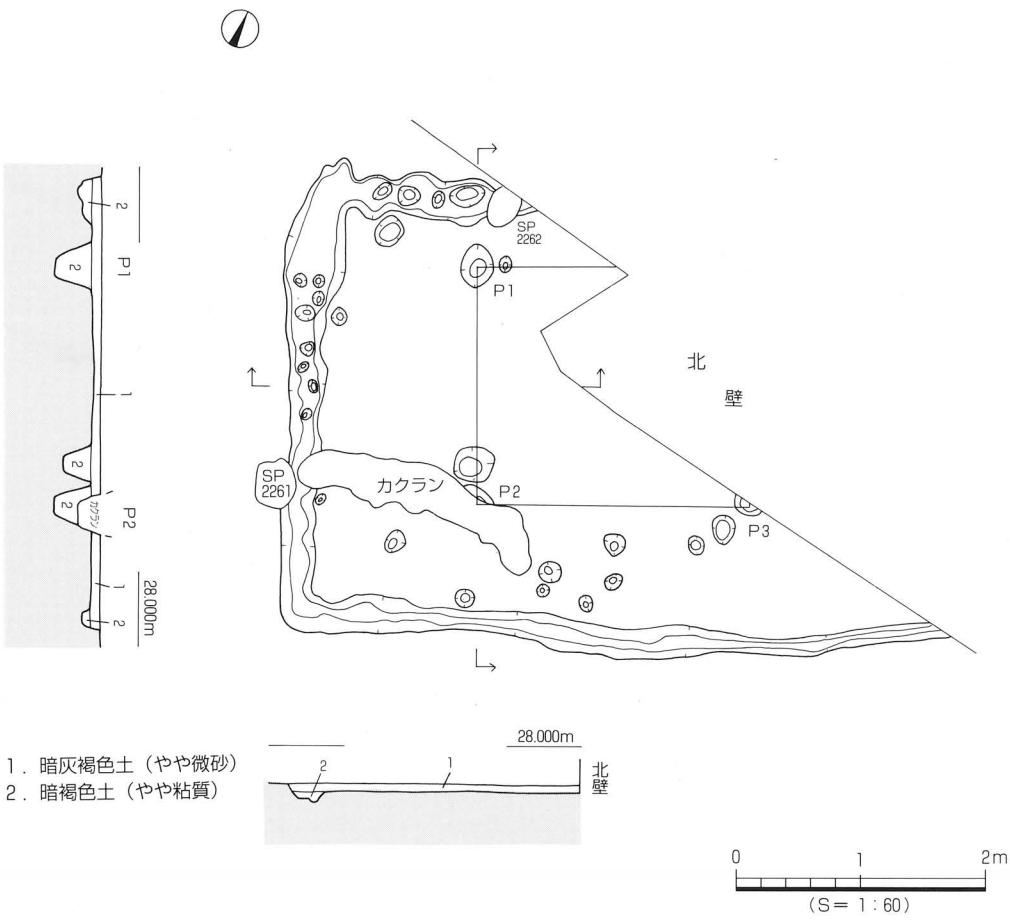
ＳＢ６（第37図）

調査区南西部のＮ20～Ｏ21区に位置し、ＳＢ５、ＳＰ4253に切られる。平面形態は方形を呈し、規模は長軸4.66m、短軸4.58m、深さ10cmを測る。埋土は２層に分かれ、１層は黒褐色土、２層は黄色土混じりの黒褐色土である。主柱穴は４本検出し、平面形態は楕円形を呈する。埋土は黄色土混じりの黒褐色土である。遺物は土師器と石核が出土した。

出土遺物（第37図）

184は土師器の器台形土器である。185は石核である。

時期：出土遺物の形態とＳＢ５に切られていることから古墳時代中期中葉以前と考えられる。



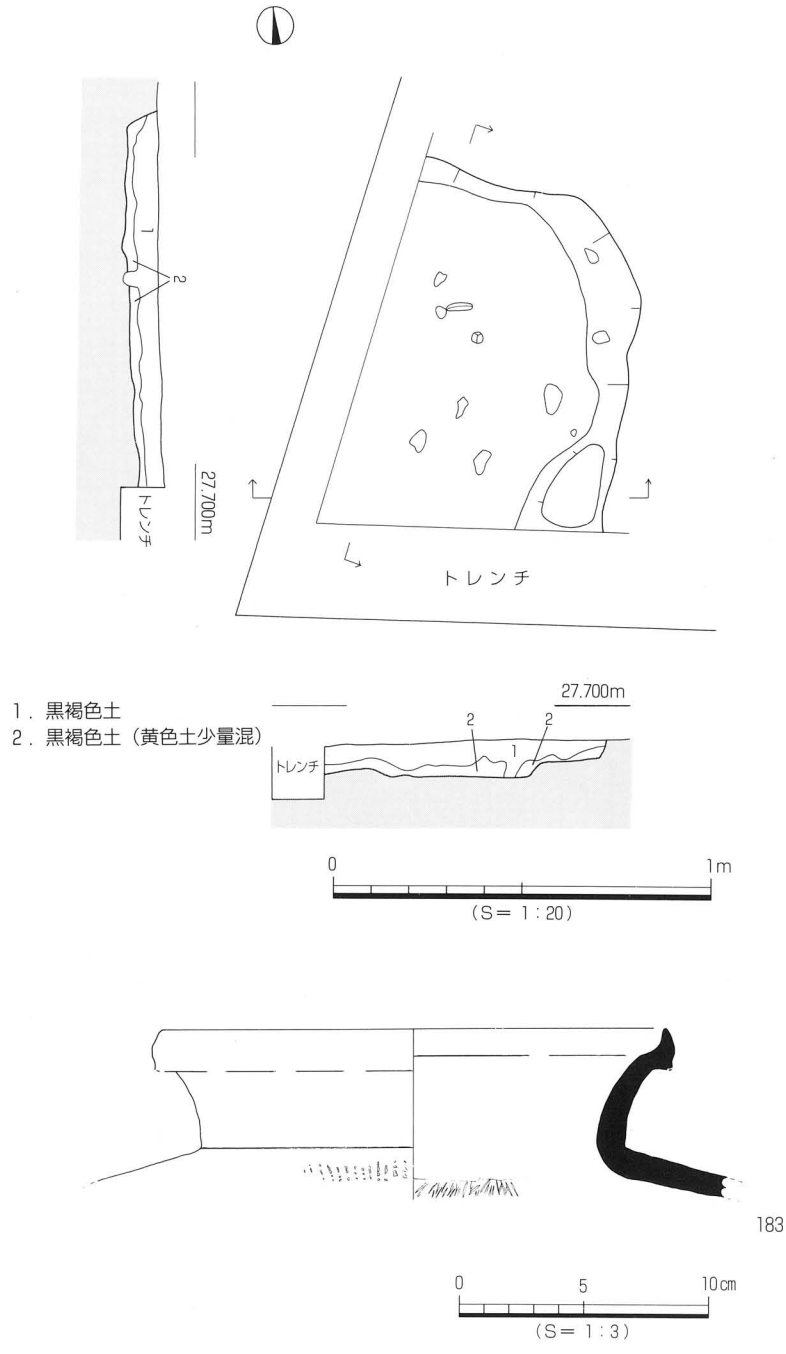
第35図　ＳＢ１測量図

(2)掘立柱建物址

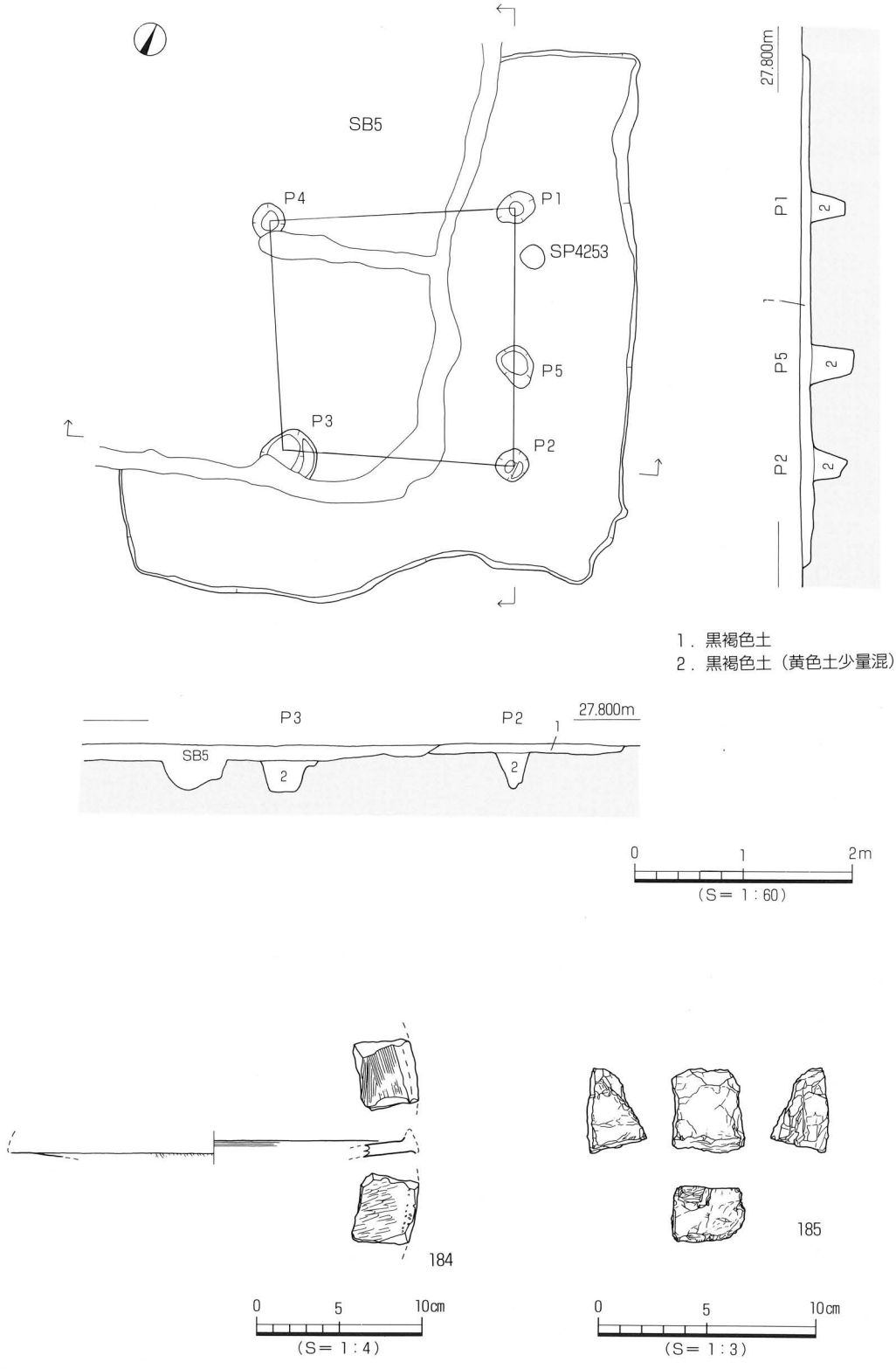
掘立１（第38図）

調査区北西部のＦ７～Ｇ８区に位置する。南北棟で１間×１間である。桁行長4.14ｍ、梁行長2.70ｍを測る。柱穴の平面形態は円形と楕円形である。規模は直径50～64㎝、深さ20㎝を測る。埋土は４層に分かれ、１層は暗褐色シルト（柱痕）、２層は灰褐色シルト、３層は黄白色シルト、４層は黄褐色微砂質土である。柱穴内部からは遺物の出土はない。

時期：柱痕埋土がＳＢ３と類似しているため、古墳時代中期中葉と考えられる。



第36図　ＳＢ４測量図・出土遺物実測図



第37図　ＳＢ６測量図・出土遺物実測図

掘立４（第39図）

調査区南西部のＯ22～Ｐ23区に位置し、ＳＫ43・50・64を切り、ＳＢ５に切られる。建物は東西棟で規模は２間×１間であり、桁行4.20ｍ×梁行2.10ｍを測る。柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径46～62㎝、深さ39～42㎝を測る。埋土は２層に分かれ、１層は褐色土（柱痕）、２層は灰褐色土である。遺物は出土していない。

時期：ＳＢ５に切られ、ＳＫ64を切っていることから、古墳時代中期と考えられる。

(3)土坑（ＳＫ）

検出した13基の土坑はいずれも中期中葉～後期初頭のものである。また平面形態は長方形（ＳＫ62）、隅丸長方形（ＳＫ41）、円形（ＳＫ57）、楕円形（ＳＫ１・49・53）以外は不整形である。断面形態は舟底状（ＳＫ１）、逆台形状（ＳＫ59・48・53・57）以外は皿状を呈している。

ＳＫ62（第40図）

調査区南西部のＯ21～Ｐ21区に位置し、ＳＫ59・60・63を切り、ＳＰ2222・2224・2287に切られる。平面形態は長方形を呈し、規模は長軸3.94ｍ、短軸2.94ｍ、深さ18㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は暗茶褐色土である。中央東壁寄りの位置で焼土の盛り上がりを確認した。規模は長軸0.74ｍ、短軸0.71ｍ、深さ８㎝を測る。埋土は明橙色シルトである。出土遺物は土師器・須恵器・石器・玉類が出土した。

出土遺物（第41図）

186～188は土師器である。186・187は甕形土器の口縁部である。188は甑形土器の把手である。189～191は須恵器である。189・190は坏身である。191は蓋である。底部がやや尖り気味である。192～194は弥生土器である。192・193は壺形土器の底部である。194は高坏形土器の坏部である。195は石庖丁未製品である。196・197はガラス製小玉である。

時期：出土遺物から５世紀末と考えられる。

ＳＫ64（第42図）

調査区南西部のＯ23～Ｐ24区に位置し、ＳＢ７を切り、掘立４、ＳＫ44、ＳＤ17、ＳＰに切られる。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸4.34ｍ、短軸3.68ｍ、深さ14㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、北西部が一段低くなっている。埋土は２層に分かれ、１層が黒褐色土、２層が黄色土混じりの黒褐色土である。遺物は土師器・須恵器・弥生土器・鉄製品が出土した。

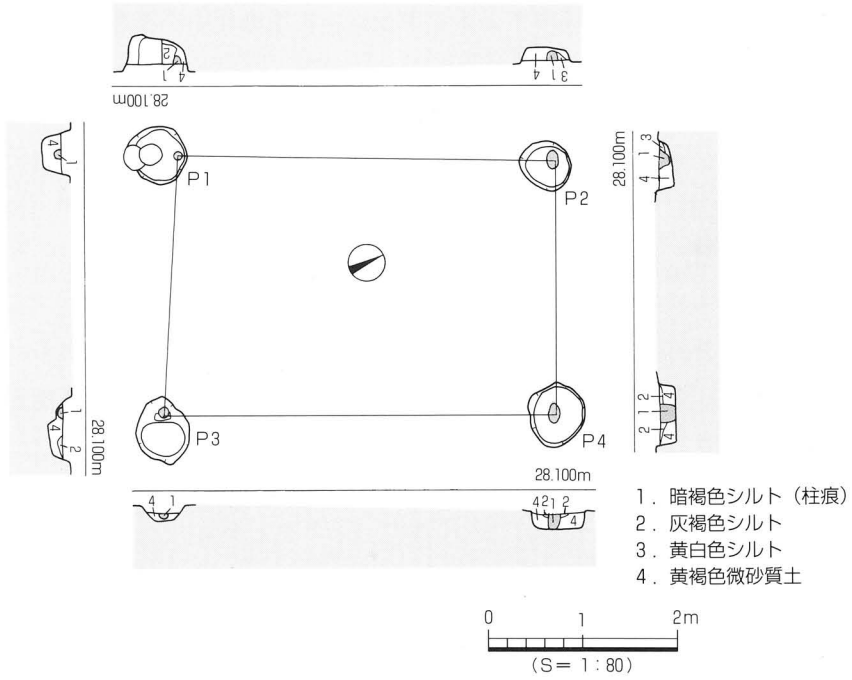
出土遺物（第42図）

198～200は土師器である。198・199は甕形土器である。199は口縁部中位で屈曲する。200は高坏形土器の坏部である。201～203は須恵器である。201は坏蓋である。202は高坏の坏部である。203は甕の頸部である。204～206は弥生土器である。204は甕形土器の頸部から肩部である。205は甕形土器の底部である。206は壺形土器の底部である。207は鉄板である。

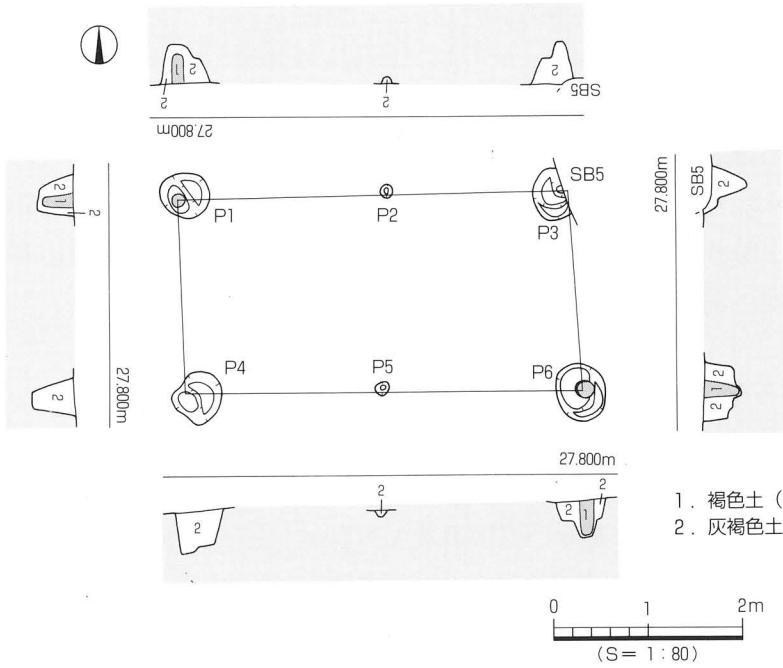
時期：出土遺物とＳＢ７を切っていることから５世紀末と考えられる。

ＳＫ44（第43図）

調査区南西部のＰ22・23区に位置し、ＳＤ17とＳＰ4076・4310に切られる。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸2.54ｍ、短軸2.40ｍ、深さ12㎝を測る。断面形態は皿状を呈し、中央北寄りに凹みを有する。埋土は３層に分かれ、１層はやや粘質の暗灰色シルト、２層はやや粘質の明黄灰色シルト、



第38図　掘立１測量図



第39図　掘立４測量図

3層はやや粘質の黒色シルト（炭含）である。遺物は土師器・須恵器・弥生土器・石鏃が出土した。

出土遺物（第43図）

208は土師器の甕形土器である。口端部は丸く仕上げる。209～214は須恵器である。209～212は坏蓋であり、209・210はつまみを有する。213は高坏坏部である。214は壺である。215は弥生土器の甕形土器である。216は石鏃である。

時期：出土遺物の形態から6世紀初頭と考えられる。

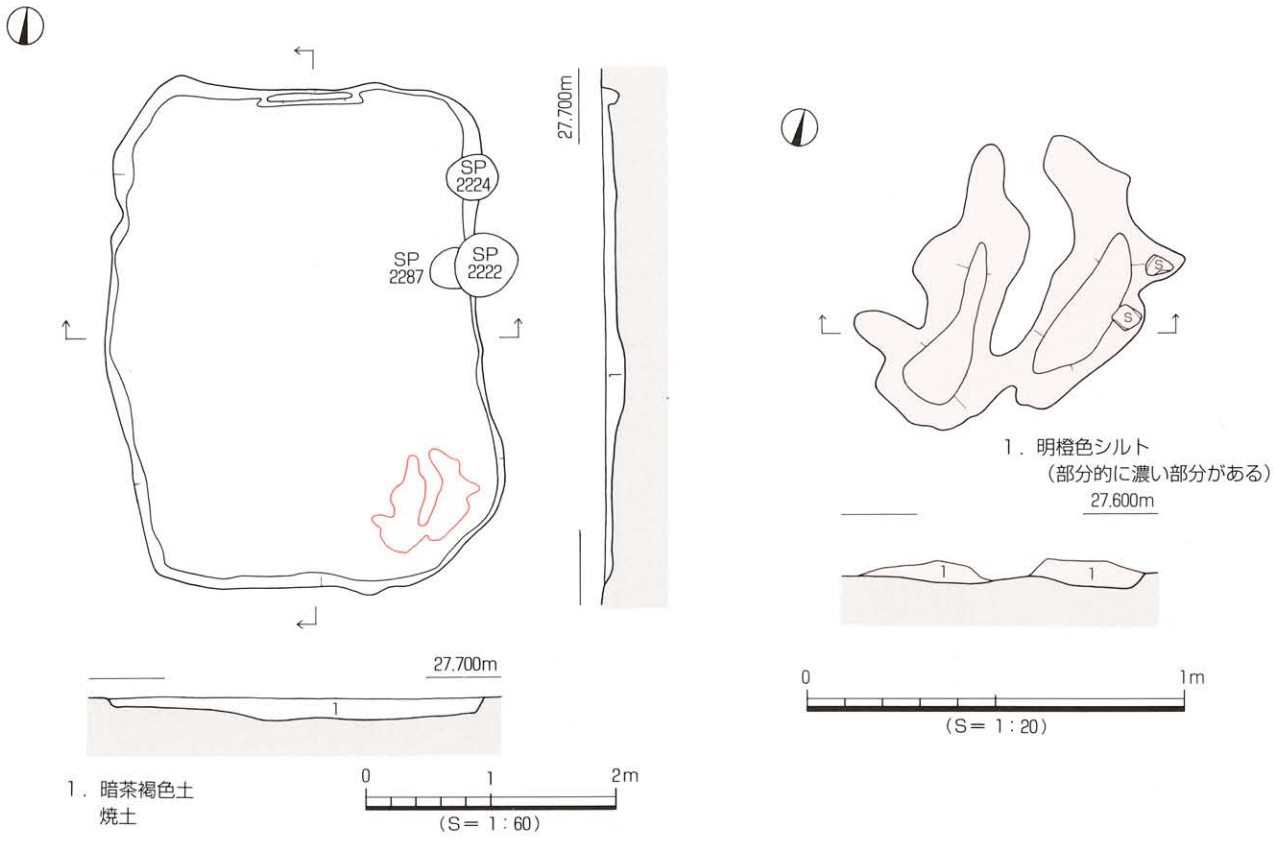
ＳＫ59（第44図）

調査区南西部のＰ21～Ｑ21区に位置し、ＳＫ62とＳＤ17、ＳＰ4227・4228に切られる。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸2.10m、短軸2.07m、深さ18cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、南部が一段低くなっている。埋土は茶褐色土である。遺物は土師器と須恵器が出土した。

出土遺物（第44図）

217～219は土師器である。217・218は甕形土器の口縁部である。219は埦形土器である。底部外面に線刻を有する。220は須恵器の坏身である。

時期：出土遺物の形態から古墳時代中期と考えられる。



第40図　ＳＫ62・ＳＫ62内焼土測量図

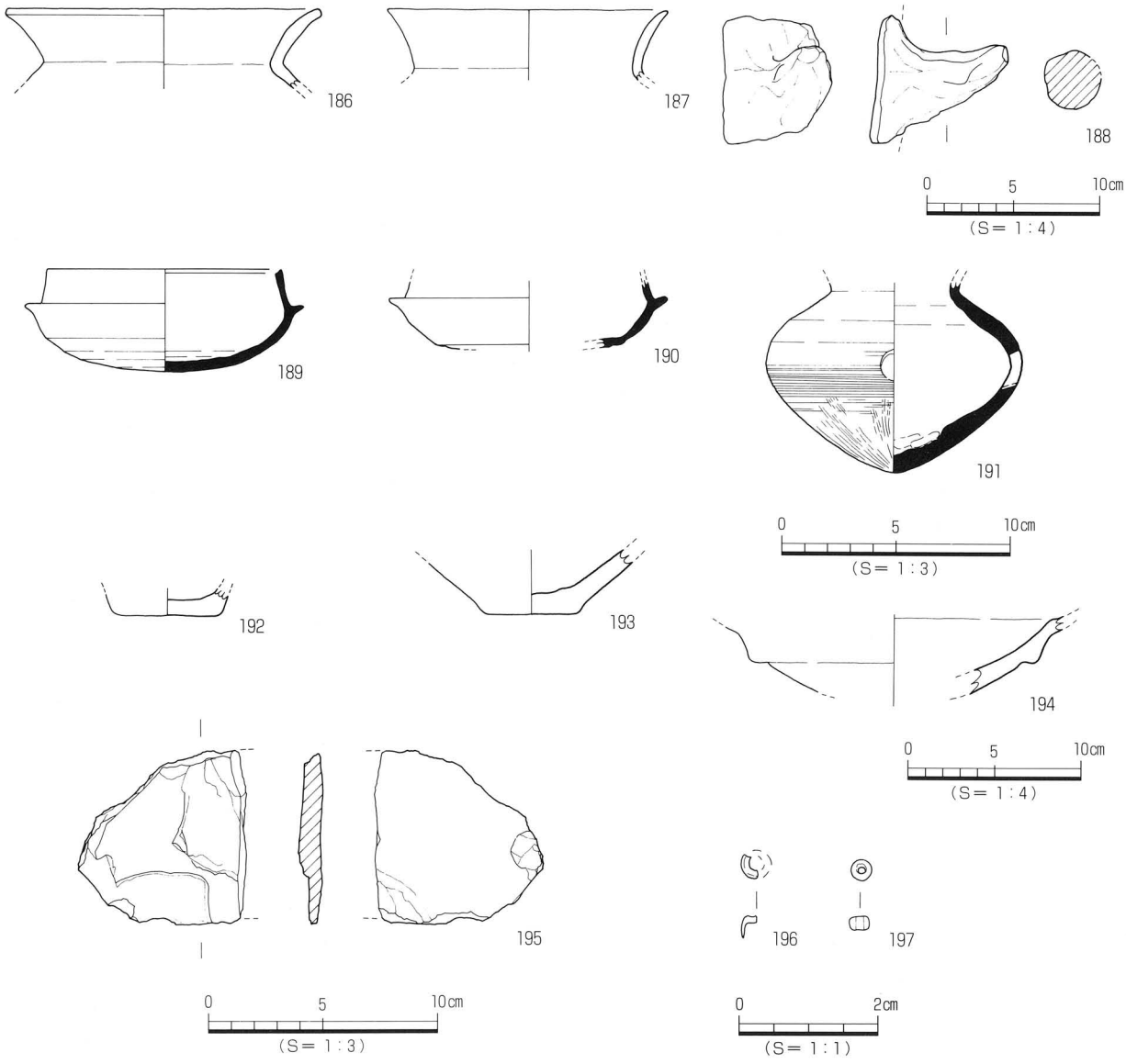
ＳＫ１（第45図）

調査区北東部のＥ５区に位置し、ＳＤ１を切りＳＡ１に切られる。平面形態は南北に長い楕円形を呈し、規模は長軸1.86m、短軸0.63m、深さ25cmを測る。断面形態は舟底状を呈する。埋土は４層に分かれ、１層は暗黄褐色シルト、２層は灰褐色砂質土、３層は明黄褐色砂質土、４層は黒褐色シルトである。遺物は弥生土器・土師器・須恵器が出土したが、図化できなかった。

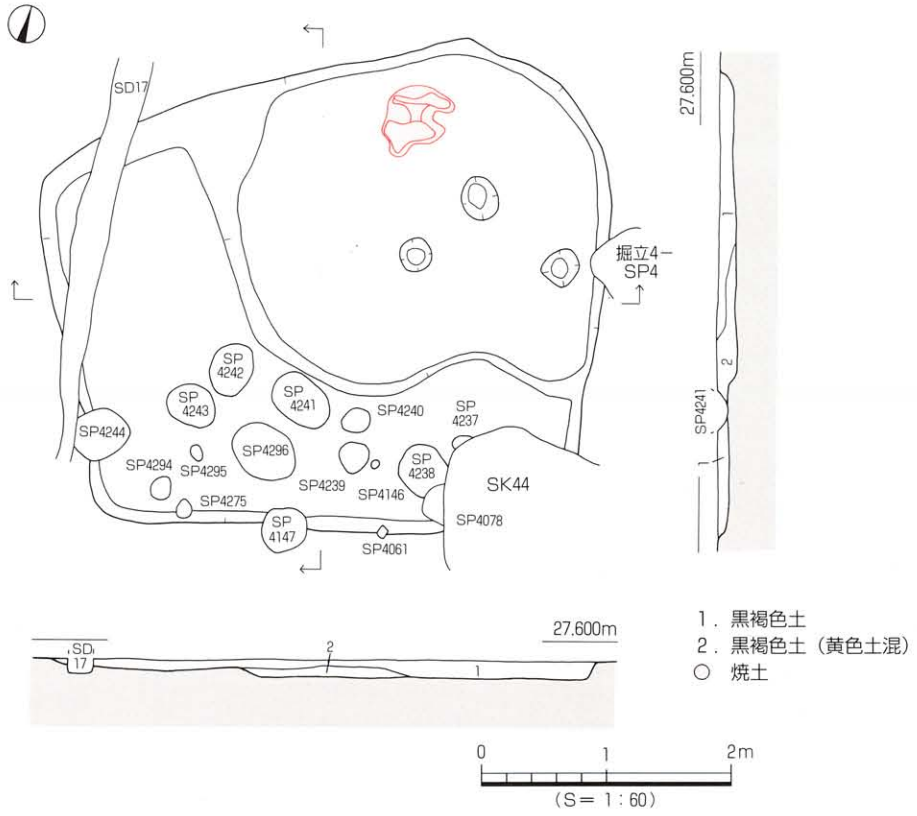
時期：ＳＡ１に切られていることから古墳時代後期以前と考えられる。

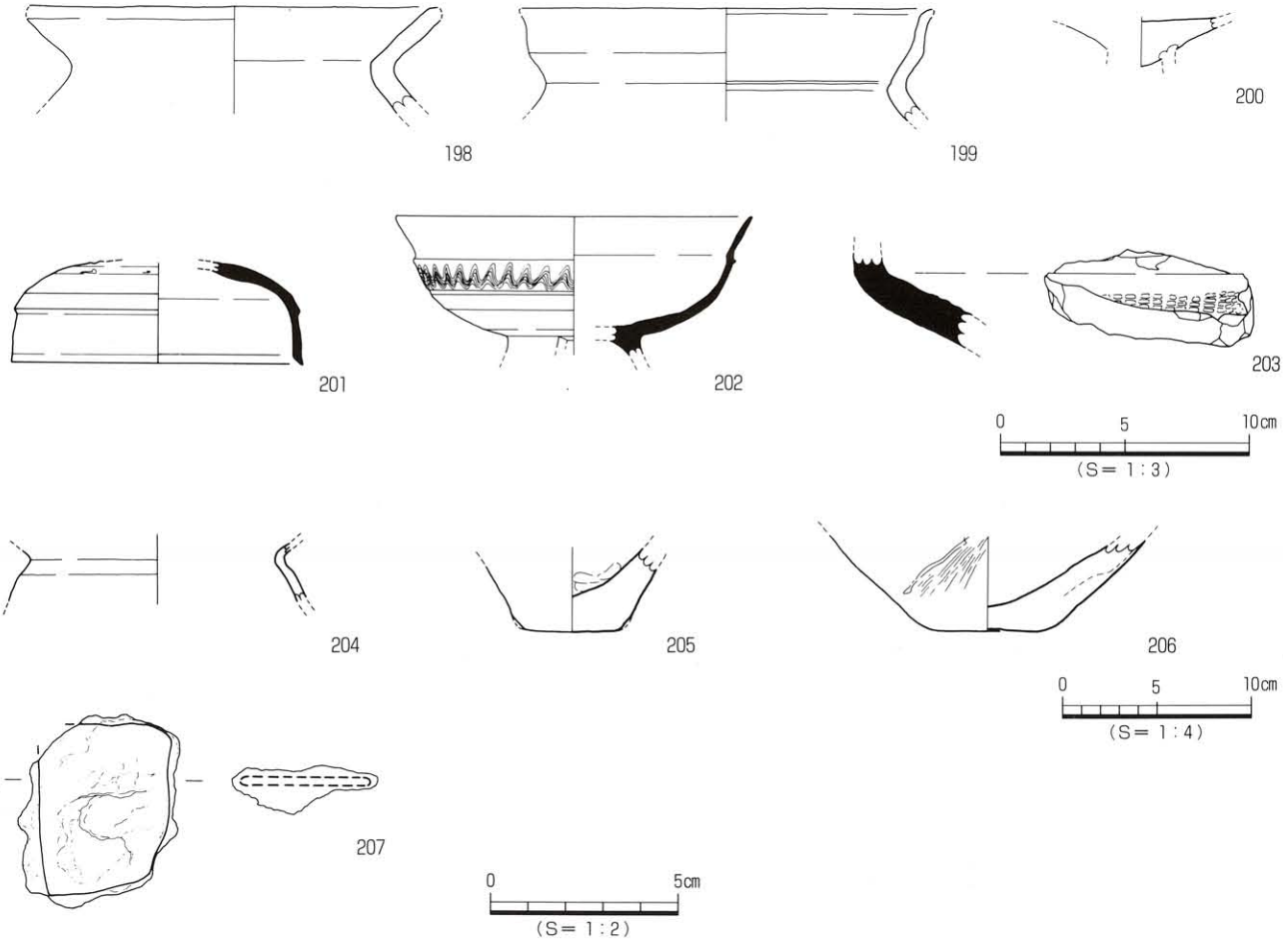
ＳＫ41（第45図）

調査区南西部のＮ22区に位置する。平面形態は南北に長い隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.90m、短軸1.30m、深さ15cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層が黒色粘質土、２層が明茶褐色シルトである。内部には長軸・短軸方向の計４か所で小柱穴を検出した。規模は直径

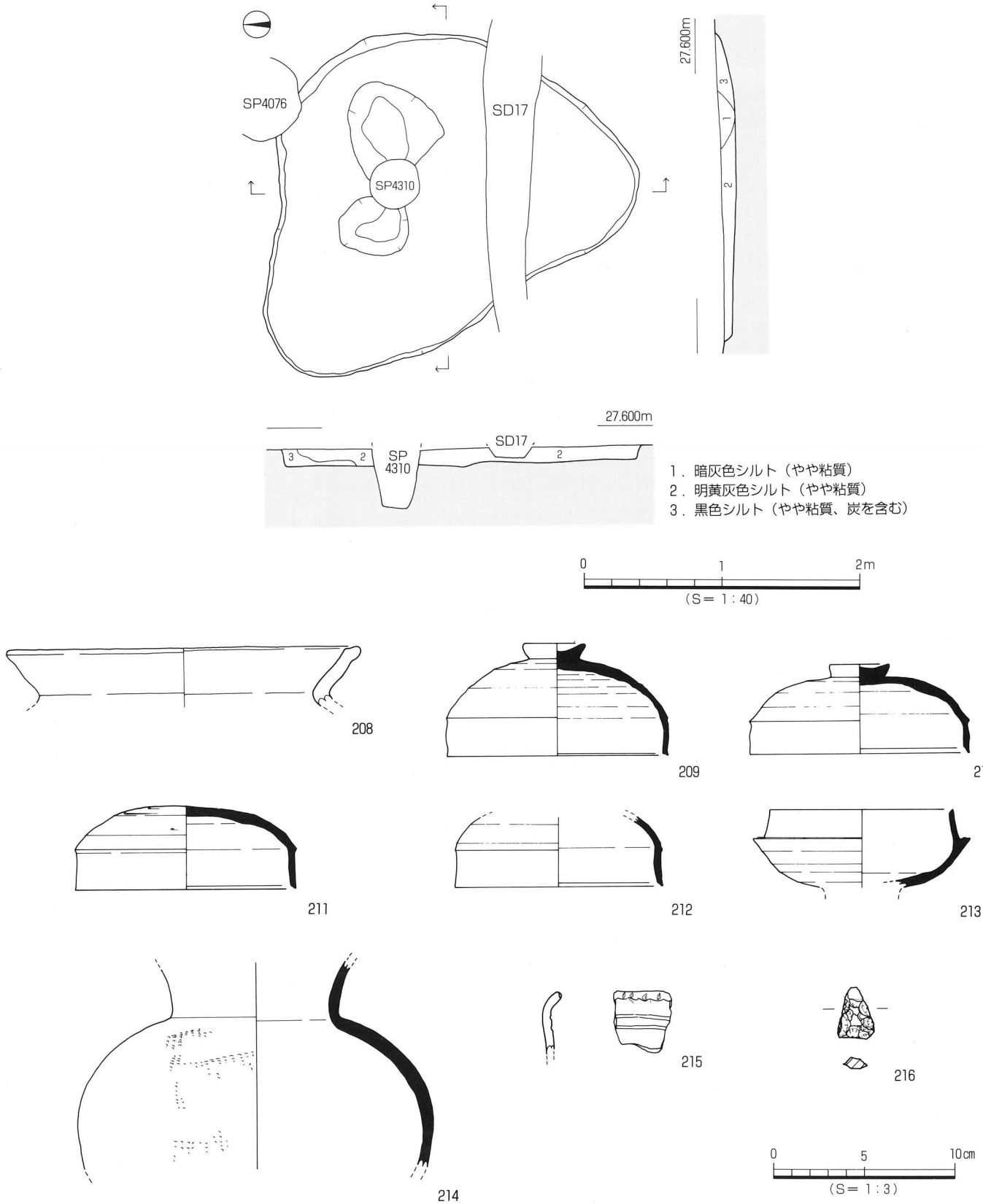


第41図　ＳＫ62出土遺物実測図





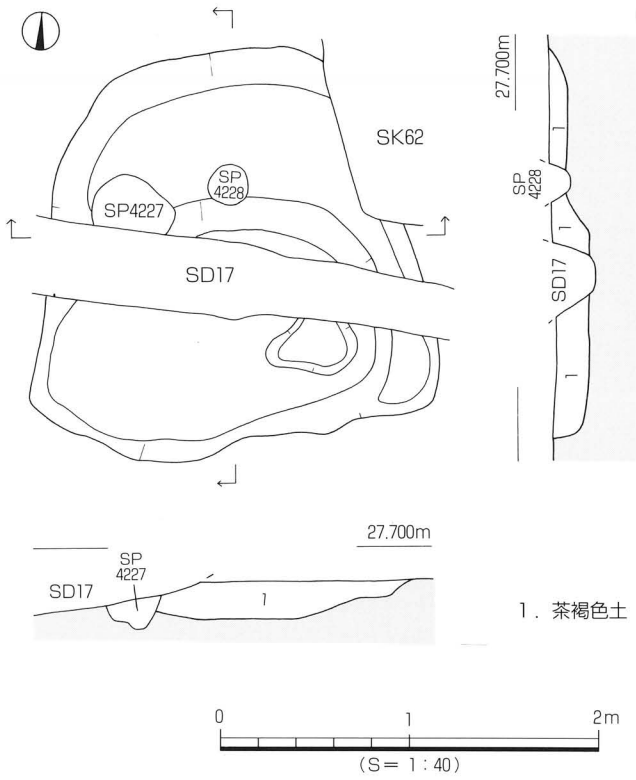
第42図　ＳＫ64測量図・出土遺物実測図

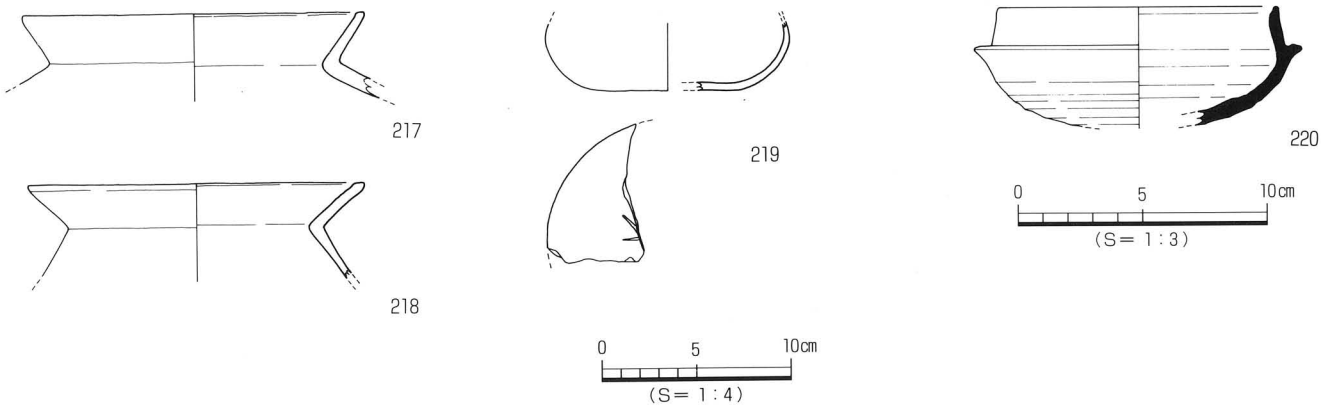


第43図　ＳＫ44測量図・出土遺物実測図

7～10cm、深さ10～12cmを測る。埋土は明茶褐色シルトである。遺物は土師器が出土したが、図化できなかった。

時期：２層埋土がＳＫ59と類似しているため、古墳時代中期と考えられる。





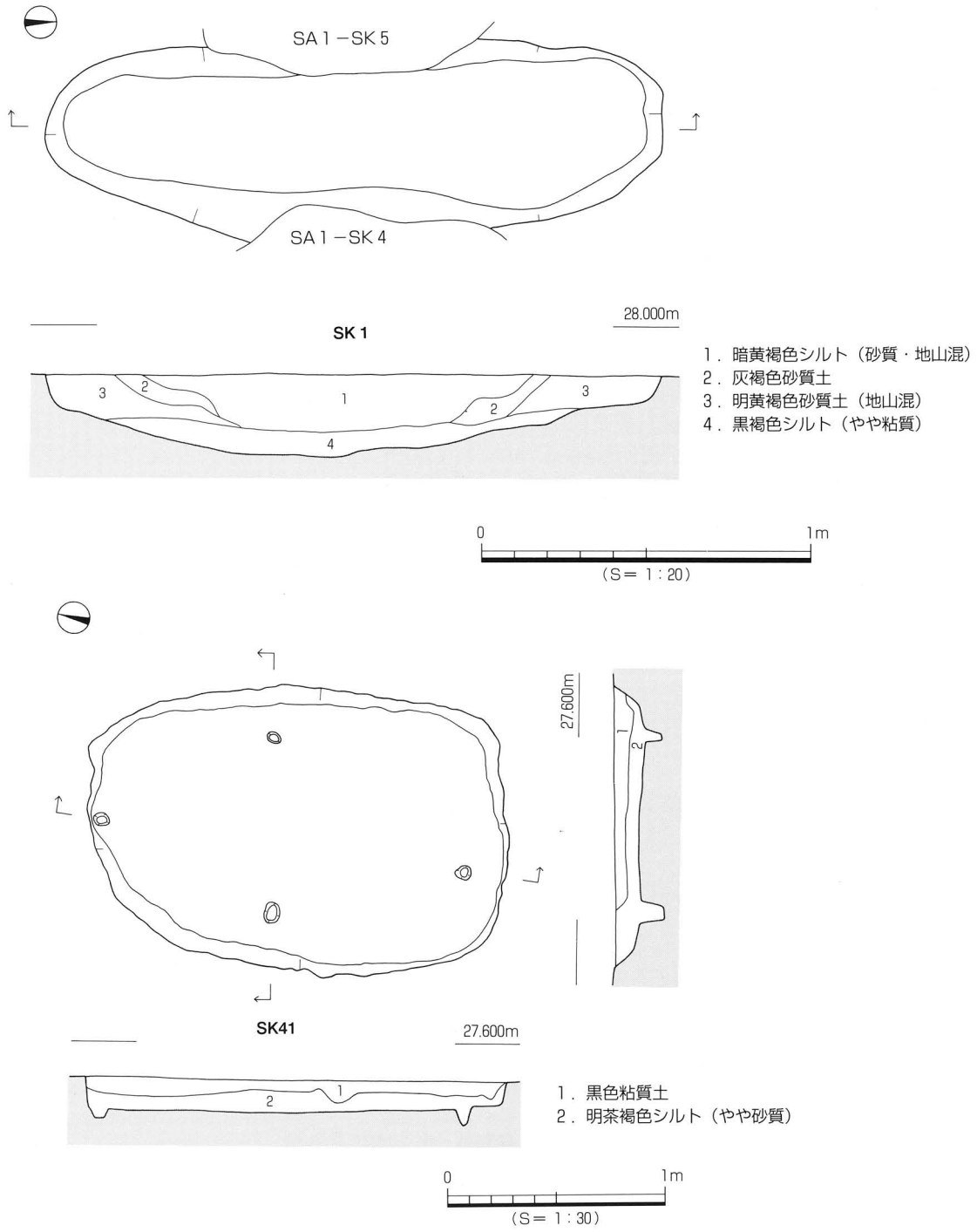
第44図　ＳＫ59測量図・出土遺物実測図

ＳＫ45（第46図）

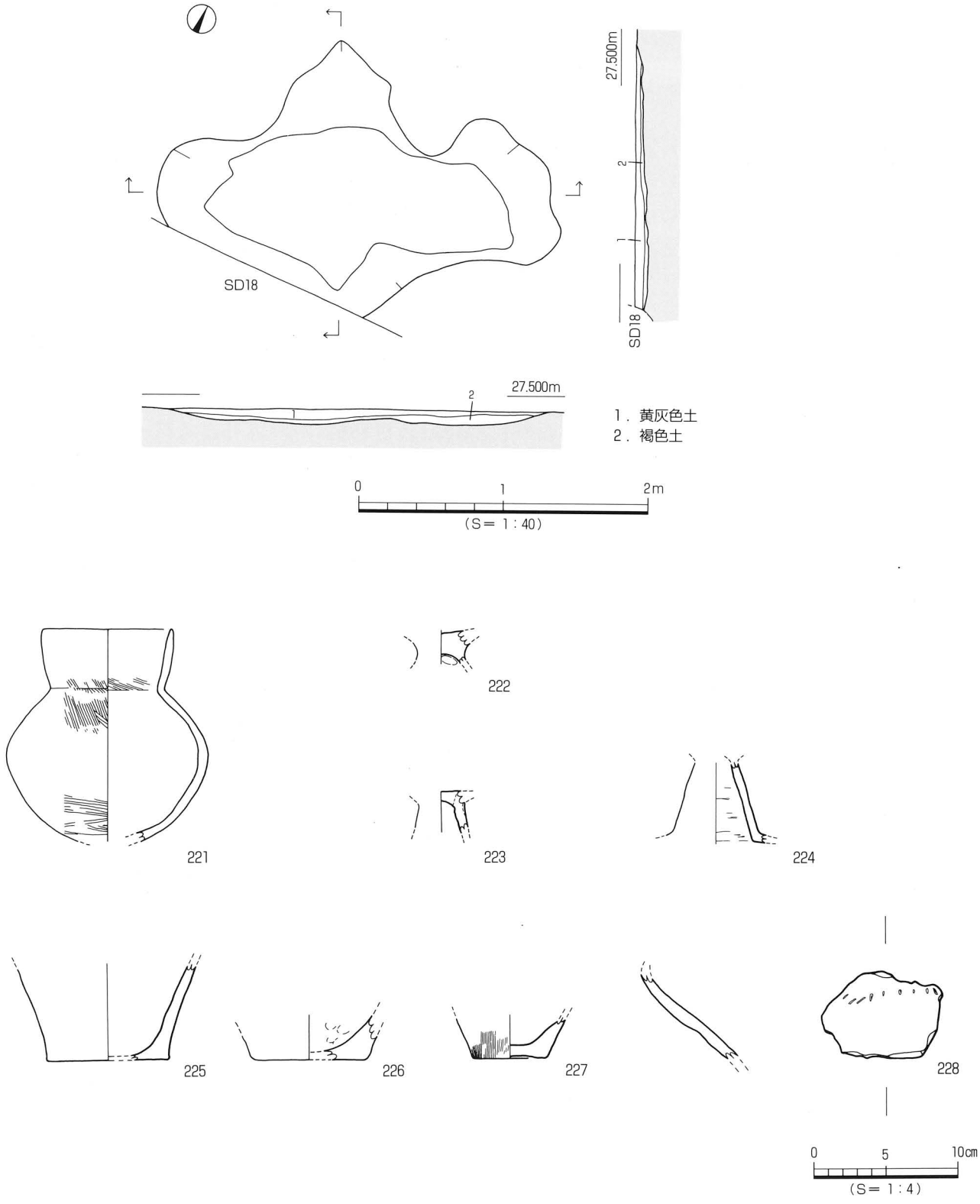
調査区南西部のQ23区に位置し、ＳＢ８を切りＳＤ18に切られる。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸2.70m、短軸1.90m、深さ10cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層が黄灰色土、２層が褐色土である。遺物は弥生土器と土師器が出土した。

出土遺物（第46図）

221～224は土師器である。221は壺形土器である。222～224は高坏形土器の坏部から柱部である。



第45図　ＳＫ１・41測量図



第46図　ＳＫ45測量図・出土遺物実測図

225～228は弥生土器である。225～227は甕形土器の底部である。228は壺形土器の肩部である。「ノ」の字状の押圧文を施す。

時期：出土遺物とＳＢ８を切っていることから古墳時代中期中葉と考えられる。

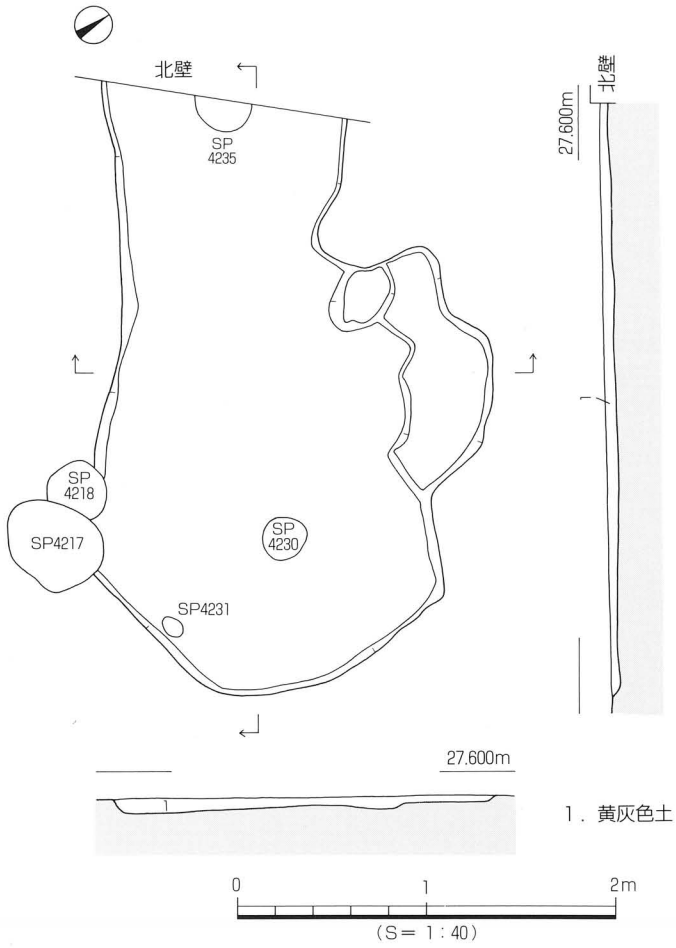
ＳＫ42（第47図）

調査区南西部のM21・22区に位置し、ＳＫ58を切り、北西部は調査区外へ続く。平面形態は東西方向に長い不整形を呈し、規模は長軸3.12m、短軸2.00m、深さ８cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は黄灰色土である。遺物は土師器が出土したが、小片であり図化できなかった。

時期：埋土がＳＫ45と同じであるため、古墳時代中期中葉と考えられる。

ＳＫ46（第48図）

調査区南西部のQ23・24区に位置し、ＳＤ19に切られている。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸2.28m、短軸1.30m、深さ12cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は黄灰色土である。遺物は弥生土器と土師器が出土したが、図化できたのは土師器２点である。



第47図　ＳＫ42測量図

出土遺物（第48図）

229・230は土師器である。いずれも甕形土器の口縁部で、直立気味に立ち上がる口縁部の中位で屈曲する。

時期：埋土がＳＫ45と同じであることと、出土遺物から古墳時代中期中葉と考えられる。

ＳＫ48（第48図）

調査区南西部のM22～N23区に位置し、北西部は調査区外に続く。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸1.18m、短軸0.66m、深さ32cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層が黒褐色土、２層が茶褐色土である。遺物は土師器が出土した。

出土遺物（第48図）

231は土師器である。甕形土器の口縁部である。

時期：出土遺物から古墳時代中期と考えられる。

ＳＫ49（第49図）

調査区南西部のM21区に位置し、ＳＢ５とＳＰ4260に切られる。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸0.87m、短軸0.56m、深さ３cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は黄灰色土である。遺物の出土はない。

時期：ＳＢ５に切られていることと、埋土がＳＫ45と同じであるため古墳時代中期中葉と考えられる。

ＳＫ57（第49図）

調査区南西部のM21・22区に位置し、南部をＳＢ５、西部をＳＰ4206に切られる。平面形態は円形を呈し、規模は長軸0.94m、短軸0.85m、深さ27cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は４層に分かれ、１層が明黄灰色シルト、２層が暗黄灰色シルト、３層が黄色粘質土、４層が暗灰色シルトである。中央部には楕円形の掘り込みがみられ、柱痕跡と思われる。遺物は弥生土器と土師器が出土したが、図化できなかった。

時期：ＳＢ５に切られていることと、埋土がＳＫ45に類似しているため古墳時代中期中葉と考えられる。

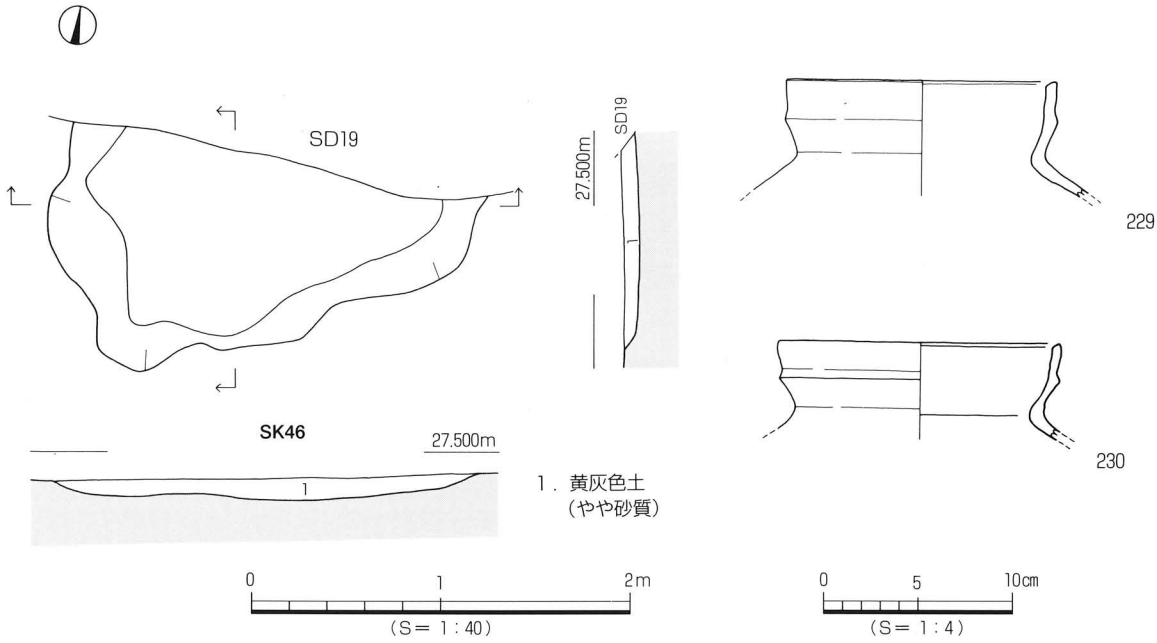
ＳＫ53（第49図）

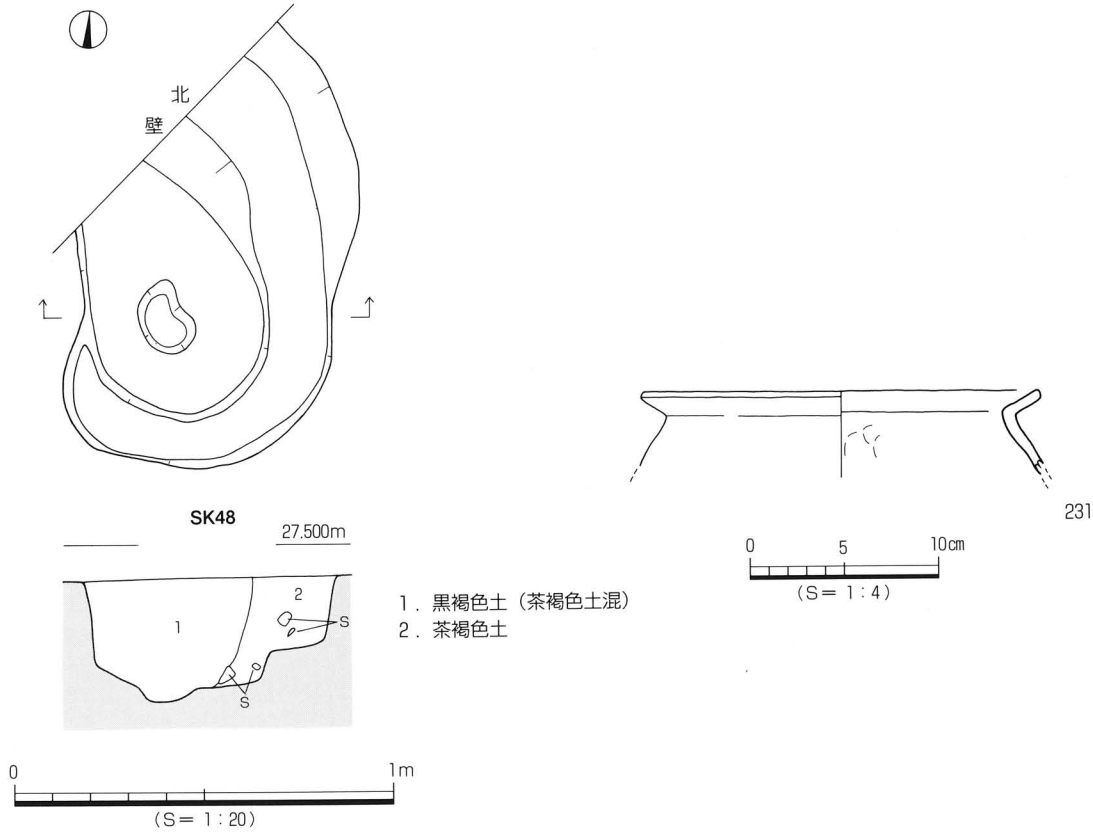
調査区南西部のO21・22区に位置し、ＳＢ５を切る。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸1.58m、短軸0.97m、深さ15cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層は黒色土混じりの暗茶褐色土、２層は黄色土混じりの暗茶褐色土である。内部施設には長軸・短軸方向の４か所で小柱穴を検出した。平面形態は円形で、規模は直径６～８cm、深さ10～15cmを測る。埋土は黄色土混じりの暗茶褐色土である。遺物は土師器が出土した。

出土遺物（第49図）

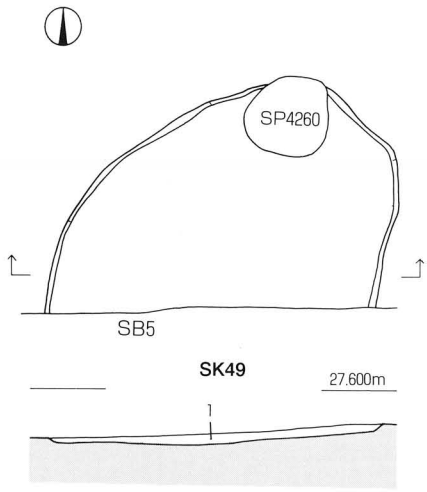
232・233は土師器である。232は壺形土器で直立して立ち上がる口縁部をもつ。233は高坏形土器で口端部は外反しながら尖り気味におさめる。

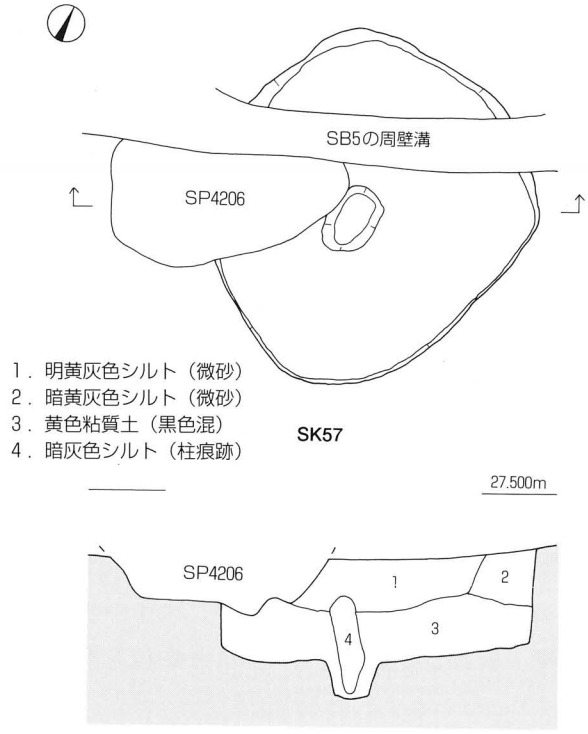
時期：出土遺物から古墳時代中期中葉と考えられる。

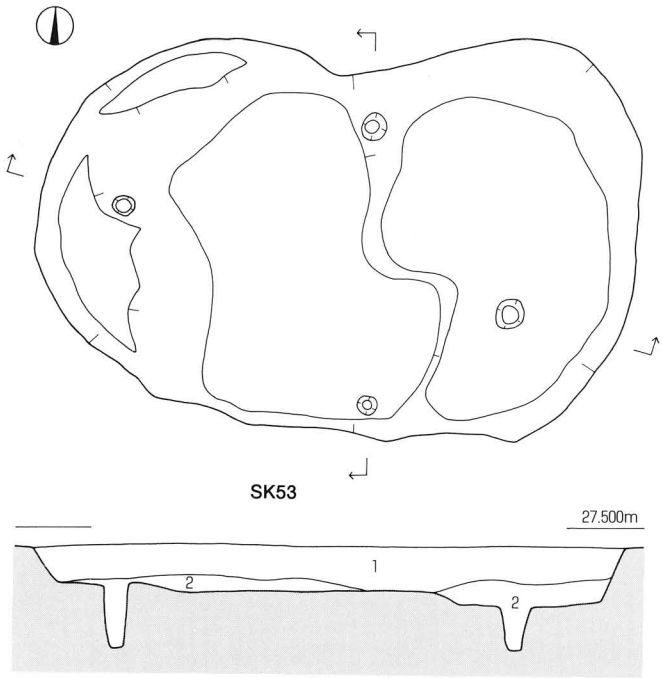


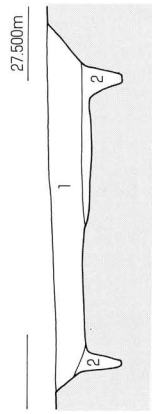


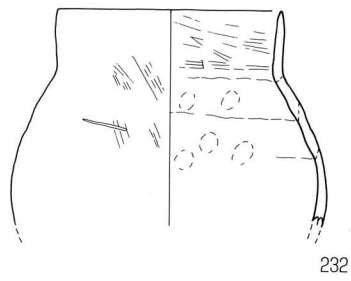
第48図　ＳＫ46・48測量図・出土遺物実測図

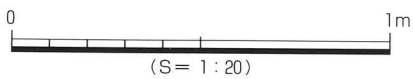


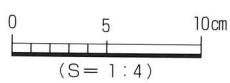












第49図　ＳＫ49・57・53測量図・出土遺物実測図

⑷溝（ＳＤ）

検出した５条の溝は出土遺物が少ないため時期決定が困難であるが、いずれも中期～後期頃と考えられる。

ＳＤ１（第50図）

調査区北東部のＥ５区に位置し、ＳＫ１に切られる。規模は検出長3.73m、幅0.68m、深さ13cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は黒褐色土である。遺物は土師器・須恵器・石庖丁未製品が出土した。

出土遺物（第50図）

234は須恵器の坏身である。235は石庖丁未製品である。

時期：ＳＫ１に切られていることから古墳時代後期以前と考えられる。

ＳＤ２（第51図）

調査区北東部のＥ６・７区に位置し、ＳＡ１、ＳＰ1064・1065・1055・1056に切られる。規模は検出長4.98m、幅0.48m、深さ12cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は灰褐色土である。遺物は土師器と須恵器が出土したが、小片のため図化できなかった。

時期：ＳＡ１に切られていることから古墳時代後期以前と考えられる。

ＳＤ10（第51図）

調査区中央北部のＧ16～Ｈ16区に位置し、ＳＤ５とＳＰ3134に切られる。規模は検出長2.13m、幅0.64m、深さ10cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は茶褐色土である。遺物は平瓦が出土したが混入品と考えられる。

出土遺物（第52図）

236は平瓦である。

時期：埋土がＳＫ59と同じであるため、古墳時代後期と考えられる。

ＳＤ11（第51図）

調査区中央南部のＪ12区に位置し、ＳＰ3167とトレンチに切られ、調査区外に続く。規模は検出長1.48m、幅0.40m、深さ16cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は茶褐色土である。遺物の出土はない。

時期：埋土がＳＫ59と同じであるため、古墳時代中期と考えられる。

ＳＤ12（第４図）

調査区南西部のＬ19～Ｐ19区に位置し、南北の両端は調査区外に続く。規模は検出長14.50m、幅0.60m、深さ８cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰褐色土である。遺物は土師器と砥石が出土した。

出土遺物（第53図）

237は土師器甑の把手である。238は砂岩製の砥石である。

時期：埋土がＳＤ２と同じであるため、古墳時代後期以前と考えられる。

(5)性格不明遺構（ＳＸ）

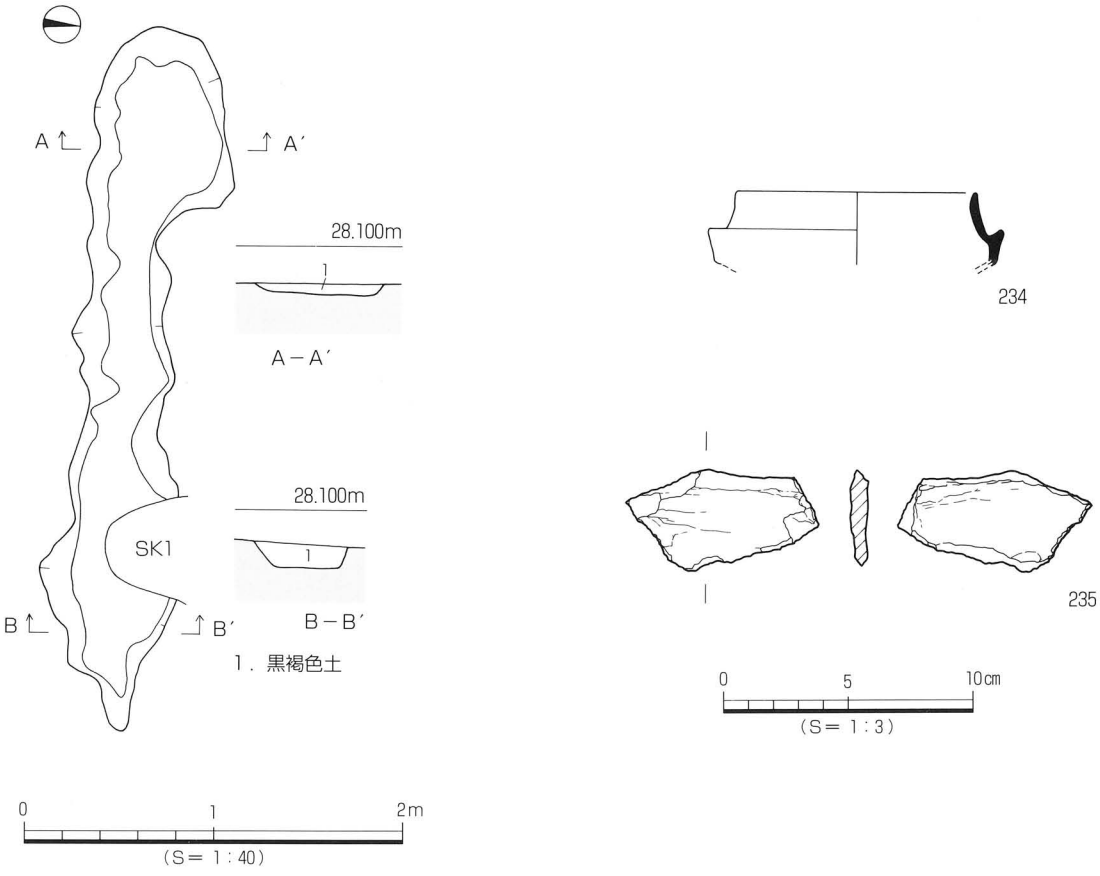
検出した３基の性格不明遺構はいずれも平面形態が不整形であり、明確な掘り方をもたないため、人工的な遺構ではなく自然の凹地と考えられる。またいずれの時期も古墳時代後期である。

ＳＸ３（第４図）

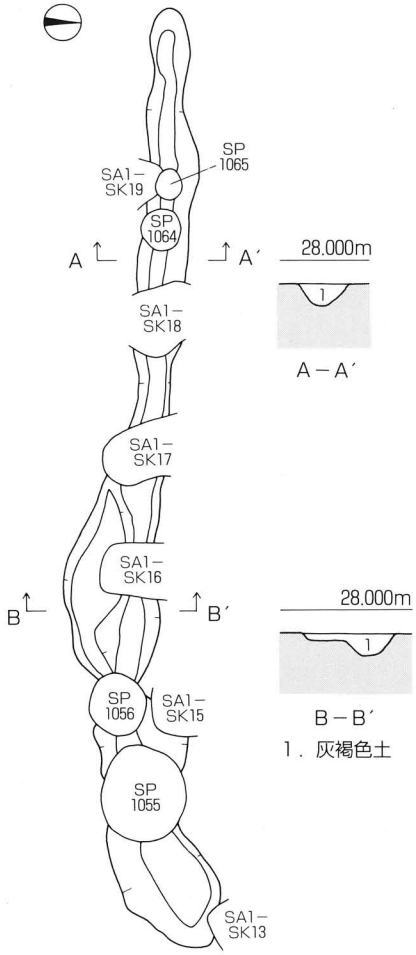
調査区北西部のＣ７～Ｅ10区に位置し、掘立~~３~~2とＳＤ５に切られる。北部は調査区外に続く。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸9.95m、短軸9.20m、深さ30cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層が黒褐色土、２層が暗灰褐色土である。遺物は土師器・須恵器・弥生土器・石鏃・石斧・石庖丁・砥石・台石・敲石・磨石が出土した。

出土遺物（第54～57図）

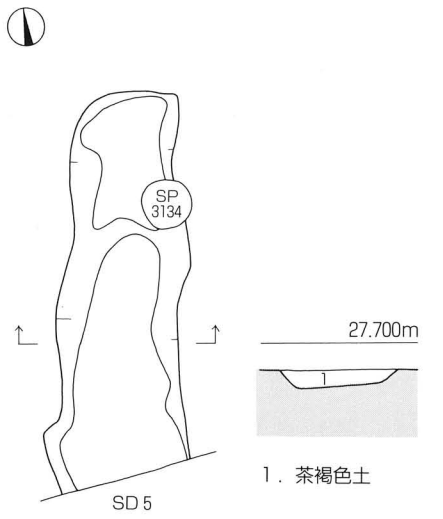
239～246は土師器である。239・240は甕形土器の口縁部である。241・242は高坏形土器の柱部である。243～246は甑形土器の把手である。247～257は須恵器である。247は坏蓋のつまみ部である。248～253は坏身である。254は高坏の脚端部である。255は鼈である。256は壺の底部である。257は四耳壺である。258～274は弥生土器である。258～261は甕形土器の底部である。262～271は壺形土器である。262はラッパ状に大きく開く口縁部、263～271は底部である。272・273は鉢形土器の底部である。274は高坏形土器である。柱部下位に山形文を施す。275～290は石製品である。275は石鏃である。276・277は両刃石斧である。前者は磨製、後者は打製である。278は石庖丁、279～282は石庖丁未製



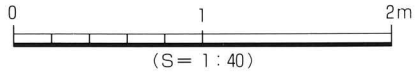
第50図　ＳＤ１測量図・出土遺物実測図

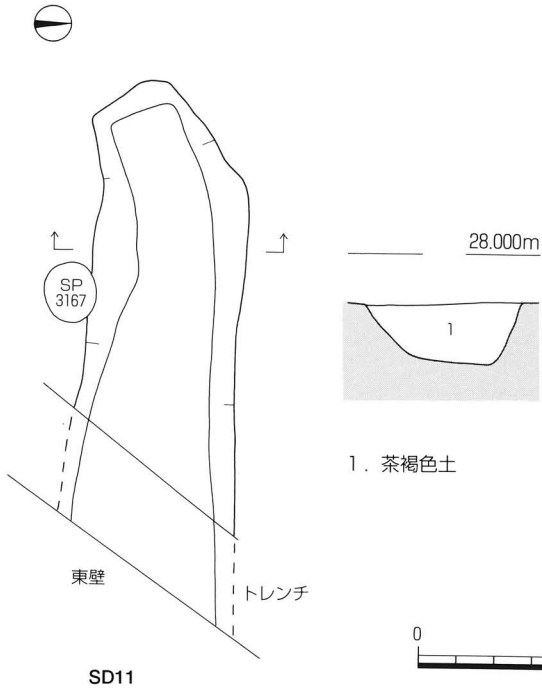


SD 2

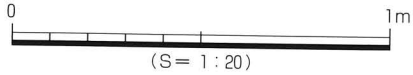


SD10





SD11



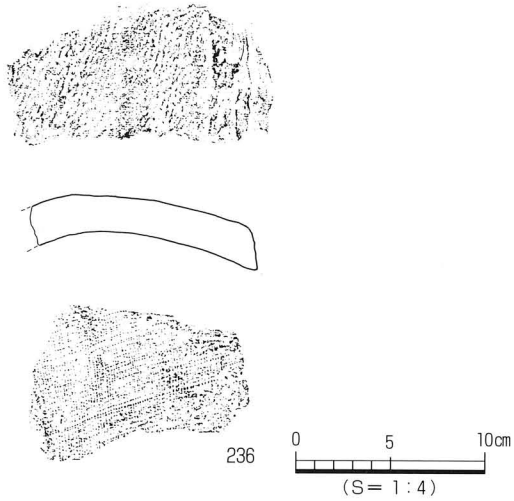
第51図　ＳＤ２・10・11測量図

品である。283は砥石である。284・285は台石である。286～289は敲石である。290は磨石である。

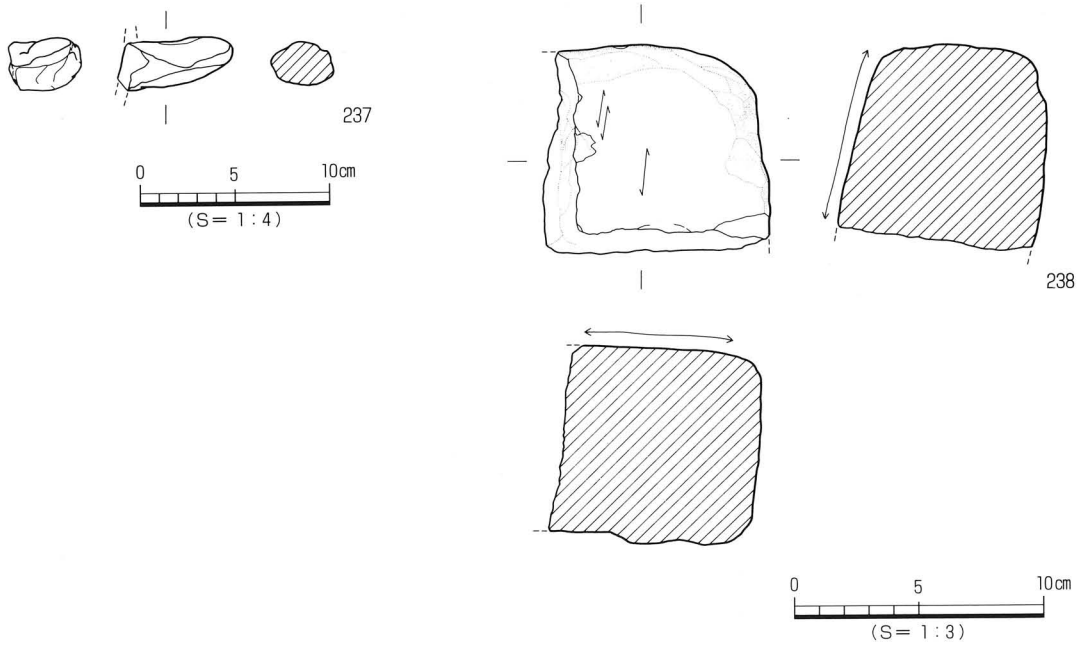
時期：出土遺物と掘立３、ＳＤ５に切られていることから、６世紀前半と考えられる。

ＳＸ４（第４図）

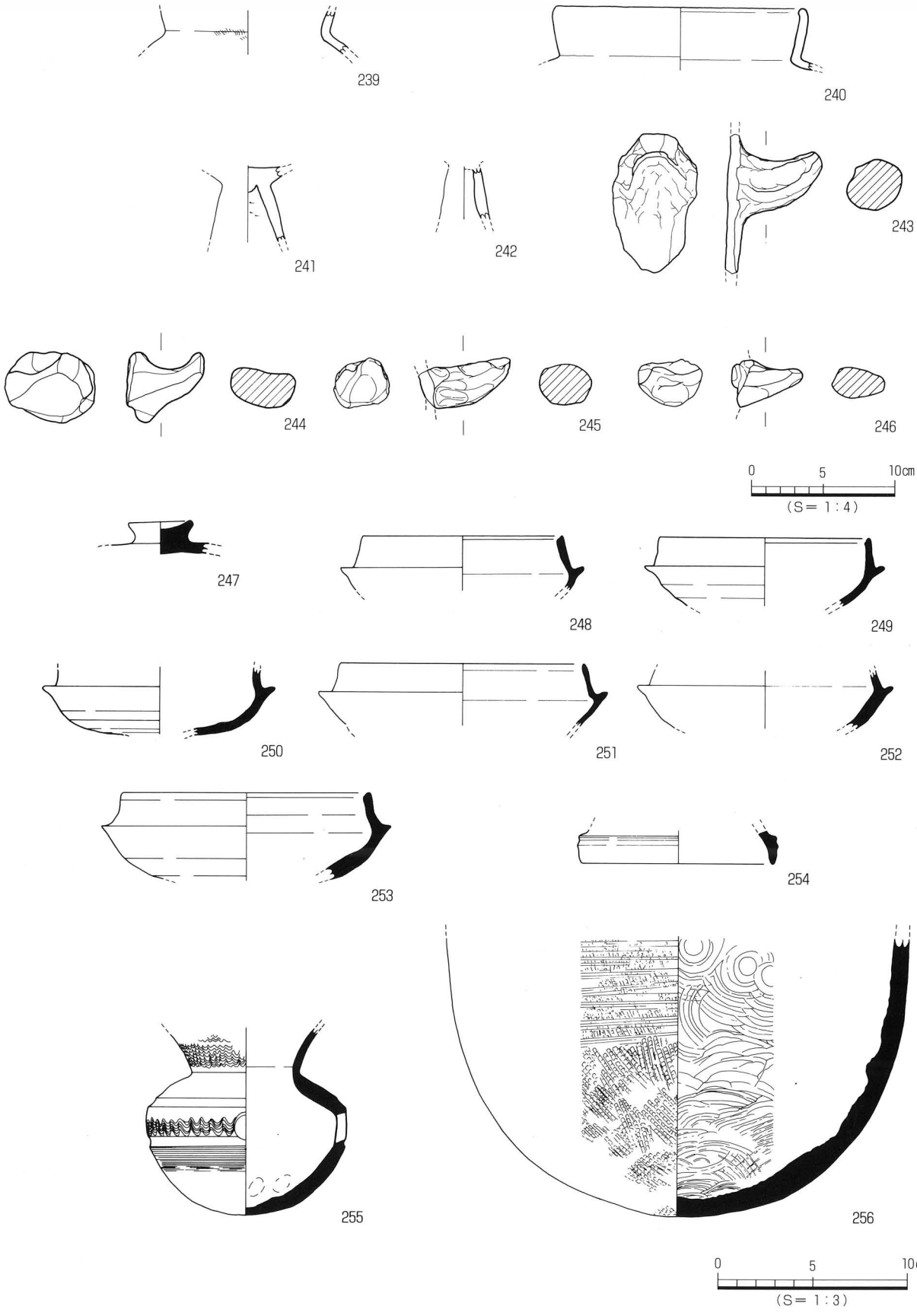
調査区中央部のＦ９～G11区に位置し、ＳK21を切り、ＳＤ５に切られる。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸8.75m、短軸2.75m、深さ30cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は褐色土である。遺物は土師器・須恵器・弥生土器が出土した。



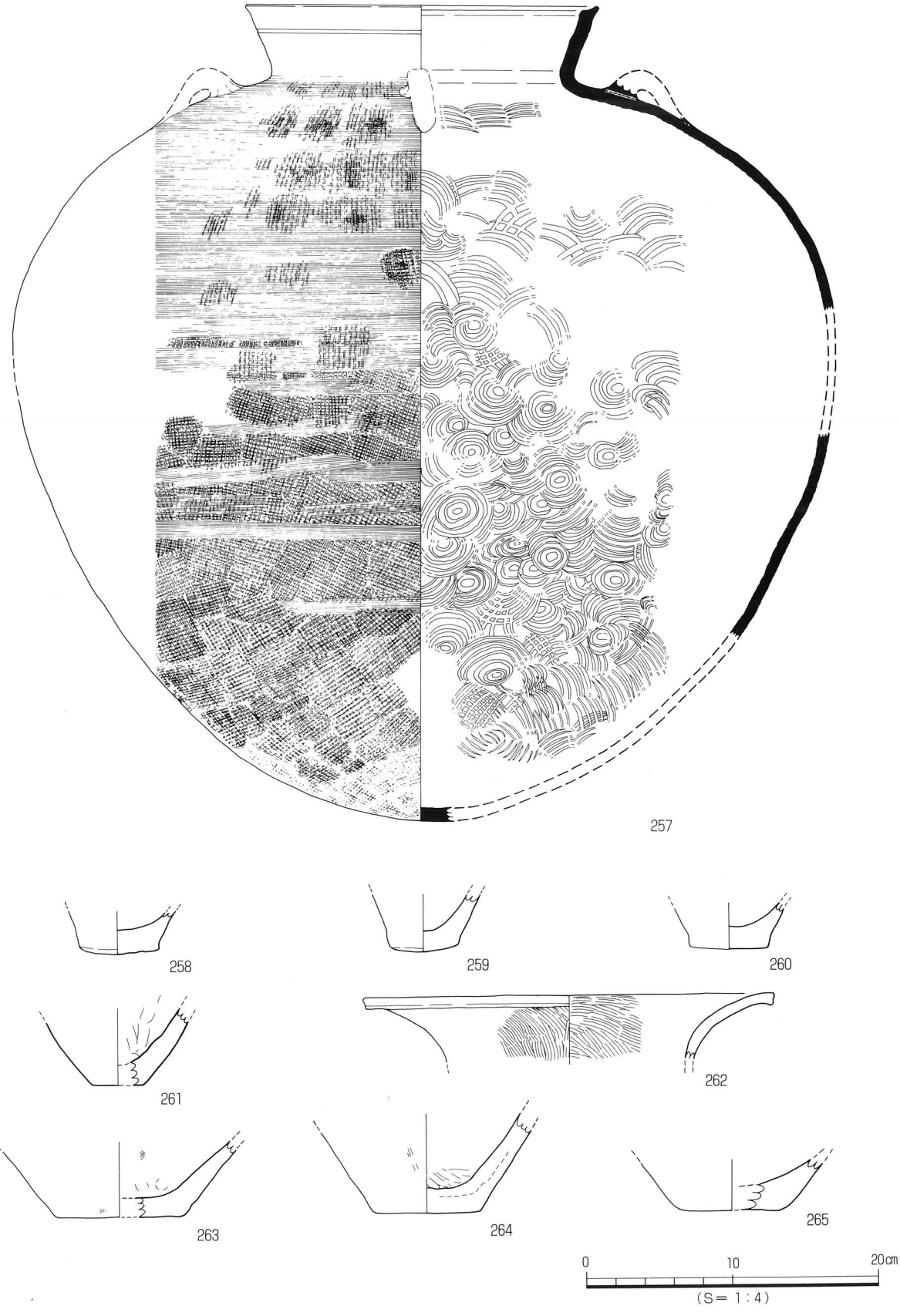
第52図　ＳＤ10出土遺物実測図



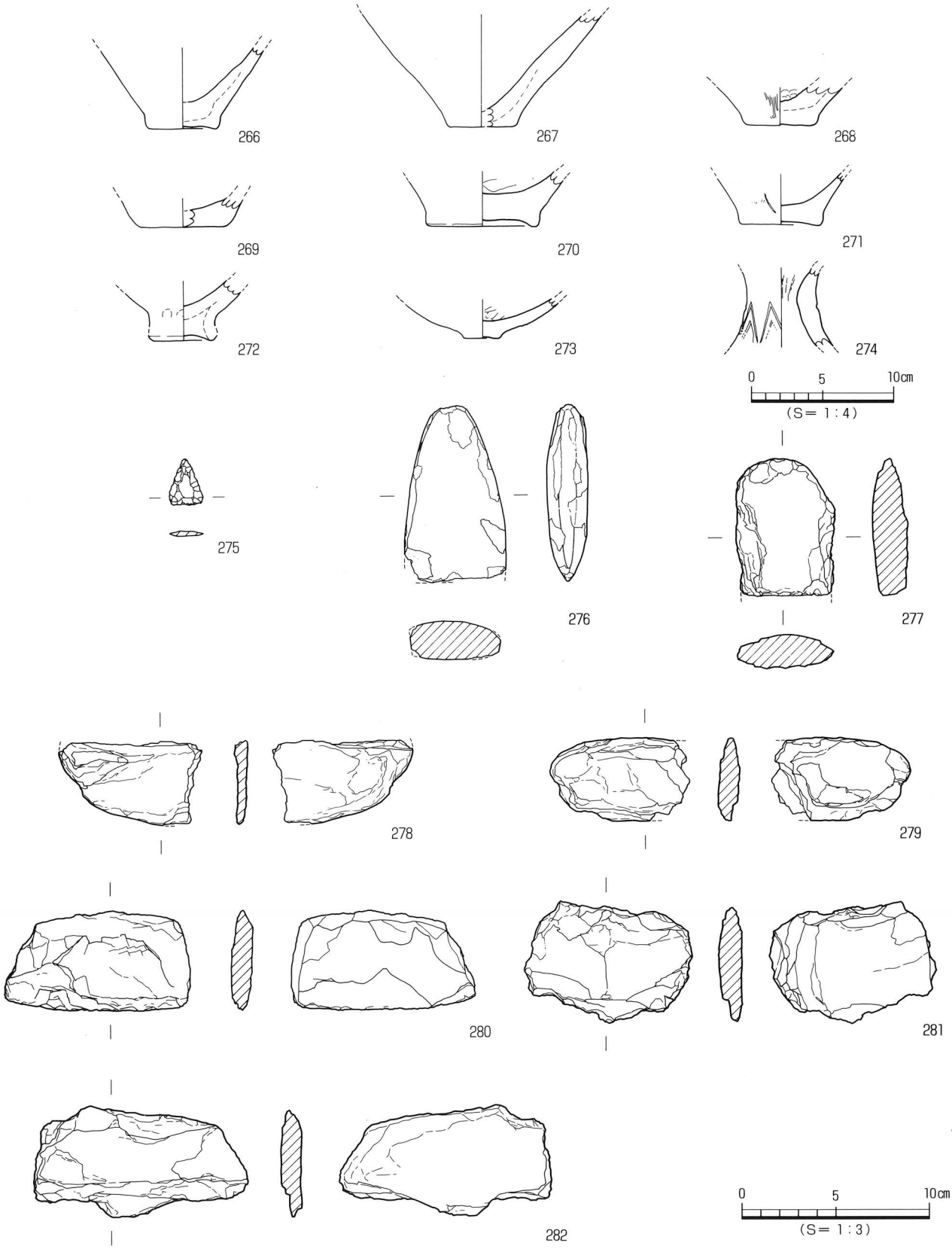
第53図　ＳＤ12出土遺物実測図



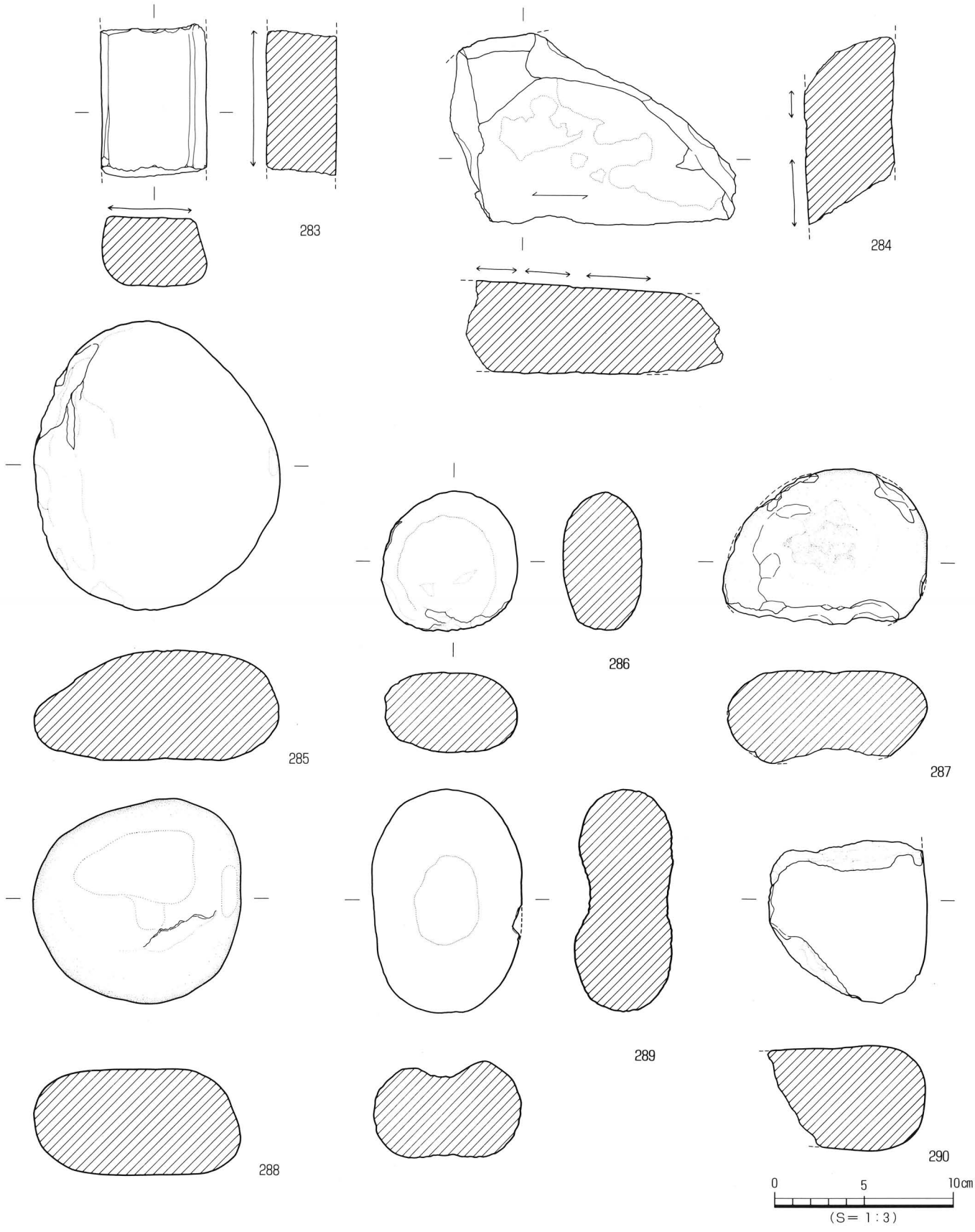
第54図　ＳＸ３出土遺物実測図(1)



第55図　ＳＸ３出土遺物実測図(2)



第56図　ＳＸ３出土遺物実測図(3)



第57図　ＳＸ３出土遺物実測図(4)

出土遺物（第58図）

291～301は土師器である。291～294は甕形土器である。295は球形の胴部をもつ壺形土器である。296・297は高坏形土器である。298～301は甑形土器の把手である。302～306は須恵器である。302・303は坏蓋である。304は坏身である。305・306は高坏である。307～312は弥生土器である。307は器台形土器の受部である。308～310は甕形土器の底部である。311・312は壺形土器の底部である。

時期：出土遺物とＳＤ５に切られていることから、６世紀前半と考えられる。

ＳＸ５（第４図）

調査区中央部のＧ14～Ｉ16区に位置し、ＳＤ５とＳＡ１に切られる。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸12.25m、短軸3.70m、深さ30cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層が黒褐色土、２層が暗灰褐色土である。遺物は土師器・須恵器・弥生土器・土師質土器・土鍋・石鏃・ナイフ形石器・台石・磨石・敲石が出土した。

出土遺物（第59～61図）

313～324は土師器である。313は甕形土器の口縁部である。314は壺形土器である。扁球形の胴部をもつ。小型品。315・316は高坏形土器である。317～324は甑形土器である。317は底部、318～324は把手である。325～343は須恵器である。325～327は坏蓋である。325はつまみ部である。328～332は坏身である。333～336は高坏である。333・334は坏部、335・336は脚部である。337・338は甕の口縁部である。339・340は壺形土器である。341は鉢である。342は器台である。343は提瓶である。344～351は弥生土器である。344・345は甕形土器の底部である。346は壺形土器の口縁部である。凹線文を巡らす。347～349は壺形土器の底部である。350は鉢形土器の底部である。351は器台形土器である。352は坏である。353は土鍋である。354～359は石製品である。354は石鏃である。355は石器未製品である。356はナイフ形石器である。357は台石である。358は磨石である。359は敲石である。

時期：出土遺物とＳＤ５に切られていることから、６世紀前半と考えられる。

⑹柵列（ＳＡ）

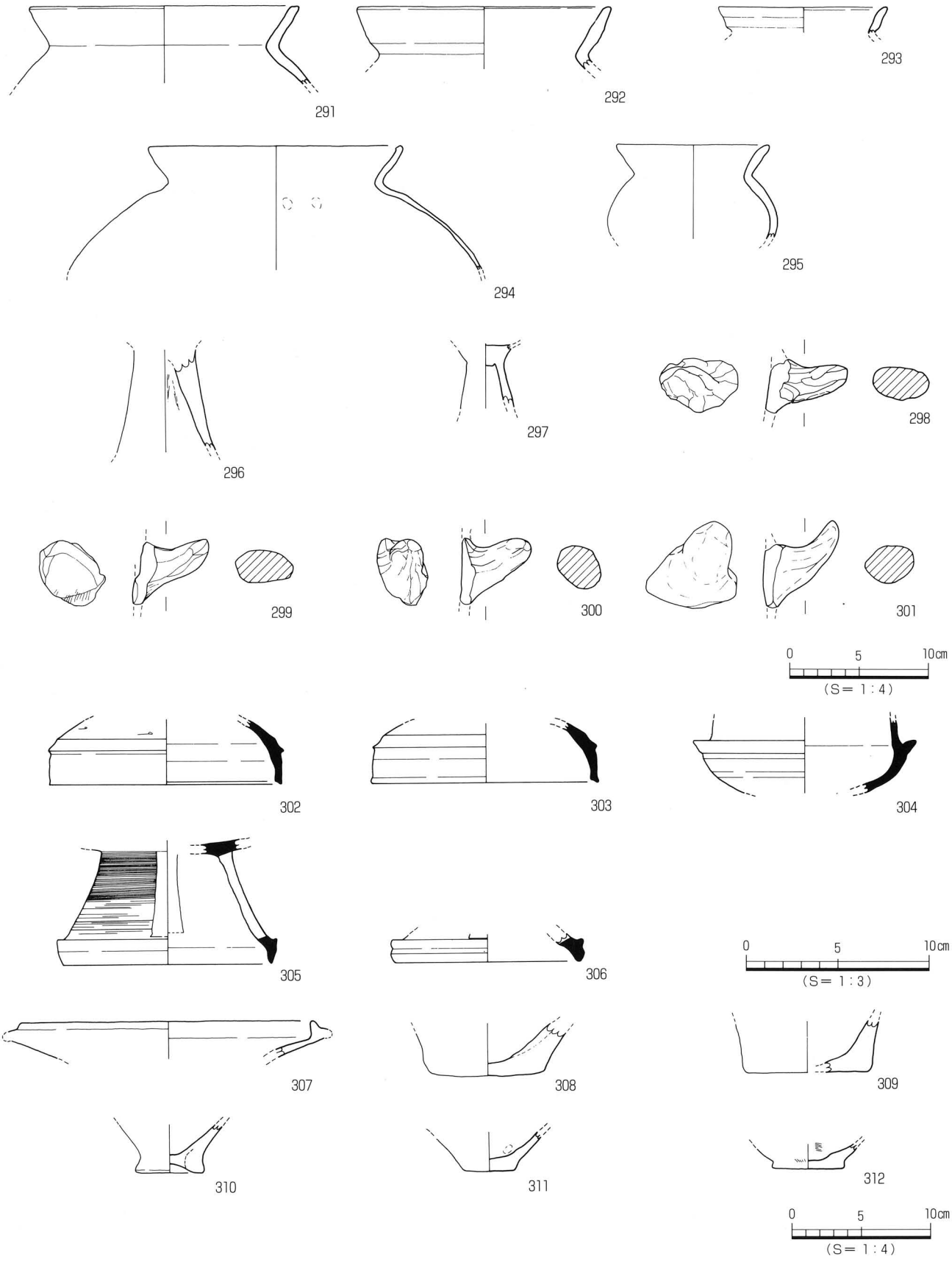
ＳＡ１（第62・63図、図版９）

調査区北西～中央部のＥ４～Ｈ16区に位置し、ＳＸ５を切りＳＤ５と墓１に切られる。規模は北東から南西方向に総延長約51mを検出した。１区で27間約19.7m、２区で２間約2.6m、３区で13間約9.3mである。柱間は26～165cmである。平面形態は楕円形または長楕円形で、規模は径28～119cm、幅23～56cmを測り、検出面より深さ2.5～25cmを測る。埋土は暗灰褐色土又は明灰褐色土である。遺物は土師器・須恵器・土師質土器・石庖丁・砥石・磨石・敲石・台石が出土した。

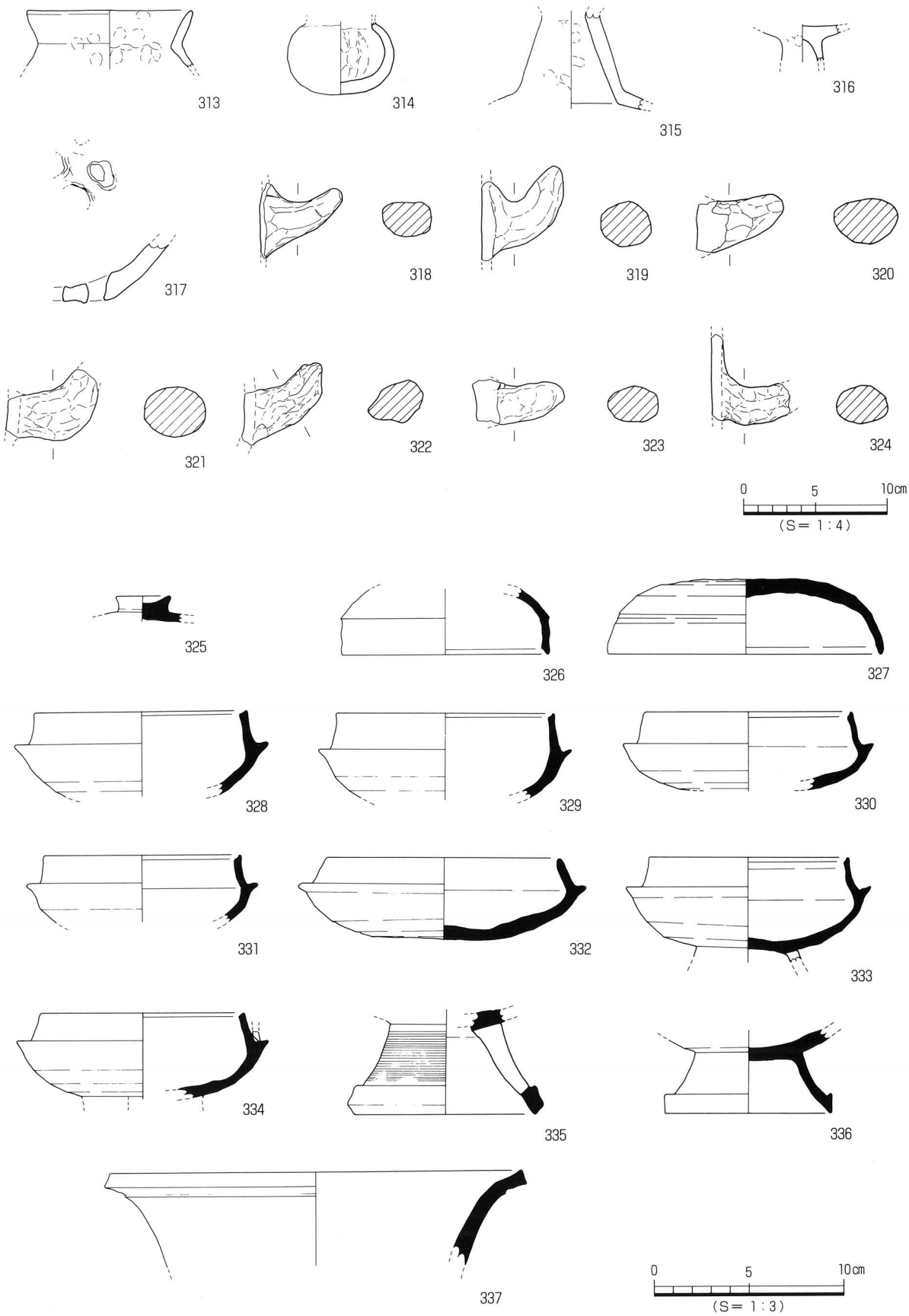
出土遺物（第64・65図）

360・361は土師器の甑形土器の把手である。362～365は須恵器である。362は坏蓋のつまみである。363は坏身である。364・365は高坏の脚部である。前者は脚部中位に円孔３か所施す。366は土師質土器の坏である。367～376は石製品である。367～369は石庖丁である。370～372は砥石である。373は磨石である。374・375は敲石である。376は台石である。

時期：出土遺物とＳＸ５を切り、ＳＤ５に切られていることから、６世紀前半以降で中世以前と考えられる。



第58図　ＳＸ４出土遺物実測図



第59図　ＳＸ５出土遺物実測図(1)

〔3〕中世以前

当該期の遺構は、土坑4基・溝2条・柱穴がある。

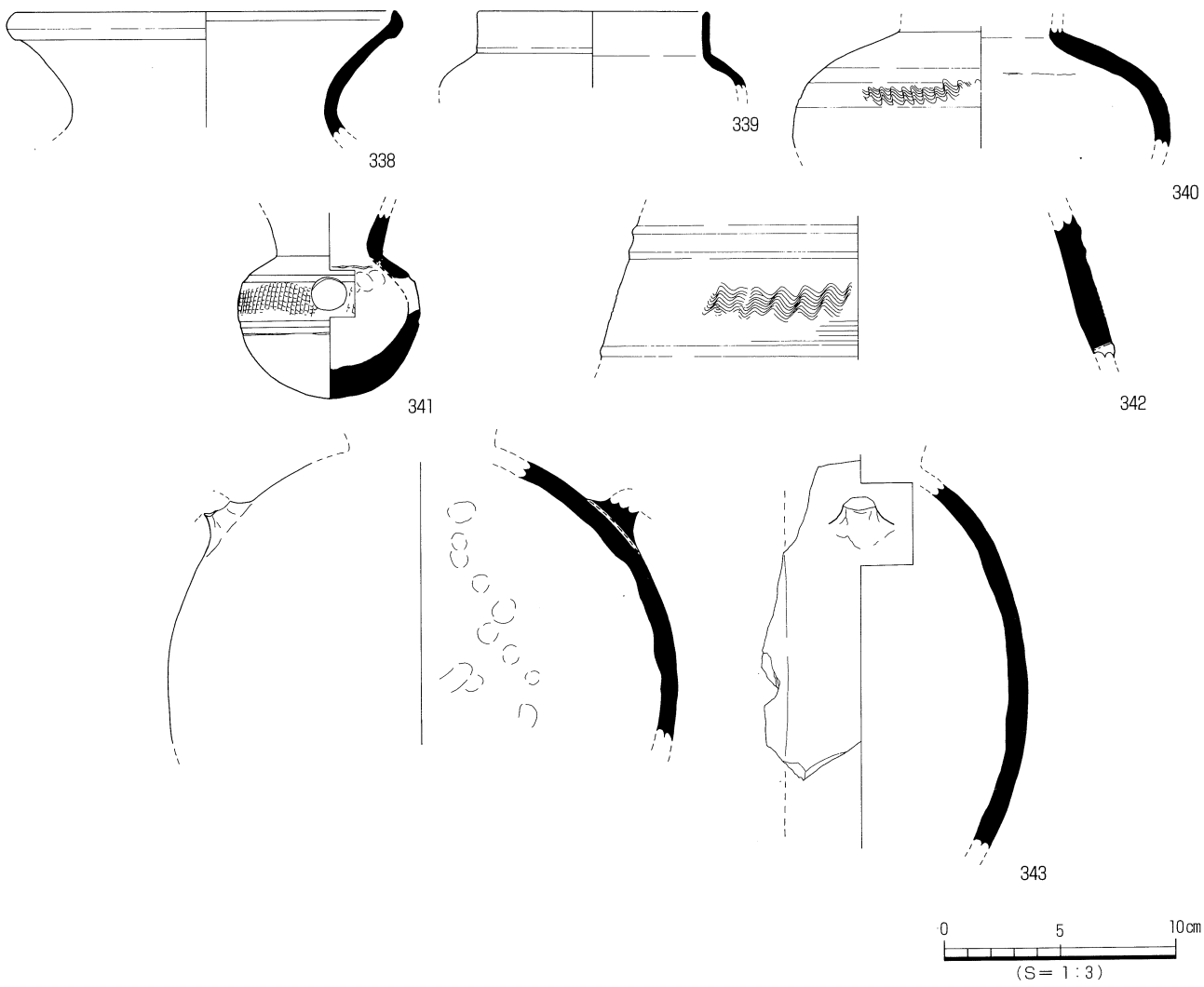
(1)土坑（ＳＫ）

検出した4基の土坑は時期決定に必要な遺物が少ないため時期決定が困難であるが、いずれも中世以前と考えられる。

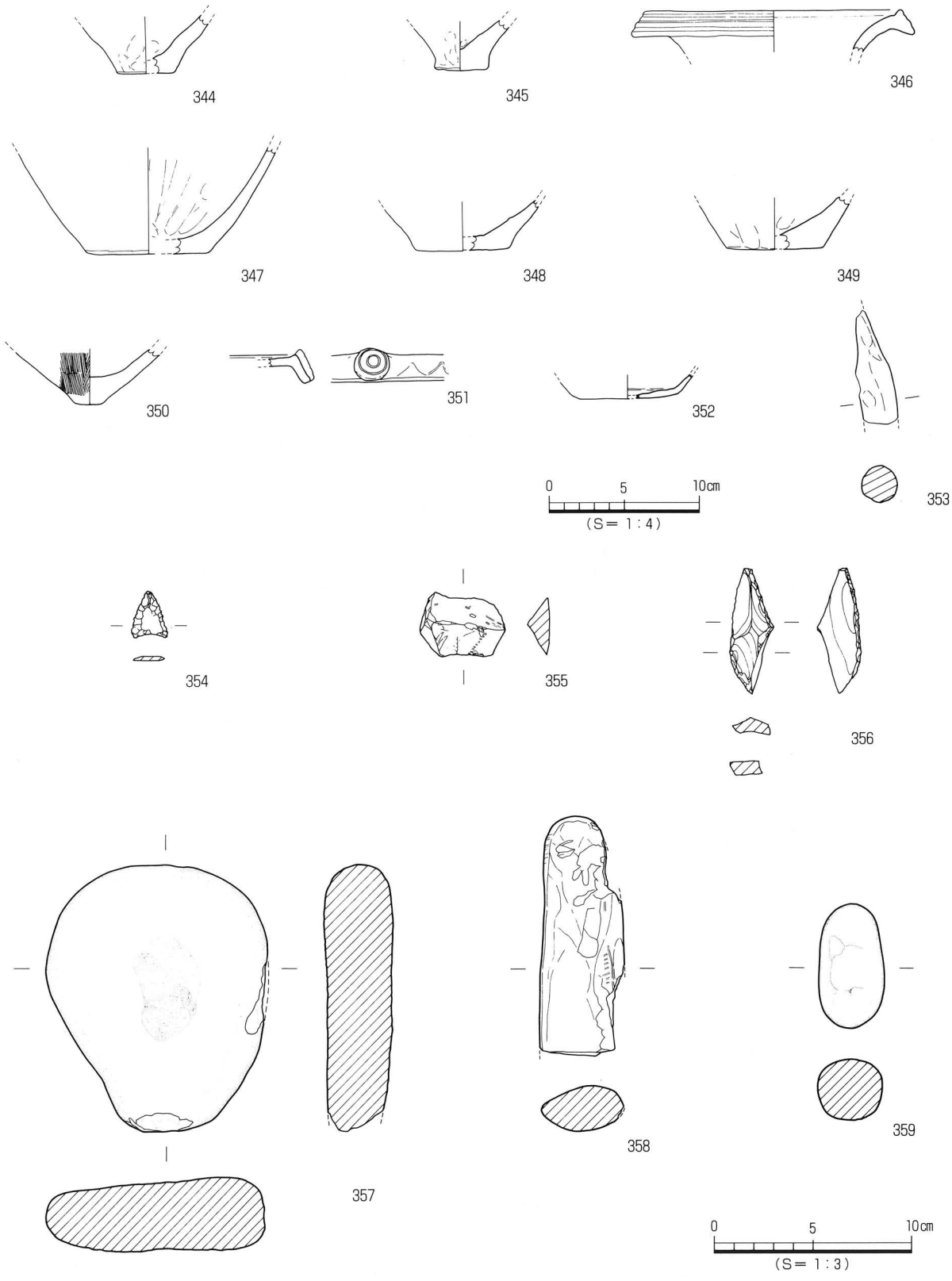
ＳＫ31（第66図）

調査区中央部南寄りのＪ12～13区に位置し、ＳＫ29とＳＤ5に切られる。平面形態は円形を呈し、規模は長軸1.03m、短軸0.80m、深さ90cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は4層に分かれ、1層が明灰褐色土、2層が灰褐色土、3層が灰褐色土（粘性が強い）、4層が灰褐色土（黄色粒状土と黒色粘質土混）である。遺物は土師器が出土したが、小片のため図化するには至らなかった。

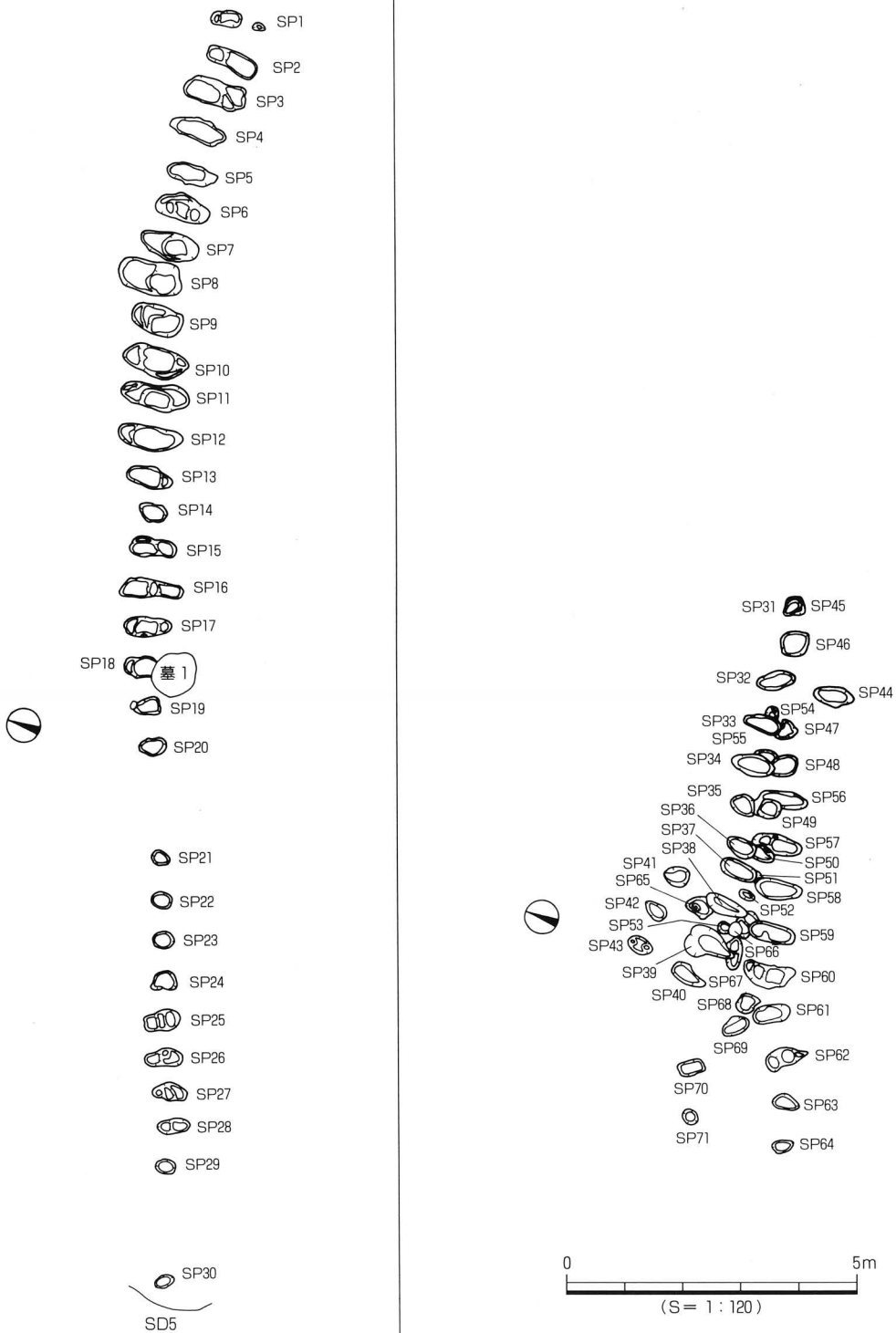
時期：埋土が中世の遺構と類似しているが、ＳＤ5に切られていることから中世以前と考えられる。



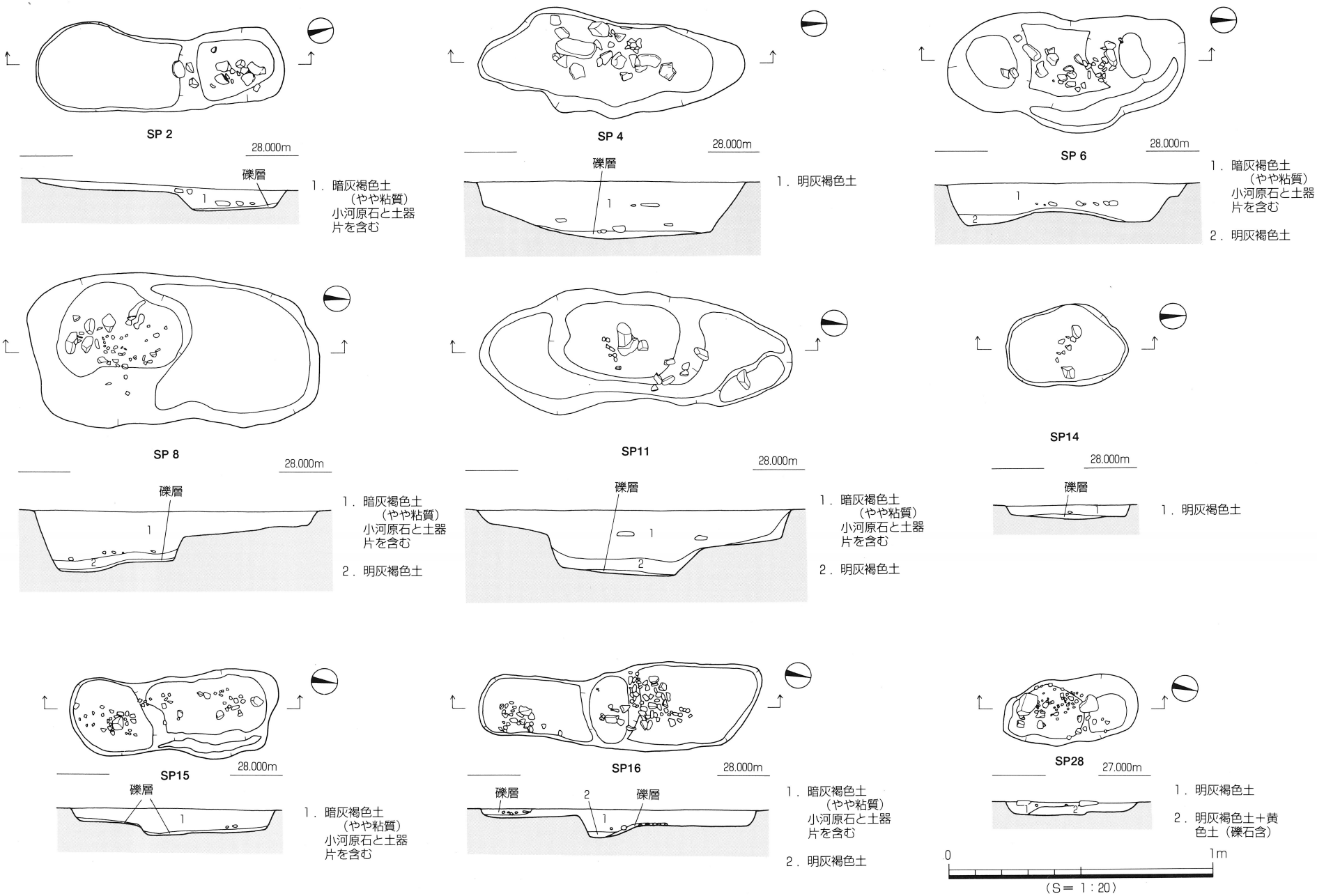
第60図　ＳＸ5出土遺物実測図(2)



第61図　ＳＸ５出土遺物実測図(3)


SP1
SP2
SP3
SP4
SP5
SP6
SP7
SP8
SP9
SP10
SP11
SP12
SP13
SP14
SP15
SP16
SP17
SP18
墓1
SP19
SP20
SP21
SP22
SP23
SP24
SP25
SP26
SP27
SP28
SP29
SP30
SD5
SP31
SP45
SP46
SP32
SP44
SP54
SP33
SP47
SP55
SP34
SP48
SP35
SP56
SP36
SP49
SP37
SP57
SP38
SP50
SP41
SP51
SP65
SP58
SP42
SP52
SP53
SP59
SP43
SP66
SP39
SP67
SP60
SP40
SP68
SP61
SP69
SP62
SP70
SP63
SP71
SP64
0
5m
(S= 1 : 120)

第62図　ＳＡ１測量図

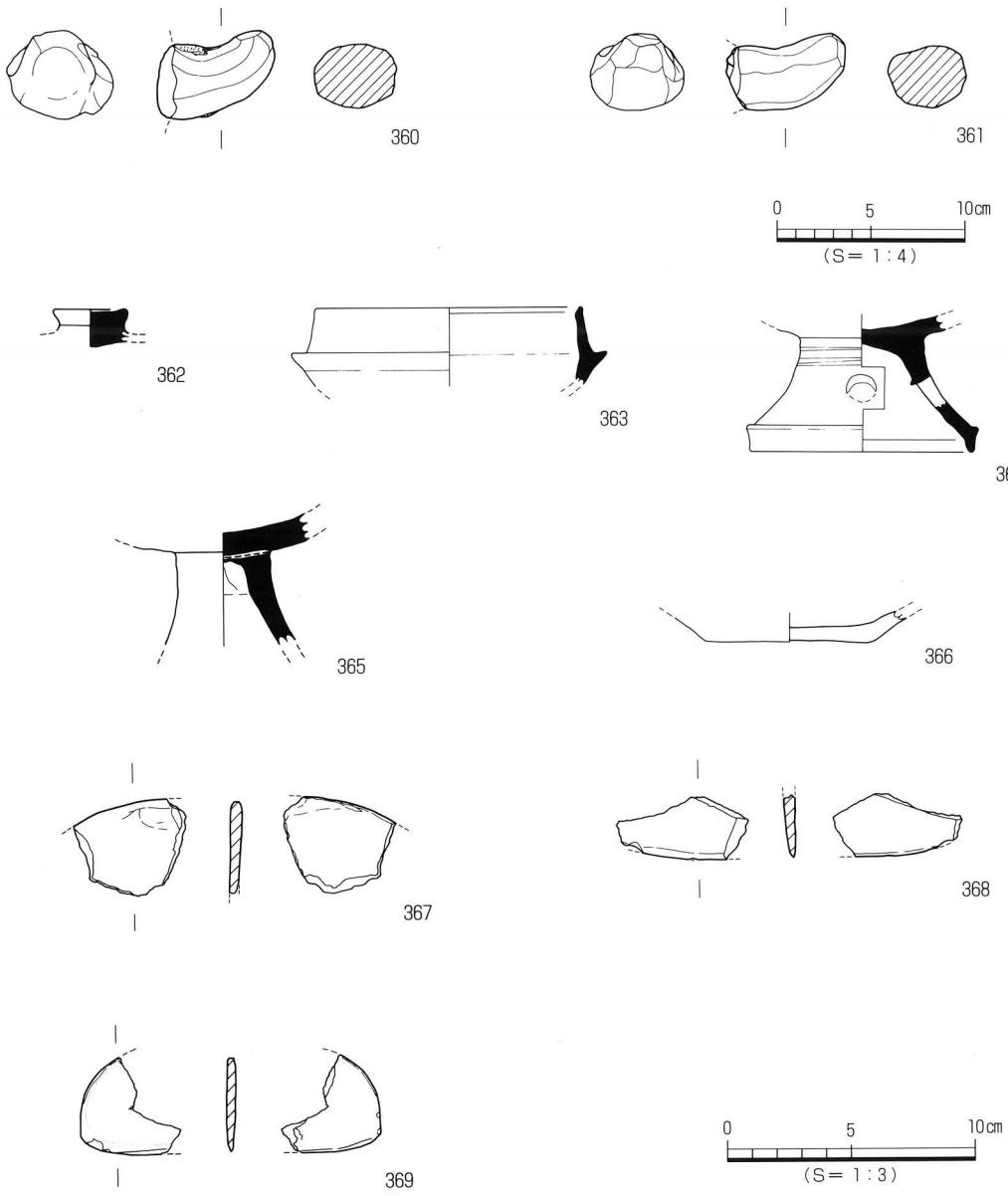


第63図　ＳＡ１－ＳＰ２・４・６・８・11・14・15・16・28測量図

ＳＫ29（第66図）

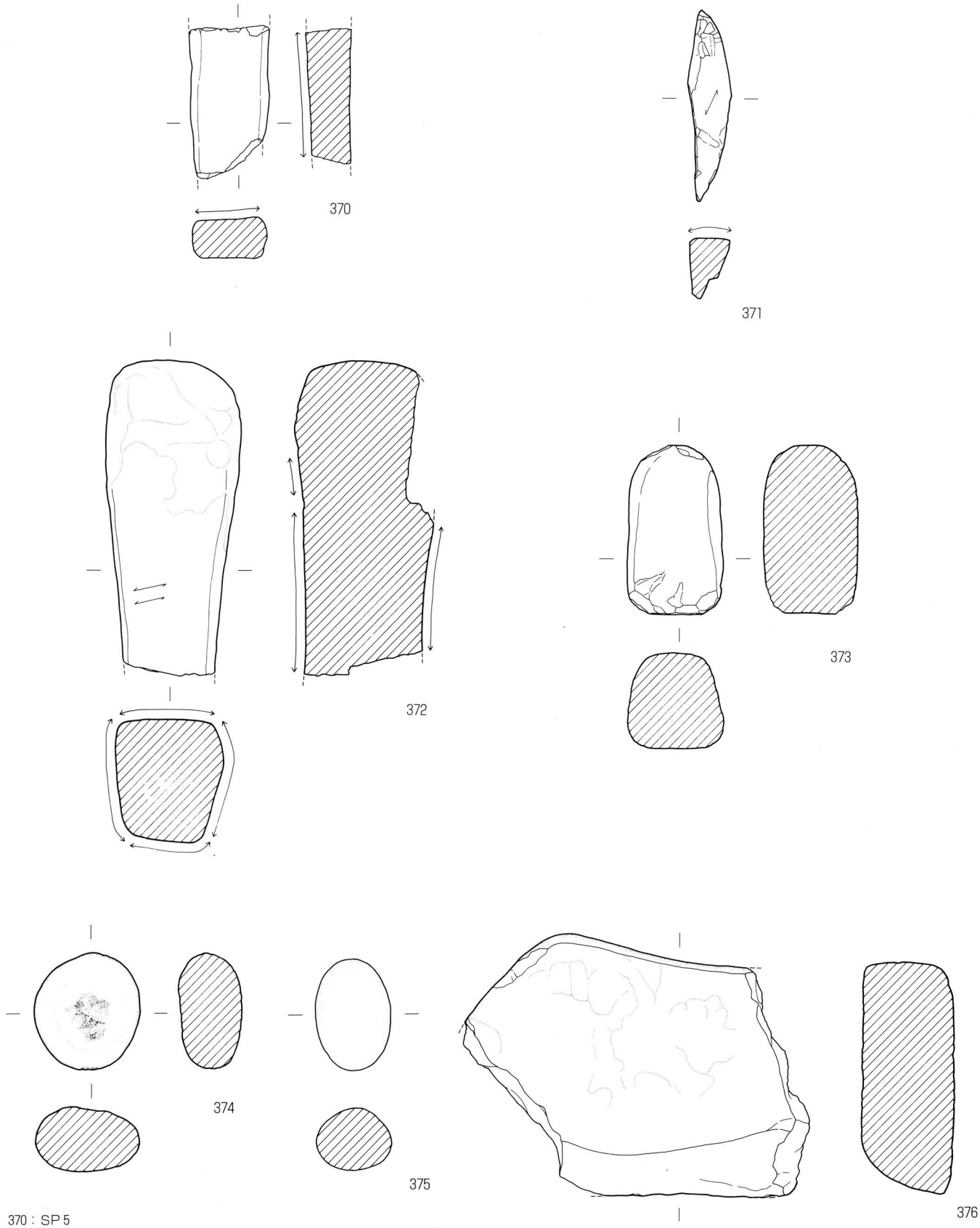
調査区中央部南のＪ13区に位置し、ＳＫ31を切る。平面形態は円形を呈し、規模は長軸0.73m、短軸0.68m、深さ23cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層は灰褐色土（黄色粒状土混）、２層は灰褐色土と黄色土の同量混合土である。遺物は土師器が出土したが、小片のため図化するには至らなかった。

時期：埋土がＳＫ31と類似しているためＳＫ31とは余り時期差はないものと考え、中世以前とする。



360・361：SP20
362・365：SP13
363・364：SP57
366：SP46
367・369：SP28
368：SP6

第64図　ＳＡ１出土遺物実測図(1)



370：SP 5
371：SP68
372：SP48
373：SP12
374：SP38
375：SP57
376：SP39

第65図　ＳＡ１出土遺物実測図(2)

ＳＫ36（第67図）

調査区中央部南寄りのＩ17・18区に位置し、ＳＤ５に切られる。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸3.94m、短軸2.17m、深さ16cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は３層に分かれ、１層が黒色土、２層が明灰褐色土（やや砂質）、３層が明褐色土（やや粘質）である。遺物は土師器・須恵器・サヌカイト片・磨石・敲石が出土した。

出土遺物（第67図）

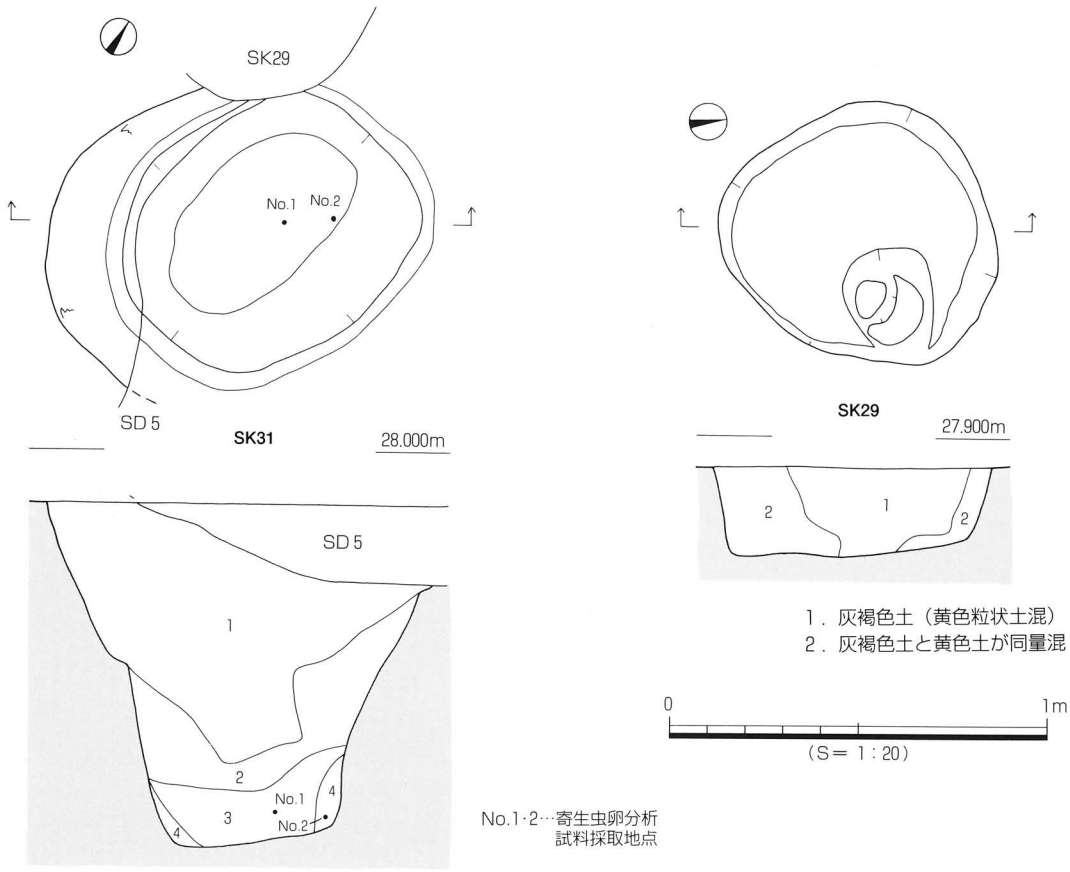
377は磨石である。378は敲石である。

時期：埋土とＳＤ５に切られていることから中世以前と考えられる。

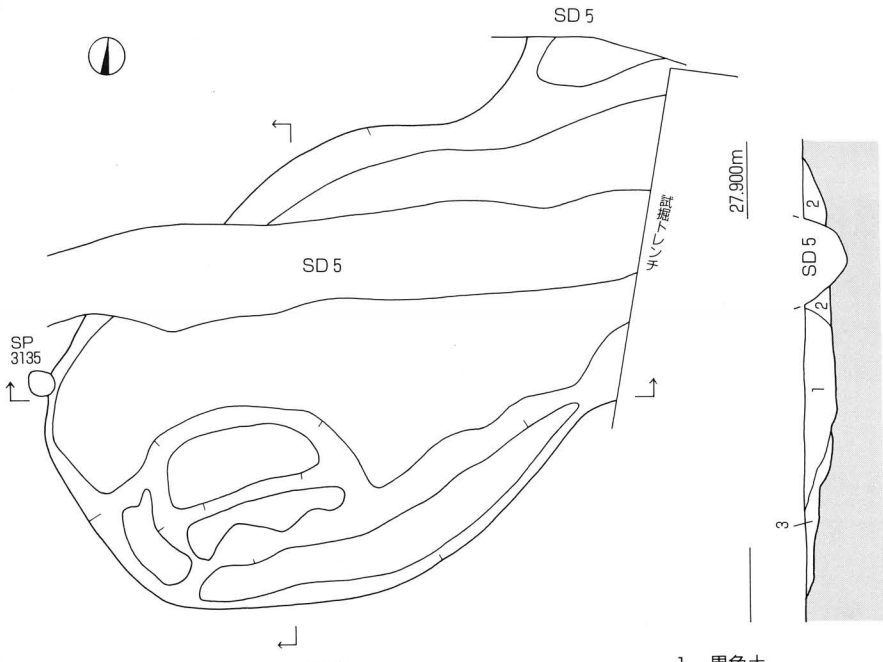
ＳＫ34（第67図）

調査区中央部のＧ14区に位置し、ＳＤ５に切られる。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸0.58m、短軸0.44m、深さ11cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層が灰褐色土、２層が灰褐色土（黄色粒状土混）である。遺物は須恵器が出土したが、小片のため図化するには至らなかった。

時期：埋土がＳＫ29と類似しているため中世以前と考えられる。



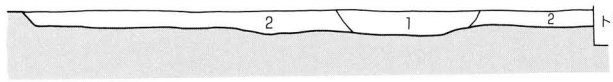
第66図　ＳＫ31･29測量図

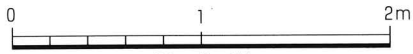


SK36

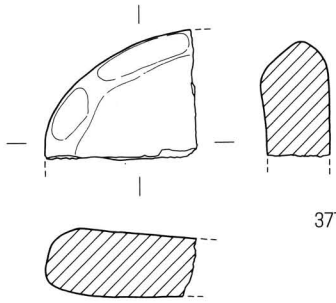
27.900m

1．黒色土
2．明灰褐色土（やや砂質）
3．明褐色土（やや粘質）

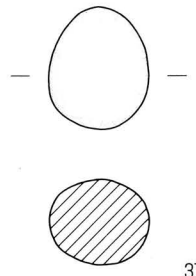




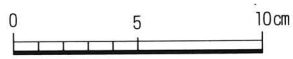
（S＝1：40）



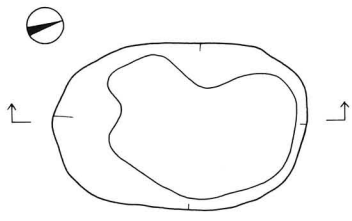
377



378



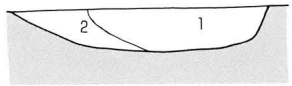
（S＝1：3）



SK34

27.800m

1．灰褐色土
2．灰褐色土
（黄色粒状土混）



（S＝1：20）

第67図　ＳＫ36・34測量図・出土遺物実測図

⑵溝（ＳＤ）

検出した２条の溝はいずれも中世以前と考えられる。

ＳＤ３（第68図）

調査区北東部のＤ４・５区に位置し、ＳＰ1243・1244・1247に切られる。規模は検出長6.48m、幅0.47m、深さ８cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰褐色土である。遺物の出土はない。

時期：埋土がＳＫ29と類似しているため中世以前と考えられる。

ＳＤ４（第68図）

調査区北東部のＣ４～Ｄ６区に位置し、東側は試掘トレンチに切られているが、その延長線上には続いていない。規模は検出長6.08m、幅0.65m、深さ８cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰褐色土である。遺物の出土はない。

時期：ＳＤ３と埋土・方向性・規模がほぼ同じであるため中世以前と考えられる。

〔４〕中　世

当該期の遺構は、掘立柱建物址２棟・土坑20基・溝12条・墓４基・井戸１基・柱穴がある。

⑴掘立柱建物址（掘立）

検出した２棟の掘立柱建物は方向性、柱穴埋土が同じであるため、同時期に立てられていたものと考えられる。

掘立２（第69図）

調査区中央部北よりのＤ８～Ｅ９区に位置し、ＳＸ３を切る。建物は南北棟で規模は２間×２間であり、桁行6.20m×梁行4.54mを測る。主軸はＮ－２°－Ｗである。柱穴の平面形態は円形または楕円形で、規模は径29～45cm、深さ27～63cmを測る。埋土は２層に分かれ、１層は灰褐色土（柱痕）、２層は明灰褐色土である。出土遺物は炭化物がある。

時期：後述するＳＤ５と埋土が同じであるため13世紀後半と考えられる。

掘立３（第70図）

調査区中央部のＦ11～Ｇ13区に位置し、ＳＸ４を切る。建物は東西棟で規模は３間×２間であり、桁行7.76m×梁行4.40mを測る。主軸はＮ－２°－Ｗである。柱穴の平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径20～33cm、深さ17～50cmを測る。埋土は２層に分かれ、１層は灰褐色土（柱痕）、２層は明灰褐色土である。遺物は出土していない。

時期：掘立２と建物の方向性と柱穴の埋土が同じであるため13世紀後半と考えられる。

⑵土坑（ＳＫ）

検出した20基の土坑は埋土と出土遺物からいずれも13世紀のものと考えられる。

ＳＫ２（第71図）

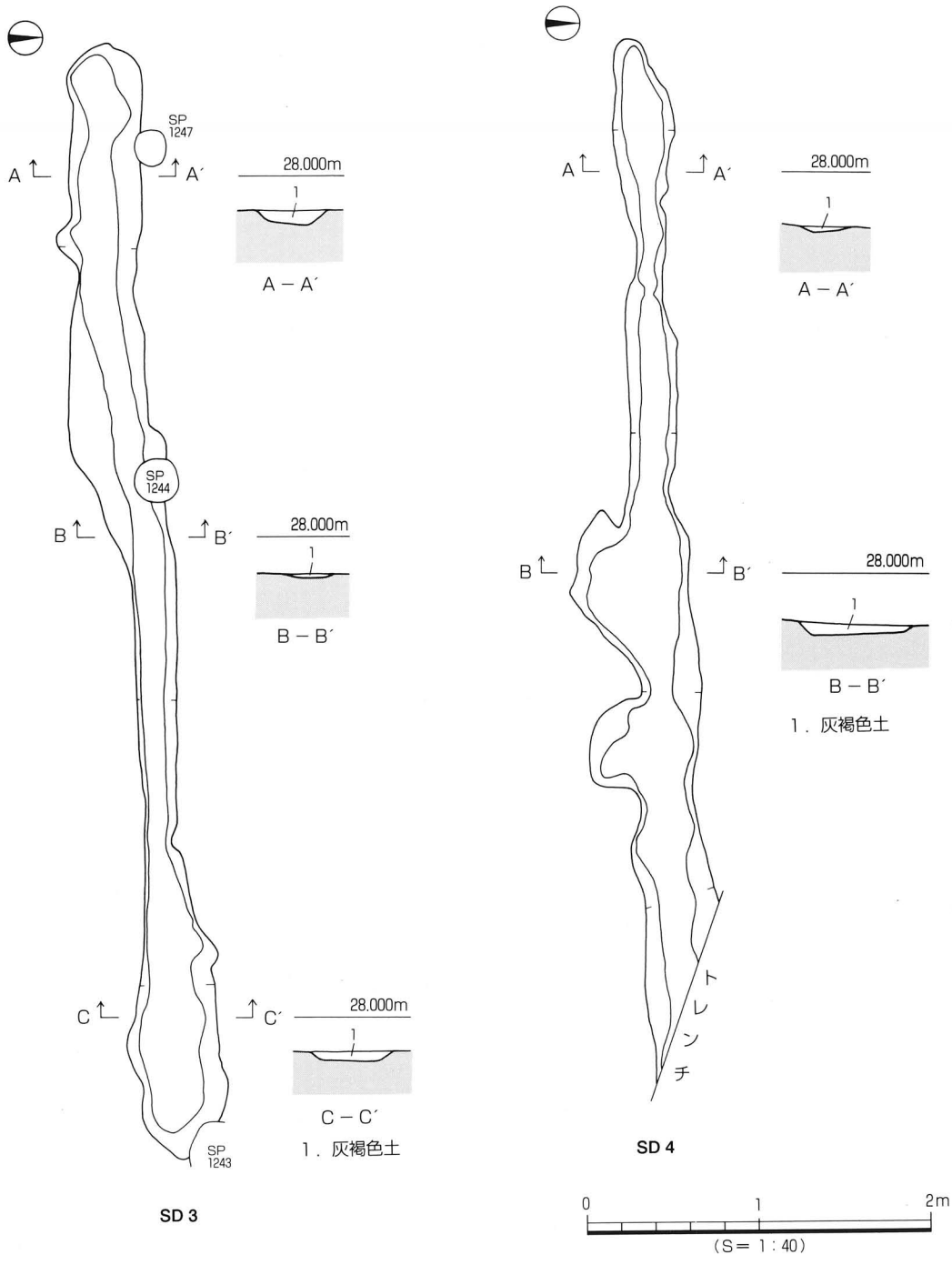
調査区北東部のＤ２～Ｅ２区に位置し、東側はトレンチに切られ、調査区外に続く。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸1.15m、短軸0.37m、深さ５cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は暗灰褐色土である。遺物は土師器が出土したが、小片のため図化するには至らなかった。

時期：埋土が掘立２・３と類似しているため中世と考えられる。

ＳＫ３（第71図）

調査区北東部のＥ６区に位置し、ＳＢ２を切る。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸0.84m、短軸0.47m、深さ３㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰褐色土である。遺物の出土はない。

時期：ＳＢ２を切り、埋土が掘立２・３と類似しているため中世と考えられる。



第68図　ＳＤ３・４測量図

ＳＫ４（第71図）

調査区北東部のＤ６区に位置し、ＳＢ２を切る。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸0.70m、短軸0.67m、深さ７㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は灰褐色土である。遺物の出土はない。

時期：ＳＢ２を切り、埋土が掘立２・３と類似しているため中世と考えられる。

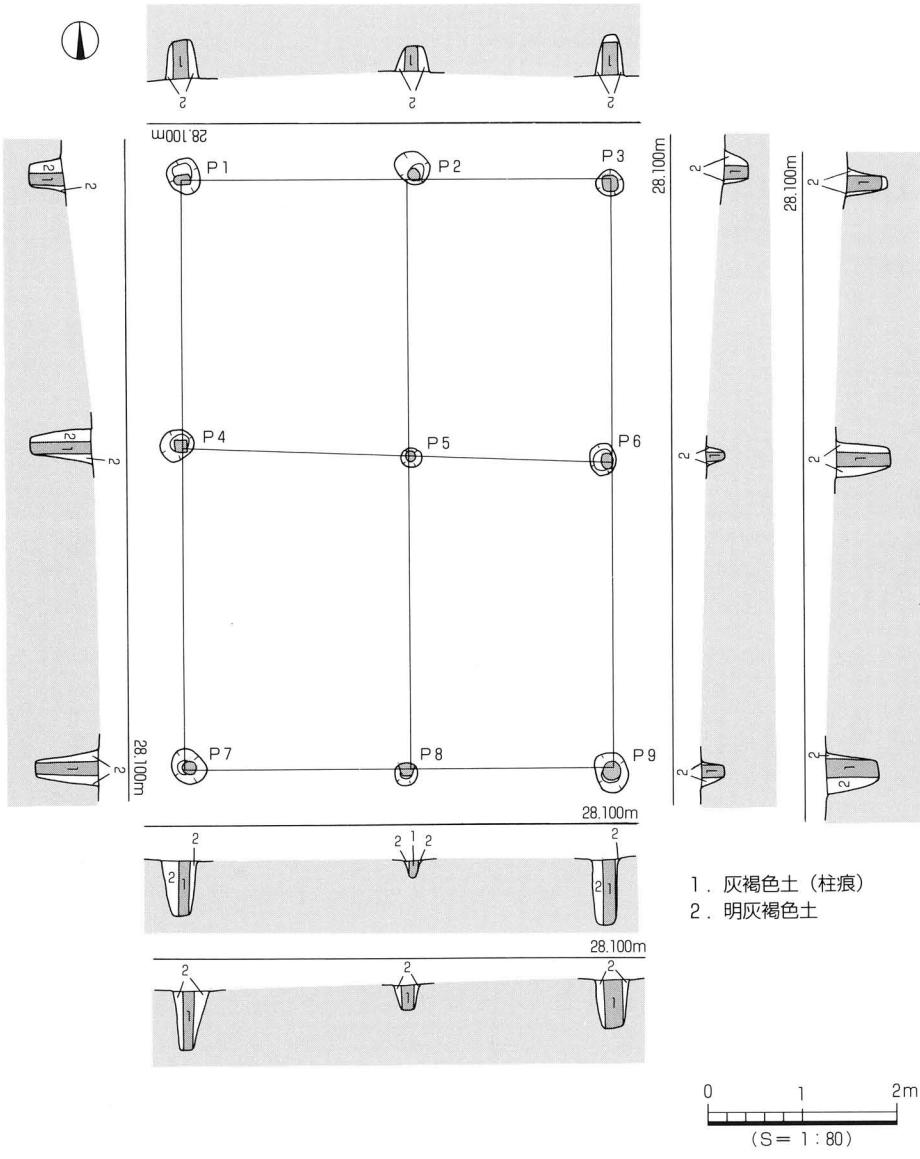
ＳＫ５（第71図）

調査区北東部のＥ６区に位置し、ＳＢ２を切る。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸0.50m、短軸0.28m、深さ３㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰褐色土である。遺物の出土はない。

時期：ＳＢ２を切り、埋土が掘立２・３と類似しているため中世と考えられる。

ＳＫ６（第71図）

調査区北東部のＤ５・６区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸0.75m、短軸0.48m、



第69図　掘立２測量図

深さ19cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は明灰褐色シルトである。遺物は石鍋が出土した。

出土遺物（第71図）

379は石鍋の転用品である。小口を面取りする。

時期：埋土が掘立２・３と類似しているため中世と考えられる。

ＳＫ７（第72図）

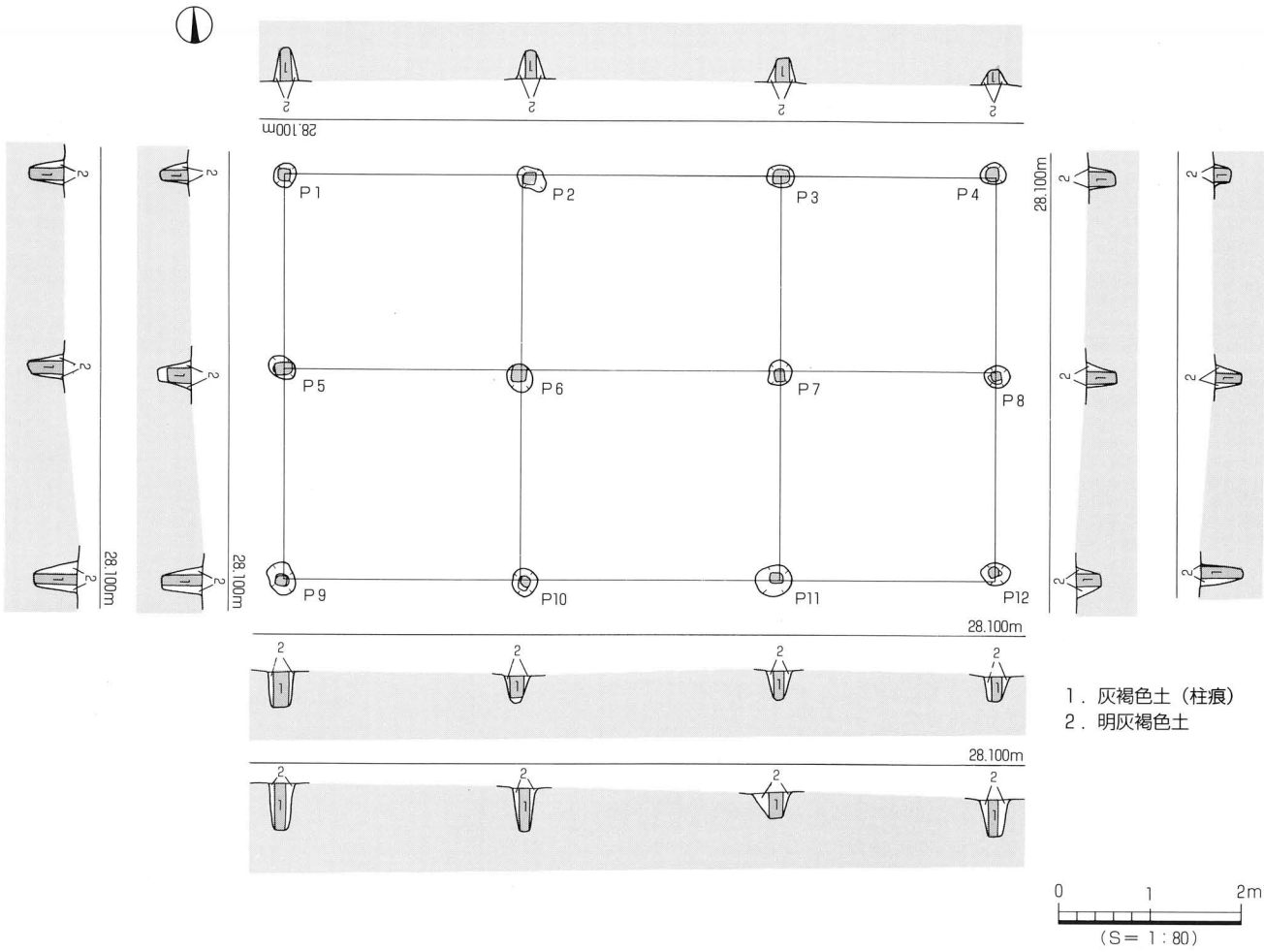
調査区北東部のＥ４区に位置する。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸1.47m、短軸0.74m、深さ14cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は暗灰褐色土である。遺物の出土はない。

時期：埋土が掘立２・３と類似しているため中世と考えられる。

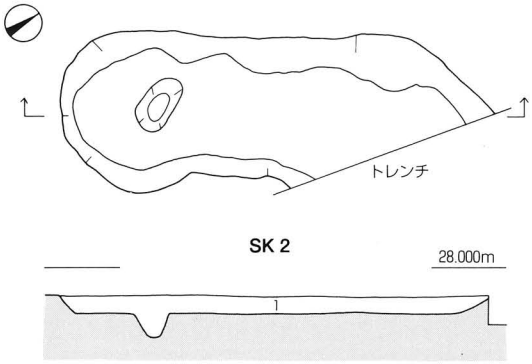
ＳＫ９（第72図）

調査区北東部のＤ４～Ｅ４区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸0.61m、短軸0.42m、深さ18cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層は灰褐色シルト、２層は黄褐色シルトである。遺物の出土はない。

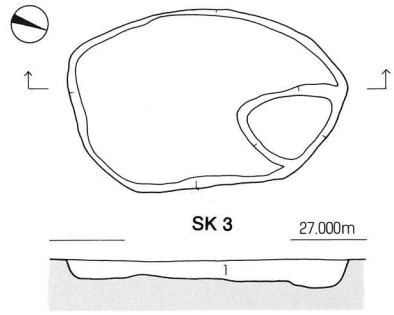
時期：埋土１層が掘立２・３と類似しているため中世と考えられる。



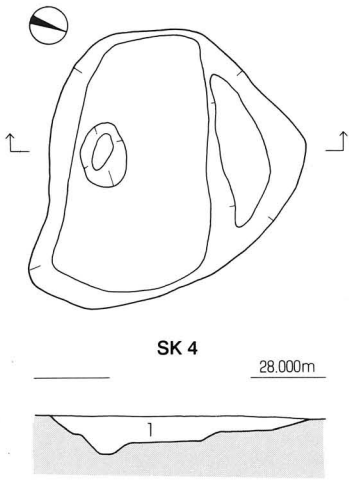
第70図　掘立３測量図



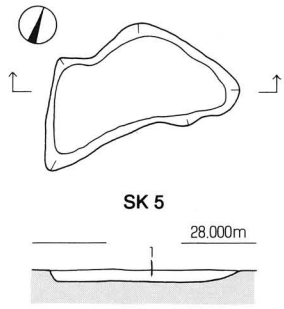
1．暗灰褐色土



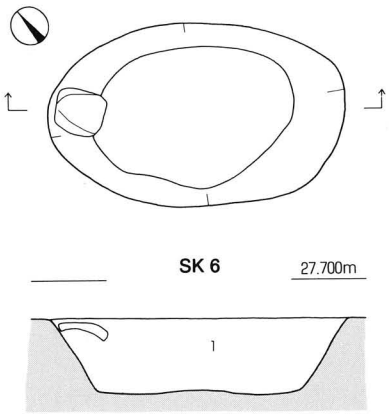
1．灰褐色土（細砂質）



1．灰褐色土（細砂質）

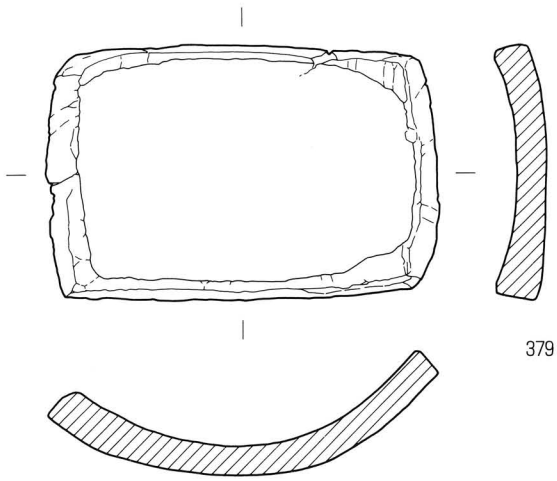


1．灰褐色土（細砂質）



1．明灰褐色シルト
（灰色濃やや粘性）

0　1m
（S＝1：20）



379

0　5　10cm
（S＝1：3）

第71図　ＳＫ２・３・４・５・６測量図・出土遺物実測図

ＳＫ12（第72図）

調査区中央部西のＦ16・17区に位置し、ＳＫ26を切る。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸1.50m、短軸0.74m、深さ14cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰褐色砂質土である。遺物の出土はない。

時期：埋土が掘立２・３と類似しているため中世と考えられる。

ＳＫ16（第72図）

調査区中央部東よりのＤ７区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸0.66m、短軸0.52m、深さ９cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は灰褐色シルトである。遺物は弥生土器・土師器・須恵器が出土したが、実測可能なものは土師器1点である。

出土遺物（第72図）

380は土師器の甕形土器の底部である。

時期：埋土が掘立２・３と類似しているため中世と考えられる。遺物は混入品と考えられる。

ＳＫ17（第73図）

調査区中央部北のＣ14区に位置し、ＳＫ18を切っている。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸1.03m、短軸1.01m、深さ15cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層が明灰色砂質土、２層が明灰色シルトである。遺物は土師質土器が出土したが、小片のため図化するには至らなかった。

時期：埋土が掘立２・３と類似しているため中世と考えられる。

ＳＫ20（第73図）

調査区中央部北のＤ10区に位置し、ＳＤ５に切られる。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸0.57m、短軸0.30m、深さ６cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は灰褐色土である。遺物の出土はない。

時期：埋土が掘立２・３と類似しているため中世と考えられる。

ＳＫ22（第73図）

調査区中央部北よりのＣ15～Ｄ15区に位置し、ＳＰ2238と2239に切られる。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸0.97m、短軸0.93m、深さ22cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層が黄色土を含む明灰褐色土、２層が黒褐色土を含む明灰褐色土である。遺物は土師器と土師質土器が出土したが、図化できたのは次の２点である。

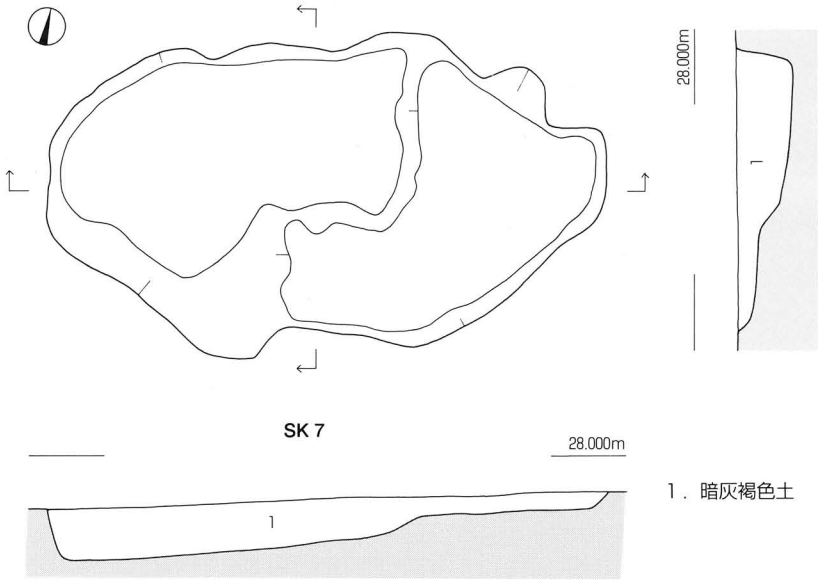
出土遺物（第73図）

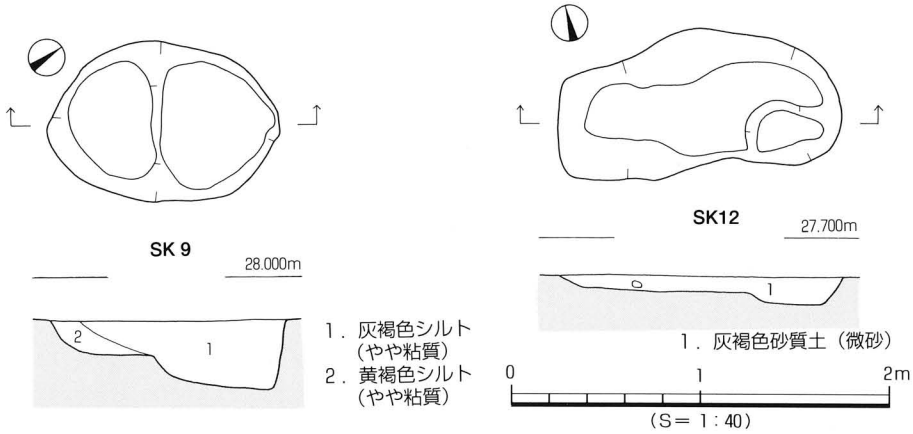
381・382は土師器である。381は甕形土器の口縁部である。382は高坏である。

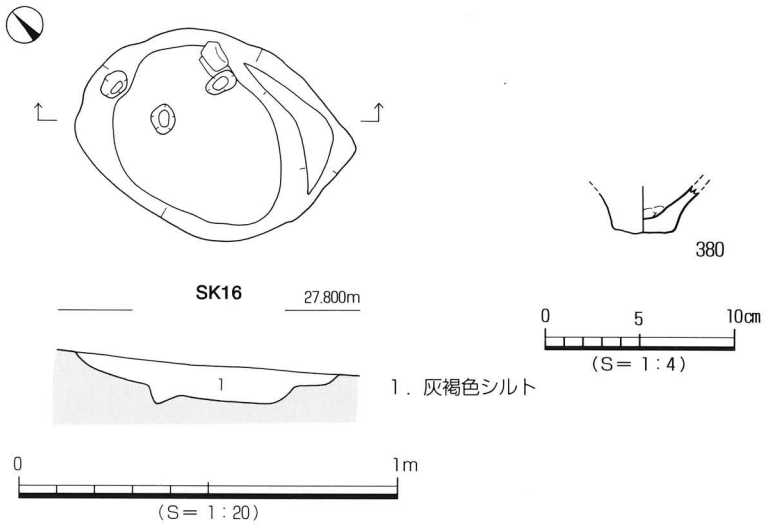
時期：埋土が掘立２・３と類似しているため中世と考えられる。遺物は混入品と考えられる。

ＳＫ25（第74図）

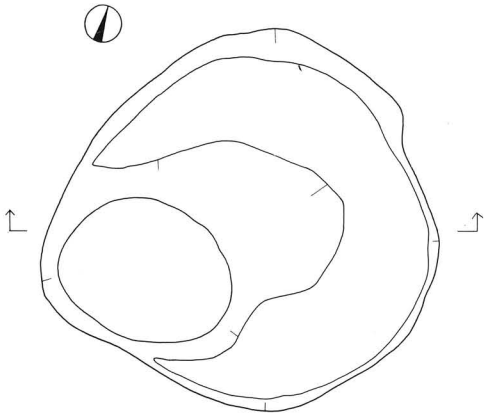
調査区中央部のＥ13区に位置し、ＳＰ2175と2176に切られる。平面形態は不整形を呈し、規模は長



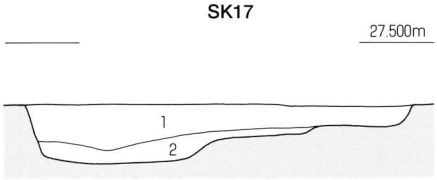




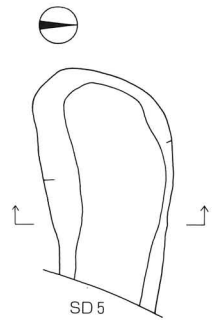
第72図　ＳＫ７・９・12・16測量図・出土遺物実測図



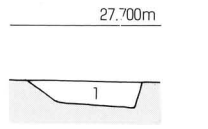
SK17



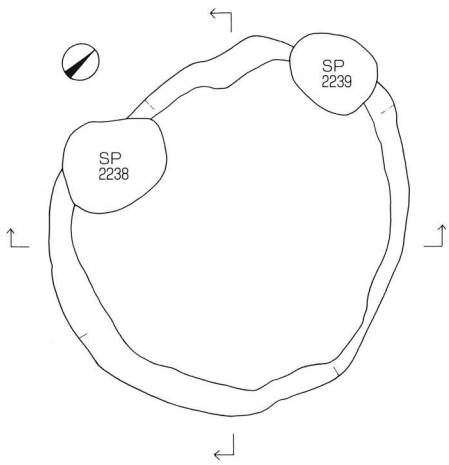
1．明灰色砂質土（微砂・黄色混）
2．明灰色シルト（1よりやや粘質）



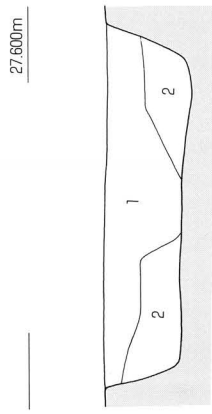
SK20

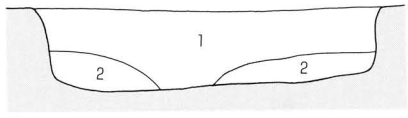


1．灰褐色土
（やや粘質・黄色混）

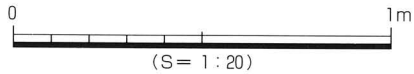


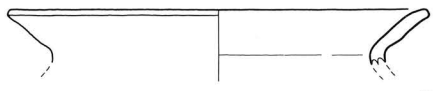
SK22



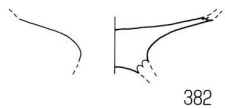


1．明灰褐色土＋黄色土
2．明灰褐色土＋黒褐色土

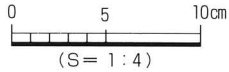




381



382



第73図　ＳＫ17・20・22測量図・出土遺物実測図

軸1.18m、短軸0.93m、深さ5cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰褐色土である。遺物の出土はない。

時期：埋土が掘立2・3と類似しているため中世と考えられる。

ＳＫ27（第74図）

調査区中央部東のＦ9区に位置し、ＳＫ10、ＳＡ1、ＳＰ2026に切られる。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸1.50m、短軸1.04m、深さ18cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は2層に分かれ、1層が明灰褐色シルト、2層が暗灰褐色シルトである。遺物は土師器が出土したが、小片のため図化するには至らなかった。

時期：埋土が掘立2・3と類似しているため中世と考えられる。

ＳＫ28（第74図）

調査区中央部北のＤ16区に位置する。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸0.76m、短軸0.70m、深さ38cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は4層に分かれ、1層が灰褐色砂質土、2層が黄褐色砂質土、3層が暗灰色シルト、4層が黄色土＋暗灰色シルト少量である。遺物は土師器・須恵器・土師質土器・瓦器が出土したが、図化できたのは次の3点である。

出土遺物（第74図）

383・384は土師質土器である。383は皿である。384は坏である。385は瓦器埦である。

時期：出土遺物から13世紀と考えられる。

ＳＫ33（第75図）

調査区中央部南のＪ13・14区に位置する。平面形態は円形を呈し、規模は東西2.78m、南北2.78m、深さ12cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は明灰褐色土である。遺物は土師器・須恵器・台石が出土したが、図化できたのは次の2点である。

出土遺物（第75図）

386・387は台石である。

時期：埋土が掘立2・3と類似しているため中世と考えられる。

ＳＫ37（第76図）

調査区中央部南のＩ18区に位置する。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸0.75m、短軸0.72m、深さ20cmを測る。断面形態は二段掘りになっており、逆台形状を呈する。埋土は明灰褐色土である。遺物は土師器が出土した。

出土遺物（第76図）

388は土師器の皿である。

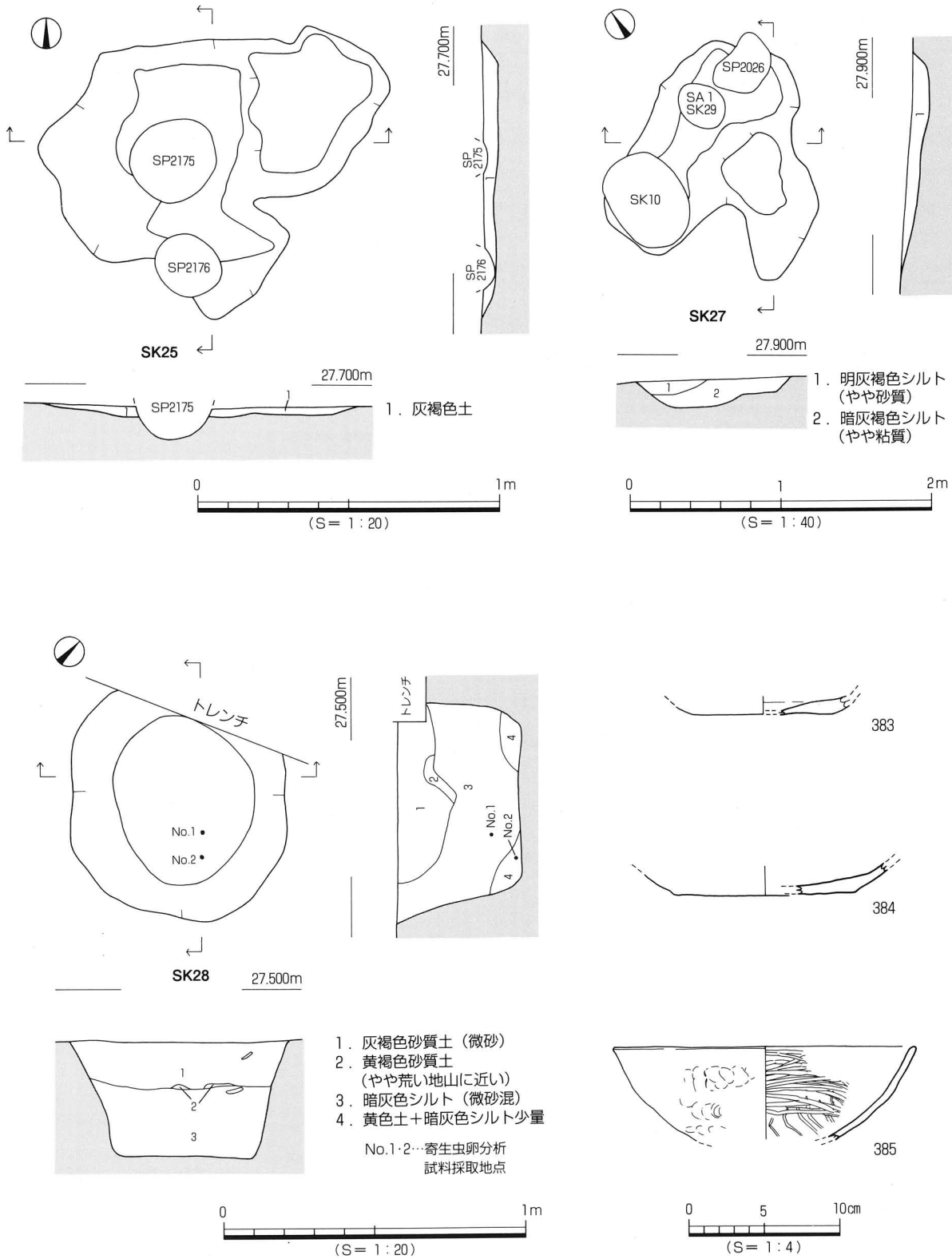
時期：埋土が掘立2・3と類似し、出土遺物から13世紀と考えられる。

ＳＫ38（第76図）

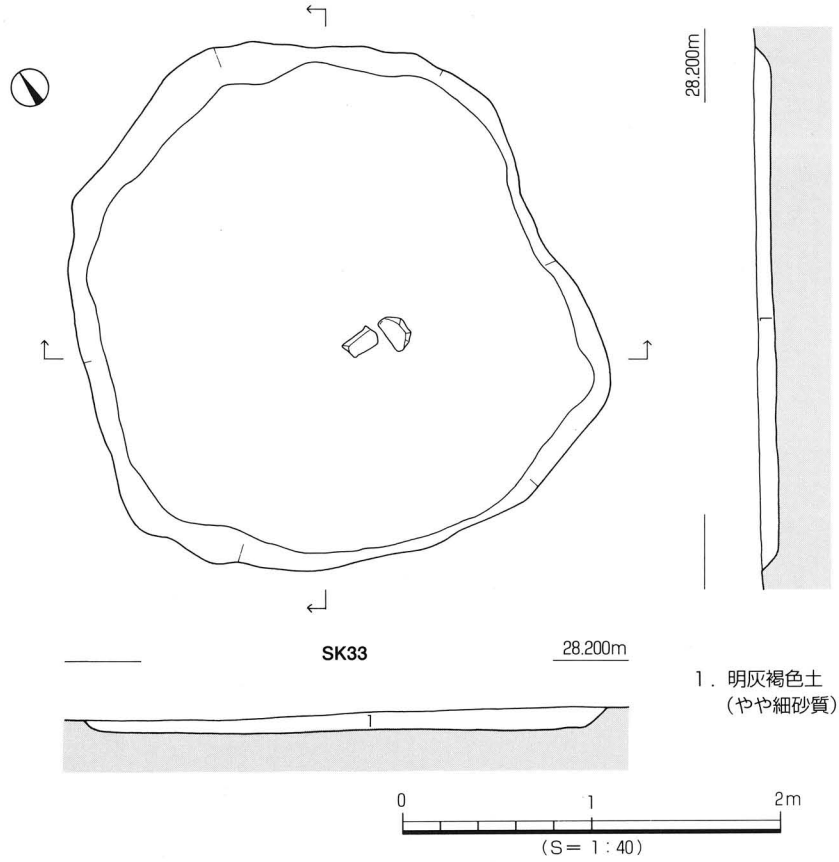
調査区中央部南のＪ15・16区に位置し、ＳＢ3を切る。平面形態は円形を呈し、規模は長軸0.87m、

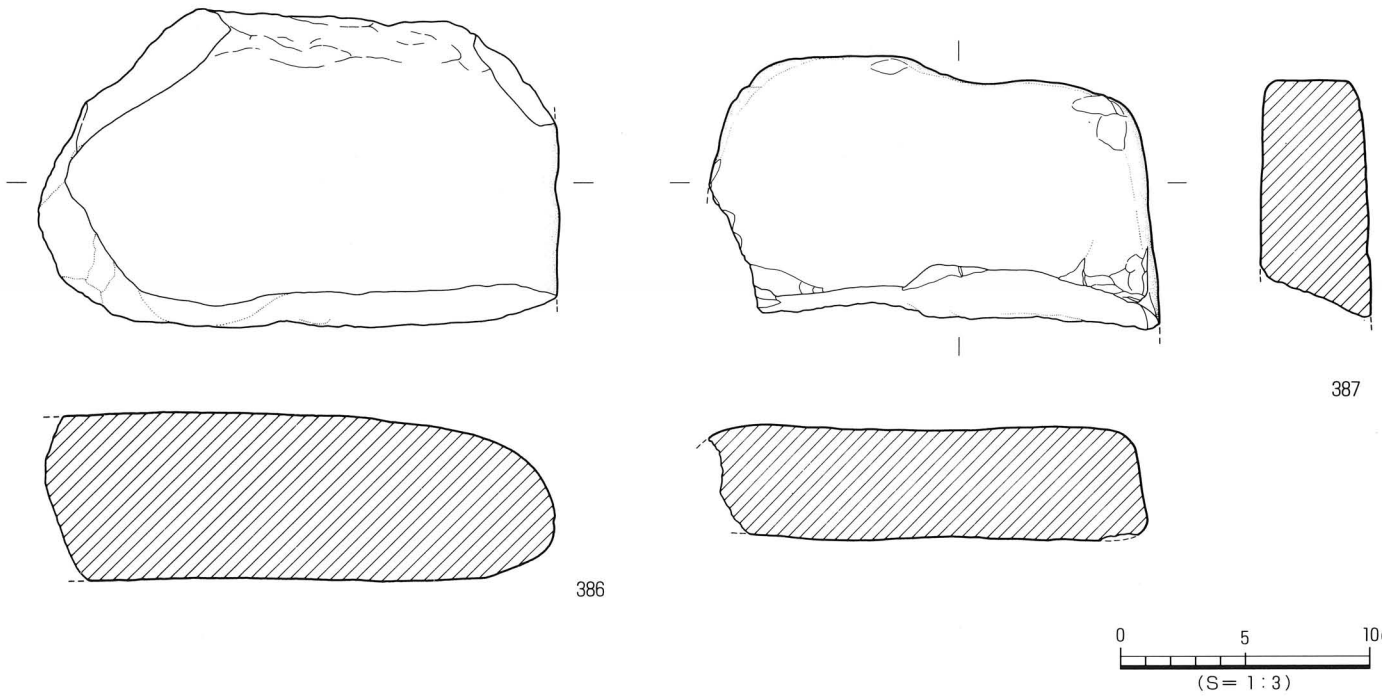
短軸0.77m、深さ16cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は灰褐色土である。遺物は土師器が出土したが、小片のため図化するには至らなかった。

時期：ＳＢ３を切り、埋土が掘立２・３と類似しているため中世と考えられる。

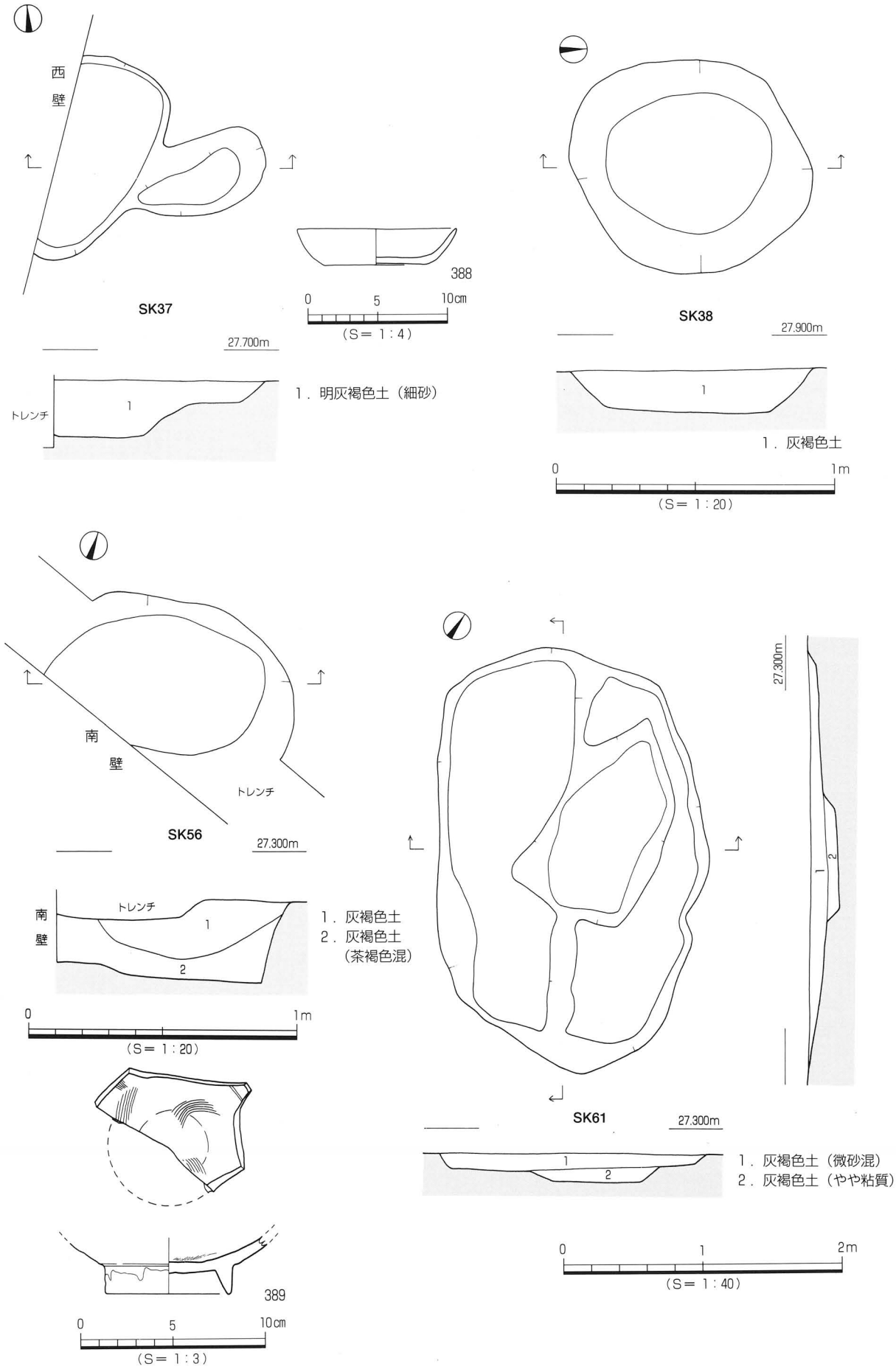


第74図　ＳＫ25・27・28測量図・出土遺物実測図





第75図　ＳＫ33測量図・出土遺物実測図



第76図　ＳＫ37・38・56・61測量図・出土遺物実測図

ＳＫ56（第76図）

調査区南西部のＱ25・Ｒ25区に位置し、ＳＤ18に切られる。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸0.88m、短軸0.65m、深さ29cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は灰褐色土である。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・陶器が出土したが、図化できたのは次の１点である。

出土遺物（第76図）

389は高台付碗である。

時期：埋土が掘立２・３と類似し、出土遺物から13世紀と考えられる。

ＳＫ61（第76図）

調査区西部のＩ19・Ｊ19区に位置し、ＳＤ５を切る。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸3.00m、短軸1.94m、深さ20cmを測る。断面形態は舟底状を呈する。埋土は灰褐色土である。遺物は土師器と須恵器が出土したが、小片のため図化するには至らなかった。

時期：ＳＤ５を切り、埋土が掘立２・３と類似しているため中世と考えられる。

⑶溝（ＳＤ）

検出した12条の溝はＳＤ５をはじめとして13世紀頃のものと考えられる。

ＳＤ５（第77図）

調査区中央部のＣ10～Ｉ21区に位置し、ＳＫ20・31・32・35・36・39・40、ＳＤ10、ＳＡ１、ＳＸ３～５を切り、ＳＫ61、ＳＤ22、ＳＥ１に切られる。溝は四方へ巡る大溝である。規模は東西方向で検出長46.70m、幅6.10m、深さ20cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は明灰褐色土である。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・土師質土器・陶器・石斧・石庖丁・砥石・ナイフ形石器・石核・鉄鏃・鉄塊が出土した。

出土遺物（第78～80図）

390・391は坏である。392は土鍋の口縁部である。393～397は鉢の口縁部である。398～405は土釜である。398・399は口縁部である。400～405は脚部である。406・407はこね鉢である。408・409は碗である。410～412は擂鉢である。413は碗の口縁部である。414～416は高台付碗の高台である。

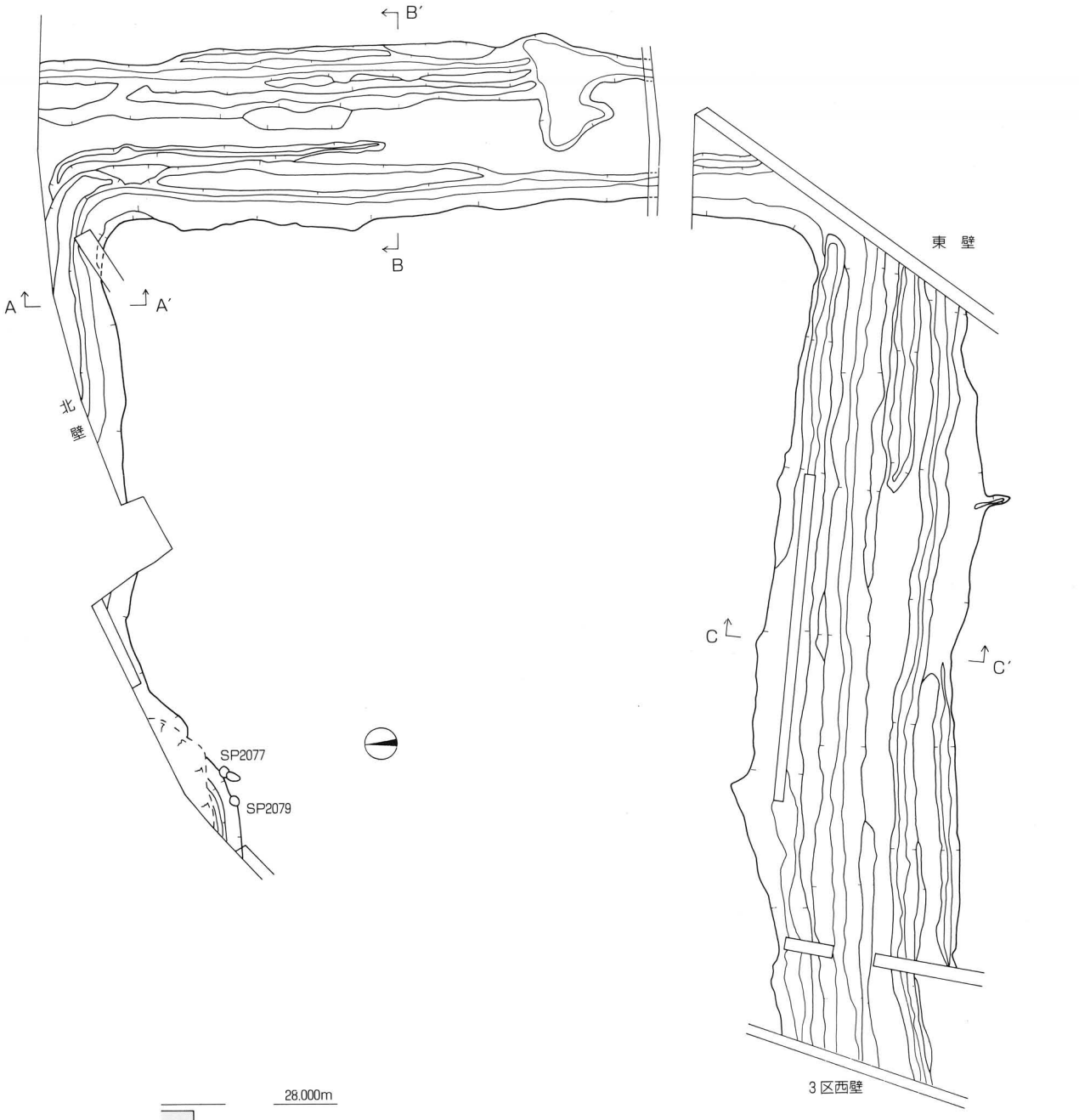
417は弥生土器の甕形土器の底部である。418・419は土師器の甑形土器の把手である。420～422は須恵器である。420・421は高坏脚部である。422は器台の脚端部である。423～429は石製品である。423は柱状片刃石斧である。424は石庖丁である。425は石器未製品である。石錘の可能性もある。426・427は砥石である。428はナイフ形石器である。429は石核である。430・431は鉄製品である。430は鉄鏃である。431は鉄塊である。

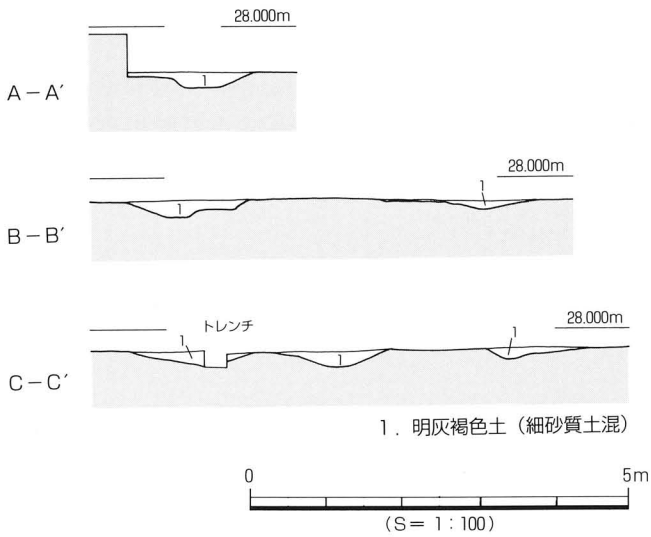
時期：出土遺物、遺構の切り合い関係、埋土などより、13世紀後半と考えられる。

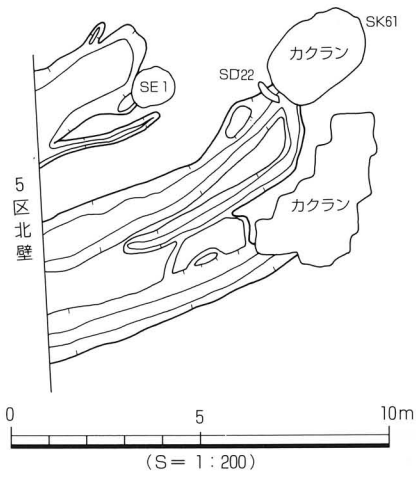
ＳＤ６（第81図）

調査区中央部のＥ16・Ｆ16区に位置し、ＳＰ2335に切られる。規模は検出長2.85m、幅0.57m、深さ７cmを測る。断面形態は舟底状を呈する。埋土は灰褐色土である。遺物は土師器が出土したが、小片のため図化するには至らなかった。

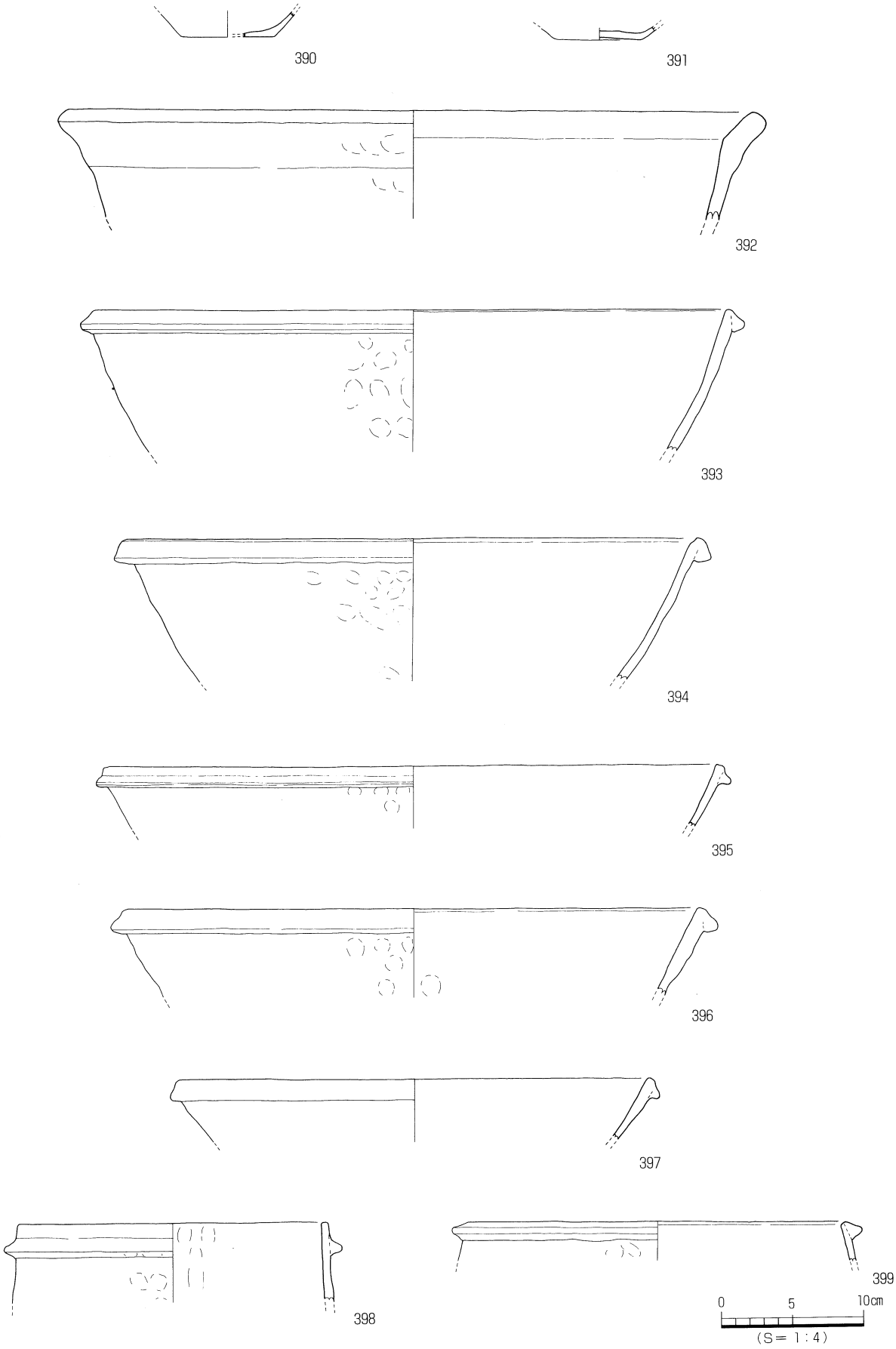
時期：埋土が掘立２・３と類似しているため中世と考えられる。


B′
B
A
A′
北壁
SP2077
SP2079
東壁
C
C′
3区西壁

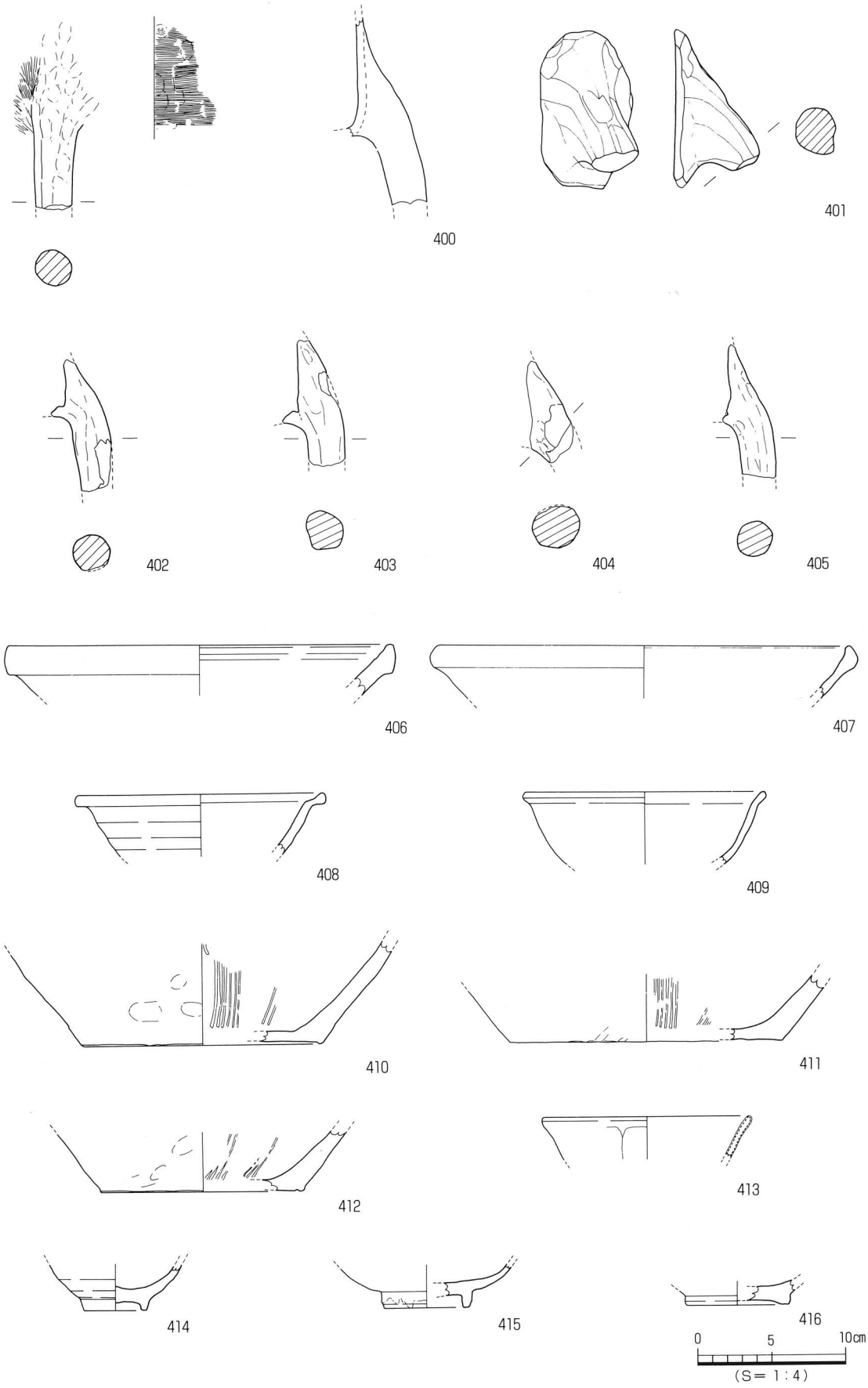

28.000m
A－A′
28.000m
B－B′
トレンチ
28.000m
C－C′
1．明灰褐色土（細砂質土混）
0
5m
（S＝1：100）


SK61
カクラン
SD22
SE1
5区北壁
カクラン
0
5
10m
（S＝1：200）

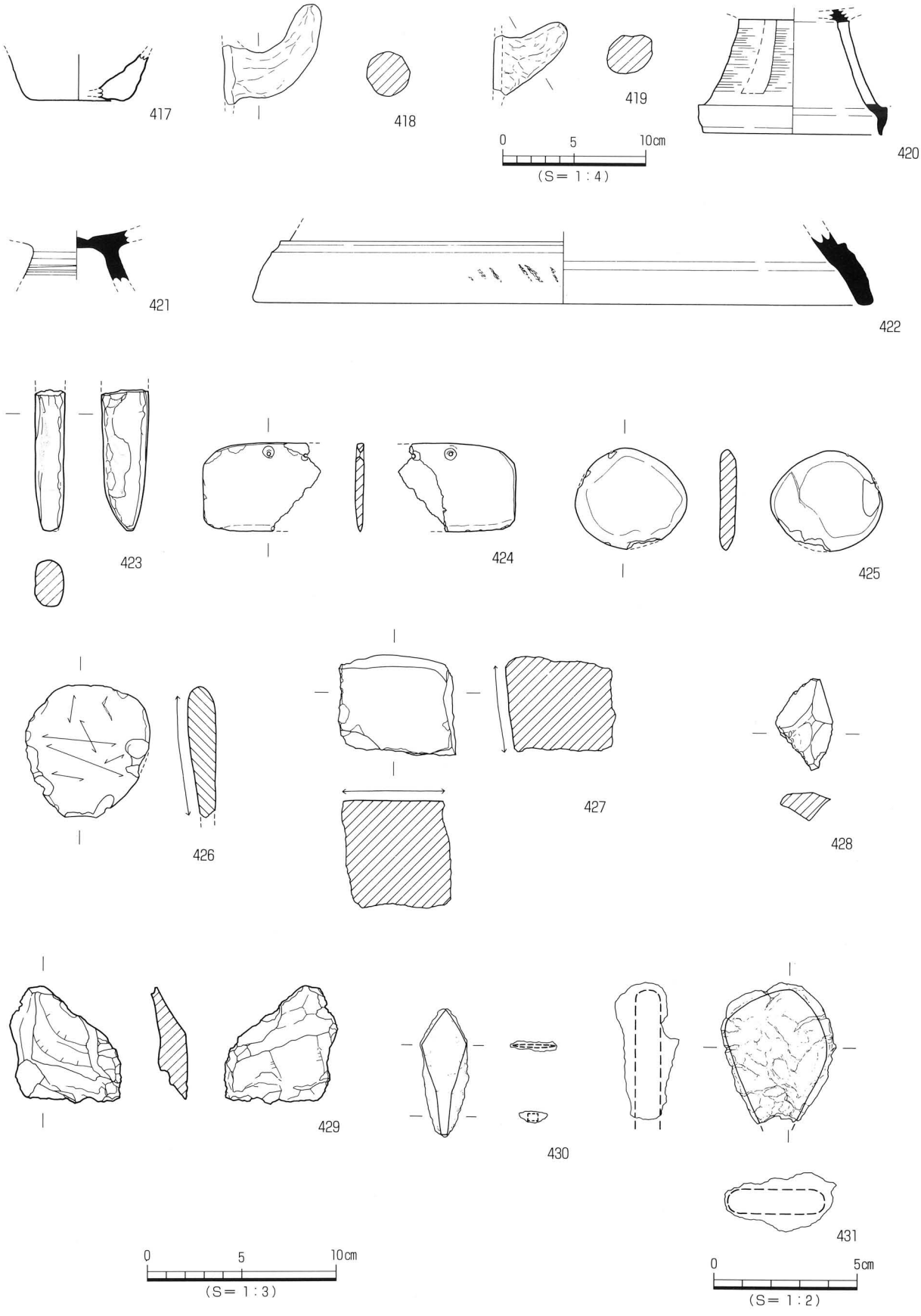
第77図　ＳＤ５測量図



第78図　ＳＤ５出土遺物実測図(1)



第79図　ＳＤ５出土遺物実測図(2)



第80図　ＳＤ５出土遺物実測図(3)

ＳＤ７（第81図）

調査区中央部のＣ13～Ｅ12区に位置する。規模は検出長6.55m、幅0.74m、深さ７cmを測る。断面形態は舟底状を呈する。埋土は明灰褐色土である。遺物は弥生土器が出土した。

出土遺物（第81図）

432は弥生土器の甕形土器の底部である。

時期：埋土が掘立２・３と類似しているため中世と考えられる。遺物は混入品と考えられる。

ＳＤ８（第81図）

調査区中央部のＣ13・Ｄ13区に位置し、ＳＰ2259に切られる。規模は検出長2.65m、幅0.58m、深さ８cmを測る。断面形態は舟底状を呈する。埋土は明灰褐色土である。遺物は土師器と須恵器が出土したが、小片のため図化するには至らなかった。

時期：埋土が掘立２・３と類似しているため中世と考えられる。

ＳＤ９（第82図）

調査区中央部のＣ12～Ｅ12区に位置し、ＳＰ2334～2337に切られる。規模は検出長5.01m、幅0.62m、深さ５cmを測る。断面形態は舟底状を呈する。埋土は明灰褐色土である。遺物は出土していない。

時期：埋土が掘立２・３と類似しているため中世と考えられる。

ＳＤ13（第４図）

調査区南西部のＬ20・M20区に位置する。規模は検出長5.36m、幅0.65m、深さ36cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は灰褐色土である。遺物は出土していない。

時期：埋土が掘立２・３と類似しているため中世と考えられる。

ＳＤ15（第82図）

調査区南西部のＯ20・Ｐ20区に位置し、ＳＤ17に切られる。規模は検出長3.83m、幅1.50m、深さ10cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は灰褐色微砂質土である。遺物は須恵器と擂鉢が出土した。

出土遺物（第82図）

433は擂鉢の口縁部である。

時期：埋土が掘立２・３と類似しているため中世と考えられる。

ＳＤ18（第４図）

調査区南西部のＱ20～Ｒ25区に位置し、ＳＢ８、ＳＫ45・51・52を切る。規模は検出長24.00m、幅1.90m、深さ25cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は灰褐色土である。遺物は土師器・須恵器・陶器・瓦器が出土した。

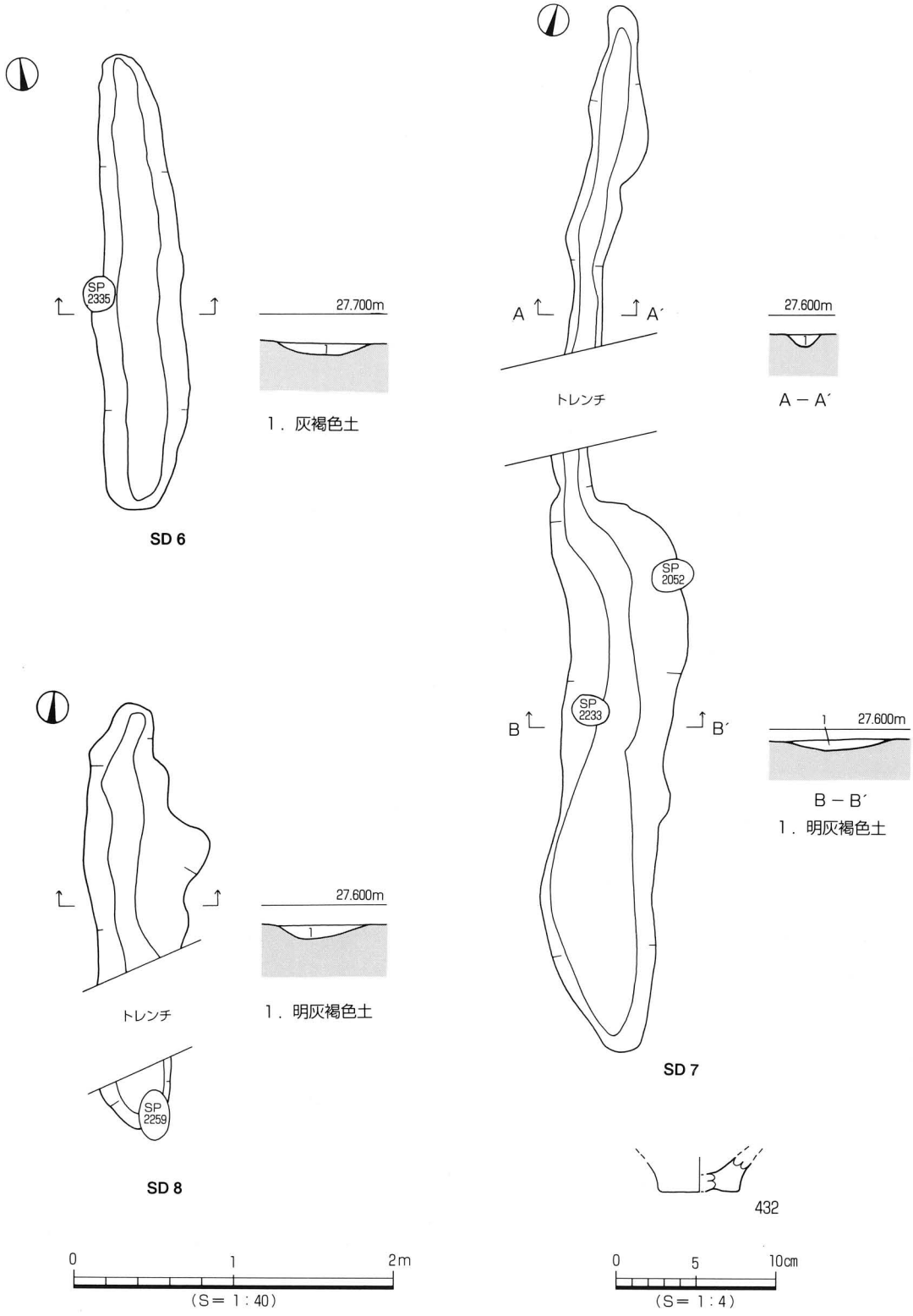
出土遺物（第83図）

434は甕である。435は土釜である。436～438は土師器の甕形土器の口縁部である。

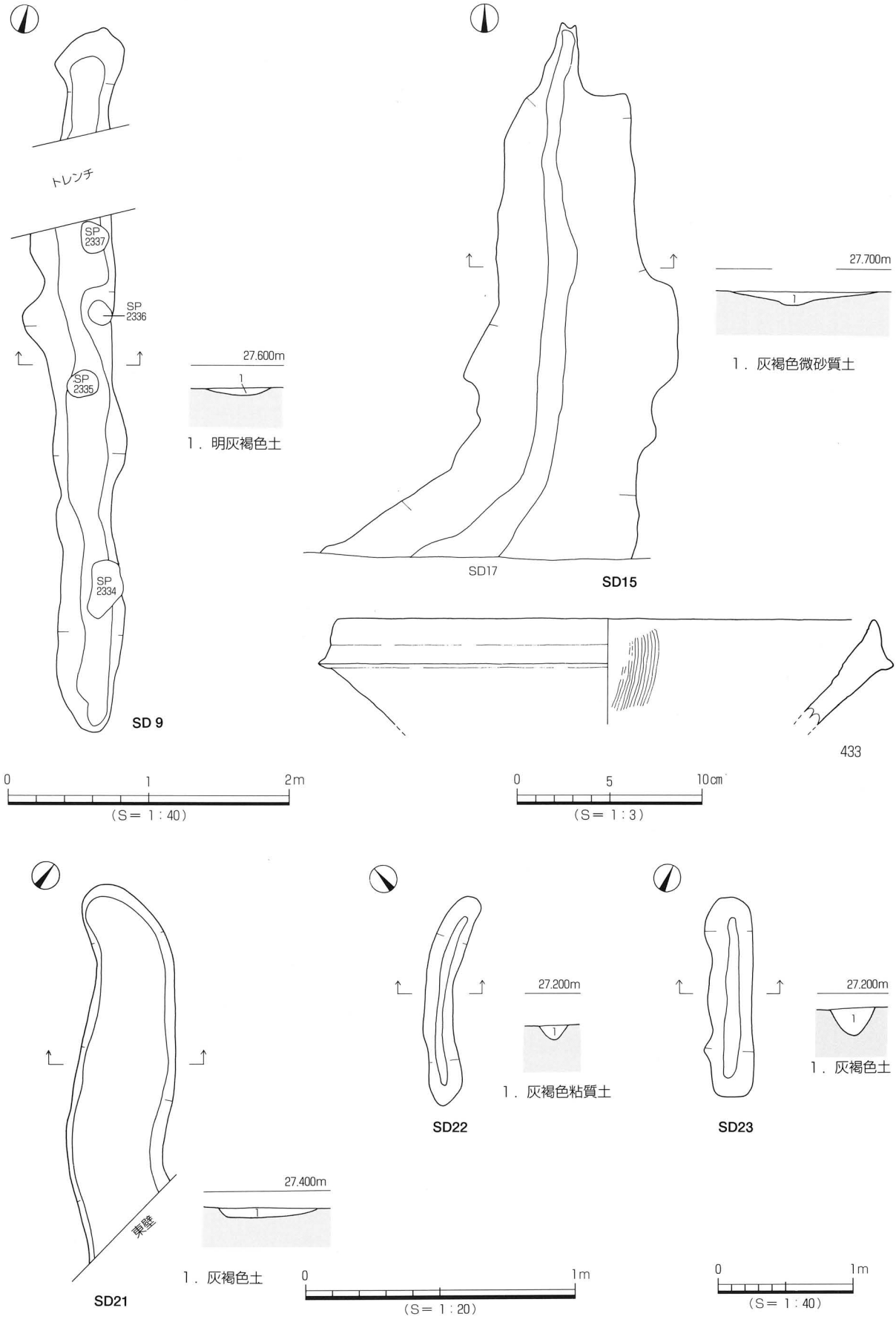
時期：埋土が掘立２・３と類似しているため中世と考えられる。

ＳＤ19（第４図）

調査区南西部のＱ20～Ｑ24区に位置し、ＳＢ８、ＳＫ46・51、ＳＤ16を切る。規模は検出長18.50ｍ、幅1.00ｍ、深さ18㎝を測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は灰褐色土である。遺物は出土



第81図　ＳＤ６・７・８測量図・出土遺物実測図



第82図　ＳＤ９・15・21・22・23測量図・出土遺物実測図

していない。

時期：埋土が掘立２・３と類似しているため中世と考えられる。

ＳＤ21（第82図）

調査区南西部のＲ20区に位置する。規模は検出長1.33m、幅0.35m、深さ４㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰褐色土である。遺物は出土していない。

時期：埋土が掘立２・３と類似しているため中世と考えられる。

ＳＤ22（第82図）

調査区西部のＩ19区に位置し、ＳＤ５を切る。規模は検出長0.77m、幅0.10m、深さ５㎝を測る。断面形態は舟底状を呈する。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は出土していない。

時期：埋土が掘立２・３と類似しているため中世と考えられる。

ＳＤ23（第82図）

調査区西部のＩ19区に位置する。規模は検出長1.43m、幅0.31m、深さ20㎝を測る。断面形態は舟底状を呈する。埋土は灰褐色土である。遺物は出土していない。

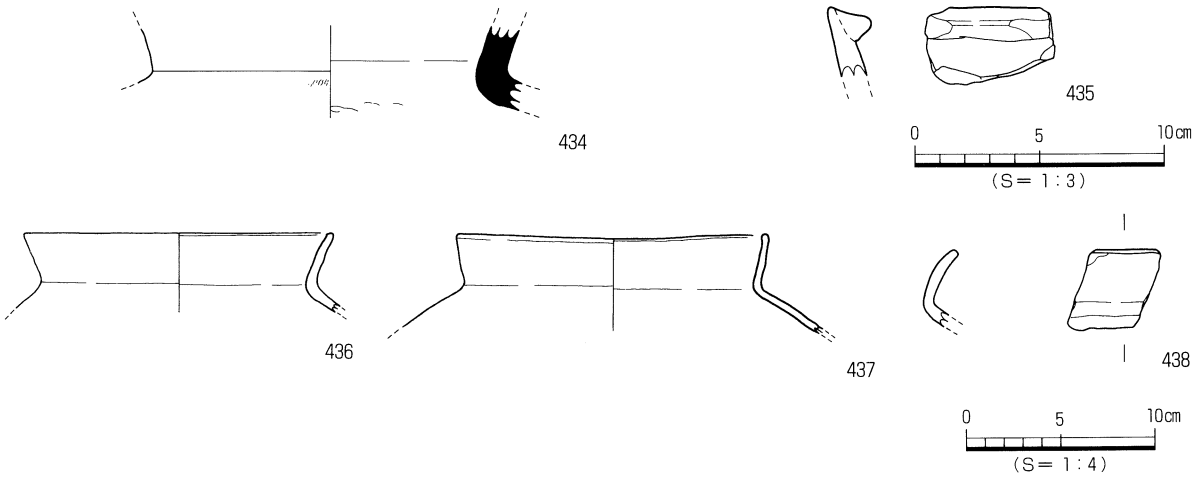
時期：埋土が掘立２・３と類似しているため中世と考えられる。

(4)墓

検出した墓４基のうち墓１・２は円形又は楕円形、墓３・４は長方形を呈している。後者には木棺痕跡などは確認できなかった。

墓１（第84図）

調査区北東部のＥ７区に位置し、ＳＡ１を切る。平面形態はほぼ円形を呈し、底面は平坦である。規模は長径0.80m、短径0.71m、深さ16㎝を測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層が灰褐色土、２層が灰褐色土に黄色土が混じる。遺物は土師器・須恵器・磁器・人頭大の礫



第83図　ＳＤ18出土遺物実測図

石数点が出土した。

出土遺物（第84図）

439・440は坏である。441は皿である。442は碗である。

時期：出土遺物の時期から12世紀末ごろと推定される。

墓2（第84図）

調査区北東部のＥ６・Ｆ６区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径0.98m、短径0.60m、深さ20cmを測る。断面形態は北部が二段掘りになったレンズ状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層が灰褐色土、２層が灰褐色土に黄色土が混じる。遺物は土師器と須恵器が出土した。

出土遺物（第84図）

443は皿である。444は坏である。

時期：出土遺物の時期から12世紀末ごろと推定される。

墓3（第84図）

調査区中央部のＦ15・16区に位置し、ＳＰ2132と2133に切られる。平面形態は長方形を呈し、規模は長径1.92m、短径0.95m、深さ25cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は３層に分かれ、１層が灰褐色土（小礫石多含）、２層が灰褐色土、３層が灰褐色粘質土（黄色土混）である。遺物は土師器と須恵器が出土したが、小片のため図化するには至らなかった。

時期：埋土が墓１・２と類似しているため中世と考えられる。

墓4（第84図）

調査区西部のＨ19区に位置する。平面形態は長方形を呈し、規模は長径1.06m、短径0.72m、深さ７cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は灰褐色土である。遺物は土師器が出土したが、小片のため図化するには至らなかった。

時期：埋土が墓１～３と類似しているため中世と考えられる。

⑸井戸（ＳＥ）

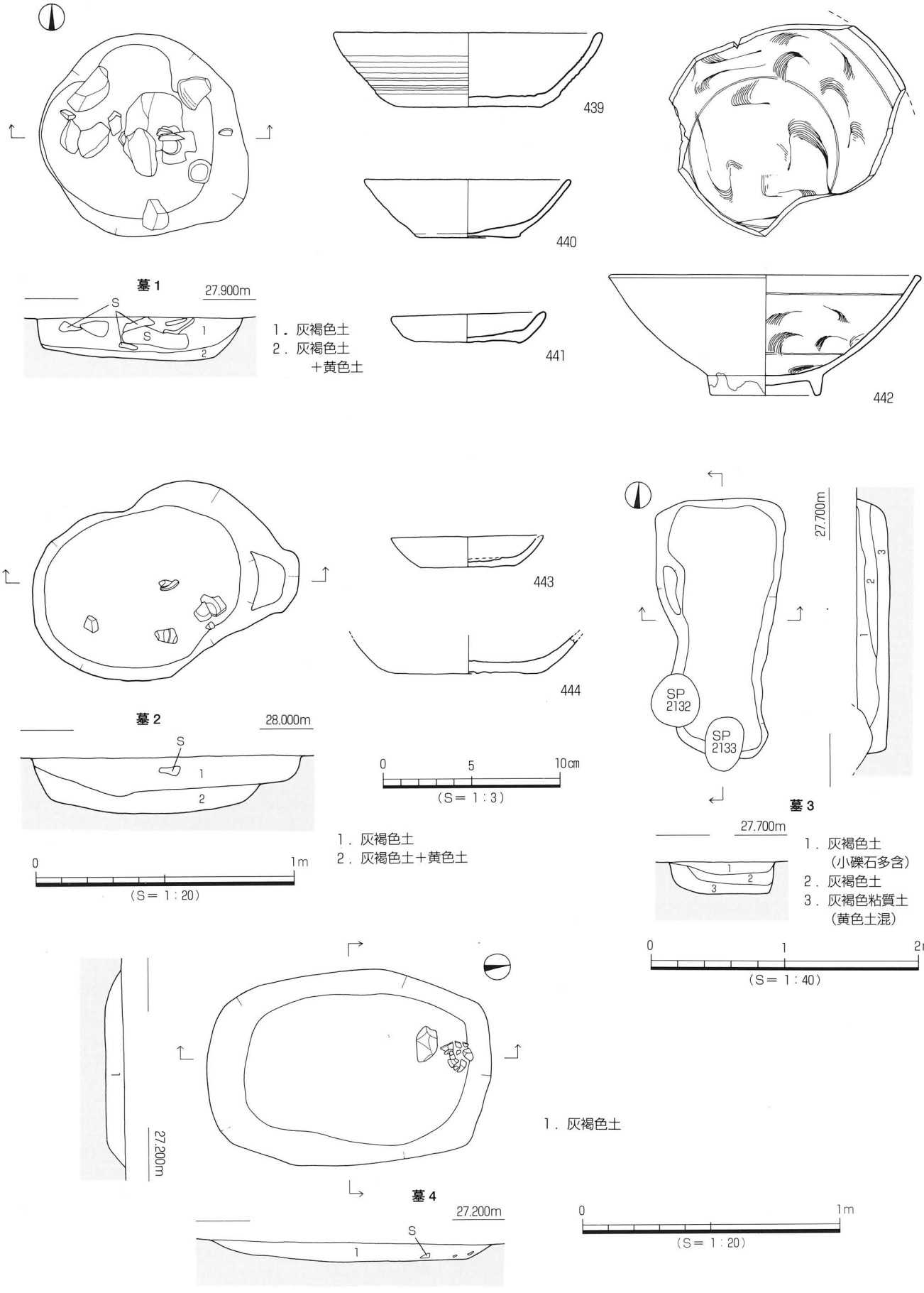
ＳＥ１（第85図、図版９）

調査区西部のＨ19区に位置し、ＳＤ５を切る。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.16m、短径1.03m、深さ46cmを測る。断面形態は二段を呈し、上段部は逆台形状、下段はほぼ垂直に掘り込まれている。井戸底は平坦である。埋土は３層に分かれ、１層が灰褐色土、２層が灰褐色土＋黄色土、３層が暗灰褐色土（粘性強）である。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・陶器・剥片刃器・石庖丁未製品・砥石・台石が出土した。

出土遺物（第86図）

445～450は石製品である。445は粗製剥片刃器である。446は石庖丁未製品である。447・448は砥石である。449・450は台石である。

時期：埋土が墓１～４と類似しているため中世と考えられる。



第84図　墓1・2・3・4測量図・出土遺物実測図

〔５〕現　代

当該期の遺構は、溝１条がある。

⑴溝（ＳＤ）

ＳＤ17（第４図）

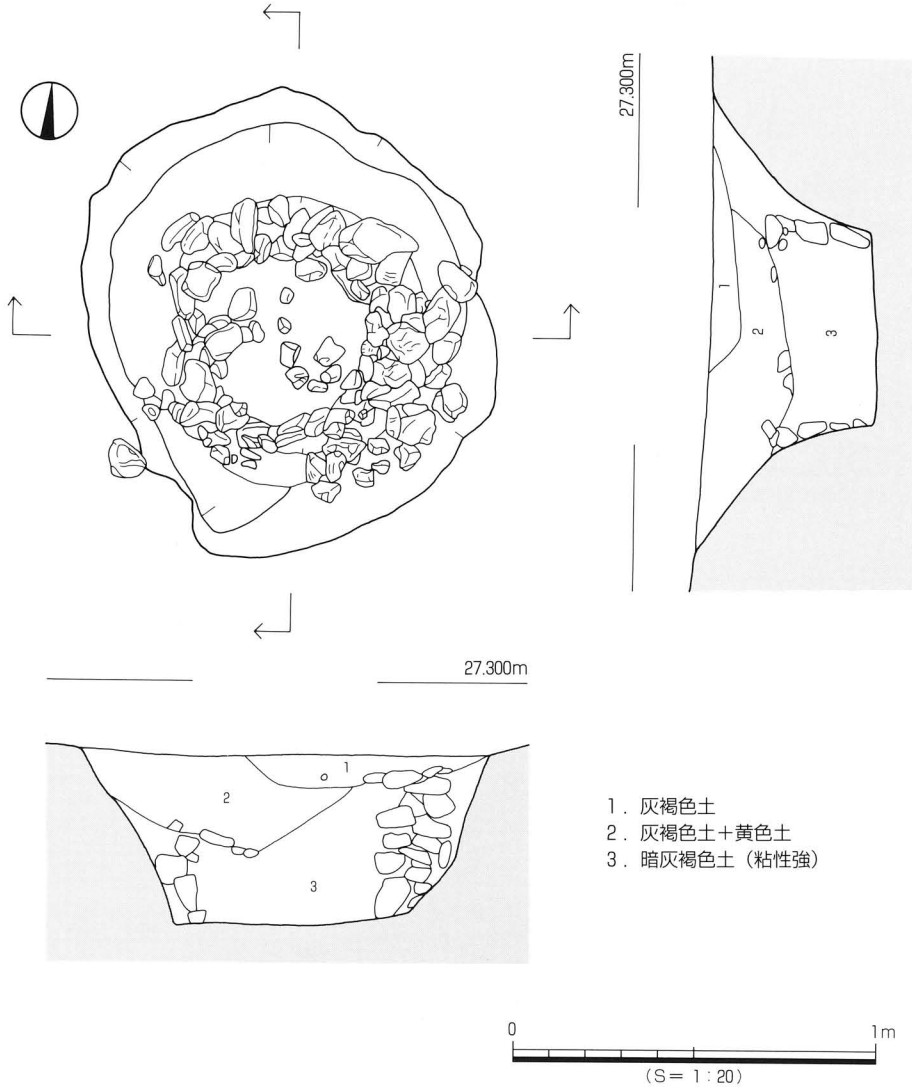
調査区南西部のＰ19～Ｏ24区に位置し、ＳＢ７、ＳＫ44・59・64、ＳＤ15を切る。規模は検出長23.60m、幅0.40m、深さ10cmを測る。断面形態はＵ字状を呈する。埋土は灰色土である。遺物は出土していない。

時期：埋土が第Ⅲ層直下から掘り込まれているため、現代と考えられる。

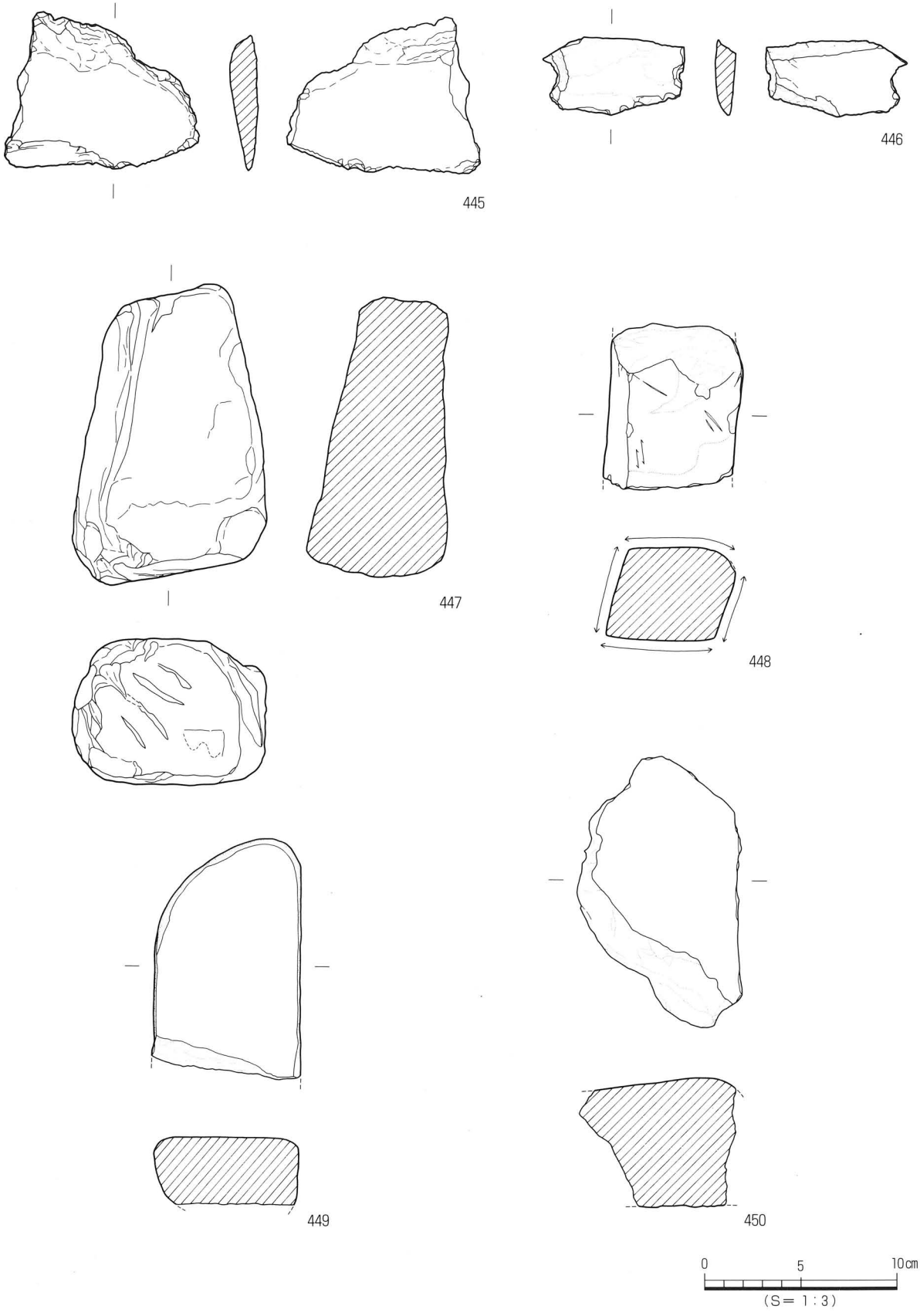
〔６〕時期不明

時期不明の遺構は土坑３基・柵列１条・性格不明遺構３基がある。

⑴土坑（ＳＫ）



第85図　ＳＥ１測量図



第86図　ＳＥ１出土遺物実測図

ＳＫ８（第87図）

調査区北東部のＥ４区に位置する。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸0.56m、短軸0.52m、深さ19cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は灰白色土である。遺物は土師器が出土した。

出土遺物（第87図）

451は壺形土器の口縁部である。452は鉢形土器の口縁部である。

時期：遺物は遺構上面で出土したため遺構の時期は不明である。

ＳＫ10（第87図）

調査区中央部のＦ９区に位置し、ＳＫ27を切る。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸0.64m、短軸0.50m、深さ８cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰白色土である。遺物は土師器が出土した。

出土遺物（第87図）

453は高坏形土器の柱部である。

時期：遺物は遺構上面で出土したため遺構の時期は不明である。

ＳＫ26（第87図）

調査区中央部西よりのＦ17～Ｇ17区に位置し、ＳＫ12に切られる。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸0.89m、短軸0.40m、深さ２cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰白色土である。遺物は土師器が出土したが、小片のため図化するには至らなかった。

時期：ＳＫ12に切られているため中世以前と考えられるが、正確な時期は不明である。

(2)柵列（ＳＡ）

ＳＡ２（第４図）

調査区南西部のＯ22～Ｓ20区に位置する。規模は北西から南東方向に総延長約18.9mを検出した。柱間は11～21cmである。平面形態は円形または楕円形で、規模は径５～７cm、検出面からの深さ７～20cmを測る。底面は尖り気味である。埋土は暗褐色土である。遺物の出土はない。

時期：他の遺構との切り合い関係が不明であるため、時期決定が困難である。

(3)性格不明遺構（ＳＸ）

ＳＸ１（第４図）

調査区北東部のＥ４・Ｆ４区に位置する。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸5.70m、短軸0.70m、深さ３cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰白色土である。遺物の出土はない。

時期：他の遺構の切り合い関係がないため、遺構の時期は不明である。

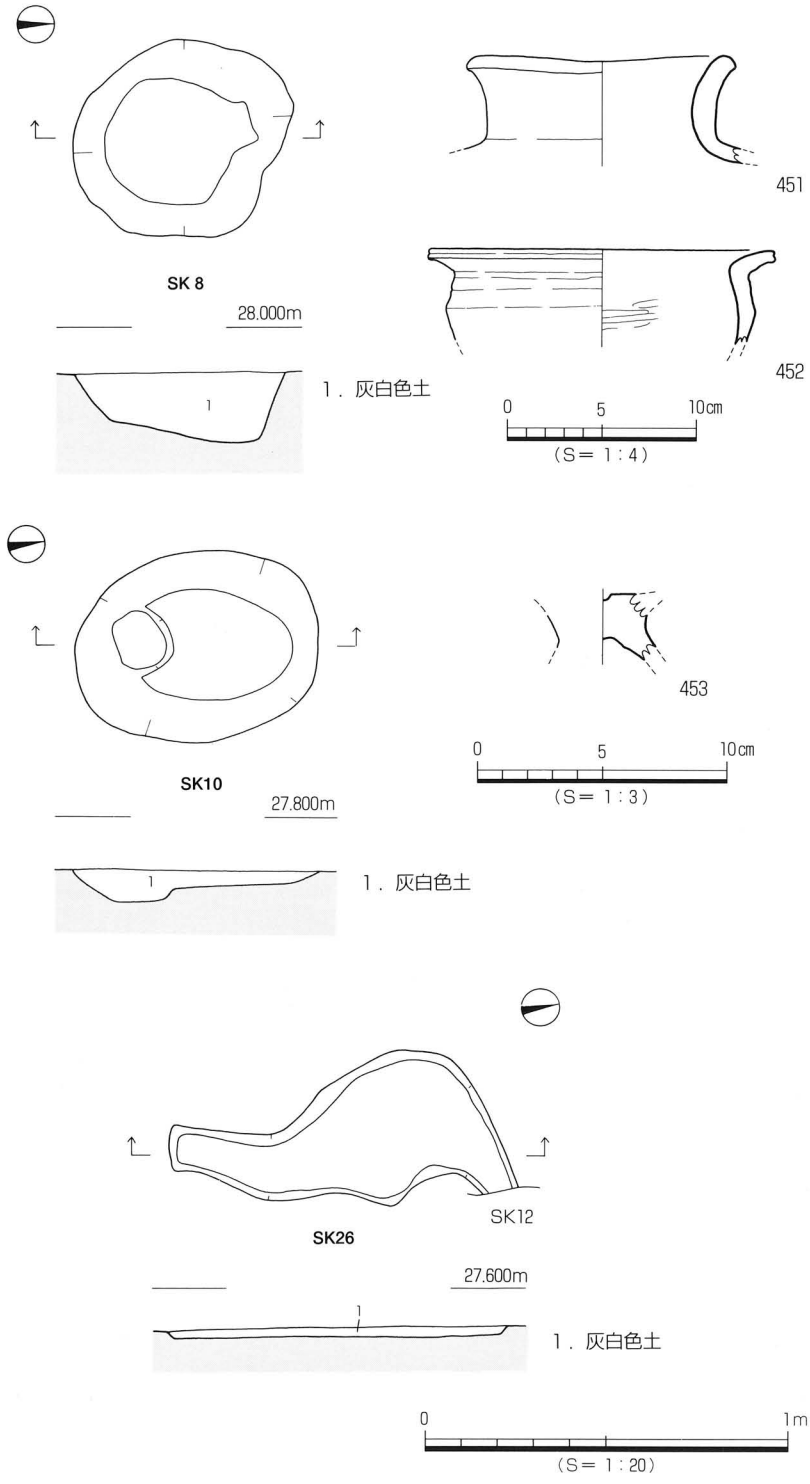
ＳＸ２（第４図）

調査区北東部のＣ３～Ｅ３区に位置する。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸3.10m、短軸2.40m、深さ６cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰白色土である。遺物の出土はない。

時期：他の遺構の切り合い関係がないため、遺構の時期は不明である。

ＳＸ６（第４図）

調査区中央部のＤ11～Ｅ12区に位置し、ＳＫ19とＳＤ９に切られる。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸4.90m、短軸4.70m、深さ15cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰白色土である。



第87図　ＳＫ８・10・26測量図・出土遺物実測図

遺物の出土はない。

時期：埋土がＳＸ１・２と同じであるため、遺構の時期は不明である。

〔７〕その他出土遺物

(1)柱穴内出土遺物（第88・89図）

454～465は弥生土器である。454～459は甕形土器である。454は凹線文がめぐる口縁部である。455～459は底部である。460・461は壺形土器である。460は凹線文がめぐる口縁部である。461は底部である。462・463は鉢形土器である。前者は口縁部から胴部、後者は胴部から底部である。464は高坏形土器である。柱部と裾部にそれぞれ２条の沈線を、その間に山形文を施す。465は支脚形土器である。受部・底部ともにくぼみをもつ。466～468は土師器である。466は甕形土器の口縁部である。467は壺形土器の胴部である。468は高坏形土器の柱部である。469～476は須恵器である。469～472は坏蓋である。472はつまみである。473～475は坏身である。473は直立して立ち上がる。476は高坏である。透かし孔の痕跡あり。477～481は皿である。482・483は埦である。484・485は土釜である。486は擂鉢である。487は甕である。488～493は石製品である。488・489は石庖丁である。490は両刃石斧である。491・492は敲石である。493は臼玉である。

(2)層位不明出土遺物（第90～92図）

494～502は弥生土器である。494～497は甕形土器の底部である。498～502は壺形土器である。498・499は口縁部である。500は絵画土器である。501・502は底部である。503～512は土師器である。503・504は小型丸底壺である。505～509は高坏形土器の柱部である。510～512は甑形土器である。513 ～523は須恵器である。513・514は坏蓋である。515～518は坏身である。519・520は高坏である。521は壺である。522は甕である。523は壺である。524・525は皿である。526～529は坏である。530・531は埦である。532は短頸壺である。533は甑の底部である。534はこね鉢である。535は擂鉢である。536～538は碗である。539は柱状片刃石斧である。540・541は石鏃である。542は石庖丁である。543～545は石庖丁未製品である。546は砥石である。547・548は台石である。549は敲石である。550は原材である。551は臼玉である。552は鉇である。553は袋状鉄製品である。554は釘である。555は環状金具である。556は銑鉄塊である。

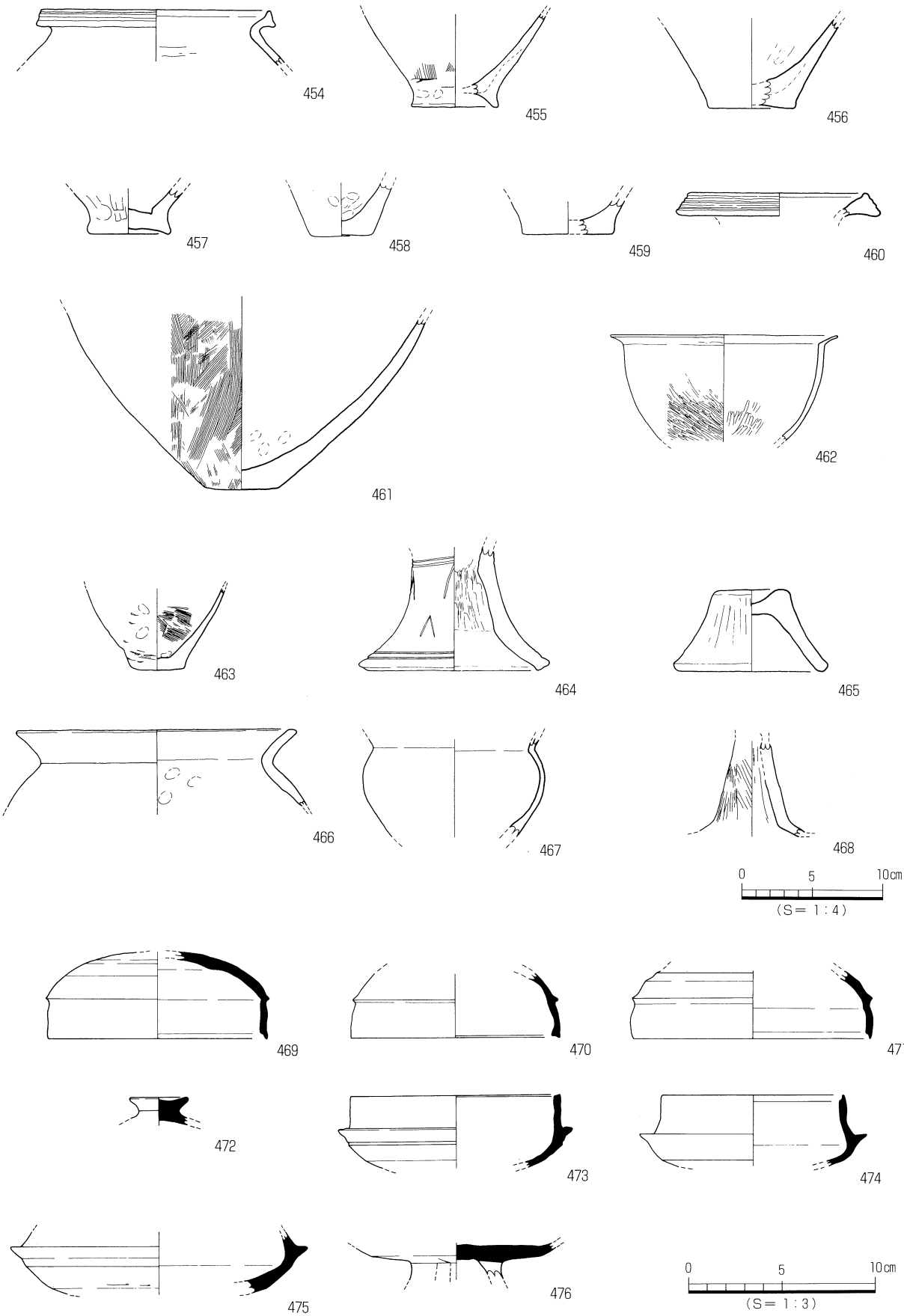
4．小　結

本調査は、弥生時代から中世における集落関連遺構の広がりの解明を主目的に調査を行った。その結果、弥生時代、古墳時代、中世以前、中世、現代における遺構と遺物を確認することができた。以下、時代ごとにまとめを行う。

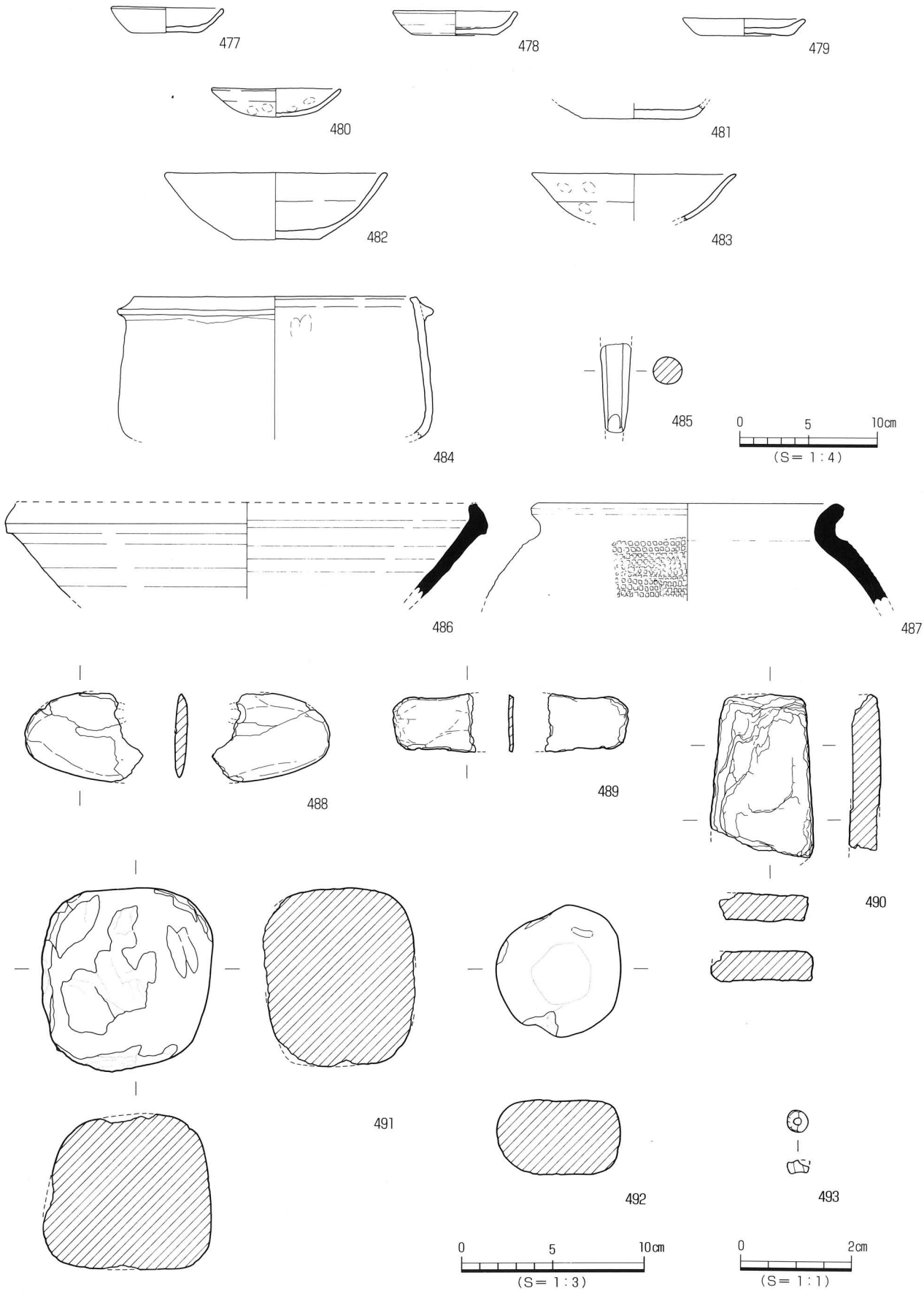
弥生時代

前期～後期の遺構と遺物を検出した。前期に比定できる遺構では、土坑４基がある。ＳＫ47・51・63・52はいずれも平面形態が隅丸長方形または長方形、断面形態が垂直に近い逆台形状を呈し、４基の内３基からは埋土中に焼土を包含するという特徴を持つ。その性格については焼成土坑や貯蔵穴などの可能性が考えられるが、検出例が少ないため、調査の増加を待って今後の検討課題としたい。

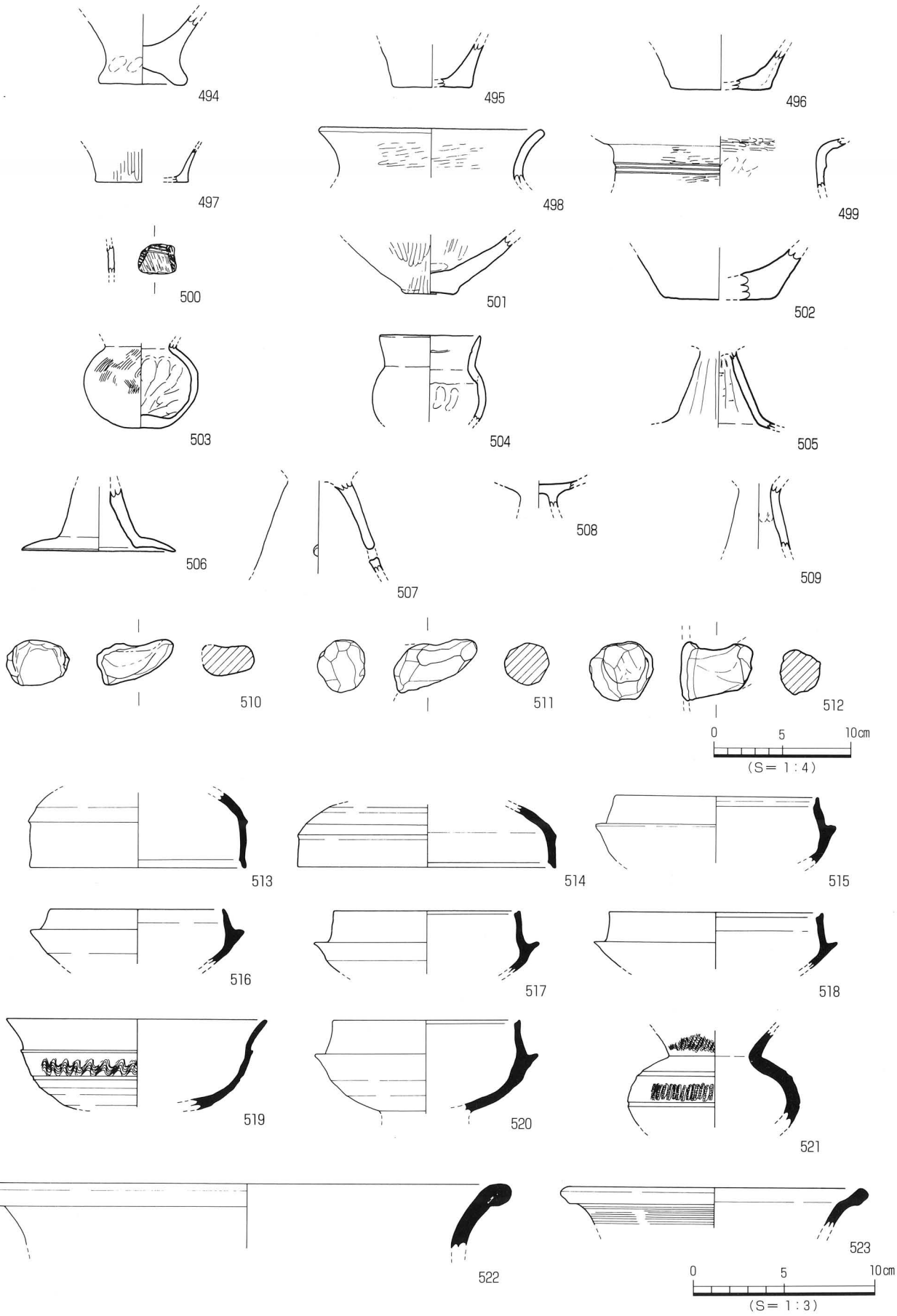
遺物では、ＳＫ47出土の土器は一括性が高い。器種には甕形土器・壺形土器・鉢形土器・支脚形土



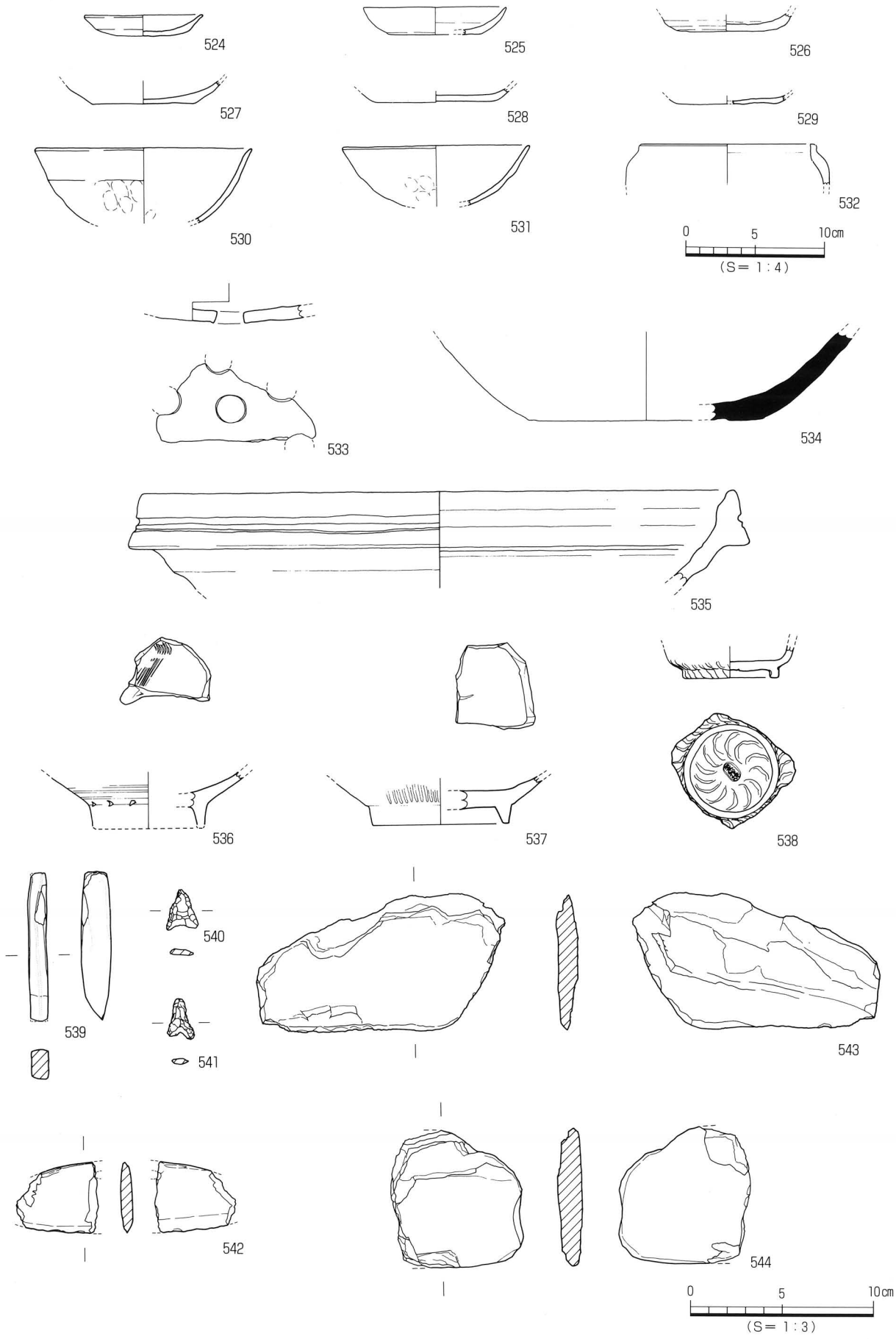
第88図　ＳＰ出土遺物実測図(1)



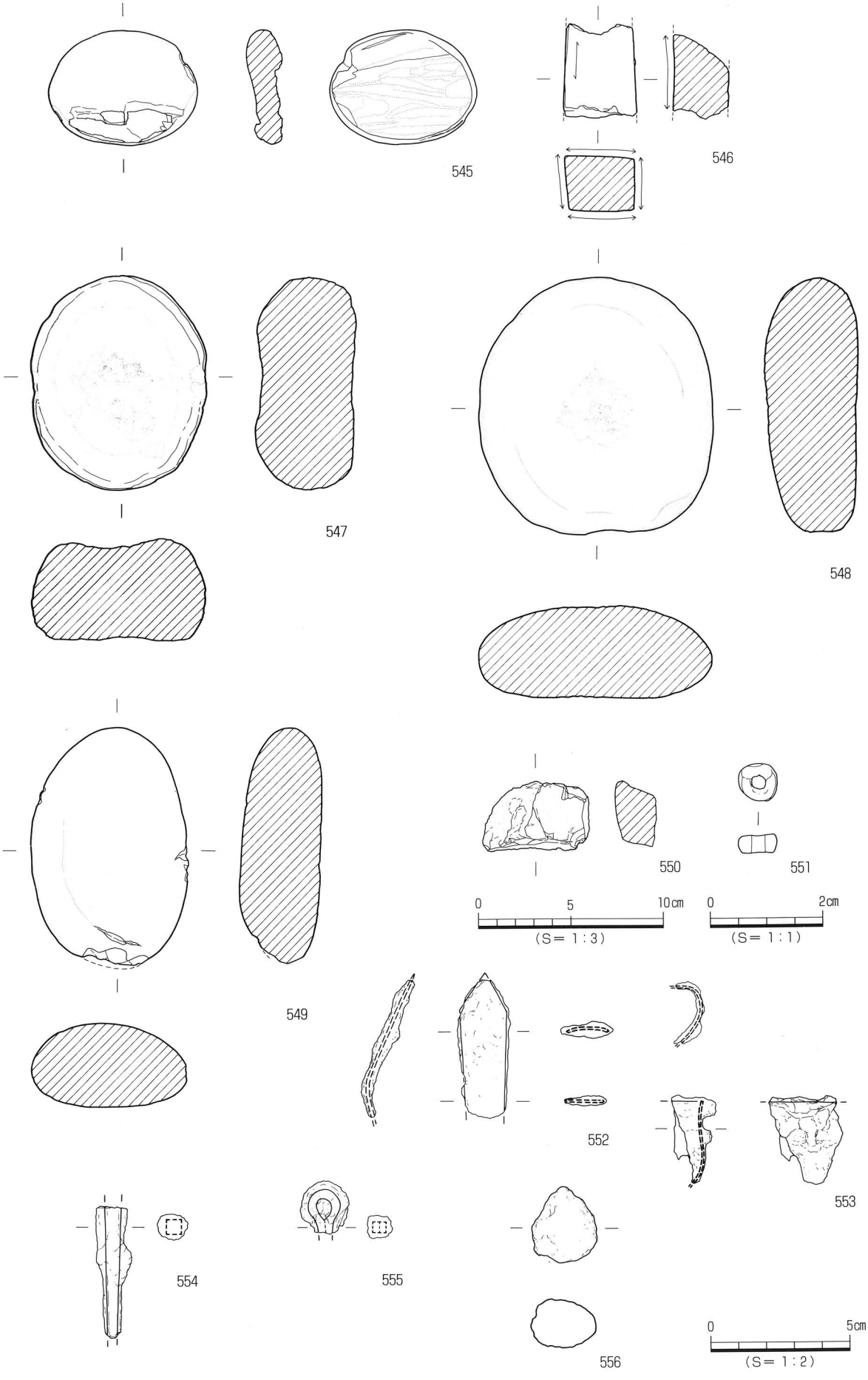
第89図　ＳＰ出土遺物実測図(2)



第90図　層位不明出土遺物実測図(1)



第91図　層位不明出土遺物実測図(2)



第92図　層位不明出土遺物実測図(3)

器がある。高坏形土器が欠落しているものの、朝美澤遺跡２次調査第Ⅲ層下層出土のものと時期・器種構成がほぼ同じである。遺構内出土としては、松山平野で最も古い一括資料のひとつであり、編年資料として貴重なものである。

中期の遺構は土坑と溝がある。住居は未検出である。

後期の遺構は竪穴式住居と土坑がある。ＳＢ２は一辺４ｍ余の隅丸方形で４基の主柱穴をもつ小型の住居に対して、ＳＢ８は主柱穴と周壁溝を備えている、直径６ｍ余の円形住居を呈し、中型住居と認定される(1)。同時期の遺物が出土している周辺の遺跡では、筋違Ｆ遺跡から直径７ｍ余の円形で６基の主柱穴をもつＳＢ５がある。

古墳時代

中期の遺構と遺物を検出した。竪穴式住居は５棟検出し、ＳＢ６が中期中葉以前で、ＳＢ１・３・５・７の４棟が中期中葉と考えられる。平面形態は方形（ＳＢ３・５・６・７）と長方形（ＳＢ１）の２種類がある。

ＳＢ３は一辺３ｍ余の小型方形住居で、内部施設は東隅に炉を備えているが、主柱穴や周壁溝は確認されなかった。ただし、屋外には北西辺と南東辺中央より約20㎝離れた位置で主柱穴２基を確認した。こうした小型住居では屋外に主柱穴を設ける場合があることを今後の調査における留意点としたい。

ＳＢ７は一辺７ｍ余の大型方形住居で、内部施設は主柱穴・周壁溝・土坑・溝を検出した。主柱穴は調査範囲の関係から２基のみ検出したが、本来は４本柱の建物であったと推測される。住居南辺付近に隅丸長方形を呈する土坑ＳＫ１を検出し、内部よりやや長胴の土師器壺が出土した。

ＳＢ１は埋土から中期中葉と考えているが、平面形態が長方形を呈することから後期まで下がる可能性も考えている(2)。

住居の切り合い関係・出土遺物の時期から推定して、古墳時代の住居はＳＢ６→ＳＢ３・ＳＢ７→ＳＢ５→ＳＢ１と変遷していく様子がうかがえる。

柵列ＳＡ１は１～３区で検出した。規模は北東から南西方向に総延長約51ｍを検出した。この遺構の特徴として、各柱穴内における遺物の出土状態にある。須恵器片・土師器片・石器片などの遺物が各々の柱穴床面に敷き詰められたように検出した。すなわち遺物は柱を設置する際の根詰めの材料として使用されたものと考えられる。また、柱穴の中には１～２回の建て替えがみられるものがあることから、柱の腐食などによって建て替えられたものと推定される。

遺物では、ＳＢ７出土の土師器は注目に値する。それは①完形品が多い、②全器種のなかでも高坏・小型丸底壺の占める割合が高い、③高坏などが据え置かれたような状態である、④脚を有する小型丸底壺や坏部内面に受け台を貼りつけた高坏などの特異な形をした土師器が含まれている、⑤出土位置が器種によって区別されている、５点が挙げられる。こうしたことからＳＢ７の遺物出土状況からは、一般的な住居の廃絶の仕方ではなく、住居廃絶に伴って祭祀が行われたと考えられる。同様にＳＢ３の炉では、土師器高坏の坏部３点を俯せに重ねた状態で出土したことから、住居廃絶に伴う祭祀行為の痕跡と考えられる。

中世以前

遺構は土坑・溝を検出した。中世の遺構との切り合い関係や埋土から判断した。ＳＫ31はトイレ遺

構の可能性が考えられたため、寄生虫卵分析を行ったが、検出されなかった。(第４章参照)

中　世

遺構は掘立柱建物・土坑・溝・墓・井戸を検出した。２・３・５区で検出した溝ＳＤ５は、東西方向で検出長46.70ｍを測り、長方形に周回すると推定され、その溝で囲まれた内部に掘立３、外部に掘立２が同時期に立てられていたと推定される。その性格については総柱建物であることから倉庫の可能性が考えられ、溝の内外に建てられた掘立２と３の役割の違いなどがあったかどうかについては今後の検討課題としたい。

ＳＫ28はトイレ遺構の可能性が考えられたため、寄生虫卵分析を行ったが、検出されなかった。(第４章参照)

現　代

遺構は溝を検出した。水田の区画溝と考えられる。

以上、調査結果についてまとめを行った。本調査によって弥生時代から中世の集落の展開がより一層明らかとなった。今後は上記の課題について周辺地域を含めて個々に比較検討を加えていきたい。

〔参考文献〕

(1)　高尾和長ほか　1996「第16章　まとめ」『東本遺跡４次調査・枝松遺跡４次調査』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

(2)　梅木謙一ほか　1991「松山平野の竪穴式住居址(1)」『松山大学構内遺跡－第２次調査－』松山大学・松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター

その他、福音寺地区の各遺跡については各報告書を参考にさせていただいた。

遺構・遺物一覧　－凡例－

(1)　以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
　　遺構一覧は山之内が、遺物観察表は山之内・仙波千秋・仙波ミリ子が作成した。

(2)　遺構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。
　　例）弥生→弥生土器、陶磁→陶器・磁器。

(3)　遺物観察表の各記載について。

法量欄　　(　)：復元推定値

形態・施文欄　土器の各部位名称を略記。
　　例）口端部→口縁端部

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記。
　　例）長→長石、石→石英、金→金ウンモ、密→精製土。(　) 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。
　　例）石・長（１～４）、多→「１～４㎜大の石英・長石を多く含む」である。
　　焼成欄の略記。◎→良好、○→良、△→不良。

表2　竪穴式住居址一覧

竪穴(SB)	時期	平面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋土	主柱穴(本)	内部施設 高床	土坑	炉	カマド	周壁溝	備考
1	古墳中期	長方形	(5.34)×3.62×0.08	暗灰褐色土	(3)					○	C5～C6区 調査区外に続く
2	弥生後期	隅丸方形	4.24×4.20×0.12	黒褐色土	4			○		○	D6～E7区 SK3・4・5に切られる
3	古墳中期	方形	3.20×3.02×0.14	暗褐色土	(2)			○			J15～K16区 SK38に切られる
4	古墳	不明	(0.97)×(0.76)×0.10	黒褐色土							J18区 調査区外に続く
5	古墳中期	方形	7.02×6.96×0.14	褐灰色土	4		○			○	M20～O22区, SB6、掘立4、SK49・54・55・57、SD14・20を切るSK53に切られる
6	古墳中期以前	方形	4.66×4.58×0.10	黒褐色土	4						N20～O21区 SB5に切られる
7	古墳中期	方形	7.38×(4.40)×0.32	暗茶褐色土	(2)		○			○	N23～P24区, SD16を切るSK64・SD17に切られる 調査区外に続く
8	弥生	円形	6.20×(6.00)×0.08	黒褐色土	(3)					○	Q21～R22区, SK51・52、SD16を切るSD18・19に切られる

表3　竪穴式住居址の炉・カマド一覧

竪穴(SB)	時期	炉	カマド	位置	平面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	出土遺物	備考
2	弥生後期	○		中央	楕円形	(0.75)×0.59×0.19	弥生	
3	古墳中期	○		北西隅	楕円形	0.77×0.61×0.15	土師器	

表4　掘立柱建物址一覧

掘立	規模(間)	方位	桁行 実長(m)	桁行 柱間寸法(m)	梁行 実長(m)	梁行 柱間寸法(m)	床面積(㎡)	時期	備考
1	1×1	南北	4.14	4.14	2.70	2.70	11.18	古墳	F7～G8区
2	2×2	南北	6.20	2.80, 3.40	4.54	2.40, 2.14	28.15	中世	D8～E9区 SX3を切る
3	3×2	東西	7.76	2.60, 2.80, 2.36	4.40	2.10, 2.30	34.14	中世	F11～G13区 SX4を切る
4	2×1	東西	4.20	2.10, 2.10	2.10	2.10	8.82	古墳 中期	O22～P23区 SK43・50・64を切る SB5に切られる

表5　土坑一覧

(1)

土坑(SK)	地区	平面形	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋土	出土遺物	時期	備考
1	E5	楕円形	舟底状	1.86×0.63×0.25	黒褐色土	弥生、土師器、須恵器	古墳時代中期以前	SA1に切られる SD1を切る
2	D2～E2	楕円形	皿状	1.15×0.37×0.05	暗灰褐色土	土師器	中世	
3	E6	楕円形	皿状	0.84×0.47×0.03	灰褐色土		中世	SB2を切る

土坑一覧

(2)

土坑(SK)	地　区	平面形	断面形	規　模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
4	D 6	不整形	逆台形状	0.70×0.67×0.07	灰褐色土		中　世	ＳＢ２を切る
5	E 6	不整形	皿　状	0.50×0.28×0.03	灰褐色土		中　世	ＳＢ２を切る
6	D 5 ・ 6	楕円形	逆台形状	0.75×0.48×0.19	明灰褐色土	石鍋	中　世	
7	E 4	不整形	逆台形状	1.47×0.74×0.14	暗灰褐色土		中　世	
8	E 4	不整形	逆台形状	0.56×0.52×0.19	灰白色土	土師器	不　明	
9	D 4 ～ E 4	楕円形	逆台形状	0.61×0.42×0.18	㊤灰褐色土 ㊦黄褐色土		中　世	
10	F 9	楕円形	皿　状	0.64×0.50×0.08	灰白色土	土師器	不　明	ＳＫ27を切る
11	D13・14	楕円形	皿　状	1.75×1.52×0.10	㊤明褐色土 ㊥黄褐色土 ㊦黒褐色土	弥生	弥　生	
12	F16・17	楕円形	皿　状	1.50×0.74×0.14	灰褐色土		中　世	ＳＫ26を切る
13	F13	楕円形	逆台形状	0.70×0.62×0.11	黒褐色土	弥生	弥生後期以降	ＳＫ14を切る
14	F13	不整形	皿　状	1.39×1.39×0.12	㊤黒色土 ㊦灰褐色土	弥生	弥生後期	ＳＫ13に切られる
15	F12	不整形	皿　状	1.10×0.71×0.06	黒褐色土	弥生	弥生中期	
16	D 7	楕円形	レンズ状	0.66×0.52×0.09	灰褐色土	弥生、土師器、須恵器	中　世	
17	C14	楕円形	逆台形状	1.03×1.01×0.15	明灰色土	土師質土器	中　世	ＳＫ18を切る
18	C14～D14	楕円形	逆台形状	0.70×0.61×0.15	黒褐色土	弥生	弥生中期	ＳＫ17に切られる
19	C12～D12	不整形	レンズ状	2.38×1.55×0.48	黒褐色土	弥生	弥　生	ＳＸ６を切る
20	D10	楕円形	逆台形状	0.57×0.30×0.06	灰褐色土		中　世	ＳＤ５に切られる
21	G11	不整形	皿　状	0.97×0.87×0.06	黒褐色土	弥生	弥　生	ＳＸ４に切られる
22	C15～D15	楕円形	逆台形状	0.97×0.93×0.22	明灰褐色土	土師器、土師質土器	中　世	
23	F14	不整形	皿　状	1.34×1.22×0.08	黒褐色土		弥　生	
24	E15	楕円形	逆台形状	0.58×0.48×0.20	黒褐色土		弥　生	
25	E13	不整形	皿　状	1.18×0.93×0.05	灰褐色土		中　世	
26	F17～G17	不整形	皿　状	0.89×0.40×0.02	灰白色土	土師器	不　明	ＳＫ12に切られる
27	F 9	不整形	逆台形状	1.50×1.04×0.18	㊤明灰褐色土 ㊦暗灰褐色土	土師器	中　世	ＳＫ10、ＳＡ１に切られる
28	D16	隅丸長方形	逆台形状	0.76×0.70×0.38	㊤灰褐色土 ㊥黄褐色土 ㊦暗灰色土	土師器、須恵器、土師質土器、瓦器	中　世	
29	J 13	円　形	逆台形状	0.73×0.68×0.23	灰褐色土	土師器	中世以前	ＳＫ31を切る
30	H13	円　形	逆台形状	0.76×0.69×0.25	黒褐色土		弥　生	
31	J 12・13	円　形	逆台形状	1.03×0.80×0.90	灰褐色土	土師器	中世以前	ＳＫ29、ＳＤ５に切られる
32	I 15	楕円形	皿　状	1.10×0.46×0.03	黒褐色土		弥　生	ＳＤ５に切られる
33	J 13・14	円　形	皿　状	2.78×2.78×0.12	明灰褐色土	土師器、須恵器、台石	中　世	
34	G14	楕円形	レンズ状	0.58×0.44×0.11	灰褐色土	須恵器	中世以前	ＳＤ５に切られる

土坑一覧

(3)

土坑(SK)	地区	平面形	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋土	出土遺物	時期	備考
35	H14	不整形	不定形	1.18×0.42×0.13	黒褐色土		弥生	SD5に切られる
36	I17・18	不整形	皿状	3.94×2.17×0.16	㊤黒色土 ㊥明灰褐色土 ㊦明褐色土	土師器、須恵器、サヌカイト、磨石、敲石	中世以前	SD5に切られる
37	I18	不整形	逆台形状	0.75×0.72×0.20	明灰褐色土	土師器	中世	調査区外に続く
38	J15・16	円形	逆台形状	0.87×0.77×0.16	灰褐色土	土師器	中世	SB3を切る
39	H13	楕円形	逆台形状	0.72×0.37×0.21	黒色土	弥生	弥生	SD5に切られる
40	I17	楕円形	逆台形状	1.07×0.72×0.23	黒褐色土		弥生	SD5に切られる
41	N22	隅丸長方形	皿状	1.90×1.30×0.15	㊤黒色土 ㊦明茶褐色土	土師器	古墳中期	
42	M21・22	不整形	皿状	3.12×2.00×0.08	黄灰色土	土師器	古墳前期	SK58を切る
43	O22	不整形	逆台形状	0.82×0.71×0.20	黒褐色土	弥生	弥生中期	SK50を切る 掘立4に切られる
44	P22・23	不整形	皿状	2.54×2.40×0.12	黄灰色土	弥生、土師器、須恵器、石鏃	古墳中期	SD17に切られる
45	Q23	不整形	皿状	2.70×1.90×0.10	黄灰色土	弥生、土師器	古墳前期	SB8を切る SD18に切られる
46	Q23・24	不整形	皿状	2.28×1.30×0.12	黄灰色土	弥生、土師器	古墳前期	SD19に切られる
47	R22～S23	隅丸長方形	逆台形状	3.50×1.89×0.50	灰褐色土	弥生、石斧	弥生前期	
48	M22～N23	不整形	逆台形状	1.18×0.66×0.32	茶褐色土	土師器	古墳前期	調査区外に続く
49	M21	楕円形	皿状	0.87×0.56×0.03	黄灰色土		古墳前期	SB5に切られる
50	O22	楕円形	逆台形状	0.74×0.72×0.17	明褐色シルト		弥生中期以前	掘立4、SK43に切られる
51	Q21・22	長方形	逆台形状	2.33×2.19×0.30	褐色土	弥生、石斧	弥生前期	SB8、SD18・19に切られる
52	R21・22	長方形	逆台形状	1.35×0.76×0.18	褐色土		弥生前期	SB8、SD18に切られる
53	O21・22	楕円形	逆台形状	1.58×0.97×0.15	茶褐色土	土師器	古墳前期	SB5を切る
54	N21～O21	不整形	レンズ状	1.05×0.49×0.15	黒色土		弥生	SB5に切られる
55	N21・22	楕円形	レンズ状	1.42×0.93×0.14	黒色土	弥生	弥生	SB5、SD20に切られる
56	Q25・R25	楕円形	逆台形状	0.88×0.65×0.29	灰褐色土	弥生、土師器、須恵器、陶磁	中世	SD18に切られる
57	M21・22	円形	逆台形状	0.94×0.85×0.27	黄灰色土	弥生、土師器	古墳前期	SB5に切られる
58	M22	円形	逆台形状	1.06×0.94×0.29	黒色土	弥生	弥生	SK42に切られる
59	P21～Q21	不整形	逆台形状	2.10×2.07×0.18	茶褐色土	土師器、須恵器	古墳中期	SK62、SD17に切られる
60	P20・21	不整形	皿状	3.40×2.20×0.20	黒褐色土	弥生	弥生前期	SK63を切る SK62に切られる
61	I19～J19	隅丸長方形	舟底状	3.00×1.94×0.20	灰褐色土	土師器、須恵器	中世	SD5を切る
62	O21～P21	長方形	皿状	3.94×2.94×0.18	暗茶褐色土		古墳中期	SK59・60・63を切る
63	P21・22	長方形	逆台形状	(3.72)×(2.72)×0.42	暗茶褐色土	弥生、土師器、須恵器	弥生前期	SK59・60・62に切られる
64	O23～P24	不整形	皿状	4.34×3.68×0.14	黄褐色土		古墳中期	SB7を切る SK44、SD17に切られる

表6　溝一覧

溝(SD)	地区	断面形	規模(m) 長さ×幅×深さ	方向	埋土	出土遺物	時期	備考
1	E5	皿状	3.73×0.68×0.13	西－東	黒褐色土	土師器、須恵器、石庖丁未製品	古墳中期	SK1に切られる
2	E6・7	逆台形状	4.98×0.48×0.12	西－東	灰褐色土	土師器、須恵器	古墳中期以前	SA1に切られる
3	D4・5	皿状	6.48×0.47×0.08	西－東	灰褐色土		中世以前	
4	C4～D6	皿状	6.08×0.65×0.08	西－東	灰褐色土		中世以前	
5	C10～I21	逆台形状	46.70×6.10×0.20	南－北 西－東	明灰褐色土	弥生、土師器、須恵器、陶磁、石庖丁、鉄鏃	中世	SK61、SD22、SE1に切られる SK20・31・32・35・36・39・40、SD10、SA1、SX3～5を切る 調査区外に続く
6	E16～F16	舟底状	2.85×0.57×0.07	南－北	灰褐色土	土師器	中世	
7	C13～E12	舟底状	6.55×0.74×0.07	南－北	明灰褐色土	弥生	中世	
8	C13～D13	舟底状	2.65×0.58×0.08	南－北	明灰褐色土	土師器、須恵器	中世	
9	C12～E12	舟底状	5.01×0.62×0.05	南－北	明灰褐色土		中世	
10	G16～H16	皿状	2.13×0.64×0.10	南－北	茶褐色土		古墳中期	SD5に切られる
11	J12	逆台形状	1.48×0.40×0.16	東－西	茶褐色土		古墳中期	調査区外に続く
12	L19～P19	皿状	14.50×0.60×0.08	南－北	灰褐色土	土師器、砥石	古墳中期	調査区外に続く
13	L20・M20	レンズ状	5.36×0.65×0.36	南－北	灰褐色土		中世	調査区外に続く
14	M22～N22	皿状	1.68×0.88×0.05	北西－南東	暗褐色土		弥生中期	SB5に切られる 調査区外に続く
15	O20・P20	レンズ状	3.83×1.50×0.10	南－北	灰褐色土	須恵器、擂鉢	中世	SD17に切られる
16	P24～Q22	舟底状	7.22×0.36×0.26	北西－南東	褐色土	弥生	弥生中期	SB7・80、SD17～19に切られる
17	P19～O24	U字状	23.60×0.40×0.10	南－北 東－西	灰色土		現代	SB7、SK44・59・64 SD15を切る 調査区外に続く
18	Q20～R25	レンズ状	24.00×1.90×0.25	東－西	灰褐色土	土師器、須恵器、陶磁、瓦器	中世	SB8、SK45・51・52を切る 調査区外に続く
19	Q20～Q24	レンズ状	18.50×1.00×0.18	東－西	灰褐色土		中世	SB8、SK46・51、SD16を切る 調査区外に続く
20	N21・22	皿状	1.53×0.32×0.04	東－西	黒色土		弥生中期	SK55を切る SB5に切られる
21	R20	皿状	1.33×0.35×0.04	北西－南東	灰褐色土		中世	調査区外に続く
22	I19	舟底状	0.77×0.10×0.05	東－西	灰褐色土		中世	SD5を切る
23	I19	舟底状	1.43×0.31×0.20	南－北	灰褐色土		中世	

表7　墓一覧

墓	地区	平面形	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋土	出土遺物	時期	備考
1	E7	円形	逆台形状	0.80×0.71×0.16	灰褐色土	土師器、須恵器、陶磁、礫石	中世	SA1を切る
2	E6・F6	楕円形	レンズ状	0.98×0.60×0.20	灰褐色土	土師器 須恵器	中世	
3	F15・16	長方形	逆台形状	1.92×0.95×0.25	灰褐色土	土師器 須恵器	中世	
4	H19	長方形	レンズ状	1.06×0.72×0.07	灰褐色土	土師器	中世	

表8　井戸一覧

井戸(SE)	地区	平面形	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋土	出土遺物	時期	備考
1	H19	楕円形	逆台形状	1.16×1.03×0.46	灰褐色土	弥生、土師器、須恵器、陶磁、砥石	中世	SD5を切る

表９　性格不明遺構一覧

性格不明遺構(SX)	地　区	平面形	断面形	規　模（m） 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	Ｅ４～Ｆ４	不整形	皿　状	5.70×0.70×0.03	灰白色土		不　明	
2	Ｃ３～Ｅ３	不整形	皿　状	3.10×2.40×0.06	灰白色土		不　明	調査区外に続く
3	Ｃ７～Ｅ10	不整形	レンズ状	9.95×9.20×0.30	㊤黒褐色土 ㊦暗灰褐色土	弥生、土師器、須恵器、石鏃、石庖丁、石斧	古　墳	掘立$\frac{2}{5}$、ＳＤ５に切られる 調査区外に続く
4	Ｆ９～Ｇ11	不整形	皿　状	8.75×2.75×0.30	褐色土	弥生、土師器、須恵器	古　墳	ＳＫ21を切る ＳＤ５に切られる
5	Ｇ14～Ｉ16	不整形	レンズ状	12.25×3.70×0.30	㊤黒褐色土 ㊦暗灰褐色土	土師器 須恵器	古　墳	ＳＤ５、ＳＡ１に切られる
6	Ｄ11～Ｅ12	不整形	皿　状	4.90×4.70×0.15	灰白色土		不　明	ＳＫ19、ＳＤ９に切られる

表10　ＳＢ２出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調（外面） （内面）	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
1	甕	底　径　2.8 残　高　11.6	平丸底の底部。	ハケ（６本/cm）	ナデ上げ→ナデ	橙色 橙色	石・長（1～6） 金 ○	黒斑	
2	こね鉢	口　径（24.5） 残　高　5.5	口端部は上方へ拡張される。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石粒（１～２） ◎		

表11　ＳＫ47出土遺物観察表　土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		色調（外面） （内面）	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
3	甕	口　径（17.5） 残　高　14.7	如意形口縁。口唇部に刻目を施す。わずかに胴が張る。	㊐ナデ ㊋マメツ（ナデ）	マメツ	橙色 橙色	石・長（1～3） ○		
4	甕	口　径（17.2） 残　高　9.6	如意形口縁。口唇部に刻目を施す。わずかに胴が張る。	マメツ	マメツ	にぶい褐色・橙色 にぶい褐色	石・長（1～4） ○		7
5	甕	口　径（20.1） 残　高　6.7	如意形口縁。 口唇部に刻目を施す。	ナデ	マメツ（ハケ）	橙色 橙色	石・長（1～3） ○		
6	甕	口　径（19.2） 残　高　5.7	如意形口縁。 口唇部に強い刻目を施す。	㊐ヨコナデ ㊋ナデ	ナデ	灰褐色・にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～3） ◎		
7	甕	口　径　22.2 残　高　14.6	如意形口縁。 口端部は丸く仕上げる。	㊐ヨコナデ ㊋ナデ	㊐ヨコナデ ㊋ナデ	淡黄橙色 橙色・淡黄橙色	石・長（1～4） ◎		
8	甕	残　高　7.9	有段部の段上に浅い刻目を施す。	ミガキ ハクリ	ナデ	橙褐色 橙色	石・長（1～3） ◎		7
9	甕	残　高　2.5	口縁部下に凸帯を貼りつけ凸帯上に浅い刻目を施す。 口唇部は尖り気味に仕上げる。	ヨコナデ	マメツ	にぶい褐色 にぶい橙色	石・長（1～3） ◎		7
10	甕	底　径　（7.8） 残　高　6.0	平底の底部。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 灰褐色	石・長（1～3） ○		
11	甕	底　径　（8.4） 残　高　5.2	やや上げ底の底部。	マメツ （一部ナデ）	マメツ	黄橙色・灰褐色 黄橙褐色	石・長（1～4） ○		
12	甕	底　径　（8.1） 残　高　4.4	やや上げ底の底部。	ナデ	ナデ （工具・指頭痕）	褐橙色 灰黄褐色	石・長（1～3） 金 ◎		
13	甕	底　径　8.2 残　高　2.8	やや上げ底の底部。	マメツ ㊎マメツ （一部ナデ）	マメツ	橙褐色・浅黄橙色 灰橙褐色	石・長（1～3） 金 ◎		
14	壺	口　径（16.4） 残　高　8.0	口縁部はゆるやかに外反する。 口端部は丸く仕上げる。	㊐ヨコナデ ㊋㊤ヨコナデ ㊋ナデ	マメツ	橙色 浅黄橙色	石・長（1～3） 金 ◎		

ＳＫ47出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
15	壺	口径(23.0) 残高 2.3	口端部は丸く仕上げる。	㊐ヨコナデ (マメツ)	マメツ	淡黄橙色 淡黄橙色	石・長(1～3) △		
16	壺	残高 3.8	肩部。横沈線文3条と重弧文5～6条を施す。	マメツ	ミガキ	浅黄橙色 黒灰色	石・長(1～2) 金 ◎		7
17	壺	残高 9.9	胴部。横沈線文3条を施す。	ミガキ→ナデ	ナデ	にぶい橙色 浅黄橙色	石・長(1～4) 金 ◎		
18	壺	底径 13.2 残高 3.7	大型品。上げ底の底部。	㊐下ナデ→ヨコナデ (マメツ) ㊎ナデ(工具痕)	ナデ (一部ミガキ)	橙色・灰黄橙色 橙色	石・長(1～4) 金 ◎		
19	壺	底径 (7.1) 残高 3.0	くびれをもつ平底の底部。	㊐下ナデ→ヨコナデ	ミガキ	黒灰色 黒灰色	石・長(1～5) 金 ○		
20	壺	底径 6.6 残高 6.5	くびれをもちやや突出する底部。	マメツ (ナデ)	マメツ (ナデ)	にぶい橙色・褐灰色 にぶい黄褐色	石・長(1～2) 金 ○		
21	鉢	口径(19.8) 残高 9.9	ゆるやかに外反しながら立ち上がる口縁部。	㊐ヨコナデ (マメツ) ㊍ミガキ→ナデ	㊐ヨコナデ→ナデ (マメツ) ㊍ミガキ→ナデ	明赤褐色 明赤褐色	石・長(1～3) ◎		7
22	鉢	口径(15.0) 残高 4.8	ゆるやかに外反する口縁部。 口端部は丸く仕上げる。	㊐ヨコナデ ㊍マメツ	㊐ハケ ㊍ナデ	黒灰色 黒灰色	石・長(1～2) ○		
23	鉢	口径(37.8) 残高 6.1	如意形口縁。 口縁部下に不明瞭な段をもつ。 口端部は丸くおさめる。	㊐ミガキ→ヨコナデ ㊍ミガキ→ナデ	㊐ミガキ→ヨコナデ ㊍ミガキ→ナデ	灰黄橙色 黒灰色・淡黄色	石・長(1～5) 金 ◎		
24	鉢	口径(40.7) 残高 11.3	如意形口縁。 口縁部下に不明瞭な段をもつ。 口端部は丸くおさめる。	㊐ミガキ→ヨコナデ ㊍ミガキ→ナデ ヨコナデ	ミガキ→ナデ	灰黄褐色 にぶい黄橙色	石・長(1～4) ◎		7
25	支脚	底径 (4.2) 残高 4.5	柱部が大きくくびれる。 受部、底部ともやや凹む。	ナデ(マメツ) 指頭痕顕著	ナデ	淡黄色 淡黄色	石・長(1～3) 金 ◎		
26	甕	口径(18.5) 残高 5.2	綾をもって外反する口縁部。 口縁端部はナデ凹む。	㊐ヨコナデ ㊍上ハケ (14～15本/cm)	㊐ヨコナデ ハクリ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～2) ◎		

表12　ＳＫ47出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
27	太形蛤刃石斧	ほぼ完形	結晶片岩	10.5	5.15	3.2	258.72		7
28	扁平片刃石斧	1/3	結晶片岩	6.7	3.1	1.6	55.39		7

表13　ＳＫ51出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
29	甕	残高 1.3	口唇部に刻目を施す。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1) ○		
30	甕	残高 3.4	口縁部下に凸帯を貼りつけ凸帯上に浅い刻目を施す。口唇部は「コ」の字状に仕上げる。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～2) ○		

ＳＫ51出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
31	甕	残高 2.6	口縁部下に凸帯を貼りつけ凸帯上に深い刻目を施す。口唇部上に沈線を施す。	ナデ	ナデ(ミガキ?)	褐灰色 灰黄橙色	石・長(1～2) 金 ○		
32	壺	口径(28.8) 残高 3.5	大きく外反する口縁部。口縁部下に不明瞭な段をもつ。	マメツ	マメツ	灰黄橙色 明黄褐色	石・長(1～3) 金 △	黒斑	

表14 ＳＫ51出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
33	細石刃	完形	チャート	2.45	1.15	0.36	0.82		
34	太形蛤刃石斧	ほぼ完形	結晶片岩	9.4	6.05	3.0	263.50		
35	砥石	完形	砂岩	14.9	20.1	7.9	3650.0		

表15 ＳＫ63出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
36	甕	口径(26.0) 残高 5.2	如意形口縁。	ナデ	ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長(1～2) ○		
37	甕	残高 3.2	如意形口縁。口縁部は強く屈曲する。口唇端面に刻目を施す。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長(1～2) ○		
38	甕	残高 3.0	有段部の段上に刻目を施す。	ヨコナデ (マメツ)	ナデ	にぶい赤橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～3) ○		
39	甕	底径(6.8) 残高 7.7	やや上げ底の底部。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長(1～3) ○		
40	甕	底径(7.0) 残高 5.8	平底の底部。	ナデ	ナデ	橙色 にぶい褐色	石・長(1～2) 金 ○		
41	甕	底径 7.7 残高 5.0	やや上げ底の底部。	ナデ (ミガキ)	ナデ	明赤褐色・にぶい赤褐色 橙褐色	石・長(1～4) 金 ○		
42	甕	底径(9.2) 残高 2.8	やや上げ底の底部。	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色 橙色	石・長(1～3) ○		
43	甕	底径(9.0) 残高 2.6	やや上げ底の底部。	マメツ	マメツ	橙色 にぶい橙色	石・長(1～2) 金 ○		
44	壺	口径(20.9) 残高 6.6	口縁部はゆるやかに外反する。口端部は「コ」の字状を呈する。口縁部下に一条の沈線を施す。口縁内外面に丹塗り。	ミガキ (一部マメツ)	ミガキ	橙褐色 橙褐色	石・長(1～3) 金 ○	丹塗り	
45	壺	口径(10.6) 残高 6.2	口縁部はゆるやかに外反する。口端部は丸く仕上げる。	㊐マメツ ㊋ミガキ→ナデ	㊐ミガキ ㊋ナデ	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～2) ◎		
46	壺	口径(11.1) 残高 4.9	口縁部は屈曲して外反する。口端部は尖り気味におさめる。	㊐ヨコナデ (マナツ) ㊋ナデ(マメツ)	㊐ヨコナデ→ナデ ㊋ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～2) ○		
47	壺	残高 6.6	肩部。横沈線文3条と重弧文5条を施す。	ナデ	ヨコナデ→ ミガキ	にぶい褐色 淡黄橙色	石・長(1～2) ○		
48	壺	底径(8.2) 残高 9.8	やや上げ底の底部。	㊋マメツ→ミガキ ㊎ヨコナデ	㊋ナデ→ミガキ ㊎マメツ	橙色・灰黄橙色 灰黄褐色	石・長(1～3) ○	黒斑	

ＳＫ63出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
49	壺	底径 6.8 残高 3.0	やや上げ底の底部。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 にぶい橙色	石・長（1～3） ○	黒斑	
50	鉢	口径(15.4) 残高 3.3	如意形口縁。口縁部はゆるやかに外反し、口端部は「コ」の字状を呈する。	マメツ	ハケ→ミガキ	橙色 橙色	石・長（1～2） ○		
51	甕	口径(19.8) 残高 4.0	口縁部は「く」の字状に折り曲げる。口端部はナデにより内傾し面をもつ。	マメツ （一部ヨコナデ）	ナデ（マメツ）	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	石・長（1～4） △		
52	甕	口径(16.4) 残高 4.0	口縁部は「く」の字状に折り曲げる。口端部は丸くおさめる。	㊐ナデ ㊁ハケ	㊐ナデ ㊁マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～2） ◎		
53	甕	口径(13.2) 残高 3.6	口縁部は外傾し口端部はやや外反し丸くおさめる。	ナデ	マメツ	にぶい橙色 にぶい褐色	石・長（1～3） 金 ○		
54	坏身	口径(10.3) 残高 4.4	立ち上がりは直立気味に内傾し、端部は段をなす。受部は水平方向に尖り気味に伸びる。	㊐回転ヨコナデ 回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	灰色 灰白色	石・長（1～3） ◎		

表16　ＳＫ60出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
55	甕	底径 (7.2) 残高 3.9	平底の底部。	㊁下ミガキ ㊇ナデ	ミガキ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～2） ◎		

表17　ＳＫ14出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
56	壺	底径 4.3 残高 5.5	厚い平底の底部。	㊁マメツ ㊁下ハケ(5本/cm) ㊇ハケ(5本/cm)	ナデ（マメツ）	黒色 明黄褐色	石・長（1～5） ○		

表18　ＳＫ18出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
57	壺	残高 15.2	肩部～胴部。肩部に木口押圧痕あり。	㊁ナデ→ハケ (11～12本/cm) ㊁下マメツ	ナデ	橙褐色・にぶい褐色 褐灰色	石・長（1～5） ◎		

表19　ＳＫ19出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
58	こね鉢	底径 (9.9) 残高 6.1	平底の底部。	㊁ヨコナデ ㊇ナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長（1～2） 黒い石粒 ○		

表20　ＳＫ39出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
59	甕	底径 7.5 残高 7.0	くびれをもつ上げ底の底部。	(胴)マメツ (ミガキ？) (底)ナデ	マメツ	茶褐色 暗茶褐色	石・長（1～3） 金 ◎	黒斑	

表21　ＳＫ43出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
60	甕	底径 (6.7) 残高 2.3	平底の底部。	(胴下)ミガキ (マメツ) (底)ナデ	ナデ	にぶい赤褐色 褐色	石・長（1） 密 ○	黒斑	
61	甕	底径 6.9 残高 4.5	やや上げ底の底部。粗製。	(胴下)ナデ (底)工具によるナデ	工具によるナデ	にぶい橙色 浅黄橙色	石・長（1～2） 金・赤茶粒 ◎	黒斑	

表22　ＳＫ55出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
62	甕	底径 8.2 残高 3.9	平底の底部。	(胴)ナデ (ミガキ) (底)ナデ	ナデ	橙褐色 浅黄橙色	石・長（1～3） 砂粒 ◎		

表23　ＳＤ16出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
63	甕	底径 (5.0) 残高 2.4	平底の底部。	マメツ (一部ナデ)	ナデ	赤橙色 橙褐色	石・長（1～7） 金 ○	黒斑	

表24　ＳＢ３出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
64	壺	残高 11.5	球形の胴部に直立気味に立ち上がる口縁部。	マメツ (指頭痕)	ナデ (指頭痕)	黄茶褐色 淡茶褐色	石・長（1） ◎		8
65	甕	残高 5.9	軟質土器。長胴甕または甑の胴部。縄蓆タタキ目を残す。	施文	マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長（1～2） 金 ◎		8
66	甑	残高 7.1	把手。外上方へ尖り気味に伸びる。	ナデ		淡黄灰色・暗灰色	砂 ◎	黒斑	
67	甕	底径 5.0 残高 1.5	やや上げ底の底部。	ハケ ナデ	マメツ	淡黄色 淡黄色	石・長（1～2） ◎	黒斑	

表25　ＳＢ３出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
68	ナイフ形石器	ほぼ完形	安山岩	6.7	2.4	0.9	16.02		8

表26　ＳＢ３内炉出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
69	高坏	口径 17.8 残高 9.4	坏部。口縁部は外傾し外面に稜をもち屈曲して外反しながら立ち上がる。口端部は丸くおさめる。	ナデ ヨコナデ	ナデ ヨコナデ	橙茶色 橙茶色	長(1) ◎		8
70	高坏	口径 17.5 残高 5.3	坏部。口縁部は外傾し外面に稜をもち屈曲して内湾気味に立ち上がる。口端部で外反し尖り気味におさめる。	マメツ	マメツ	橙褐色 橙褐色	石・長(1～3) ◎		8
71	高坏	口径 16.4 残高 5.5	坏部。口縁部は外傾し外面に稜をもち屈曲して内湾気味に立ち上がる。口端部で外反し丸くおさめる。	㊐ハケ→ヨコナデ ㊎ヨコナデ	ヨコナデ (マメツ)	淡茶色 淡茶褐色	石・長(1～2) ◎		8

表27　ＳＢ５出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
72	坏蓋	つまみ径 (3.4) 残高 1.5	つまみ。中央部がくぼむ。	回転ナデ	ナデ	灰白色 灰色	石・長(1) 密 ◎		
73	高坏	残高 2.8	脚部。透かしあり。	㊎回転ナデ ㊍カキ目	㊎ナデ ㊍回転ナデ	灰色 灰色	長(1) 密 ○		
74	甕	口径(17.5) 残高 7.6	如意形口縁。口端部は丸味をもつ。	マメツ	マメツ	淡橙色・橙色 橙色	石・長(1～5) 金 ○	黒斑	
75	甕	残高 2.6	如意形口縁。口端部は面をなす。	マメツ	マメツ	淡黄橙色 淡黄橙色	石・長(1～2) 金 ○		
76	壺	口径(13.7) 残高 2.4	外反する口縁部。口端部は面をなす。	ヨコナデ	マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1～2) ◎		
77	壺	口径(14.9) 残高 3.9	外反する口縁部。口端部は下方に拡張する。	ヨコナデ	マメツ	灰白色 にぶい橙色	石・長(1) ◎	黒斑	
78	壺	残高 4.0	頸部外面に二条の凸帯文を施す。	付着物のため不明	ヨコナデ (ハケ？)	橙色 にぶい橙色	石・長(1～2) ◎		
79	壺	底径 (6.0) 残高 4.0	平底の底部。	マメツ	ナデ (一部マメツ)	橙色 にぶい橙色	石・長(1～3) ◎		
80	壺	残高 2.0	複合口縁壺。２次口縁部に波状文を施す。	マメツ	マメツ	浅黄橙色 黄橙色	石・長(1～4) ◎		
81	高坏	口径(19.6) 残高 4.7	坏部。口縁部は内湾しながら立ち上がり外面に稜をもち屈曲して外反する。口端部は面をなす。	マメツ	マメツ	黄橙色 黄橙色	石・長(1～3) ○		

表28　ＳＢ５出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
82	石庖丁未製品	1/3	結晶片岩	3.3	6.1	1.0	22.82		
83	石庖丁	4/5	結晶片岩	4.4	8.7	0.9	37.59		

表29　ＳＢ５出土遺物観察表 装身具

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
84	臼玉	ほぼ完形	凝灰岩 灰黄褐色	0.3	0.5	0.2	0.11		
85	小玉	完形	ガラス 青色	0.3	0.5	0.2	0.10		
86	小玉	完形	ガラス 青色	0.5	0.4	0.2	0.14		

表30　ＳＢ５内ＳＫ１出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
87	高坏	残高 2.7	坏部。口縁部は外傾し外面に稜をもち屈曲して立ち上がる。	㊍ハケ→ナデ ㊍底ヨコナデ ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	密 ◎		
88	高坏	脚基部径 3.9 残高 4.3	柱部。坏部との接合は充填技法による。	マメツ	マメツ	浅黄橙色 橙色	密 赤色土粒 ○		

表31　ＳＢ５内ＳＫ２出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
89	壺	残高 3.0	軟質土器。肩部外面に格子タタキ目を残す。	マメツ (タタキ痕)	マメツ	黄橙色 黄橙色	石・長（1～3） ○		

表32　ＳＢ５内ＳＫ３出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
90	壺 (絵画土器)	残高 4.3	肩部外面に線刻を施す。	ハケ（7本/cm）	ナデ	にぶい橙色 浅黄橙色	石・長（1～3） 金・赤色土粒 ◎		
91	高坏	口径(20.6) 残高 5.1	坏部。口縁部は外傾し、外面にわずかな稜をもち屈曲して外反しながら立ち上がる。口端部は尖り気味におさめる。	マメツ (ハケ痕)	マメツ (ハケ痕)	橙色 にぶい橙色	石・長（1～3） ○		
92	高坏	口径(18.2) 器高 12.6 底径(10.4)	口縁部は外傾し、外面にわずかな稜をもち屈曲して外反しながら立ち上がる。口端部は丸くおさめる。裾部は短く大きく開く。端部は丸味をもって接地する。	㊍ヨコナデ ㊍柱ハケ(13~15本/cm) ㊍裾ヨコナデ	㊍ヨコナデ ㊍脚マメツ	淡黄橙色 淡黄橙色	石・長（1～3） 赤色土粒 ○		

表33　ＳＢ５内ＳＤ２出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
93	石錘	ほぼ完形	花崗岩	10.7	9.3	5.1	728.0		

表34　ＳＢ７出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
94	甕	口径 15.4 残高 18.6	やや肩の張る胴部。外傾する口縁部に口端部は尖り気味に丸く仕上げる。口縁部に丹塗り。	㊍㊎胴上ハケ (5～6本/cm) ㊍胴マメツ	㊍ハケ (5～6本/cm) ㊍胴マメツ・ハクリ	淡黄橙色・橙色 淡黄橙色・橙色	石・長（1～3） ○	丹塗り	5
95	甕	口径 19.0 残高 10.1	外傾する口縁部。口端部はやや外反し丸く仕上げる。	㊍マメツ ㊍胴上ハケ(6~7本/cm) ㊍胴マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長（1） ○		

ＳＢ７出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
96	甕	口径(13.2) 残高 5.7	外傾する口縁部。口端部は丸く仕上げる。内面に粘土接合痕が顕著である。	㊐ヨコナデ ㊒ナデ	㊐ヨコナデ(ハケ痕) ㊒ナデ(ハケ痕)	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1～2) ◎		
97	壺	口径(10.7) 器高 16.9	完形品。ほぼ球形の胴部に直立気味に立ち上がる口縁部。口端部手前で外反し尖り気味に仕上げる。	㊐マメツ (ナデ・ヨコナデ) ㊒ハケ→ナデ	㊐ハケ→ナデ (マメツ) ㊒マメツ (ナデ・ハケ痕)	黄橙色 にぶい黄橙色・浅黄橙色	石・長(1～2) ○	黒斑	5
98	壺	口径(9.0) 器高 12.5	中型品。直立気味に外傾する口縁部。口端部は尖り気味に丸く仕上げる。	㊐㊓ヨコナデ ㊒ナデ	㊐マメツ・ハクリ (ハケ痕) ㊒ナデ	浅黄橙色・淡橙色 浅黄橙色	石・長(1) 金 ○	黒斑	5
99	壺	口径(10.4) 残高 6.8	球形の胴部に外反する口縁部。口端部は丸く仕上げる。内面に粘土接合痕が顕著である。	㊐ヨコナデ ㊒ナデ	ナデ	橙褐色・赤橙褐色 茶褐色	石・長(1～2) ◎		
100	壺	口径(12.6) 残高 8.4	直立気味に立ち上がり口端部は外反し「コ」の字状に丸く仕上げる。内外面ともナデ痕跡が強く残る。	㊐ナデ (指頭痕) ㊓㊒ハケ(4本/cm)	㊐ナデ ㊓ヨコナデ ㊒板状工具によるナデ	橙色・浅黄橙色 橙色・浅黄橙色	石・長(1) ◎		
101	壺	口径(10.4) 残高 10.4	直立気味に立ち上がり口端部は外反し尖り気味に丸く仕上げる。	㊐ナデ ㊒ハケ(マメツ)	㊐ナデ ㊒マメツ (ハケ痕)	にぶい赤褐色 褐色	石・長(1) ○	黒斑	
102	壺	残高 12.8	球形の胴部に丸底。	㊒ミガキ ㊓ナデ	㊒ハケ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～3) ○	黒斑	
103	壺	口径 8.4 器高 9.9	小型品。直立気味に外傾する口縁部。口端部は尖り気味に丸く仕上げる。内面に指頭痕が顕著である。	マメツ (ナデ)	㊐㊓ナデ ㊒ケズリ	橙色 橙色	石・長(1～2) ○	黒斑	5
104	壺	口径 8.6 器高 9.2	小型品。外傾する口縁部。口端部は尖り気味に丸く仕上げる。内面にケズリ痕が顕著である。	㊐ヨコナデ (マメツ) ㊒ナデ(マメツ)	㊐ヨコナデ→ナデ ㊒ケズリ (指頭痕)	橙色・灰黄橙色 橙褐色	石・長(1～2) 黒・金・赤色土粒 ◎	黒斑	5
105	壺	口径 7.8 器高 8.7	小型品。直立気味に外傾する口縁部。口端部は先細りする。	マメツ (ナデ)	ナデ	橙色 にぶい橙色	石・長(細粒) 金 ○	黒斑	
106	壺	口径 7.6 器高 9.0	小型品。やや肩の張る扁球形の胴部。直立気味に外傾する口縁部。口端部は先細りする。	㊐マメツ (一部ヨコナデ) ㊒マメツ(ハケ痕)	㊐マメツ (一部ヨコナデ) ㊒ナデ(マメツ)	明黄褐色 明黄褐色	石・長(1～2) △		
107	壺	口径 8.0 器高 8.9	小型品。外傾する口縁部。口端部は外反し丸く仕上げる。	㊐ヨコナデ→ナデ (マメツ) ㊒マメツ(一部ナデ)	㊐ヨコナデ→ナデ ㊒マメツ (一部ヨコナデ)	黄褐色・赤橙色 黄褐色・赤橙色	石・長(1～4) ◎	黒斑	5
108	壺	口径 (7.3) 残高 8.2	小型品。やや肩の張る扁球形の胴部。口縁部は外傾し口端部は先細りする。平底。	マメツ	㊐ヨコナデ ㊒ナデ	黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～2) ○	黒斑	
109	壺	口径 (7.4) 器高 7.8	小型品。直立気味に長く外傾する口縁部。口端部は丸く仕上げる。	㊐マメツ ㊓ヨコナデ ㊒マメツ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1～2) 赤色土粒 ◎		
110	壺	口径 (7.6) 器高 8.6	小型品。短く直立する口縁部。口端部は丸味をもつ。内外面とも指頭痕が顕著である。粗製。	ナデ (マメツ)	㊐マメツ ㊒ナデ(マメツ)	橙色 橙色・黄褐色	石・長(1～3) 金 ○		
111	壺	口径 (6.8) 器高 7.3	小型品。直立気味に外傾する口縁部。口端部は先細りする。粗製。	㊐ヨコナデ ㊓工具痕 ㊒ナデ(マメツ)	㊐ナデ ㊓工具痕	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長(1) 金 ◎		
112	壺	残高 8.5	小型品。直立気味に外傾する口縁部。やや肩の張る胴部。	㊓ヨコナデ ㊒ナデ (工具痕)	㊓ヨコナデ ㊒ナデ	灰白色 暗灰褐色	石・長(1～2) ◎	黒斑	
113	壺	残高 8.2	小型品。球形の胴部。直立気味に外傾する口縁部。	㊓ヨコナデ ㊒工具痕 (マメツ)	㊓ヨコナデ ㊒ナデ(マメツ)	橙色 橙色	石・長(1～2) ○	黒斑	
114	壺	残高 7.2	扁球形の胴部。	ナデ	ナデ	浅黄褐色・赤橙色 浅黄色・赤橙色	石(1) 金 ◎	黒斑	
115	壺	残高 5.7	小型品。扁球形の胴部。	マメツ・ハクリ ㊓ナデ	マメツ・ハクリ	浅黄橙色 浅黄橙色・灰白色	石・長(1～3) 金・赤色土粒 ◎		

ＳＢ７出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
116	壺	残高 5.9	小型品。扁球形の胴部。	ナデ	マメツ	赤橙色・にぶい橙色 淡赤橙色・明褐灰色	石・長（1～3） ○		
117	壺	残高 5.3	小型品。扁球形の胴部。	㊀ヨコナデ ㊁ナデ	㊀ナデ ㊁ナデアゲ	淡黄橙色・灰白色 淡黄橙色・灰白色	石・長（1） 金・赤色土粒 ◎	黒斑	
118	壺	残高 6.8	扁球形の胴部。内面に指頭痕が顕著である。	マメツ （一部ナデ）	ナデ	赤橙色 灰褐色・橙色	石・長（1～5） 金・赤色土粒 ◎		
119	壺	口径 9.2 器高 14.4 底径 9.6	完形品。外傾する口縁部。口端部は丸味をもつ。脚部は短く大きく広がる。端部は丸味をもって接地する。	㊐ヨコナデ ㊁ナデ ㊂ヨコナデ→ナデ	㊐ヨコナデ（マメツ） ㊁ケズリ ㊂上ナデ ㊂端ヨコナデ→ナデ	橙褐色 橙褐色	石・長（1～2） 赤色土粒 ◎	黒斑	5
120	鉢	口径 8.5 器高 7.5 底径 3.0	小型品。平底の底部に直立気味に立ち上がり、口端部は外反する。内外面に指頭痕が顕著である。粗製。	ナデ （指頭痕）	ナデ （指頭痕）	黄橙褐色 橙褐色	石・長（1～3） ◎	黒斑	5
121	高坏	口径(16.9) 器高 11.5 底径(11.2)	外傾し内湾しながら立ち上がる口縁部。口端部は外反する。裾部は短く大きく広がる。端部は丸味をもって接地する。	マメツ （一部ヨコナデ・ナデ）	㊍マメツ （ナデ・一部工具痕） ㊀マメツ（ケズリ） ㊃マメツ（一部ヨコナデ）	黄橙色・橙色 黄橙色・橙色	石・長（1～3） 赤色土粒 ○		5
122	高坏	口径(17.7) 残高 6.6	坏部。ゆるやかに外傾し端部手前で外反する。端部は丸味をもつ。	㊐ヨコナデ（マメツ） ㊍マメツ（一部ナデ）	マメツ （一部ナデ） 工具痕	浅黄橙色 黄橙色	石・長（1～4） 赤色土粒 ◎		
123	高坏	口径(16.6) 残高 5.3	坏部。口縁部は外傾し外面に稜をもち屈曲して立ち上がる。端部は丸味をもつ。	㊐マメツ （ヨコナデ） マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長（1～2） ◎		
124	高坏	口径 15.9 残高 5.6	坏部。ゆるやかに外傾し端部手前で外反する。端部は丸味をもつ。	㊐ヨコナデ ㊍底ナデ	マメツ	にぶい橙色・にぶい褐色 浅黄橙色・にぶい褐色	石・長（1～3） 金・赤色土粒 ◎		
125	高坏	口径(16.0) 残高 5.7	坏部。ゆるやかに外傾し、端部手前で外反する。端部は丸味をもつ。	ヨコナデ （マメツ）	マメツ	にぶい橙色 橙色	石・長（1～4） ◎	黒斑	
126	高坏	残高 5.9	柱部から坏部。坏部はゆるやかに外傾する。	㊍マメツ （ハケ痕） ㊁ナデ	㊍ナデ ㊁マメツ	にぶい黄橙色 にぶい橙色	石・長（1） 密 金・赤色土粒 ○	黒斑	
127	高坏	底径(11.0) 残高10.5	柱部から坏部。坏部は屈曲して立ち上がる。裾部は屈曲して広がり端部は先細る。	マメツ・ハクリ （一部ナデ）	マメツ	橙色 黄橙色・橙褐色	石・長（1～4） ○		
128	高坏	底径(10.6) 残高 6.6	柱部。裾部は屈曲して広がる。端部は丸味をもち接地する。	マメツ	マメツ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長（1～2） 金 ◎		
129	高坏	底径 10.6 残高 6.2	柱部。裾部は屈曲して広がる。端部は丸味をもち接地する。	㊀マメツ （ハケ痕） ㊃ヨコナデ	㊀マメツ（ケズリ） ㊃ヨコナデ （工具痕）	橙色 橙色	石・長（1～2） ○	黒斑	
130	高坏	底径(11.6) 残高 7.6	柱部。裾部は屈曲して広がる。端部は先細りし接地する。	マメツ （一部ヨコナデ）	マメツ （ケズリ）	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長（1～3） 赤色土粒 △		
131	高坏	底径 11.1 残高 7.4	柱部。裾部は屈曲して広がる。端部は丸味をもち接地する。	マメツ・ハクリ	㊀マメツ ㊃ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～3） 金 ◎	黒斑	
132	高坏	底径(10.2) 残高 7.1	柱部。裾部は屈曲して広がる。端部は先細りし接地する。	㊀ナデ ㊃ヨコナデ	㊀ケズリ ㊃ヨコナデ	橙色・浅黄橙色 橙色	石・長（1） 金 ◎		
133	高坏	底径(11.8) 残高 6.8	柱部。裾部は屈曲して大きく広がる。端部は丸味をもち接地する。	㊀ナデ ㊃ヨコナデ	㊀マメツ ㊃ヨコナデ	浅黄橙色 橙色	石・長（1～2） 金・赤色土粒 ◎		
134	高坏	底径(10.8) 残高 5.9	柱部。裾部は屈曲して広がる。端部は丸味をもち接地する。	マメツ・ハクリ	マメツ・ハクリ	橙色 橙色	石・長（1～3） ○		

ＳＢ７出土遺物観察表 土製品

(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
135	高坏	底径 10.3 残高 6.9	柱部。裾部は屈曲して広がる。端部は丸味をもち接地する。	(柱)ナデ (裾)ヨコナデ	(柱上)シボリ痕 (柱)ケズリ (裾)ヨコナデ	浅黄橙色・橙色 浅黄橙色・橙色	石・長(1～3) ◎		
136	高坏	底径 12.3 残高 8.0	柱部。裾部はゆるやかに広がる。端部は丸味をもち接地する。	(柱)ナデ (裾)ヨコナデ	(柱)ケズリ (裾)ヨコナデ	浅黄色 浅黄色	石・長(1～2) 金・赤色土粒 ◎	黒斑	
137	高坏	底径 11.3 残高 6.3	柱部。長い裾部は屈曲して広がる。端部は外反し先細りする。	(柱)ナデ(マメツ) (裾)ヨコナデ(マメツ)	(柱)マメツ(ケズリ) (裾)マメツ(一部ヨコナデ)	黄橙色 黄橙色・浅黄橙色	石(3.5) 密 ○	黒斑	
138	高坏	底径(10.5) 残高 6.5	柱部。裾部は屈曲して広がる。端部はやや外反し丸味をもつ。	(柱)ナデ (裾)ヨコナデ	(柱上)シボリ痕 (柱)マメツ(ハケ痕?) (裾)ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1) 密 金・赤色土粒 ○		
139	高坏	底径 10.5 残高 6.9	ゆるやかに外傾する柱部。柱部下位に３方向から円孔を施す。内面に３条の沈線あり。	(柱上)マメツ(ハケ痕) マメツ	(柱上)工具痕 マメツ	浅黄橙色・橙色 浅黄橙色・橙色	石・長(1～3) 金 ○		
140	高坏	口径 17.4 器高 11.3 底径 9.8	完形品。ゆるやかに外傾する口縁部。端部手前で外反する。柱部は「ハ」の字状に開き短く接地する。坏部内面に突帯を貼りつける。	(坏)ヨコナデ (脚)ナデ(マメツ)	(坏)ヨコナデ (柱)マメツ(ケズリ) (裾)マメツ(ヨコナデ)	橙色 橙色	石・長(1) 密 ○		6
141	高坏	口径(27.5) 器高 11.2 底径 15.2	大きく外傾する口縁部。口端部は外反し丸味をもつ。脚部は大きく開き、端部はわずかに外反する。	ナデ (マメツ)	ナデ (マメツ)	黄橙色・橙色 黄橙色・橙色	石・長(1～3) ○	黒斑	6
142	高坏	口径(21.2) 器高 16.5 底径(17.0)	大きく外傾する口縁部。口端部はわずかに外反し丸味をもつ。脚部は大きく開き、端部はわずかに外反する。	(口)(裾)ヨコナデ (坏上)ナデ(ハケ痕) (柱)ナデ(マメツ)	(坏)ナデ(マメツ) (柱上)ヨコナデ(指頭痕) (柱下)ハケ(5～6本/cm)→ナデ (裾)ヨコナデ	橙褐色・浅黄橙色 橙褐色・浅黄橙色	石・長(1～2) 金 ◎		
143	甑	口径(33.4) 残高 22.2	外傾しながら開く口縁部。口端部はわずかに外反し丸味をもつ。	(口)ナデ (胴)ハケ(マメツ)	マメツ (ハケ痕)	橙色 橙色	石・長(1～2) ○		
144	甑	口径(26.0) 残高 13.2	外傾しながら開く口縁部。口端部はわずかに外反し丸味をもつ。	(口)ナデ (胴)ハケ(6～7本/cm)	ナデ (マメツ)	橙色 橙色	石・長(1) ◎	煤付着	
145	甑	口径(21.2) 残高 16.7	外傾しながら開く口縁部。口端部はわずかに外反し内面に面をもつ。	(口)マメツ(ヨコナデ) (胴)マメツ(ナデ)	(口)ヨコナデ (胴)ナデ(マメツ)	黄橙褐色 黄橙褐色	石・長(1～2) ◎	黒斑	
146	甑	残高 5.7	底部。中央１ヶ所とその周囲に７ヶ所の円孔を施す。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	長(1～3) ○		
147	甑	残高 3.9	底部。２ヶ所の円孔を施す。	マメツ (格子目タタキ?)	マメツ	橙色・にぶい橙色 黄橙色	密 ◎		
148	甑	残高 3.7	把手。上外方へのびる。	ナデ (マメツ)	マメツ	黄橙褐色 黄橙褐色	石・長(1～2) ◎		
149	甕	口径(23.0) 残高 6.4	軟質土器。口縁部は短く外反し、口端部は面をもっておさめる。胴部は格子タタキ目を残す。	(口)ヨコナデ(マメツ) (胴)格子目タタキ	(口)マメツ (胴)ナデ	橙褐色 灰黄橙色	石・長(1～2) 金 ○	黒斑	6
150	甕	残高 5.9	軟質土器。長胴甕または甑の胴部。縄席タタキ目と格子タタキ目を残す。	格子目タタキ	ナデ	黒褐色 橙色	石・長(1～2) ○		6
151	壺	口径(20.6) 残高 16.9	軟質土器。口縁部は短く立ち上がり口端部は面をなす。胴部は球形をなし、格子タタキ目を残す。	(口)ヨコナデ (胴)格子目タタキ	(口)ヨコナデ (胴)ナデ	にぶい橙色 橙色	石・長(1～3) 金・赤色土粒 ○		6
152	壺	口径 2.7 器高 5.9 底径 2.6	小型品。平底の底部。口縁部は直立して立ち上がり、口端部は丸くおさめる。	工具による押え	工具によるナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1) ◎	黒斑	6
153	壺	底径 2.1 残高 1.6	小型品。平底の底部。粗製。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1) ○		

ＳＢ７出土遺物観察表 土製品

(5)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
154	甑	残 高 4.0	小型品。円孔を施す。	ナデ	ナデ	にぶい橙色・灰白色 浅黄橙色	石・長（1～2） 金 ◎		
155	甕	底 径 (6.0) 残 高 4.3	くびれをもつ上げ底の底部。	㊥ミガキ ㊦ヨコナデ→ナデ	ナデ ヨコナデ→ナデ	橙褐色 橙褐色	石・長（1～3） 金 ◎	黒斑	
156	甕	底 径 3.4 残 高 4.9	わずかに上げ底の底部。	㊥ハケ(マメツ) ㊦ナデ	マメツ	橙色 にぶい橙色	石・長（1～3） ○		
157	甕	底 径 4.3 残 高 2.9	上げ底の底部。	ナデ (マメツ)	マメツ	灰白色 灰色	石・長（1～3） 金 ○	黒斑	
158	甕	底 径 4.0 残 高 3.0	上げ底の底部。	ナデ (指頭痕)	ナデ	橙色 橙色	石・長（1～3） ○		
159	壺	底 径 (9.4) 残 高 5.9	わずかに上げ底の底部。	マメツ	マメツ (ハケ)	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長（1～5） 金 ◎		
160	壺	底 径 (7.5) 残 高 3.7	平底の底部。	㊥ハケ (5本/cm) ㊦ナデ(ハケ痕)	マメツ	褐灰色 灰黄色	石・長（1～4） 金 ◎		
161	壺	底 径 (7.4) 残 高 4.4	わずかに上げ底の底部。	ナデ	マメツ	灰黄橙色 灰黄色	石・長(1~4)多い 金 ◎	黒斑	
162	壺	底 径 5.5 残 高 2.7	平底の底部。	ナデ	ナデ	褐灰色 黄灰色	石・長（1～3） ◎	黒斑	
163	壺	底 径 6.0 残 高 3.5	平底の底部。	ナデ (マメツ)	マメツ (一部ナデ)	橙褐色 灰橙色	石・長（1～7） 金 ◎		
164	壺	底 径 (4.4) 残 高 2.6	わずかに上げ底の底部。	ナデ (マメツ)	マメツ	浅黄橙色 黄灰色	石・長（1～4） ○		
165	壺	底 径 4.8 残 高 2.1	上げ底の底部。	ナデ	マメツ (ミガキ？)	褐灰色 にぶい褐色	石・長（1～2） 金 ○		
166	支脚	残 高 15.1	円筒状の体部。受部は「Ｖ」字状にカットする。	ケズリ→ナデ	ナデ (指頭痕顕著)	浅黄橙色・橙色 橙色	石・長（1～3） ○		
167	絵画土器	残 高 4.6	口縁部下に線刻を施す。	ナデ→施文 (マメツ)	ヨコナデ	浅黄橙色 褐灰色	石・長（1～2） 金・赤色土粒 ○	黒斑	

表35　ＳＢ７出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
168	石鏃	ほぼ完形	サヌカイト	3.2	1.85	0.55	2.89		
169	石鏃	先端大きく欠損	サヌカイト	2.25	1.7	0.3	1.38		
170	敲石	完形	砂岩	5.75	4.0	3.6	103.25		

表36　ＳＢ７出土遺物観察表 装身具

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
171	管玉	完形	碧玉 淡緑色	2.6	0.5	0.5	1.06		6
172	小玉	完形	ガラス 青色	0.3	0.4	0.1	0.09		6

表37　ＳＢ７内ＳＫ１出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
173	壺	口径 9.7 器高 13.7	なだらかな肩部に直立気味に立ち上がる口縁部。口端部は尖り気味に丸くおさめる。丸底の底部。	㊐ヨコナデ(マメツ) ㊒ナデ (一部工具痕)	㊐ヨコナデ (マメツ) ㊒ナデ(マメツ)	明赤褐色 褐色･にぶい褐色	石･長(1～2) ◎	黒斑	6

表38　ＳＢ７上面検出遺構出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
174	坏蓋	残高 2.9	やや扁平な天井部。	㊎回転ヘラ削り ㊐回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石･長(1～2) ○		
175	坏身	口径(10.8) 残高 3.6	立ち上がりは内傾し、端部は凹面をなす。受部は水平気味に外上方へ伸びる。	㊐回転ナデ ㊏回転ヘラ削り	回転ナデ	灰白色 灰白色	石･長(1) ○		
176	坏身	口径(12.2) 残高 5.3	立ち上がりは内傾し、端部は凹面をなす。受部は水平気味に伸びる。	㊐回転ナデ ㊏回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色 灰色	石･長(1～2) ◎		
177	坏身	口径(11.0) 残高 4.5	立ち上がりは内傾し、端部は凹面をなす。受部は水平気味に伸びる。	㊐回転ナデ ㊏回転ヘラ削り	回転ナデ	乳灰色 乳灰色	石･長(1～3) △		
178	坏身	口径(10.6) 残高 3.9	立ち上がりは内傾し、端部は段をなす。受部は水平気味に外上方へ伸びる。	㊐回転ナデ ㊏回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色 灰色	石･長(1～3) ○		
179	坏身	残高 3.3	受部は水平気味に外上方へ伸びる。	㊐回転ナデ ㊏回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色 灰白色	石･長(1～2) ○		
180	高坏	口径(10.3) 器高 10.6 底径 (8.6)	立ち上がりは内傾し、端部は凹面をなす。受部は水平気味に外上方へ伸びる。脚は三方に台形の透かしあり。	㊐回転ナデ ㊐底回転ヘラ削り ㊒脚回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石･長(1～2) ○		
181	高坏	口径(10.6) 器高 9.3 底径 (8.4)	立ち上がりは内傾し、端部は段をなす。受部は水平気味に外上方へ伸びる。脚は三方に台形の透かしあり。	㊐回転ナデ ㊐底回転ヘラ削り ㊒脚回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石･長(1～3) ◎		
182	壺	口径(19.9) 残高 10.1	口縁部は外傾し口端部は下方に伸び丸くおさめる。頸部は３区画に波状文を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗青灰色 青灰色･灰白色	石･長(1～3) ◎		

表39　ＳＢ４出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
183	甕	口径(20.0) 残高 6.7	口縁部は短く外傾し口端部は上下方に拡張する。	㊐㊔回転ナデ ㊒タタキ→カキ目	㊐㊔回転ナデ ㊒タタキ	青灰色 青灰色	石･長(1) 密 ◎		

表40　ＳＢ６出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
184	器台	残高 1.0	受部。口端部が上下に拡張する。	ミガキ	ハケ (13本/cm)	橙色 橙色	石･長(1～3) ◎		

表41　ＳＢ６出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
185	石核	不明	チャート	3.8	3.3	2.5	38.72		

表42　ＳＫ62出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
186	甕	口径(17.9) 残高 4.6	外傾する口縁部。口端部はやや外反して丸く仕上げる。	マメツ	マメツ	にぶい褐色 にぶい橙色	石・長（1～4） ○		
187	甕	口径(16.2) 残高 4.1	外傾する口縁部。口端部は丸く仕上げる。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 淡黄橙色	石・長（1～5） ○	黒斑	
188	甑	残高 7.4	把手。外上方へ伸びる。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 灰黄色	石・長（1） ○		
189	坏身	口径 10.0 器高 4.4	立ち上がりは内傾し、端部は段をなす。受部は水平気味に外上方へ伸びる。	㊐回転ナデ ㊇回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色 灰色	石・長（1） ○		
190	坏身	残高 2.9	立ち上がりは内傾する。受部は水平気味に外上方へ伸びる。	㊐回転ナデ ㊇回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色 灰色	石・長（1～4） ◎		
191	甕	残高8.2	やや肩の張る胴部。底部は尖り気味である。	㊐回転ナデ ㊐カキ目 ㊇ナデ	㊐回転ナデ ㊇回転ナデ→ナデ （指頭痕）	灰色 灰色	石・長（1～2） 密 ◎	自然釉	
192	壺	底径（6.2） 残高 1.6	平底の底部。	ナデ	マメツ	浅黄橙色 橙色	石・長（1～3） ○	黒斑	
193	壺	底径（5.3） 残高 3.7	平底の底部。	マメツ	マメツ	浅黄橙色 灰色	石・長（1～3） 金 ◎	黒斑	
194	高坏	残高 4.6	坏部。口縁部は外傾し外面に稜をもち屈曲して立ち上がる。	マメツ	マメツ	淡黄橙色 浅黄橙色	石・長（1～3） 金・赤色土粒 ◎		

表43　ＳＫ62出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
195	石庖丁未製品	1/2	結晶片岩	7.4	7.2	9.5	64.90		

表44　ＳＫ62出土遺物観察表 装身具

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
196	小玉	1/3	ガラス 青色	(0.4)	(0.4)	0.1	0.02		
197	小玉	完形	ガラス 水色	0.2	0.3	0.1	0.02		

表45　ＳＫ64出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
198	甕	口径(16.1) 残高 4.2	「く」の字状の口縁部は外傾し口端部は丸味をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 橙色	石・長（1～2） 金 ◎		
199	甕	口径(16.3) 残高 4.4	口縁部は外傾し中位で屈折する。口端部は尖り気味におさめる。	ヨコナデ (マメツ・ハクリ)	ヨコナデ (マメツ)	灰黄橙色 橙褐色	石・長（1～3） ○		
200	高坏	残高 1.8	坏部。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長（1） ○		
201	坏蓋	口径(11.4) 残高 4.0	丸い天井部。口端部はやや外反し段をなす。	㊦回転ヘラ削り ㊐回転ナデ	回転ナデ	乳灰色 灰黄褐色	長（2） 密 ○		
202	高坏	口径(14.0) 残高 5.5	口縁部は外方に開く。体部外面に沈線をめぐらせ、その上に波状文を施す。口端部は尖り気味におさめる。	㊐回転ナデ (坏下)回転ヘラ削り ㊥回転ナデ	回転ナデ	暗赤灰色 赤灰色	石・長（1～3） ◎	自然釉	
203	甕	残高 3.9	頸部から肩部。口縁部は強く折り曲げられる。	ヨコナデ 格子目タタキ	ヨコナデ	明オリーブ灰色 暗オリーブ灰色	密 ◎		
204	甕	残高 3.2	頸部から肩部。口縁部は外傾する。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長（1～3） ○		
205	甕	底径 (5.0) 残高 4.5	平底の底部。	ナデ (ハクリ・マメツ)	ナデ (指頭痕)	にぶい橙色 橙色	石・長（1～4） ◎	黒斑	
206	壺	底径 (6.0) 残高 5.0	やや上げ底の底部。	ナデ (一部ハケ痕)	ナデ (マメツ)	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長（1～4） 金 ○	黒斑	

表46　ＳＫ64出土遺物観察表 金属製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
207	鉄板	ほぼ完形	鉄	4.5	3.5	(0.2)	38.98	4隅を欠く。 不整形	10

表47　ＳＫ44出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
208	甕	口径(18.8) 残高 3.2	口縁部は内湾気味に外傾し、口端部内面に面をもち丸く仕上げる。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～2） ◎		
209	坏蓋	口径(12.0) つまみ径 3.4 器高 6.1	天井部は丸く器高が高い。つまみは中央部がくぼむ。	(つまみ)回転ナデ ㊦回転ヘラ削り ㊐回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰黄色	石・長（1） ○		
210	坏蓋	口径(12.0) つまみ径 3.2 器高 4.8	天井部は丸く、つまみは中央部がやや突出する。	(つまみ)回転ナデ ㊦回転ヘラ削り ㊐回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長（1～4） ◎		
211	坏蓋	口径(12.0) 残高 4.5	天井部はやや平らで、口端部はやや外反し段をなす。	㊦回転ヘラ削り ㊐回転ナデ	回転ナデ	灰色 乳灰色	石・長（1～3） 密 ◎		
212	坏蓋	口径(11.2) 残高 3.8	口端部はやや外反し段をなす。	㊦回転ヘラ削り ㊐回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長（1～4） 密 ○		
213	高坏	口径(10.0) 残高 4.3	坏部。立ち上がりは内傾し、口端部は段をなす。受部は外上方に伸びる。透かし孔の痕跡あり。	㊐回転ナデ (坏底)回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色 灰色	石・長（1～2） 密 ◎		

ＳＫ44出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
214	壺	残 高 11.2	口縁部は外傾する。やや肩の張る胴部。	㊦ヨコナデ ㊥タタキ→ヨコナデ	ヨコナデ	暗灰色 暗青灰色	長（1～3） 密 ◎		
215	甕	残 高 3.4	折曲口縁。口端部外面に刻目を入れ、胴上半部に沈線文を施す。	ヨコナデ	マメツ	にぶい橙色 橙色	石・長（1～3） 金 ○		

表48 ＳＫ44出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
216	石 鏃	ほぼ完形	サヌカイト	2.7	1.9	0.6	3.01		

表49 ＳＫ59出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
217	甕	口 径(18.1) 残 高 4.6	口縁部は外傾し口端部内面は肥厚し丸味をもつ。	マメツ	マメツ	赤橙色 赤橙色	石・長（1～4） ○		
218	甕	口 径(17.8) 残 高 5.1	口縁部は外傾し口端部内面は肥厚し丸味をもつ。	マメツ （一部ヨコナデ）	マメツ	明褐色 橙色	石・長（1～4） ◎		
219	埦	残 高 3.6	口縁部はわずかに内湾する。底部外面に線刻あり。	マメツ	マメツ	橙色 にぶい橙色	石・長（1～4） ○		
220	坏身	口 径(11.0) 残 高 4.7	立ち上がりは短く内傾し、口端部は段をなす。受部はほぼ水平方向に伸びる。	㊐回転ナデ ㊦回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色 灰色	石・長（1～3） ◎		

表50 ＳＫ45出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
221	壺	口 径 (8.8) 残 高 14.7	やや肩の張る球形の胴部に直立気味に立ち上がる口縁部。口端部は尖り気味におさめる。	㊐ヨコナデ→ナデ ㊦上ハケ(7本/cm) ㊦下マメツ(一部ハケ痕)	㊐ナデ ㊦ハケ ㊥ナデ(一部ヨコナデ)	褐灰色・赤橙色 黒褐色	石・長（1） 密 ○	黒斑	
222	高坏	残 高 2.3	坏部～柱部。	ヨコナデ （マメツ）	ナデ （指頭痕）	明赤橙色 浅黄橙色	密 ◎		
223	高坏	基部径 (3.1) 残 高 3.0	坏部～柱部。	ナデ	ナデ	橙色 橙褐色	密 ◎		
224	高坏	残 高 5.6	「ハ」の字状に開く柱部。	㊦柱ナデ ㊦裾ヨコナデ	㊦柱ケズリ→ナデ ㊦裾ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	密 ◎		
225	甕	底 径 (8.3) 残 高 6.6	平底の底部。	マメツ	ナデ	褐灰色 にぶい橙色	石・長（1～2） 金 ◎	黒斑	
226	甕	底 径 (8.0) 残 高 3.1	平底の底部。	ナデ	ナデ （指頭痕）	淡黄橙色 淡黄橙色	石・長（1～3） 金・石粒多い ◎		
227	甕	底 径 5.2 残 高 2.8	やや上げ底の底部。	ハケ ㊦ナデ	マメツ	橙色 橙色	石・長（1～2） ○		
228	壺	残 高 6.1	肩部に「ノ」の字状の押圧文が施される。	マメツ	マメツ	赤褐色 明赤褐色	石・長（1～3） ○		

表51　ＳＫ46出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
229	甕	口径(14.2) 残高 6.1	口縁部は直立気味に立ち上がり中位で屈折する。口端部内面に面をもつ。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長（1～3） 石粒多い ○		
230	甕	口径(14.8) 残高 5.2	口縁部は直立気味に立ち上がり中位で屈折する。口端部内面に面をもつ。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 赤褐色	石・長（1～3） ○		

表52　ＳＫ48出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
231	甕	口径(20.9) 残高 4.6	「く」の字状に折り曲げられた口縁部。口端部は平らに仕上げる。	マメツ	㊐ヨコナデ ㊒上ナデ	にぶい橙色 にぶい褐色	石・長（1～2） ○		

表53　ＳＫ53出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
232	壺	口径(11.9) 残高 11.5	直立して立ち上がる口縁部。口端部は尖り気味におさめる。	マメツ (ハケ痕)	㊐ハケ ㊒ナデ(指頭痕)	にぶい橙色 にぶい褐色	石・長（1～4） 金 ○		
233	高坏	口径(17.0) 残高 4.9	坏部。坏底部より屈曲して立ち上がる。口端部は外反しながら尖り気味におさめる。	ナデ	㊐ナデ ㊓ハケ （7本/cm）	赤橙色 赤橙色	石・長（1～2） 金 ○		

表54　ＳＤ１出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
234	坏身	口径 (9.4) 残高 2.9	立ち上がりはやや内傾し、口端部は尖り気味におさめる。受部は外上方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長（1） ○		

表55　ＳＤ１出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
235	石庖丁未製品	不明	結晶片岩	7.6	3.9	0.6	29.24		

表56　ＳＤ10出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
236	瓦	残長 12.6 残幅 9.0 厚さ 2.2	平瓦。	細縄タタキ	布目痕	乳白色 乳白色	密 ○		

表57　ＳＤ12出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
237	甑	残高 2.8	把手。ほぼ水平方向に伸びる。	マメツ	マメツ	淡黄橙色 淡黄橙色	石・長（1～3） ◎		

表58　ＳＤ12出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
238	砥石	1/4	砂岩	8.1	8.9	7.6	935.0		

表59　ＳＸ３出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
239	甕	残高 3.1	口縁部は「く」の字状に折り曲げる。	マメツ (ハケ痕少しあり)	ナデ	橙色 橙色	石・長(1) 金 ○		
240	甕	口径(17.2) 残高 4.3	口縁部は内湾気味にほぼ直立し、口端部は丸く仕上げる。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～3) ○		
241	高坏	残高 5.2	坏部から「ハ」の字状に開く柱部。	㊀ナデ ㊁ミガキ？ (マメツ)	㊀ナデ(マメツ) ㊁工具によるナデ	橙色 橙色	細砂粒 金 赤色土粒 ○		
242	高坏	残高 3.6	柱部。	マメツ	マメツ	黄橙色 黄橙色	石・長(1～2) ○		
243	甑	残高 10.0	把手。外上方に伸びる。	ナデ	ナデ	橙色 浅黄橙色	石・長(1～2) 金 ○		
244	甑	残高 5.0	把手。外上方に伸びる。	ナデ		橙色	石・長(1～2) ○		
245	甑	残高 3.5	把手。外上方に伸びる。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長(1～4) ◎		
246	甑	残高 3.3	把手。外上方に伸びる。接合面にボタン状の粘土を貼りつける。	ナデ	ナデ	黄褐色 明黄褐色	石・長(1～2) ○		
247	坏蓋	残高 1.7	つまみ。中央部がくぼむ。	ナデ 回転ナデ	ナデ 回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1) ◎		
248	坏身	口径(10.3) 残高 1.9	立ち上がりは内傾し、端部は段をなす。受部は外上方に伸びる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) 密 黒砂粒 ◎		
249	坏身	口径(11.0) 残高 3.6	立ち上がりはやや内傾し、端部は段をなす。受部は水平方向に尖り気味に伸びる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		
250	坏身	残高 3.5	立ち上がりはやや内傾する。受部は水平方向に尖り気味に伸びる。	㊀上回転ナデ ㊀下回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		
251	坏身	口径(12.6) 残高 3.2	立ち上がりはやや内傾し、端部は尖り気味に伸びる。受部は水平方向に伸びる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1～4) ◎		
252	坏身	残高 3.0	立ち上がりは内傾する。受部は短く外上方に伸びる。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石・長(1～2) ○		
253	坏身	口径(12.7) 残高 4.5	立ち上がりはやや内傾し、端部は丸く仕上げる。受部は水平方向に尖り気味に仕上げる。	㊁回転ナデ ㊁底回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰白色	石・長(1) 密 黒砂粒 ◎		
254	高坏	底径(10.0) 残高 1.8	脚端部。透かし孔あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	青灰色 青灰色	石・長(1) ○		
255	甕	残高 8.4	口頸部は外傾し、やや肩の張る扁球形の胴部。頸部及び体部の沈線で区画された部分に波状文を施す。	㊀体上回転ナデ ㊀体下カキ目 ナデ	㊀体上回転ナデ ㊀体下ナデ (指頭痕)	灰色 灰色	石・長(1～2) ○		
256	壺	残高 14.8	胴部～丸底の底部。	㊁胴平行タタキ→ カキ目 ㊁底平行タタキ	同心円文タタキ	青灰色 青灰色	石・長(1～3) ○		
257	壺	口径(23.8) 器高 56.9	口縁部は「く」の字状に短く立ち上がり口端部は内面に面をもつ。頸部下に耳の痕跡あり。やや肩の張る胴部。底部は尖り気味におさめる。	㊁口回転ナデ ㊁胴格子目タタキ→ カキ目	㊁口回転ナデ ㊁胴同心円文タタキ	青灰色 青灰色	石・長(1～3) 密 ◎	四耳壺	

ＳＸ３出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
258	甕	底径 5.5 残高 3.0	やや突出する平底の底部。	ナデ	ナデ	浅黄色 黄灰色	石・長（1～3） ◎	黒斑	
259	甕	底径 4.8 残高 4.0	やや突出する平底の底部。	丁寧なナデ	丁寧なナデ	明赤褐色 にぶい黄橙色	石・長（1～4） 金・黒色粒 ○		
260	甕	底径 5.4 残高 3.2	やや突出する平底の底部。	ナデ	ナデ	にぶい橙色・橙色 黒褐色	石・長（1～3） ○		
261	甕	底径 (3.6) 残高 5.4	平底の底部。	マメツ	指によるナデ上げ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～2） ◎		
262	壺	口径(28.0) 残高 4.6	ラッパ状に大きく外傾する口縁部。口端部はナデによりくぼむ。	ヨコナデ ハケ（5本/cm）	ハケ→ナデ ハケ（5本/cm）	褐灰色 淡黄橙色	石・長（1～3） ◎	黒斑	
263	壺	底径 (8.6) 残高 5.2	平底の底部。	マメツ (ハケ痕少しあり)	ナデ (ハケ痕少しあり) 指頭痕	にぶい黄橙色 淡黄橙色	石・長（1～3） ○	黒斑	
264	壺	底径 7.4 残高 6.7	平底の底部。	マメツ (ハケ痕少しあり)	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～2） ◎		
265	壺	底径 (7.0) 残高 3.5	やや上げ底の底部。	ナデ (マメツ)	マメツ	にぶい黄褐色 にぶい橙色	石・長（1～4） ○		
266	壺	底径 (5.0) 残高 5.7	やや上げ底の底部。	マメツ	マメツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長（1～5） ◎		
267	壺	底径 (4.7) 残高 7.9	平底の底部。	ナデ (マメツ)	ナデ (マメツ)	明黄褐色 橙色	石・長（1～4） 金・赤色土粒 ◎		
268	壺	底径 (4.7) 残高 2.7	やや上げ底の底部。	ハケ痕少しあり ナデ	工具痕	淡黄橙色 褐灰色	石・長（1～3） ◎		
269	壺	底径 (6.2) 残高 2.0	平底の底部。	ナデ	マメツ	橙色 灰色	石・長（1～3） ○	黒斑	
270	壺	底径 7.9 残高 3.9	上げ底の底部。	ナデ (一部マメツ) ヨコナデ	ナデ (マメツ)	橙色・にぶい橙色 浅黄橙色	石・長（1～5） 砂粒 ◎	黒斑	
271	壺	底径 5.6 残高 3.2	上げ底の底部。	マメツ (一部ハケ)	マメツ	橙色 にぶい黄褐色・明赤褐色	石・長（1～3） ○		
272	鉢	底径 (4.9) 残高 4.2	上げ底の底部。	ナデ (一部ヨコナデ)	ナデ (マメツ)	明赤褐色 にぶい橙色	石・長（1～4） 金 ○		
273	鉢	底径 2.6 残高 2.8	小さいボタン状の底部。やや上げ底を呈する。	マメツ	ナデ (指頭痕)	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～2） 赤色土粒 ○		
274	高坏	残高 5.6	柱部下位に山形文を施す。	ナデ	ナデ しぼり痕	橙色 橙色	石・長（1） ◎		

表60　ＳＸ３出土遺物観察表 石製品

(1)

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
275	石鏃	完形	サヌカイト	2.4	1.8	0.3	1.3		

ＳＸ３出土遺物観察表 石製品

(2)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
276	石斧	ほぼ完形	結晶片岩	9.2	5.3	2.1	166.33		
277	石斧	1/2	結晶片岩	7.1	5.0	1.9	93.70		
278	石庖丁	1/2	結晶片岩	7.4	4.3	1.0	31.81		
279	石庖丁未製品	1/2	結晶片岩	7.3	4.3	1.1	42.24		
280	石庖丁未製品	完形	結晶片岩	9.7	5.1	1.1	80.06		
281	石庖丁未製品	完形	サヌカイト	8.8	6.2	1.2	79.01		
282	石庖丁未製品	ほぼ完形	結晶片岩	11.2	5.8	1.1	100.33		
283	砥石	1/2	砂岩	8.1	5.8	3.9	375.0		
284	台石	1/4	安山岩	15.7	10.2	4.9	902.0		
285	台石	完形	花崗岩	15.7	13.4	5.9	1720.0		
286	敲石	完形	砂岩	7.6	7.4	4.3	320.0		
287	敲石	1/2	砂岩	8.4	11.0	4.9	610.0		
288	敲石	完形	砂岩	11.1	11.3	5.7	1095.0		
289	敲石	完形	花崗岩	12.1	8.1	5.2	792.0		
290	磨石	1/4	砂岩	8.8	8.6	5.7	528.0		

表61　ＳＸ４出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
291	甕	口径(19.2) 残高 5.7	口縁部は内湾気味に立ち上がり口端部は面取りして内傾させる。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～3） ○		
292	甕	口径(18.1) 残高 4.5	口縁部は内湾気味に立ち上がり口端部は丸くおさめる。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 灰褐色	石・長（1～3） ○		
293	甕	口径(12.1) 残高 1.9	口縁部は短く外傾し口端部は丸味をもつ。	ヨコナデ	マメツ （ヨコナデ）	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～3） 密 ○		

ＳＸ４出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
294	甕	口径(18.2) 残高 9.0	口縁部は外傾し口端部は面取りして内傾させる。やや肩の張る胴部。	マメツ	㊐ナデ ㊒マメツ	明褐色 橙色	石・長(1～3) ○		
295	壺	口径(10.9) 残高 6.8	口縁部は外傾し口端部は丸くおさめる。球形の胴部。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～3) 密 ○		
296	高坏	残高 7.4	柱部。	マメツ	マメツ (しぼり痕)	黄橙色 橙色	石・長(1) 金 ○		
297	高坏	基部径 3.6 残高 4.6	坏部～柱部。	マメツ	マメツ ㊓工具によるナデ	橙色・灰白色 橙色・灰白色	石・長(1) 密 金・赤色土粒 ○		
298	甑	残高 3.9	把手。やや上方へ伸びる。	ナデ	マメツ	橙色 橙色	石・長(1～3) 石粒 ◎		
299	甑	残高 4.7	把手。外上方へ伸びる。	ナデ (一部ハケ)	ナデ	橙色 橙色	石・長(1～3) 石粒 ○		
300	甑	残高 4.8	把手。外上方へ伸びる。	マメツ	マメツ	淡黄橙色 淡赤橙色	石・長(1～3) ○		
301	甑	残高 6.3	把手。外上方へ伸びる。	マメツ	マメツ	淡黄橙色 淡黄橙色	石・長(1～4) 密 ○		
302	坏蓋	口径(12.4) 残高 3.5	口縁部は内湾しながら垂下し、口端部は内傾する段をなす。	㊎回転ヘラ削り ㊐回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	石・長(1～4) 密 ○		
303	坏蓋	口径(12.1) 残高 3.2	口縁部は内湾しながら垂下し、口端部は内傾する段をなす。	㊎回転ヘラ削り ㊐回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石・長(1～3) 密 ◎		
304	坏身	残高 4.1	立ち上がりはやや内傾する。受部は外上方に伸びる。	㊐回転ナデ ㊍回転ヘラ削り	回転ナデ	青灰色 青灰色	石・長(1～3) 密 ◎		
305	高坏	底径(11.2) 残高 6.7	「ハ」の字状に広がる短い脚部。透かし孔あり。	㊎上カキ目 ㊎下カキ目→ナデ ㊍回転ナデ	㊎ナデ ㊒マメツ	黒色 灰色	長(1～5) ○	自然釉	
306	高坏	底径(9.9) 残高 1.5	脚部。透かし孔あり。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1) 密 ◎		
307	器台	口径(21.2) 残高 2.6	受部。口端部が上下に拡張する。	マメツ・ハクリ	マメツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～2) ○		
308	甕	底径 8.3 残高 3.8	平底の底部。	マメツ・ハクリ (一部ナデ)	ナデ	にぶい橙色 灰褐色	石・長(1～6) ○	黒斑	
309	甕	底径(9.0) 残高 3.7	平底の底部。	ナデ (マメツ)	ナデ (マメツ)	明黄褐色 にぶい橙色	石・長(1～4) 赤色土粒 ○	黒斑	
310	甕	底径 5.0 残高 3.5	上げ底の底部。	マメツ	マメツ	にぶい黄橙色 橙色	石・長(1～5) 多い △		
311	壺	底径 3.6 残高 2.9	平底の底部。	マメツ (ハケ痕)	ナデ	橙色 オリーブ黒色	石・長(1～4) 多い ○	黒斑	
312	壺	底径 5.2 残高 1.8	平底の底部。	ナデ (ハケ痕)	ナデ (ハケ痕)	にぶい橙色・赤橙色 灰色	石・長(1～5) 金 多い ○	黒斑	

表62　SX5出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土/焼成	備考	図版
313	甕	口径(11.6) 残高 4.0	口縁部は外傾し口端部は丸味をもつ。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	黄茶褐色 黄茶褐色	石・長(1～4) 金 ◎		
314	壺	残高 5.0	小型品。扁球形の胴部。	ナデ (マメツ)	ナデ	淡褐色 褐色	長(1～2) ◎		
315	高坏	残高 6.8	柱部。「ハ」の字状に開く。	マメツ (ナデ)	マメツ	黄茶色 黄茶色	石・長(1) 密 金 ◎		
316	高坏	残高 2.3	坏部～柱部。	マメツ	マメツ	乳黄茶色 乳黄茶色	石・長(1) 金 ◎		
317	甑	残高 4.2	底部。円孔の痕跡あり。	ナデ	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1～2) 金 ◎		
318	甑	残高 5.2	把手。外上方へ伸びる。	ナデ	ナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長(1～5) ◎		
319	甑	残高 6.6	把手。外上方へ伸びる。	ナデ	ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1～3) ◎		
320	甑	残高 4.1	把手。外上方へ伸びる。	ナデ (マメツ)	ナデ	淡灰褐色 淡灰褐色	石・長(1～5) ◎		
321	甑	残高 5.0	把手。外上方へ伸びる。	ナデ (マメツ)	ナデ	黄茶色 黄茶色	石・長(1) ◎		
322	甑	残高 5.8	把手。外上方へ伸びる。	ナデ	ナデ	黄茶色 黄茶色	密 ◎		
323	甑	残高 3.2	把手。やや水位平方向へ伸びる。	ナデ (マメツ)	ナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長(1～4) ◎		
324	甑	残高 6.3	把手。外上方へ伸びる。	ナデ	ナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長(1～2) ◎		
325	坏蓋	残高 1.4	つまみ。中央部がくぼむ。	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 青灰色	長(1) 密 ◎		
326	坏蓋	口径(10.7) 残高 3.4	口端部はやや外傾し段をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) 密 ◎		
327	坏蓋	口径(14.2) 器高 3.9	ほぼ水平な天井部。天井部と口縁部の境にゆるやかな稜をもつ。	㊤回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	㊤ナデ ㊐回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1) 密 ◎		
328	坏身	口径(10.9) 残高 4.4	立ち上がりはやや内傾し、端部は段をなす。受部は水平方向に尖り気味に伸びる。	㊐回転ナデ ㊇回転ヘラケズリ→ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1) 密 ◎		
329	坏身	口径(11.3) 残高 4.4	立ち上がりはやや内傾し、端部は段をなす。受部は外上方へ尖り気味に伸びる。	㊐回転ナデ ㊇回転ヘラケズリ →ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1) 密 ◎		
330	坏身	口径(10.7) 残高 4.1	立ち上がりはやや内傾し、端部は段をなす。受部は水上方へ伸びる。	㊐回転ナデ ㊇回転ヘラケズリ	回転ナデ	淡青灰色 淡青灰色	石(1) 密 ◎		
331	坏身	口径(10.2) 残高 3.5	立ち上がりはやや内傾し、端部は段をなす。受部は水平方向に尖り気味に伸びる。	㊐回転ナデ ㊇回転ヘラケズリ	回転ナデ	淡青灰色 淡青灰色	長(1) 密 ◎		

ＳＸ５出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
332	坏身	口径 12.0 器高 4.3	立ち上がりは直線的に内傾し、端部は丸く仕上げる。受部は外上方へ伸び、丸く仕上げる。	㊐回転ナデ ㊎回転ヘラケズリ	㊐回転ナデ ㊎ナデ	淡青灰色 淡青灰色	石・長(1) 密 ◎		
333	高坏	口径 10.4 残高 5.5	坏部。立ち上がりは内傾し、端部は段をなす。受部は外上方へ尖り気味に伸びる。透かし孔3ケ所あり。	㊐回転ナデ ㊍㊎回転ヘラケズリ ㊌回転ナデ	㊐回転ナデ ㊍㊎ナデ ㊌回転ナデ	青灰色 青灰色	石(1) 密 ◎		
334	高坏	口径(10.6) 残高 4.4	坏部。立ち上がりは内傾し、端部は面をなす。受部は水平方向へ尖り気味に伸びる。透かし孔あり。	㊐回転ナデ ㊍㊎回転ヘラケズリ ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1) 密 ◎		
335	高坏	底径 (9.3) 残高 5.4	脚部。透かし孔あり。	㊏回転ナデ カキ目 ㊓回転ナデ	㊍ナデ ㊌回転ナデ	淡青灰色 淡青灰色	石・長(1) 密 ◎		
336	高坏	底径 (8.6) 残高 4.3	短い脚部。	㊍回転ヘラケズリ ㊌回転ナデ	㊍回転ナデ ナデ ㊌回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1) 密 ◎		
337	甕	口径(21.4) 残高 4.9	外反する口縁部。口端部は平らで口端部外面直下に一条の沈線を施す。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 褐灰色	長(1) 密 ◎	自然釉	
338	甕	口径(16.0) 残高 5.3	「ハ」の字状に大きく開く口縁部。口端部は上下方向に拡張し尖り気味におさめる。	マメツ (回転ナデ)	マメツ	乳灰色 乳灰色	石・長(1～2) 密 ○		
339	壺	口径 (9.6) 残高 3.3	やや肩の張る胴部に直立する口縁部。口端部は丸くおさめる。	㊐回転ナデ ㊎回転ナデ (ややマメツ)	㊐マメツ ㊎回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1) 密 ◎		
340	壺	残高 5.1	やや肩の張る胴部。胴部中位に波状文を施す。	㊎ナデ ㊋回転ナデ ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石・長(1) 密 ◎		
341	甕	残高 7.8	やや肩の張る胴部。胴部中位に3条の沈線を施し、その間に刺突文をめぐらし、円孔を穿つ。	㊎回転ナデ ㊍ナデ	㊎回転ナデ ㊍回転ナデ ナデ	灰色 灰色	長(1) 密 ◎	自然釉	
342	器台	残高 6.0	突帯をめぐらせ、その間に波状文を施す。透かし痕跡あり。	回転ナデ	マメツ	白灰色 白灰色	石・長(1) 密 △		
343	提瓶	残高 16.6	扁平な胴部。肩部に把手あり。	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	灰色 灰色	石・長(1) 密 ◎		
344	甕	底径 (4.0) 残高 3.8	平底の底部。	ナデ	ナデ	茶褐色 暗褐色	石・長(1～2) ◎		
345	甕	底径 3.7 残高 3.6	やや突出する平底の底部。	ナデ	ナデ	茶褐色 淡茶褐色	石・長(1～4) ◎		
346	壺	口径(17.1) 残高 2.8	口縁部は大きく外傾する。口端部は上下に肥厚し、3条の凹線が巡る。	ナデ	マメツ	淡褐色 淡灰褐色	石・長(1～2) ◎		
347	壺	底径 (8.2) 残高 6.8	平底の底部。	㊋マメツ(ミガキ?) ㊎ナデ(マメツ)	ナデ (マメツ)	淡褐色 淡茶褐色	石・長(1) ◎	黒斑	
348	壺	底径 (6.3) 残高 3.3	やや上げ底の底部。	マメツ	マメツ	黄褐色 黄褐色	石・長(1～8) ◎		
349	壺	底径 (6.6) 残高 3.5	平底の底部。	マメツ ㊎ナデ	マメツ	灰黄色 灰黄色	石・長(1～2) 金 ◎		
350	鉢	底径 1.9 残高 4.2	小さいボタン状の底部。	ハケ (10～11本/cm) ㊎ナデ	マメツ	淡褐色 白黄褐色	石・長(1～5) ◎	黒斑	

ＳＸ５出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
351	器台	残高 2.3	受部。口端部が下方に拡張する。端面に波状文を施し円形浮文を貼りつける。	ナデ (マメツ)	ナデ	灰茶褐色 乳褐色	石・長(1～2) 金 ◎		
352	坏	底径 6.6 残高 1.7	底部の切り離しは回転糸切り技法による。	㊦回転糸切り	回転ナデ	乳白色 乳白色	密 ◎		
353	土鍋	残高 7.7	三足鍋の足。	ナデ		茶褐色 茶褐色	石・長(1～3) 金・石粒 ◎		

表63　ＳＸ５出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
354	石鏃	完形	サヌカイト	2.3	1.8	0.2	0.98		
355	石器未製品	完形	砂岩	4.2	3.2	1.2	16.01		
356	ナイフ形石器	完形	赤色珪質岩	6.1	2.1	0.7	9.55		
357	台石	ほぼ完形	砂岩	13.1	10.9	3.5	79.00		
358	磨石	3/4	砂岩	11.8	4.2	2.2	113.69		
359	敲石	完形	花崗岩	6.1	3.7	3.0	84.76		

表64　ＳＡ１出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
360	甑	残高 4.0	把手。外上方へ伸びる。	ナデ		橙色	石・長(1～4) 赤色土粒 ◎		
361	甑	残高 4.1	把手。外上方へ伸びる。	ナデ		赤褐色	石・長(1) 暗赤褐色土粒 ○		
362	坏蓋	残高 1.5	つまみ。中央部がくぼむ。	回転ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1) ◎		
363	坏身	口径(10.5) 残高 3.1	立ち上がりはやや内傾し、端部は段をなす。受部は外上方に伸びる。	回転ナデ	回転ナデ	淡青灰色 淡青灰色	長(1) 密 ◎		
364	高坏	底径 (8.8) 残高 5.5	坏部から脚部。「ハ」の字状に開き、端部外面に凹部をもつ。脚部中位の円孔を3ケ所穿つ。	㊎回転ナデ ㊍カキ目 回転ナデ	㊎ナデ・回転ナデ ㊍ナデ・回転ナデ	灰色 淡青灰色	密 ○		
365	高坏	残高 5.2	坏部から脚部。	回転ナデ	㊎㊦ナデ ㊍ヨコナデ	青灰色 紫灰色	石・長(1) 黒ウンモ ◎		
366	坏	底径 6.4 残高 1.2	底径のきり離しは回転糸切り技法による。	ナデ 回転糸切り痕	ナデ	乳灰色 淡灰色	石(1) ○		

表65　ＳＡ１出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
367	石庖丁	1/3	結晶片岩	3.7	4.4	0.5	12.77		
368	石庖丁	1/3	結晶片岩	2.5	5.1	0.5	7.78		
369	石庖丁	1/3	結晶片岩	4.0	3.8	0.4	7.68		
370	砥石	1/2	砂岩	8.1	4.3	2.5	163.60		
371	砥石	1/4	砂岩	10.3	2.3	3.3	65.70		
372	砥石	2/3	凝灰岩	16.8	8.1	7.0	1325.0		
373	磨石	完形	砂岩	9.1	5.3	5.1	398.0		
374	敲石	完形	砂岩	6.3	5.8	3.5	161.29		
375	敲石	完形	砂岩	6.0	4.1	3.4	112.99		
376	台石	2/3	砂岩	14.2	18.8	5.0	2300.0		

表66　ＳＫ36出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
377	磨石	1/4	安山岩	5.1	6.0	2.6	116.49		
378	敲石	完形	砂岩	4.8	4.0	3.3	90.70		

表67　ＳＫ６出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
379	石鍋	1/6	凝灰岩	9.9	15.4	1.2	562.50		

表68　ＳＫ16出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
380	甕	底径 3.2 残高 2.1	やや突出する平底の底部。	ナデ	ナデ (指頭痕)	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長（1～4） ○		

表69　ＳＫ22出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
381	甕	口径(22.0) 残高3.0	口縁部は外傾し口端部は面をなす。	マメツ (ハケ目少しあり)	ヨコナデ	淡黄橙色 淡黄橙色	石･長(1～1.5) ○		
382	高坏	残高3.1	坏部～柱部。	マメツ	(坏)マメツ (柱)ナデ	橙色 橙色	密 △		

表70　ＳＫ28出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
383	皿	底径(7.0) 残高0.9	底部の切り離しは回転糸切り技法による。	(体)マメツ (底)回転糸切り痕	回転ナデ (マメツ)	灰白色 灰白色	密 ○		
384	坏	底径(9.0) 残高1.5	底部の切り離しは回転糸切り技法による。	(体)マメツ (底)回転糸切り痕	マメツ	浅黄橙色 灰白色	石・長(1) ○		
385	塊	口径(14.9) 残高4.5	口縁部は内湾気味に立ち上がり内面に暗文が施される。口端部は丸く仕上げる。	(口)ヨコナデ (体)ナデ (指押え)	(口端)ヨコナデ (体)暗文	暗青灰色 暗青灰色	長(1) 黒石粒 ○		

表71　ＳＫ33出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
386	台石	1/2	砂岩	20.3	12.1	6.5	2850.0		
387	台石	1/3	砂岩	9.3	17.3	4.2	1437.0		

表72　ＳＫ37出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
388	坏	口径(11.4) 器高 2.6 底径 7.7	口縁部は内湾気味に立ち上がり口端部は尖り気味に仕上げる。底部は回転糸切り技法による。	(体)マメツ (底)マメツ (回転糸切り痕)	マメツ (ナデ)	黄褐色 黄褐色	密 ◎		

表73　ＳＫ56出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
389	高台付碗	底径 6.6 残高 3.2	高台は削り出しによる。内面に沈線状の段とハケ状工具による文様あり。	(体)施釉 (高台)削り出し	施釉	(釉)浅黄色･灰白色 浅黄色	密 黒茶砂粒 ◎		

表74　ＳＤ５出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
390	坏	底径(6.5) 器高 1.8	口縁部は直線的に外方向に開く。底部は回転糸切り技法による。	(体)ナデ (マメツ) (底)回転糸切り痕	ナデ (マメツ)	乳黄色 乳黄色	石･長(1～2) 金 ◎		
391	坏	底径 6.0 器高 1.0	底部は回転糸切り技法による。	回転ナデ 回転糸切り	マメツ	乳黄色 淡橙茶色	密 ◎		

ＳＤ５出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
392	土鍋	口径(35.9) 残高 5.7	ゆるやかな「く」の字形の口縁部より直線的に外方向に伸び、口端面を平らに仕上げる。	㊐ヨコナデ ㊍ナデ (指押え)	㊐ヨコナデ ㊍マメツ	にぶい褐色 にぶい橙色	石・長(1～2) ○		
393	鉢	口径(44.8) 残高 10.1	口端部に断面三角形の突帯をめぐらす。	㊐ヨコナデ ㊍ナデ	ナデ	黒褐色 茶褐色	長(1～2) ◎	煤付着	
394	鉢	口径(40.3) 残高 10.1	口端部に断面三角形の突帯をめぐらす。	㊐ヨコナデ ㊍ナデ	㊐ヨコナデ ㊍ナデ (マメツ)	暗褐色 茶褐色	長(1～2) ◎	煤付着	
395	鉢	口径(43.2) 残高 4.3	口端部やや下位に断面三角形の突帯をめぐらす。	㊐ヨコナデ ㊍ナデ	ヨコナデ	茶褐色 灰茶褐色	石・長(1～3) 金 ◎	煤付着	
396	鉢	口径(40.4) 残高 6.1	口端部に断面三角形の突帯をめぐらす。	㊐ヨコナデ ㊍ナデ	㊐ヨコナデ ㊍ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～3) 金 ◎	煤付着	
397	鉢	口径(33.4) 残高 4.3	口端部やや下位に断面三角形の突帯をめぐらす。	ナデ (マメツ)	ナデ (マメツ)	淡褐灰色・褐灰色 淡褐灰色	石・長(1～3) 金 ◎	煤付着	
398	土釜	口径(21.8) 残高 5.7	口縁部はやや内湾し口端部やや下位にタガをめぐらす。	㊐ヨコナデ ㊍ナデ	㊐ヨコナデ ㊍ナデ	茶褐色 淡茶褐色	石・長(1～2) 金 ◎	煤付着	
399	土釜	口径(26.4) 残高 2.8	口縁部はやや内湾し断面三角形の突帯をめぐらす。	㊐ヨコナデ ㊍ナデ	ナデ	褐色 淡褐色	石・長(1～2) 金 ◎		
400	土釜	残高 12.8	脚部。	ナデ (一部工具痕)	㊍ナデ ヨコハケ (10本/cm) ㊎ヨコナデ	黄茶褐色 黄茶褐色	石・長(1～3) 金 ◎	煤付着	
401	土釜	残高 8.5	脚部。	ナデ	ナデ	淡灰色 淡灰色	石・長(1～2) ◎		
402	土釜	残高 8.9	脚部。	ナデ	ナデ	暗茶色 暗茶色	石・長(1～3) 金 ◎		
403	土釜	残高 8.5	脚部。	ナデ	ナデ	淡茶褐色 褐灰色	長(1～2) ◎		
404	土釜	残高 6.9	脚部。	ナデ		淡灰色	石・長(1～7) ◎		
405	土釜	残高 9.1	脚部。	ナデ	ナデ	茶褐色 暗茶色	石・長(1～4) 金 ◎		
406	こね鉢	口径(25.6) 残高 3.4	口端部は上下に拡張する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		
407	こね鉢	口径(27.9) 残高 3.5	口端部は上方向に拡張する。	回転ナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	石・長(1～2) ◎		
408	碗	口径(16.4) 残高 4.2	口縁部は外傾し更に屈曲により外方向にのび端面を丸く仕上げる。	回転ナデ	回転ナデ	淡灰色・淡緑灰色 淡緑灰色	密 ◎		
409	碗	口径(16.0) 残高 4.9	口縁部は外傾し更に屈曲により外方向にのび端面は平らに仕上げる。	施釉	施釉	灰オリーブ色 灰オリーブ色	密 ◎		
410	擂鉢	底径(16.4) 残高 6.8	底部。端部のみ接地し、ゆるやかに立ち上がる。内面は使用により磨滅している。	㊍回転ナデ ㊎ナデ	回転ナデ	暗灰色 淡灰色	密 ◎		

ＳＤ５出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土 焼成	備考	図版
411	擂鉢	底径(18.6) 残高 4.3	底部。端部のみ接地し、ゆるやかに立ち上がる。内面は使用により磨滅している。	㊍回転ナデ ㊎ナデ	回転ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	長（1～2） ◎		
412	擂鉢	底径(13.9) 残高 4.1	平底の底部。内面は使用により磨滅している。	㊍回転ナデ ㊎ヨコナデ	回転ナデ	橙褐色 橙褐色	石・長（1） ◎		
413	碗	口径(13.8) 残高 2.9	口縁部は外傾し更に屈曲により外方向にのび端面を平らに仕上げる。	施釉	施釉	緑灰色 緑灰色	密 ◎		
414	高台付碗	底径 4.2 残高 3.1	高台は削り出しによる。内外面に施釉あり。	㊍回転ナデ（施釉） ㊎回転糸切り→ケズリ	回転ナデ（施釉）	灰黄色 灰黄色	密 ◎		
415	高台付碗	底径(5.6) 残高 2.9	高台は削り出しによる。内外面に施釉あり。	㊍施釉 ㊎回転ヘラケズリ	施釉	明緑灰色・淡橙灰色 明緑灰色	密 ◎		
416	高台付碗	底径(6.9) 残高 1.7	高台の内面を斜めに削り出す。内面に施釉あり。	回転ヘラケズリ	施釉	白灰色 白色	密 ◎		
417	甕	底径(6.6) 残高 3.3	やや上げ底の底部。	ナデ（マメツ）	ナデ	淡灰色 乳灰色	石・長（1～3） ○		
418	甑	残高 7.0	把手。外上方に大きく屈曲する。	ナデ（マメツ）	マメツ	橙茶色 橙茶色	石・長（2～5） ◎		
419	甑	残高 5.2	把手。外上方に伸びる。	ナデ	ナデ	淡黄茶色 淡黄茶色	石・長（1～2） ◎		
420	高坏	底径(9.4) 残高 6.6	脚部。「ハ」の字状に開き、長方形の透かしを穿つ。	㊌カキ目 ㊍回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長（1） ◎	自然釉	
421	高坏	残高 2.6	坏部～脚部。	㊏回転ナデ ㊌カキ目	㊏回転ナデ→ナデ ㊌ナデ 回転ナデ	淡青灰色 灰色	密 ◎		
422	器台	底径(31.3) 残高 3.8	脚端部。櫛歯状工具による刺突文を外面に施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 灰色	石・長（1～2） ○		

表75　ＳＤ５出土遺物観察表 石製品

(1)

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
423	石斧	2/3	結晶片岩	7.3	3.0	2.4	45.89		
424	石庖丁	1/2	結晶片岩	6.2	5.5	0.5	22.52		
425	石器未製品	ほぼ完形	結晶片岩	5.2	1.5	0.9	44.54		
426	砥石	ほぼ完形	砂岩	6.4	4.6	1.4	75.63		
427	砥石	1/3	砂岩	4.9	5.8	5.5	265.50		

ＳＤ５出土遺物観察表 石製品

(2)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
428	ナイフ形石器	完形	砂岩	4.7	6.9	1.5	16.12		
429	石核	完形	赤色珪質岩	5.8	5.8	1.5	52.30		

表76　ＳＤ５出土遺物観察表 金属製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
430	鉄鏃	完形	鉄	4.4	1.5	(0.1)	4.00	圭頭斧箭式。	10
431	鉄塊	ほぼ完形	鉄	4.5	3.4	(0.9)	41.96	全体に亀裂の入った厚い錆が付着。	10

表77　ＳＤ７出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
432	甕	底径 (5.0) 残高 2.2	やや上げ底の底部。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長（1～2） ○		

表78　ＳＤ15出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
433	擂鉢	口径(28.5) 残高 5.6	口縁端部は上下に大きく拡張され「く」の字状の形態に近い縁帯を形成する。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰赤色 赤灰色	長（1～2） ◎		

表79　ＳＤ18出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
434	甕	残高 3.4	頸部。	ヨコナデ 並行タタキ	ヨコナデ タタキ	青灰色 青灰色	石・長（1～2） ◎		
435	土釜	残高 2.8	口端部に断面三角形の突帯をめぐらす。	マメツ	マメツ	橙色 にぶい橙色	石・長（1～2） 金 ◎		
436	甕	口径(16.4) 残高 4.2	内湾気味に立ち上がる口縁部。口端部は内面に丸みのある面をもつ。	マメツ	マメツ	橙褐色・褐灰黄色 褐灰黄色	石・長（1～4） △		
437	甕	口径(16.6) 残高 5.2	ほぼ直立気味に立ち上がる口縁部。口端部は内面に面をもつ。やや肩の張る胴部。	マメツ (一部ヨコナデ)	マメツ	橙褐色 橙褐色	石・長（1～4） 赤色土粒 ○		
438	甕	残高 4.3	「く」の字状に外反する口縁部。口端部は平らに仕上げる。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長（1） ○		

表80　墓１出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
439	坏	口径(14.9) 器高 4.1	口縁部は内湾気味に立ち上がり口端部はわずかに内湾し丸く仕上げる。全体に厚手のつくり。	㈱ヨコナデ ㈹糸切り	ヨコナデ	灰白色・淡橙色 灰白色・淡赤橙色	石・長（1～2） 金 ◎		

墓1出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
440	坏	口径(15.3) 器高 4.3	口縁部は内湾気味に立ち上がり口端部は丸く仕上げる。	㊍回転ナデ ㊎糸切り	回転ナデ	淡黄橙色 淡黄橙色	密 ○		
441	皿	口径 8.5 器高 1.7 底径 5.9	口縁部は直線的に立ち上がり口端部は丸く仕上げる。 全体に厚手のつくり。	㊍ヨコナデ (マメツ) ㊎糸切り	マメツ (ナデ)	橙色 橙色	密 ○		
442	碗	口径(17.4) 器高 6.7 底径 6.2	口縁部はやや丸みをもちながら立ち上がり、口端部は外方向に尖気味に仕上げる。高台は削り出しによる。内面に2条の沈線と櫛歯状工具による文様を描く。	㊍施釉 ㊎ヨコナデ・ ケズリ	施釉	㊗浅黄色	密 ◎		

表81 墓2出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
443	皿	口径 (8.5) 器高 1.7 底径 5.3	口縁部は直線的に立ち上がり口端部は尖り気味におさめる。	マメツ	マメツ (ハクリ)	浅黄橙色 灰白色	密 ○		
444	坏	底径 8.0 残高 2.2	底部は回転糸切り離しが施される。	㊍マメツ (一部ナデ) ㊎マメツ (糸切り痕)	マメツ	浅黄橙色 灰黄色	長 (1～2) ○		

表82 SE1出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
445	粗製剥片刃器	1/2	安山岩	8.0	10.0	2.0	137.67		
446	石庖丁未製品	1/2	結晶片岩	3.8	7.2	1.0	45.52		
447	砥石	完形	砂岩	15.2	9.9	7.3	1384.0		
448	砥石	1/3	砂岩	8.5	6.7	4.7	399.0		
449	台石	1/2	砂岩	12.0	7.4	3.4	577.0		
450	台石	1/4	安山岩	13.7	8.2	6.5	935.0		

表83 SK8出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
451	壺	口径(14.2) 残高 5.2	短く立ち上がり外傾する口縁部。口端部は更に外反し丸くおさめる。全体に厚手のつくり。	マメツ・ハクリ (一部ヨコナデ)	マメツ・ハクリ (一部ヨコナデ)	橙色 橙色	石・長(1～7) 微砂 ○		
452	鉢	口径(18.3) 残高 5.1	口縁部は強く屈曲し口端部はナデにより凹む。胴部は稜をもって張り出す。	ヨコナデ	㊐ヨコナデ ㊋ミガキ	にぶい橙色 淡橙色	石・長 (1) 金 ◎		

表84 SK10出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
453	高坏	残高 2.6	柱部。	ナデ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～2) ○		

表85　ＳＰ出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
454	甕	口径(16.0) 残高 3.7	口縁部は短く屈曲し、口端部は上下方向に拡張する。端面には２条の凹線を施す。	マメツ 工具痕？	マメツ	橙色 橙色	石・長（1） 細粒 ○	SP4217	
455	甕	底径(6.2) 残高 6.7	くびれをもつ上げ底の底部。	(胴)マメツ (胴下)ハケ→ヨコナデ (底)ヨコナデ	マメツ (一部工具によるナデ)	明赤褐色 明褐色	石・長（1～2） 砂粒 ◎	SP4046	
456	甕	底径(6.2) 残高 6.4	やや上げ底の底部。	マメツ (胴下)ナデ (底)ナデ	ナデ	灰褐色 黄褐色	石・長（1～4） 金 ○	SP2201	
457	甕	底径(5.7) 残高 3.3	くびれをもつ上げ底の底部。	ナデ (板・指による) (底)マメツ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～3） ◎	SP4021	
458	甕	底径(4.4) 残高 4.2	平底の底部。	マメツ (底)ナデ	ナデ (マメツ)	淡褐色 淡褐色	石・長（1～2） ◎	黒斑 SP3121	
459	甕	底径(6.4) 残高 2.4	平底の底部。	マメツ	マメツ	にぶい褐色 橙色	石・長（1～3） 金 ○	SP2013	
460	壺	口径(12.4) 残高 1.7	口端部は肥厚し端面に４条の凹線を施す。	マメツ	マメツ	にぶい褐色 にぶい橙色	石・長（1～2） 金 ◎	SP4175	
461	壺	底径 5.2 残高 12.5	平底の底部。	(胴下)ハケ (13～15本/cm) (底)ナデ→ハケ	ナデ	にぶい橙色 橙色	石・長（1～4） ○	SP4117	
462	鉢	口径(15.9) 残高 7.5	口縁部は屈曲して外反し口端部は丸く仕上げる。	(口)ヨコナデ(マメツ) (胴上)マメツ (胴下)ミガキ	(口)ヨコナデ(マメツ) (胴上)マメツ (胴下)ミガキ	黄褐色 黄褐色	長（1～2） ◎	黒斑 SP3046	
463	鉢	底径 3.8 残高 5.8	やや突出する平底の底部。	(胴)マメツ (胴下)(底)ナデ (一部ハケ痕)(工具痕)	(胴)ハケ(11本/cm) (マメツ) →ナデ	橙色 橙色	石・長（1～4） 金 ◎	SP4117	
464	高坏	底径 13.5 残高 8.8	柱部から裾部にかけてゆるやかに外反する。柱部と裾部それぞれに2条の沈線を、その間に2段の山形文を施す。	マメツ	(脚)しぼり痕→ナデ (脚下)マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～3） 金 ○	SP4046	
465	支脚	上部径 5.1 器高 5.8 底径 10.3	中実。受部、底部ともに凹みをもつ。裾端部は丸く仕上げる。	粗ミガキ→ヨコナデ (マメツ)	マメツ (一部ナデ)	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長（1～5） 金 ◎	SP4117	
466	甕	口径(19.8) 残高 5.5	ゆるやかに外傾する口縁部。 口端部は尖り気味に仕上げる。	(口)ヨコナデ (マメツ) (胴上)マメツ	(口)ヨコナデ (胴上)マメツ	黄橙褐色 黄橙褐色	石・長（1～3） ◎	SP4008	
467	壺	残高 7.0	頸部～胴部。やや肩の張る胴部。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長（1～3） ○	SP4117	
468	高坏	残高 6.9	柱部。	マメツ (ハケ目)	工具痕→ナデ	灰白色・橙色 灰白色・橙色	石・長（1～2） 細粒 ○	SP4084	
469	坏蓋	口径(11.6) 残高 4.6	丸い天井部。口縁部はほぼ垂直に垂下し口端部は内面に段をなす。稜は水平方向に張り出す。	(天)回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長（1～3） 細粒 ◎	SP4083	
470	坏蓋	口径(11.0) 残高 3.4	口縁部は外傾しながら垂下し口端部は内面に段をなす。稜は水平方向に張り出す。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長（1） 密 ○	SP2013	
471	坏蓋	口径(12.5) 残高 3.6	口縁部は内湾気味に垂下し口端部は内面に段をなす。稜は水平方向に張り出す。	(天)回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長（1～3） 細粒 ○	SP4061	
472	坏蓋	つまみ径 2.8 残高 1.5	つまみ。中央部がやや突出する。	回転ナデ	ナデ	青灰色 青灰色	石・長（1～2） ○	SP2036	

ＳＰ出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)/(内面)	胎土/焼成	備考	図版
473	坏身	口径(11.0) 残高 3.8	立ち上がりは垂直に立ち上がり口端部内面に段をなす。受部は水平方向に伸びる。	㊀回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1～2) ○	SP2032	
474	坏身	口径 (9.6) 残高 3.8	立ち上がりは内湾気味に立ち上がり口端部内面に段をなす。受部は外上方に伸びる。	㊀回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	石・長 (1) ○	SP4061	
475	坏身	残高 3.3	立ち上がりは内湾気味に立ち上がり受部は外上方に伸びる。	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1～2) ・ △	SP1002	
476	高坏	残高 2.0	坏部～脚部。透かし痕あり。	回転ナデ	回転ナデ ナデ	灰色 灰色	石 (1～3) 密 ◎	SP1145	
477	皿	口径 8.2 器高 2.0 底径 5.0	口縁部は内湾気味に立ち上がり口端部は丸くおさめる。	㊀回転ナデ ㊁回転糸切り	回転ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2) 金 ◎	SP3157	
478	皿	口径 9.2 器高 1.8 底径 6.1	口縁部は内湾気味に立ち上がり口端部は丸くおさめる。全体に厚手のつくり。	㊀回転ナデ ㊁回転糸切り	回転ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長(1～2) 金 ◎	SP3157	
479	皿	口径 8.9 器高 1.3 底径 6.4	口縁部は短く外反し口端部は丸くおさめる。	マメツ	マメツ	淡黄橙色 淡黄橙色	石・長 (1) ○	SP4264	
480	皿	口径 (9.2) 器高 2.1	口縁部はやや丸みをもちながら立ち上がり口端部は尖り気味におさめる。	ナデ	ナデ	灰色 灰色	密 ○	SP2120	
481	皿	底径 7.5 残高 1.1	平底の底部。	㊀マメツ ㊁回転糸切り (マメツ)	マメツ (一部ヨコナデ)	淡黄色 淡黄色	微砂 ○	SP1216	
482	埦	口径(15.8) 器高 4.9 底径 6.5	口縁部は内湾気味に立ち上がり口端部は肥厚し丸くおさめる。	㊀マメツ ㊁マメツ (糸切り痕)	マメツ	淡白色 淡白色	石・長(1～3) ○	SP1216	
483	埦	口径(14.8) 残高 3.5	口縁部は内傾気味に立ち上がる。	ナデ	ナデ	灰色 灰色	密 ○	SP1037	
484	土釜	口径(20.4) 残高 10.3	口縁部は内湾気味に立ち上がる。口端部から少し下がった位置に断面三角形の突帯をめぐらす。	㊀ヨコナデ ㊄ナデ	ナデ (マメツ)	橙褐色 灰黄橙色	石・長(1～4) 赤色土粒 ○	黒斑 SP2185	
485	土釜	残高 6.5	脚部。	マメツ (一部ナデ)		橙褐色	石・長(1～2) ◎	SP4163	
486	こね鉢	口径(24.9) 残高 5.2	口端部は上方に拡張される。端部外面に自然釉が付着。	㊀施釉 ㊄ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長 (1) ○	SP2111	
487	甕	口径(16.2) 残高 5.0	口縁部は強く折れ曲げられ短く外傾する。口端部は丸くおさめる。全体に厚手のつくり。	㊀ナデ ㊃タタキ	ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	SP3124	

表86　ＳＰ出土遺物観察表 石製品

(1)

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
488	石庖丁	1/2	結晶片岩	4.7	6.4	0.6	26.33	ＳＰ4165	
489	石庖丁	1/2	結晶片岩	3.1	4.5	0.2	6.53	ＳＰ4042	
490	両刃石斧	1/2	結晶片岩	8.5	5.5	1.6	142.25	ＳＰ2200	

ＳＰ出土遺物観察表 石製品

(2)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
491	敲石	完形	砂岩	9.7	9.0	8.2	1150.0	ＳＰ2264	
492	敲石	ほぼ完形	花崗岩	7.1	6.7	3.9	286.49	ＳＰ2292	

表87　ＳＰ出土遺物観察表 装身具

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
493	臼玉	ほぼ完形	凝灰岩 淡灰色	2.0	4.0	0.2	0.05	ＳＰ4241	

表88　層位不明出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
494	甕	底径 (6.2) 残高 5.1	くびれのある上げ底の底部。	ナデ	ナデ	橙色・明赤褐色 にぶい褐色	石・長（1～3） ○		
495	甕	底径 (5.6) 残高 3.2	平底の底部。	マメツ ナデ	ナデ	橙色 にぶい橙色	石・長（1～2） ○		
496	甕	底径 (7.2) 残高 2.9	平底の底部。	ナデ	ナデ	橙色 にぶい橙色	石・長（1～3） ○		
497	甕	底径 (6.7) 残高 2.4	平底の底部。	ミガキ ナデ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1） ◎		
498	壺	口径(16.0) 残高 3.7	ゆるやかに外傾する口縁部。口端部は「コ」の字状に仕上げる。	ミガキ	ミガキ	橙色 橙色	石・長（1～2） ○		
499	壺	残高 3.6	大きく外傾する口縁部。口縁部下に不明瞭な段と二条の沈線をもつ。	ヨコナデ ミガキ	ミガキ ナデ	橙色 にぶい橙色	石・長（1～2） 金 ◎		
500	絵画土器	残高 2.1	胴部片。ヘラ状の工具による施文を施す。	ハケ→施文	マメツ	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長（1～2） ○		
501	壺	底径 4.0 残高 4.3	やや上げ底の底部。	ミガキ（粗い） ナデ	ナデ （一部ミガキ?）	橙褐色 橙色	石・長（1～5） 金 ◎	黒斑	
502	壺	底径 (7.8) 残高 3.8	平底の底部。	マメツ	マメツ	橙色 にぶい橙色	石・長（1～5） 赤褐色土粒 ◎		
503	壺	残高 6.2	小型品。扁球形の胴部に丸底の底部をもつ。	(胴上)ハケ（6～7本/cm）→ナデ (胴下)ナデ	強いナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1） 金 ◎	黒斑	
504	壺	口径 (7.4) 残高 6.3	小型品。口縁部は直線的に立ち上がり、口端部は尖り気味におさめる。球形の胴部。	ナデ （マメツ）	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色・乳灰色	密 ○		
505	高坏	残高 5.6	三角錐の柱部に屈曲して外反する裾部をもつ。	(柱)ヨコナデ ナデ (裾)ヨコナデ	(柱)ケズリ (裾)ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	密 ◎		
506	高坏	底径 (11.2) 残高 4.6	柱部から屈曲して内湾気味に広がる裾部。端部は尖り気味に接地する。やや厚手のつくり。	マメツ・ハクリ （一部ヨコナデ）	マメツ	灰黄橙色 明黄褐色	石・長（1～6） ◎		

層位不明出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
507	高坏	残高 6.8	柱部。円孔を穿つ。	マメツ	マメツ	淡黄橙色 淡黄橙色	密 金・赤紫色土粒 ○		
508	高坏	残高 2.0	坏部～柱部。	マメツ	(坏底)ナデ (柱)マメツ	橙色 橙色	密 ○		
509	高坏	残高 4.8	柱部。	マメツ (ナデ)	ナデ	橙色 橙色	密 ○		
510	甑	残高 3.3	把手。外上方に伸びる。	ナデ		にぶい橙色	石・長(1～3) 金 ◎		
511	甑	残高 3.8	把手。外上方に伸びる。	ナデ		橙色	石・長(1～4) ◎		
512	甑	残高 4.3	把手。外上方に伸びる。	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1) ○		
513	坏蓋	口径(11.6) 残高 4.1	口縁部は内湾気味に垂下し口端部は内面に段をなす。稜はやや下方に張り出す。	(天)マメツ (口)回転ナデ	回転ナデ	暗灰色・灰色 灰色	密 ◎		
514	坏蓋	口径(14.0) 残高 3.4	口縁部は短く垂下し口端部内面に段をもつ。稜は水平方向に張り出す。	(天)回転ヘラケズリ (口)回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	自然釉	
515	坏身	口径(11.0) 残高 3.6	立ち上がりは内湾気味に立ち上がり口端部内面に段をもつ。受部は水平方向に伸びる。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
516	坏身	口径 (9.4) 残高 3.0	立ち上がりは内湾気味に立ち上がり口端部は尖り気味に仕上げる。受部は水平方向に伸びる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1) ◎		
517	坏身	口径(10.1) 残高 3.4	立ち上がりは内湾気味に立ち上がり口端部内面に段をなす。受部はやや上方に伸びる。	(口)回転ナデ (底)回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○	自然釉	
518	坏身	口径(11.6) 残高 3.1	立ち上がりは内湾気味に立ち上がり口端部内面に段をなす。受部はやや上方に伸びる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ◎		
519	高坏	口径(14.1) 残高 4.9	口縁部は内湾気味に立ち上がり段をもち外反する。外面に波状文と一条の凹線を施す。	(坏上)回転ナデ (坏下)回転ヘラケズリ	回転ナデ	赤灰色 赤灰色	石・長(1) ◎		
520	高坏	口径(10.1) 残高 5.1	立ち上がりは内湾気味に立ち上がり口端部内面に段をなす。受部はやや上方に伸びる。透かし孔痕跡あり。	(坏上)回転ナデ (坏下)回転ヘラケズリ (坏底)回転ヘラケズリ→ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1) 密 ◎		
521	壺	残高 5.3	頸部～胴部。頸部に波状文。体部に上下2条の沈線とその間に刺突列点文あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長(1) ○		
522	甕	口径(27.7) 残高 3.6	口縁部は外傾し口端部は肥厚し丸く仕上げる。	回転ナデ	回転ナデ→ナデ 回転ナデ	青灰色 灰色	石・長(1) 密 ◎		
523	壺	口径(15.8) 残高 2.1	口縁部は外傾し口端部近くで屈曲し外反する。口端部は肥厚し方形に仕上げる。	ヨコナデ カキ目	ヨコナデ	灰色 灰色	石・長(1～2) ◎		
524	皿	口径 8.5 器高 1.5 底径 6.7	口縁部は短くやや外反し口端部は尖り気味におさめる。	(口)ヨコナデ (底)ナデ	ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		
525	皿	口径(10.4) 器高 2.0 底径 (6.8)	口縁部は内湾気味に立ち上がり口端部は尖り気味におさめる。	(口)ナデ (マメツ) (底)マメツ	ナデ (マメツ)	乳灰色 乳灰色	石・長(1～2) 密 ◎		

層位不明出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
526	坏	底径 (7.5) 残高 1.3	平底の底部。	回転ナデ 回転糸切り	回転ナデ	乳灰色 乳灰色	石・長 (1) ◎		
527	坏	底径 (7.4) 残高 1.3	やや上げ底の底部。	マメツ	マメツ	乳白色 乳白色	密 ○		
528	坏	底径 (8.8) 残高 0.9	平底の底部。	回転ナデ (マメツ) 回転糸切り痕	マメツ (回転ナデ)	淡灰黄色 淡灰色	密 ◎		
529	坏	底径 (7.0) 残高 0.6	やや上げ底の底部。	マメツ 回転糸切り	マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長 (1) ○		
530	埦	口径(15.3) 残高 5.4	口縁部は内湾気味に立ち上がり口端部は稜をもってやや外反し尖り気味におさめる。	㊐ヨコナデ ㊍ナデ	ナデ	黒灰色 黒灰色	密 ◎		
531	埦	口径(13.3) 残高 4.3	口縁部は内湾気味に立ち上がり口端部付近で直線的に立ち上がり、丸くおさめる。	ナデ (マメツ)	ナデ	乳灰色 乳灰色	石・長 (1～2) ◎		
532	壺	口径(11.9) 残高 3.0	口縁部は肥厚しながら内湾し口端部は短く直立して丸くおさめる。	㊐回転ナデ ㊍施釉	㊐回転ナデ ㊍施釉	褐色・青紫色 褐色・青紫色	密 ◎		
533	甑	残高 0.9	底部。円孔を有する。	マメツ	ナデ	黒灰色 淡褐灰色	砂粒 (1) 密 ◎	黒斑	
534	こね鉢	底径(12.8) 残高 4.8	底部。	㊍下回転ナデ ㊎回転ヘラ切り	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
535	擂鉢	口径(31.8) 残高 5.2	口縁部は上下方に肥厚される。口端部外面に2条の沈線を施す。	ヨコナデ	ナデ ヨコナデ	赤橙色 にぶい赤橙色	密 ◎		
536	碗	底径 (6.0) 残高 2.9	高台は削り出しによる。外面の高台と坏部の境に刺突文を施す。内面に櫛歯状工具による文様を描く。	施釉 ㊍高台削り出し	施釉	灰オリーブ色 灰オリーブ色	精 ○		
537	碗	底径 (7.3) 残高 2.5	高台は削り出しによる。高台内部は釉を削り取っている。	施釉 ㊍高台削り出し	施釉 (ヨコナデ)	オリーブ黄色 灰オリーブ色	精 ○		
538	碗	底径 5.1 残高 1.7	底部中央に「二本松焼」の刻印が押される。	工具による施文様	ナデ	赤灰色 にぶい赤褐色	密 ◎		

表89 層位不明出土遺物観察表 石製品

(1)

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
539	柱状片刃石斧	ほぼ完形	結晶片岩	7.9	1.6	1.0	25.83		
540	石鏃	完形	サヌカイト	2.1	1.6	0.3	0.93		
541	石鏃	完形	サヌカイト	2.1	1.4	0.3	0.73		
542	石庖丁	1/2	結晶片岩	4.4	4.8	0.6	16.89		

層位不明出土遺物観察表 石製品

(2)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
543	石庖丁未製品	完形	結晶片岩	13.3	7.3	1.1	157.17		
544	石庖丁未製品	1/2	結晶片岩	7.1	7.3	1.3	105.53		
545	石庖丁未製品	完形	結晶片岩	7.9	6.1	1.4	142.79		
546	砥石	1/4	砂岩	4.9	3.8	2.9	78.45		
547	台石	完形	砂岩	11.3	9.2	5.4	1020.0		
548	台石	完形	砂岩	13.5	12.4	4.8	1338.0		
549	敲石	ほぼ完形	砂岩	13.5	9.4	4.4	647.0		
550	原材（礫素材）	ほぼ完形	赤色珪質岩	3.7	5.7	2.3	62.05		

表90 層位不明出土遺物観察表 装身具

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
551	臼玉	ほぼ完形	凝灰岩 黒褐色	0.4	0.7	0.3	0.19		

表91 層位不明出土遺物観察表 金属製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
552	鉇	1/3	鉄	5.0	1.6	(0.1)	9.26	先端部のみ残存。	10
553	袋状鉄製品	1/5	鉄	3.2	2.7	(0.1)	3.98	鞘尻の可能性あり。	10
554	釘	2/3	鉄	4.7	0.55	(0.55)	7.73	頭部と先端部を欠く。	10
555	環状金具	1/3	鉄	1.5	1.2	0.4	5.07	頭部のみ残存。	10
556	銑鉄塊	ほぼ完形	鉄	2.7	2.3	1.7	21.32	亀裂の入り方から鋳造品の可能性あり。	10

第３章

筋違（すじかい）Ｎ遺跡

第3章　筋違Ｎ遺跡

１．調査の経過

(1)調査に至る経緯

平成11年３月19日、仙波茂夫氏より、松山市福音寺町423－１の宅地分譲にあたり、埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課と呼称する）に提出された。

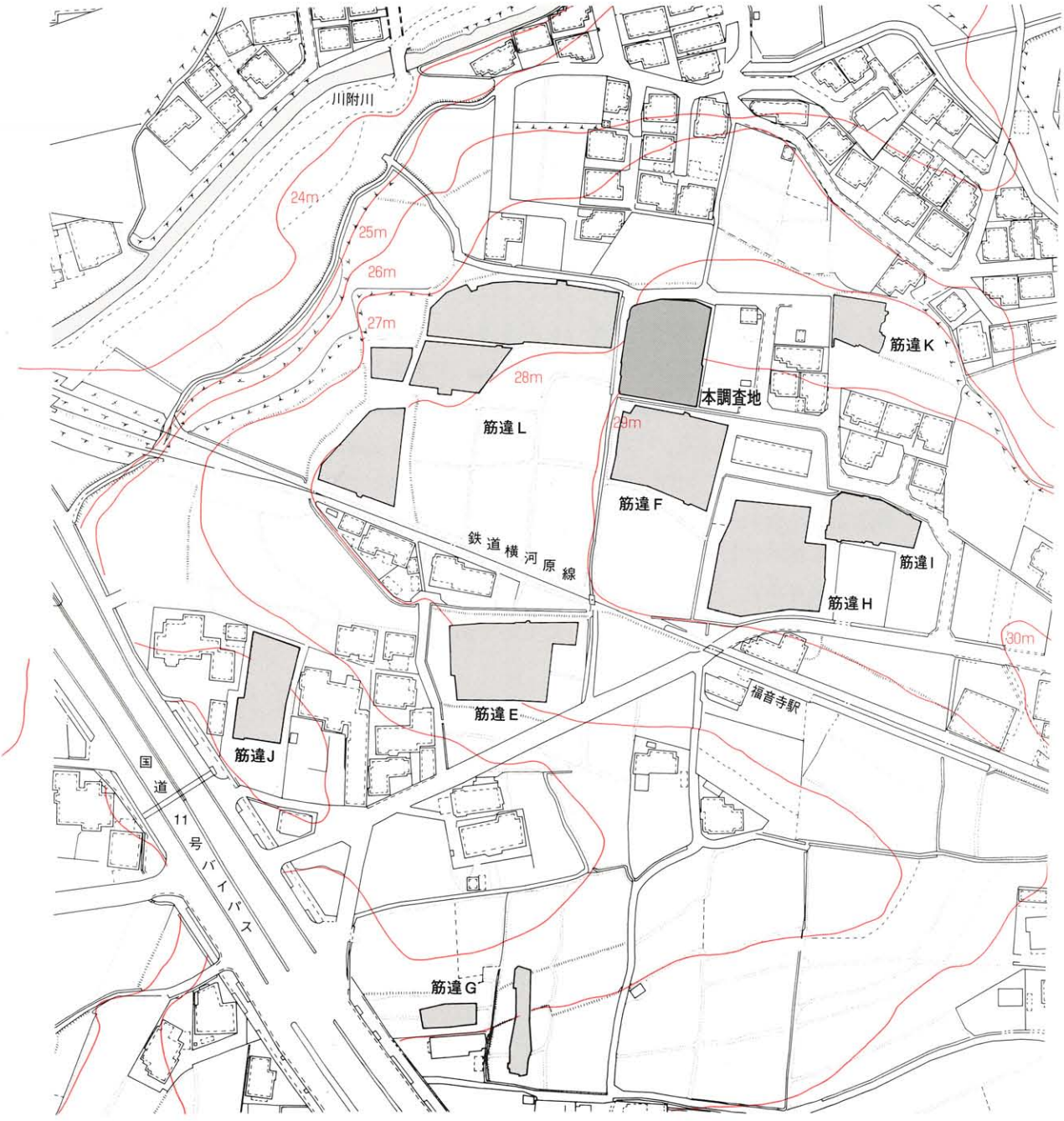
当該地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『No.114　松末遺物包含地』内にある。さらに、筋違遺跡として過去にＡ～Ｍの本格調査が実施され、弥生時代前期・後期、古墳時代後半期、中世の遺構と遺物を確認している。このうち、筋違Ｆ遺跡は当該地の南に隣接し、筋違Ｌ遺跡は西に隣接する。また、南東には弥生時代後期と古墳時代後半期の大規模集落である福音小学校構内遺跡が位置する。

文化教育課は申請地における埋蔵文化財の有無を確認するため、平成11年３月下旬に試掘調査を実施した。試掘調査では、４本のトレンチ（Ｔ１～Ｔ４）を設定したところ、申請地の北中央部から遺構が検出された。遺構の埋土からは弥生土器、土師器、須恵器が出土した。これらのことから、当該地の遺跡の存在が明らかになった。この結果を受け、申請者、文化教育課、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センターと呼称する）の三者は、確認された遺跡の取り扱いについて協議をおこない、協議では、宅地分譲に伴って消失する遺跡に対して、記録保存のための本格調査を実施することにした。埋文センターは申請者の協力のもと、平成11年11月１日から翌年１月14日までに発掘調査をおこなった。調査は、申請地を含めた周辺地域における弥生・古墳時代の集落の広がりと、その構造の解明を主目的としたものである。

(2)調査の経緯

発掘調査（屋外調査）は、平成11年11月１日から開始した。試掘調査の成果を基に、申請地の北半部を発掘区とし、重機を用いて地表下20～40cmまでの土層を掘削した。廃土は申請地内で処理した。５日からは本格的に作業員を動員し、人力によって遺構の検出を試みた。10日までⅣ層上面における遺構の検出をおこない、竪穴式住居址、掘立柱建物址、土坑、柱穴等多数の遺構を確認した。11日には、遺構検出状況の写真撮影をおこなう。検出した遺構の調査は、配置図の作成と埋土の記録からはじめた。以下、竪穴式住居址の調査を中心に取り上げておきたい。

竪穴式住居址は、ＳＢ４から調査をはじめ、次にＳＢ３の精査にとりかかった。ＳＢ３の遺存は比較的良好で、多量の遺物が出土した。そのため、ＳＢ３は埋土の掘り下げと併行して、24日～12月２日に遺物の出土状況の平面測量をおこなった。12月３日にはＳＢ３の遺物出土状況の写真撮影。遺物のレベル測量をおこなった後に、遺物を取り上げた。６日にはＳＢ１の精査もはじめ、７日にはＳＢ３の床面を精査し、主柱穴と炉の配置を確認した。15日には遺構完掘状況の写真撮影を実施、16日には、調査区の拡張をおこない、４本のトレンチ（Ｔ５～Ｔ８）を設定した。その結果、土坑１基と柱穴32基を検出した。20日、Ｔ５～Ｔ８の遺構検出状況の写真撮影。21日、調査指導のため愛媛大学の村上恭通先生が現場来訪。ＳＫ２から須恵器の坏身と管玉が出土する。ＳＰ100からは須恵器の坏蓋が出土した。27日、Ｔ５～Ｔ８の遺構完掘状況の写真撮影を実施する。28日～１月４日まで、調査休止。平成12年１月５日から調査再開する。11日には、調査の検討会を実施する。12日、ＳＢ１床面の確認調査を実施。13日に出土遺物・発掘道具の撤収、14日には事務所の撤去をおこない、同日をもっ



第93図　調査地位置図（縮尺 1 / 2,000）

て屋外調査を終了した。

整理作業（室内調査）は17日から実施する。まず出土遺物の洗浄と注記からとりかかり、併行して測量図面、撮影写真の整理台帳記入をおこなった。その後、遺物の接合作業を経た後、遺物の実測図作成にとりかかった。また、これと併行して、測量図面の二次原図作成をおこなう。そして、原稿の執筆、図版の浄写、遺物写真の撮影の後に、報告書の割り付けを実施した。報告書作成にかかわる全ての作業が終了したのは平成12年５月末である。

(3)調査組織

調 査 地　松山市福音寺町423－1
遺 跡 名　筋違Ｎ遺跡
調査期間　平成11年11月１日～翌年１月14日
調査面積　572m²
調査委託　仙波　茂夫
調査担当　河野　史知・加島　次郎

2．層 位

筋違Ｎ遺跡は、現在の川附川下流の左岸に位置し、標高29mを測る。福音寺地区には大きく３つの微高地があり、調査地は北に展開する微高地のなかの、標高が最も高い区域に位置する。調査前は水田であった。

層位は、第Ⅰ層から第Ⅵ層まで確認した（第95図）。

第Ⅰ層は二層に分けられ、①層は灰色土（Ｎ6/0）で、層厚15～20cmを測る。本層は現代の耕作土である。②層は橙色土（5ＹＲ7/6）を含む灰色土（Ｎ7/0）で、層厚４～16cmを測る。本層は現代の水田床土である。いずれも調査区の全域に分布する。

第Ⅱ層は二層に分けられ、①層は灰白色土（Ｎ8/0）で、層厚２～12cmを測る。調査区の北東部の一部を除いて広く分布する。本層は旧水田耕作土である。②層は橙色土（5ＹＲ7/8）を含む灰色土（Ｎ6/0）で、層厚２～４cmを測る。調査区北東部の一部を除いて広く分布する。本層は旧水田床土である。

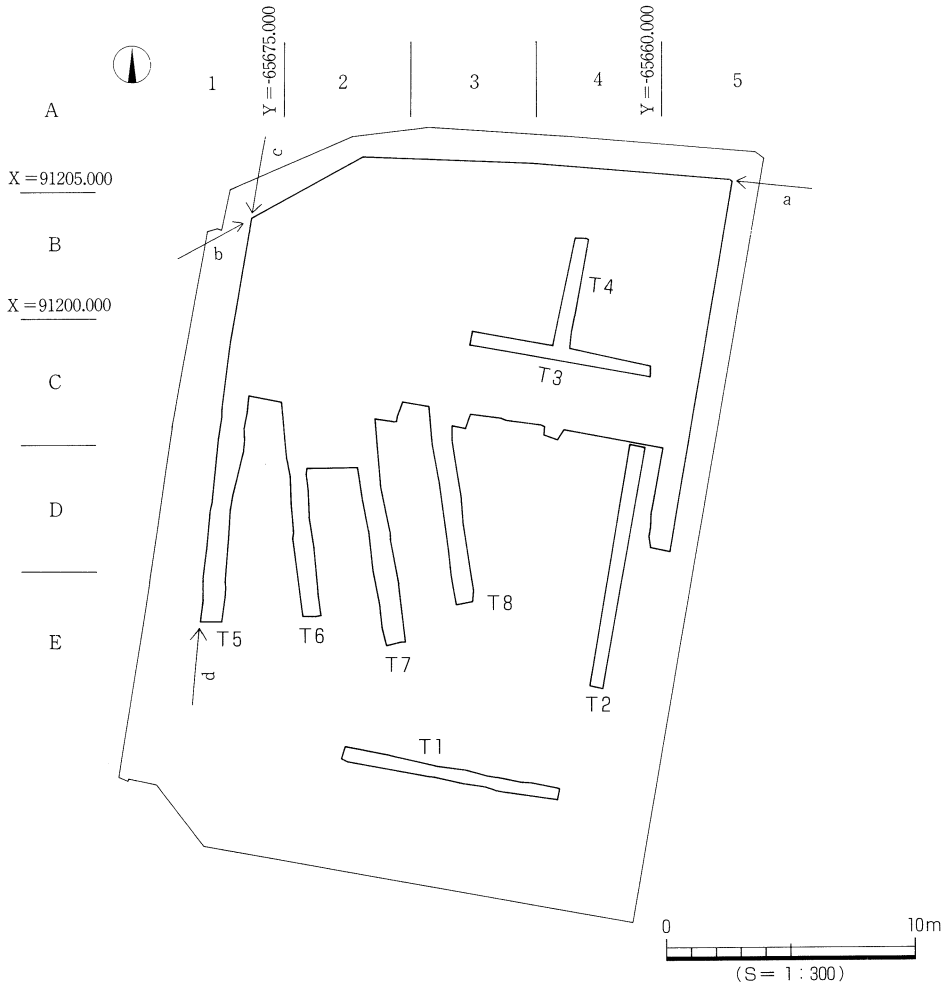
第Ⅲ層は二層に分けられる。①層は黒褐色土（7.5ＹＲ3/1）の砕ブロックを多量に含む褐灰色土（7.5ＹＲ4/1）で、層厚２～10cmを測る。調査区の北東部に分布する。弥生土器と土師器の微細片をわずかに包含する。②層は褐灰色土（7.5ＹＲ4/1）で、層厚６～12cmを測る。調査区の北東から南西にかけて広く分布する。弥生土器もしくは土師器の細片を包含するが、①に比べ量は少ない。

第Ⅳ層は三層に分けられる。①層はにぶい橙色土（7.5ＹＲ7/3）で、土は大変硬くしまっている。層厚４～30cmを測る。調査区の北部中央と南半部を除いて分布する。②層は浅黄橙色土（7.5ＹＲ8/4）で、５㎜大の砂岩礫を多量に含み、ガチガチした質感がある。層厚20～40cmを測る。調査区の南半部に分布する。③層は浅黄橙色土（7.5ＹＲ8/4）で、５～10㎜大の黄色砂岩礫を多量に含み、硬くしまる。調査区の南半部に分布する。遺構の大半はⅣ－①層上面で検出したが、Ⅳ－①層が分布しない調査区南半部ではⅣ－②層上面で検出している。

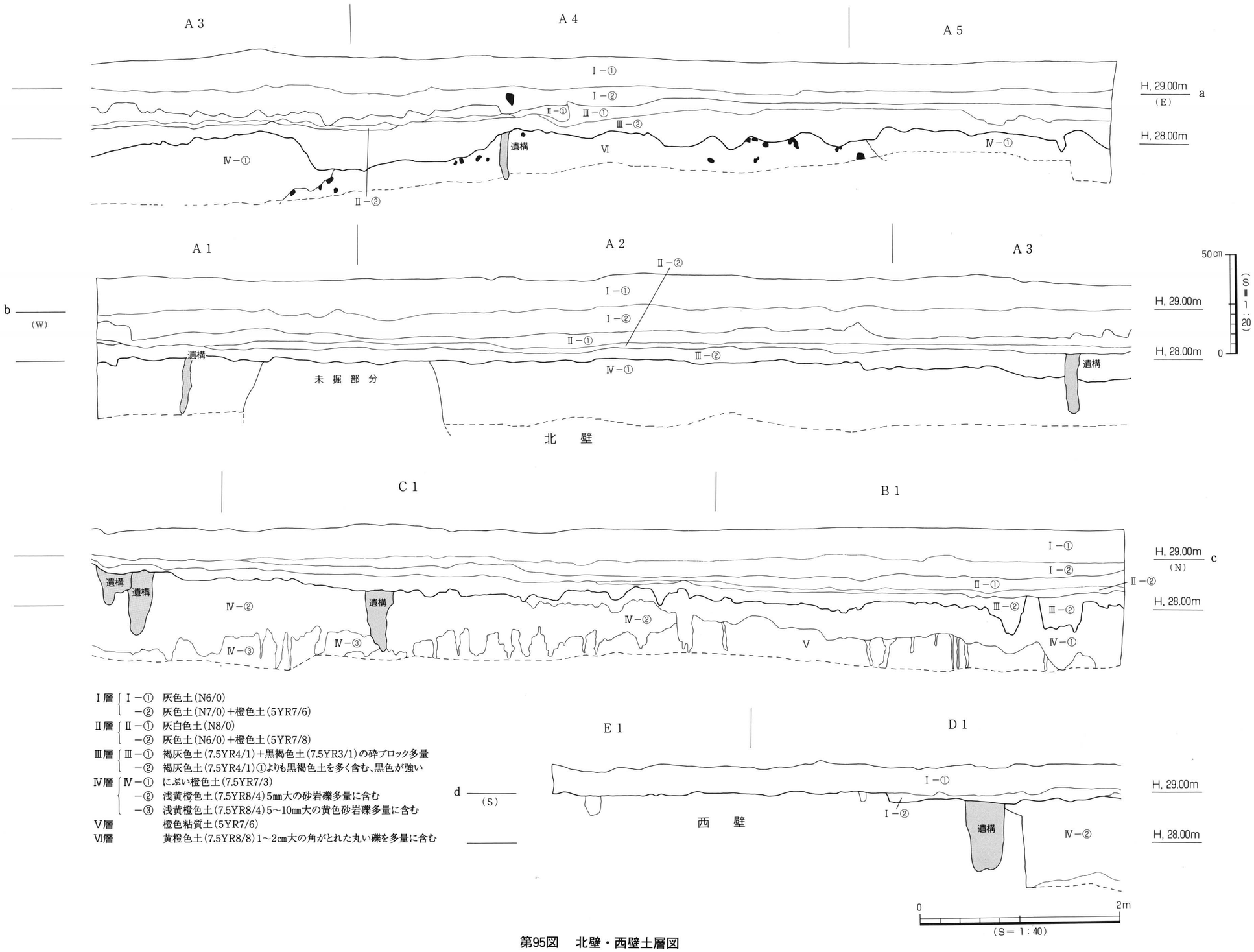
第Ⅴ層は橙色粘質土（5ＹＲ7/6）である。土はきめの細かい粒で構成される。本層上面には細かい凹凸がみられ、凹部には灰色粘質土が薄く堆積している。

第Ⅵ層は黄橙色土（7.5ＹＲ8/8）である。１～２㎝大の角がとれた丸い礫を多量に含み、土は硬くしまっている。調査区の北部に局部的に分布するようである。

なお、第Ⅳ層以下は、人力により深掘りを実施したが、遺物は検出されなかった。土色については農林水産省農林水産技術会議事務局監修の新版標準土色帖（1989）を準拠した。調査にあたり、真北方向を軸として調査地に５ｍ方眼区画を設定した。方眼区画は北から南へ向かってＡ・Ｂ・Ｃ…、西から東へ向かって１・２・３…とし、呼称はこれらを組み合わせることとした（第94図）。

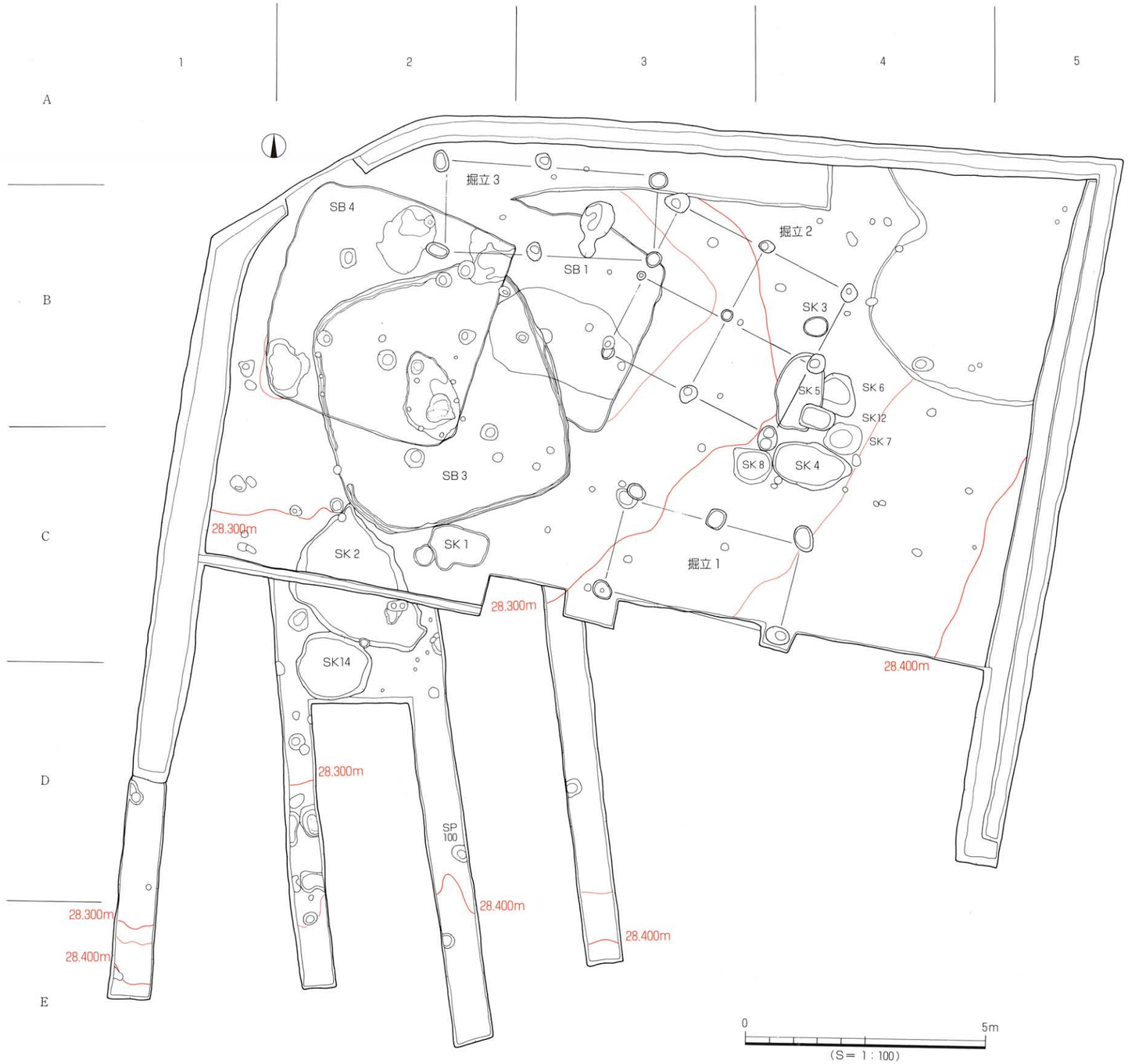


第94図　調査地区割り図（Ｔ１～Ｔ４は試掘トレンチ）



Ⅰ層 Ⅰ－① 灰色土(N6/0)
　　－② 灰色土(N7/0)＋橙色土(5YR7/6)
Ⅱ層 Ⅱ－① 灰白色土(N8/0)
　　－② 灰色土(N6/0)＋橙色土(5YR7/8)
Ⅲ層 Ⅲ－① 褐灰色土(7.5YR4/1)＋黒褐色土(7.5YR3/1)の砕ブロック多量
　　－② 褐灰色土(7.5YR4/1)①よりも黒褐色土を多く含む、黒色が強い
Ⅳ層 Ⅳ－① にぶい橙色土(7.5YR7/3)
　　－② 浅黄橙色土(7.5YR8/4)5㎜大の砂岩礫多量に含む
　　－③ 浅黄橙色土(7.5YR8/4)5～10㎜大の黄色砂岩礫多量に含む
Ⅴ層 橙色粘質土(5YR7/6)
Ⅵ層 黄橙色土(7.5YR8/8)1～2㎝大の角がとれた丸い礫を多量に含む

第95図　北壁・西壁土層図


1
2
3
4
5
A
B
C
D
E
掘立 3
SB 4
SB 1
掘立 2
SK 3
SK 5
SK 6
SK12
SK 7
SK 8
SK 4
SB 3
28.300m
SK 2
SK 1
掘立 1
28.300m
28.400m
SK14
28.300m
SP
100
28.400m
28.300m
28.400m
28.300m
28.400m
0
5m
（S＝ 1 : 100）

第96図　遺構配置図

3．遺構と遺物

本調査では、多数の遺構と遺物を確認した（第96図）。検出遺構は、竪穴式住居址３棟、掘立柱建物址３棟、土坑11基、柱穴87基である。これらの遺構は、弥生時代後期と古墳時代後期に帰属する。なお、報告書作成中に、竪穴式住居址の主柱穴と、掘立柱建物を構成する柱穴については柱穴番号を振り替えており、これらの数は柱穴数に含まれない。また、竪穴式住居址にともなう土坑についても同様に扱った。

遺物は、遺構出土と包含層出土に大別できる。前者は、弥生時代後期と古墳時代後期に帰属するものが多い。後者は、微細片のため、図化できるものはない。包含層が遺構を覆うことから、包含層の形成時期は６世紀以降になる。以下、時代別に遺構と遺物を述べる。

〔１〕弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、竪穴式住居址１棟（ＳＢ３）、土坑５基（ＳＫ３～６・12）である。

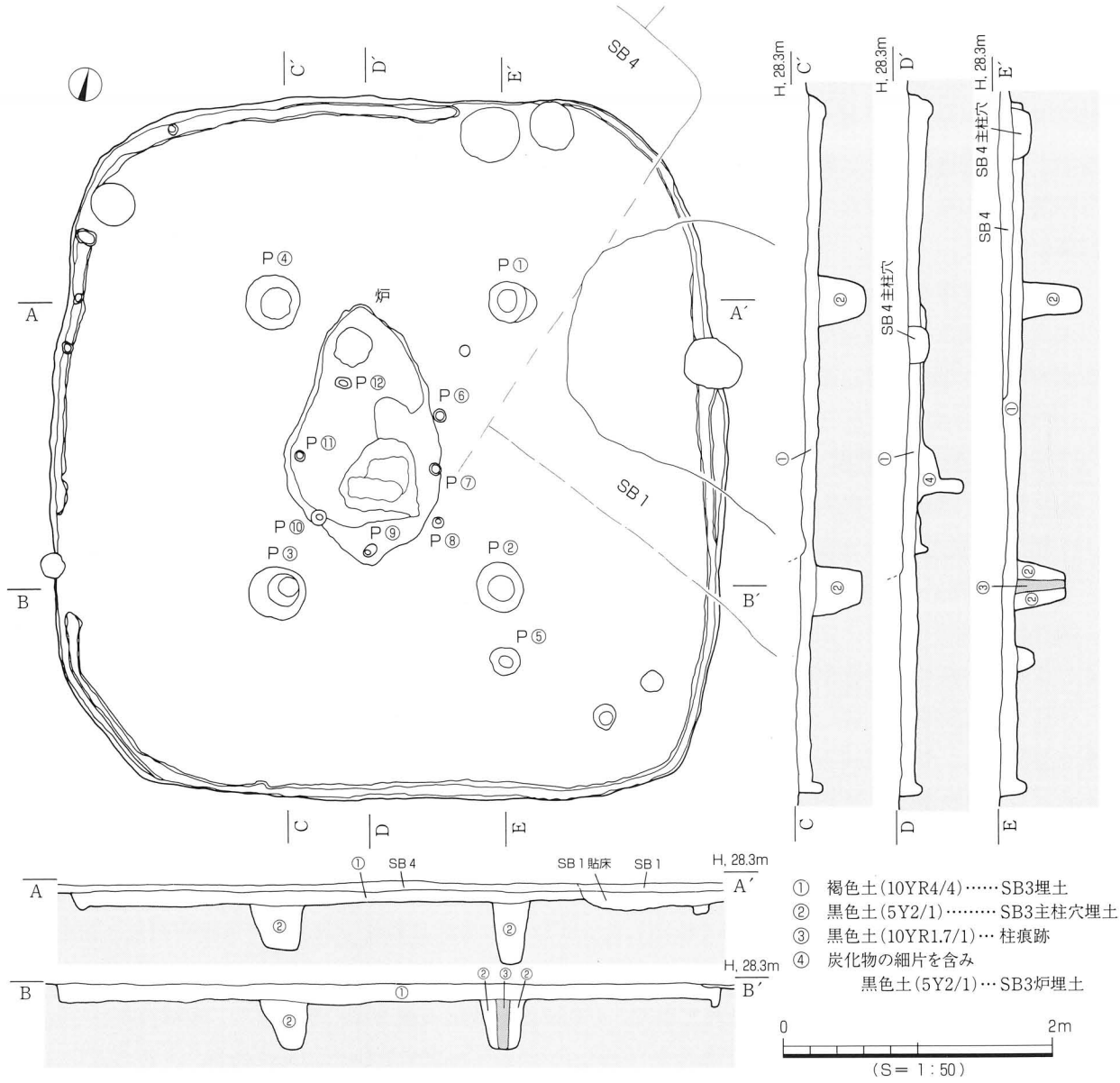
(1)竪穴式住居址（ＳＢ）

ＳＢ３（第97～100図、図版13・14・17・18）

調査区北西部のＢ２・３区、Ｃ２・３区に位置する。東側に営まれたＳＢ１と西側に営まれたＳＢ４によって住居の北半部が切られている。

住居の平面形態は、四方がやや膨らみをもつやや不整な隅丸の方形である。規模は東西長4.98m、南北長5.16m、深さ15cmを測る。埋土は褐色土（10ＹＲ4/4）である。壁際には幅６～15cmの周壁溝がめぐる。周壁溝は断面形態が逆台形を呈し、溝底は５～８cmを測る。主柱を構成する柱穴は４本で、Ｐ①～④である。柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は直径が30～40cm、深さ25～48cmを測る。埋土は黒色土（5Ｙ2/1）で、柱穴の下部には、にぶい橙色土（7.5ＹＲ7/3）の小さな塊が混じる。炉は、これら４本の主柱穴に囲まれた位置で検出した。炉の平面形態は南北を長軸とする楕円形で、規模は南北長1.92m、東西長1.15m、深さ８cmを測る。埋土は黒色土（5Ｙ2/1）で、わずかに炭化物の細片が混じる。炉の南は、深く掘り込まれており、その平面形態は不整な半円形を呈し、規模は南北55cm、東西60cm、深さ30cmを測る。埋土は黒色土（5Ｙ2/1）でわずかに炭化物の細片を含む。土坑の床には、炭化物が３cmの厚さで堆積していた。なお土坑の床面は平坦で、焼けていない。落ち込みを取り囲むように、周辺には小ピット７基が配置する。小ピット群は平面形態が円形と楕円形を呈し、規模は直径８～13cm、深さ0.5～5.0cmを測り、埋土は黒色土（5Ｙ2/1）である。小ピットのなかには、掘り方が落ち込みに向かって傾斜するものがある。

遺物は、住居の埋土・柱穴・炉から出土した。埋土から出土した遺物は、弥生土器、石器、鉄器である。これらの遺物は住居址西半部から出土し、床面から５～10cm遊離していた。弥生土器は破片資料で、接合して完形となるものはない。柱穴出土遺物には、弥生土器と石器がある。これは、主柱穴を構成するＰ②～④と、小穴Ｐ⑤から出土した。Ｐ②は南東部を構成する主柱穴で、遺物は柱痕を取り囲む状態で出土した。遺物は甕１点と石器３点がある。炉からは、深く掘り込まれたところから甕と支脚が出土した。甕は底部片で、支脚は脚部を一部欠くが遺存は良好で、落ち込みの階段部から横倒しの状態で出土した。



第97図　ＳＢ３測量図

出土遺物（第101～109図、図版17・18）

弥生土器は甕、壺、鉢、高坏、器台、支脚、ミニチュア、石器は石庖丁、砥石、敲石、台石等、鉄器は鉇と板状素材が出土している。これらの遺物は、出土状況から共時性が認められるが、出土地点を明確化するために、住居埋土・柱穴・炉の順に分けて記述する。

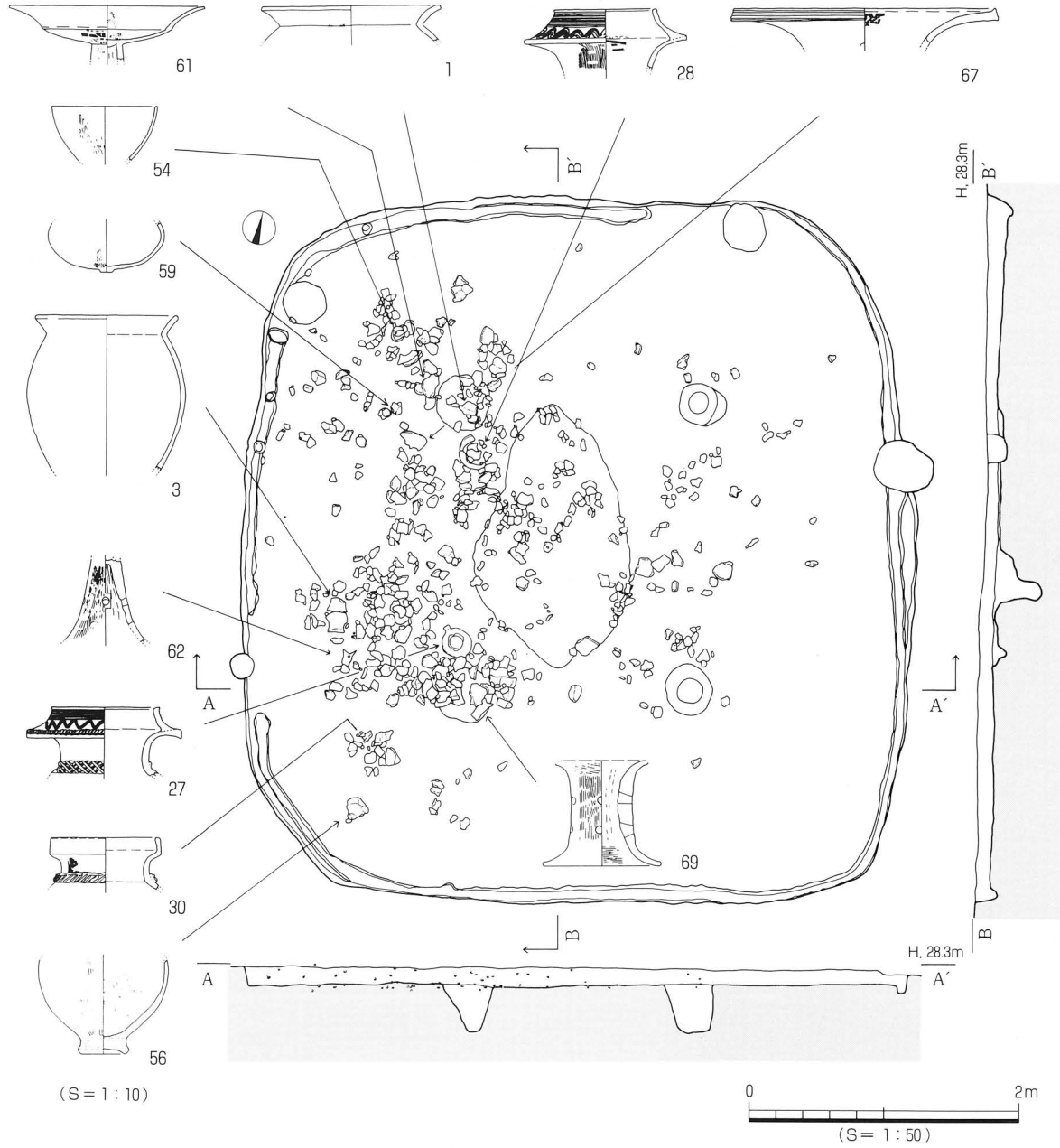
弥生土器

①住居埋土出土品

甕（１～24）　甕には法量に大・中・小の三つのものがある。以下、法量ごとに記述する。調整は刷毛目調整で、タタキはみられない。

大型品（１～３）　口径値が20㎝を超えるものである。

１は口径値が26㎝を測る最も大きいものである。鋭く外反する口縁部をもち、内外面に稜をもつ。３は頸部の締まりは弱く、肩部は張らない。頸部内面の稜はやや弱い。



第98図　ＳＢ３遺物出土状況測量図

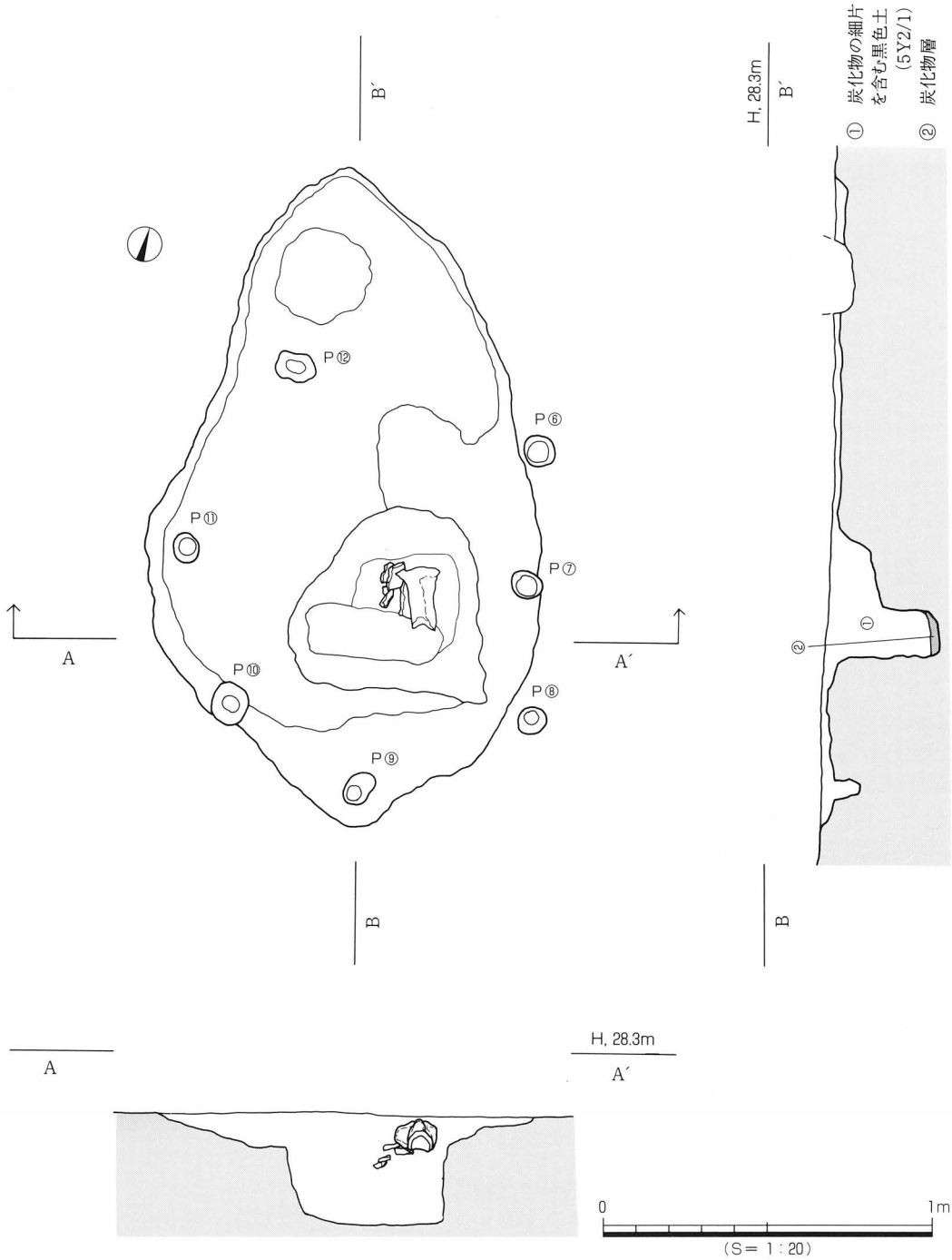
中型品（４～11）　口径値が14～18cmのものである。

頸部が締まるもの（４～６・９・11）と、締まりの弱いもの（７・８・10）がある。５と９は肩部に張りをもち、８は胴中位付近に最大径をもつものである。

小型品（12～14）　口径値が10～14cm未満のものである。

12は口縁端部が広く面取りされ、13は狭く面取りされる。14は胴部の張りは弱く、口端は先細りする。15は口縁部は厚く仕上げられ、口端は先細りする。内外面は横刷毛が施され、外面はナデ消される。他とは色調が異なり、内外面ともにオリーブ黒色を呈する。

底部（16～24）　16～20は小さい立ち上がりをもち、ごくわずかな上げ底、21～24はあいまいな立ち上がりをもつわずかな上げ底と平底である。

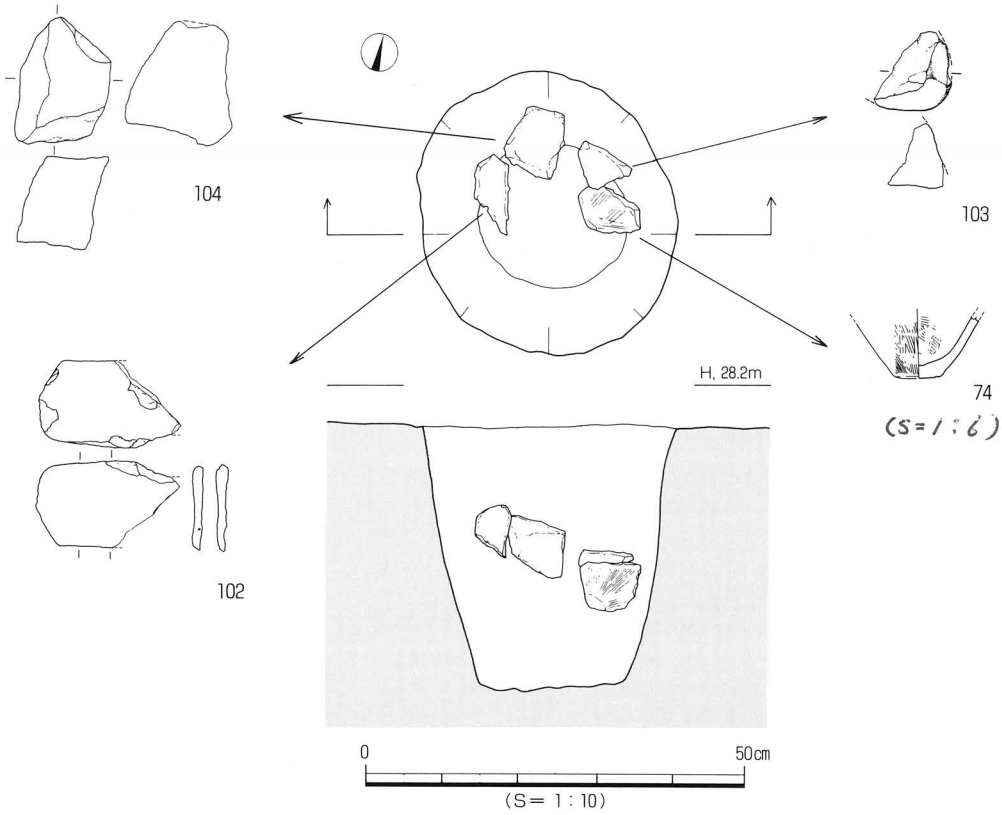


第99図　ＳＢ３炉測量図

壺（25～52）　壺には、複合口縁壺と複合口縁壺でない単口縁壺に大別される。

複合口縁壺（25～31）　口縁接合部の形態に「コ」の字接合のものと、「く」の字接合のものがある。25～28は「コ」の字接合で、二次口縁部外面には施文がみられる。27は接合部に斜位の刻み目文があり、頸部には格子刻みの突帯が巡る。29と30は「く」の字接合で、二次口縁部外面は無文である。頸部には斜位刻みの凸帯が巡る。

単口縁壺（32～40）　32は筒状の口頸部をもち、頸部の締まりが弱い。33と34は頸部が長く、口縁部は緩やかに外反する。33の口縁端部は面取りする。34は頸部に刻みをもつ突帯が巡る。35は頸部が



第100図　ＳＢ３主柱穴Ｐ②測量図

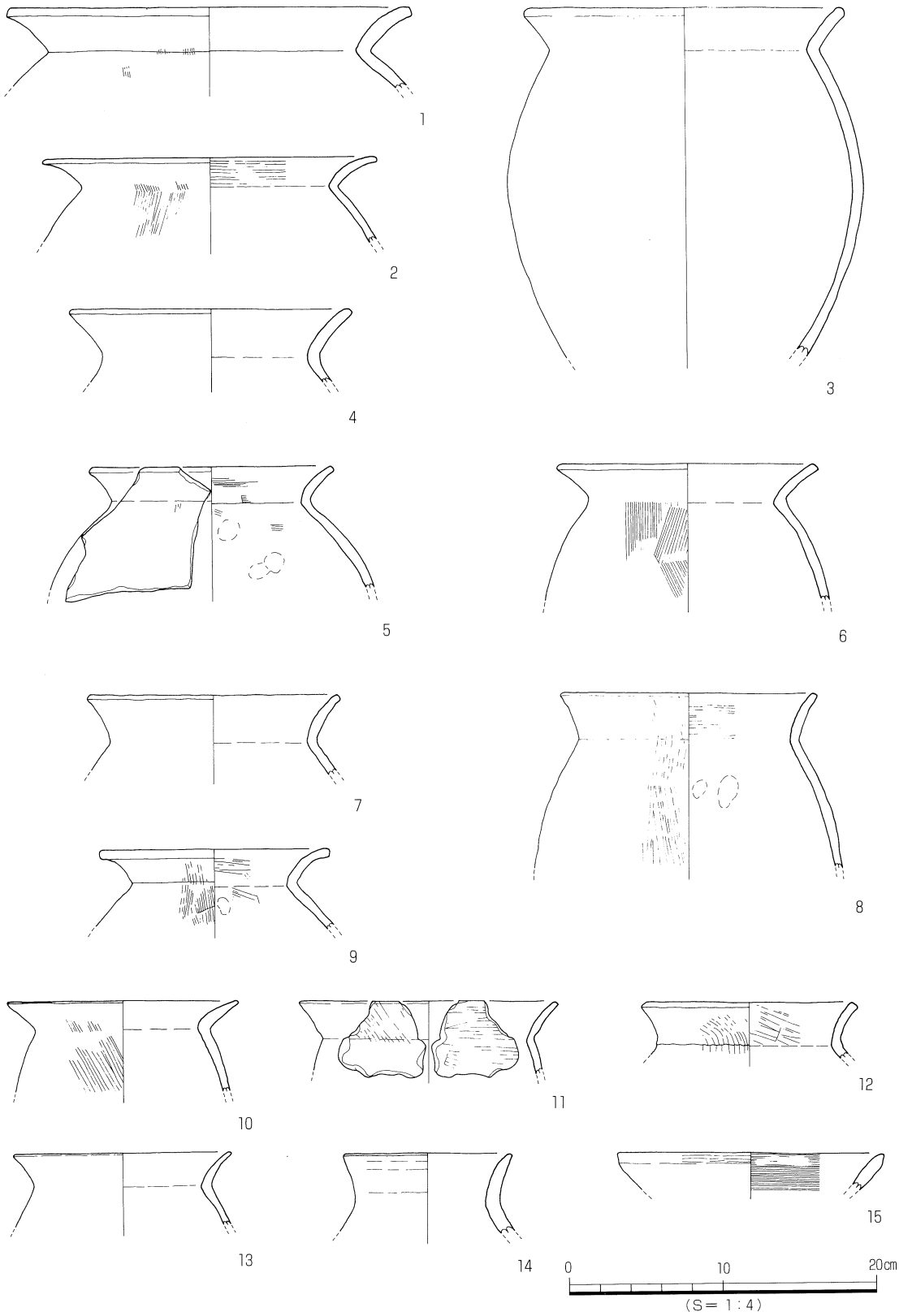
短く、口縁部は大きく外反し、口縁端部は面取りされ、わずかにつまみ上げられる。36と37は長く直立気味に立ち上がる口頸部をもつ。36は口頸部が直立し、口縁端部は面取り気味におさまる。37は口頸部がわずかに外傾して立ち上がる。38と39は扁平球の胴部である。39は頸部下端に半截竹管状工具により直線文と竹管文を施す。40は口縁端部が上下に拡張され、沈線文を施す。他とは色調が異なり、褐色を呈する。41～52は底部である。平底、わずかな上げ底、ボタン状に突出するものなどがある。平底はあいまいな立ち上がりをもつもの（41・42）、立ち上がりをもつもの（45）がある。上げ底には、49のように、焼成後に穿孔されたものがある。50～52はボタン状に突出する底部である。胴部は大きく張る扁平球であることから、先述した36や37のような長い口頸部をもつ壺になる可能性がある。

鉢（53～60）　鉢には、口縁部を折り曲げるものと、直口するものがある。53～55は口縁部で、53が折り曲げによるもの、54と55が直口するものである。後者は口縁端部が丸くおさまる。56～60は底部で、56は大きいくびれをもつ上げ底、57は小さいくびれをもつ平底になる。59と60は、底部がボタン状に突出する。

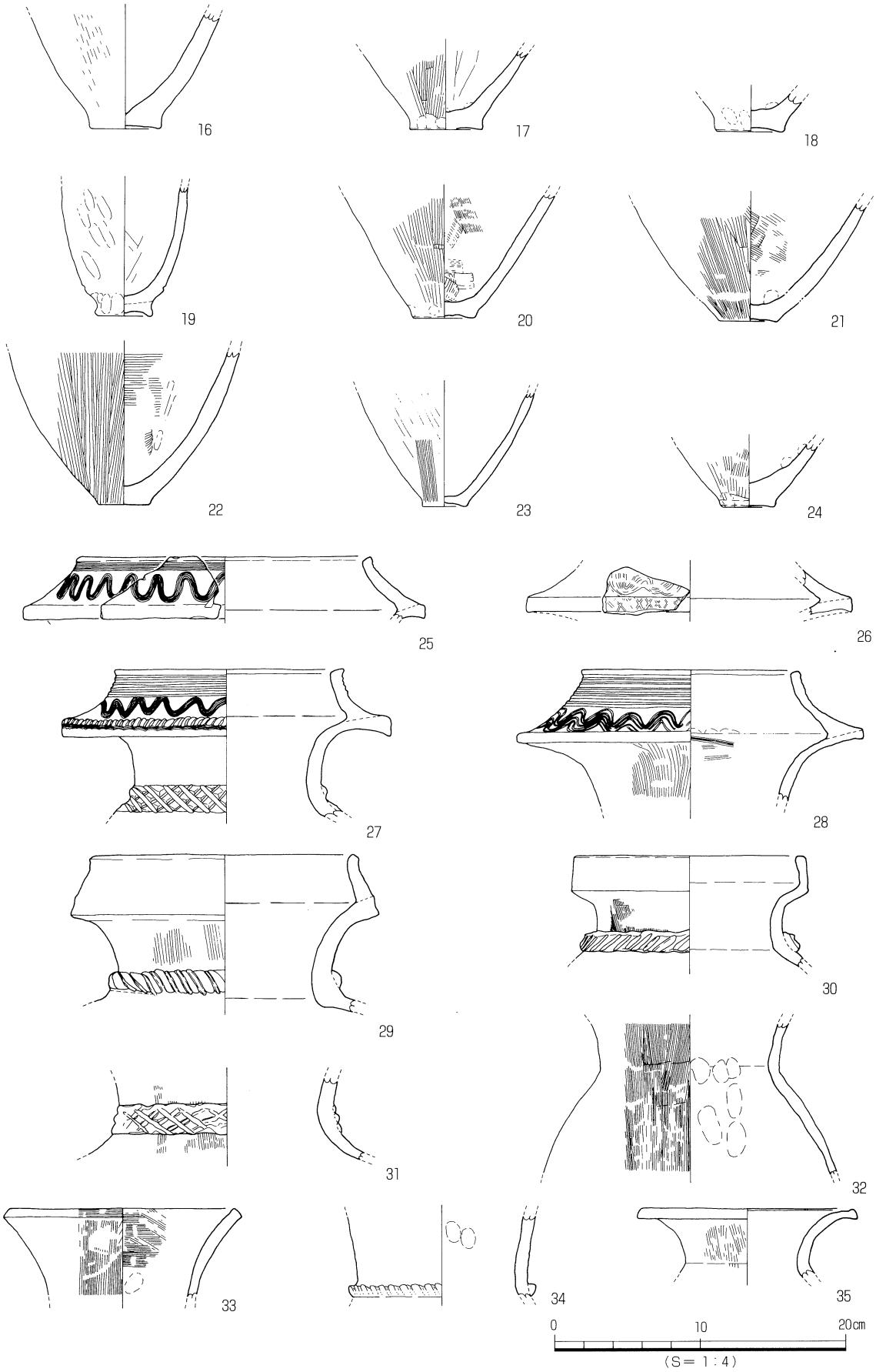
高坏（61～65）　61は坏部が大きく外反する。坏部と脚部との接合部は円盤充填による。62～64は脚部である。62は円孔を２段もつ。

器台（66～68）　66・67は大型品の受部片である。66は口縁端部が上下に拡張され、３条の凹線状の沈線を施文した後に、円形と逆「Ｖ」字状の浮文を貼付する。69と70は小型品である。69は受部と裾部がスカート状に開く器形を呈し、柱部には円孔を２段もつ。

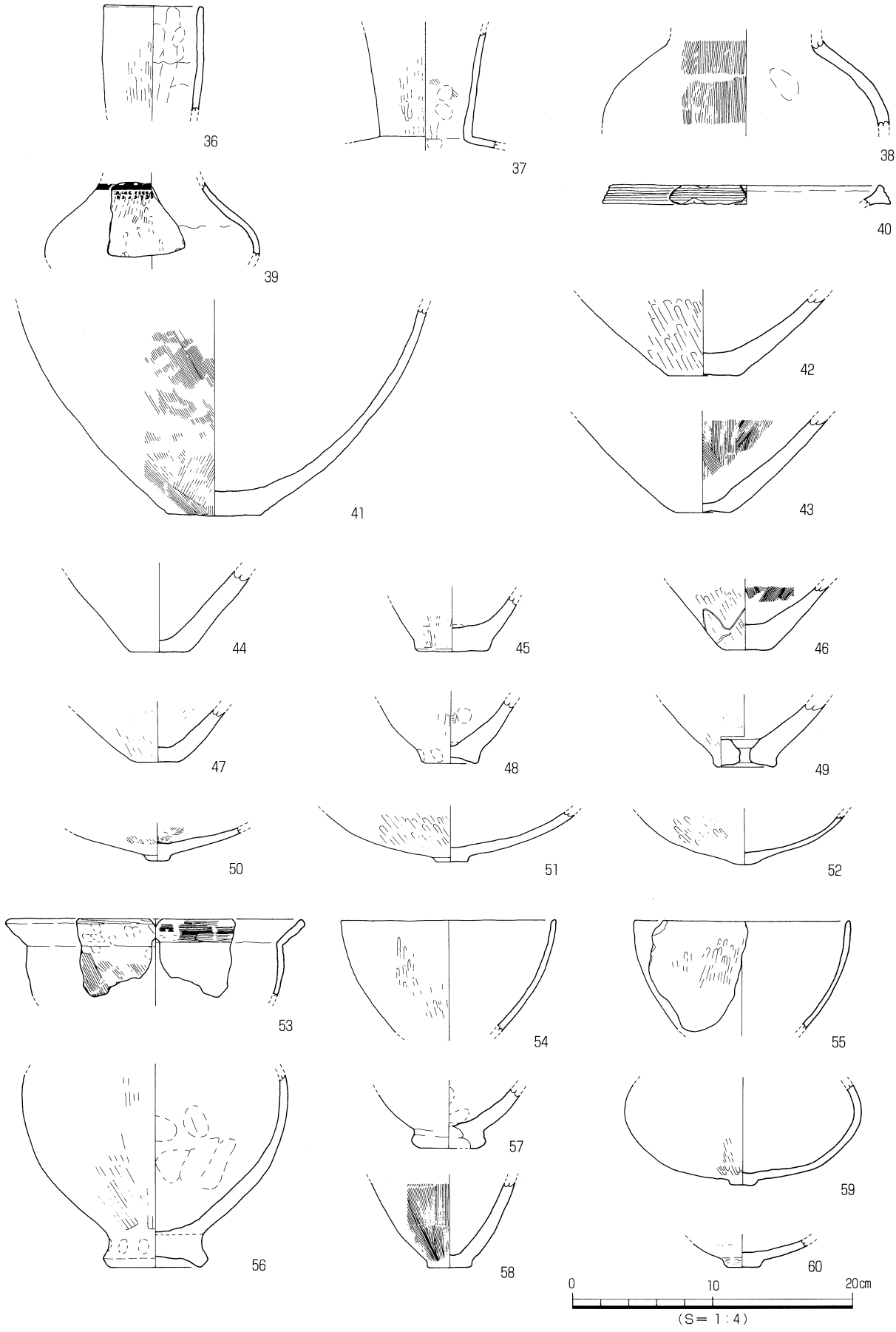
支脚（71・72）　ともに受部片である。71は途中まで中空の角状の突起である。72は粘土を巻き込んで成形する。



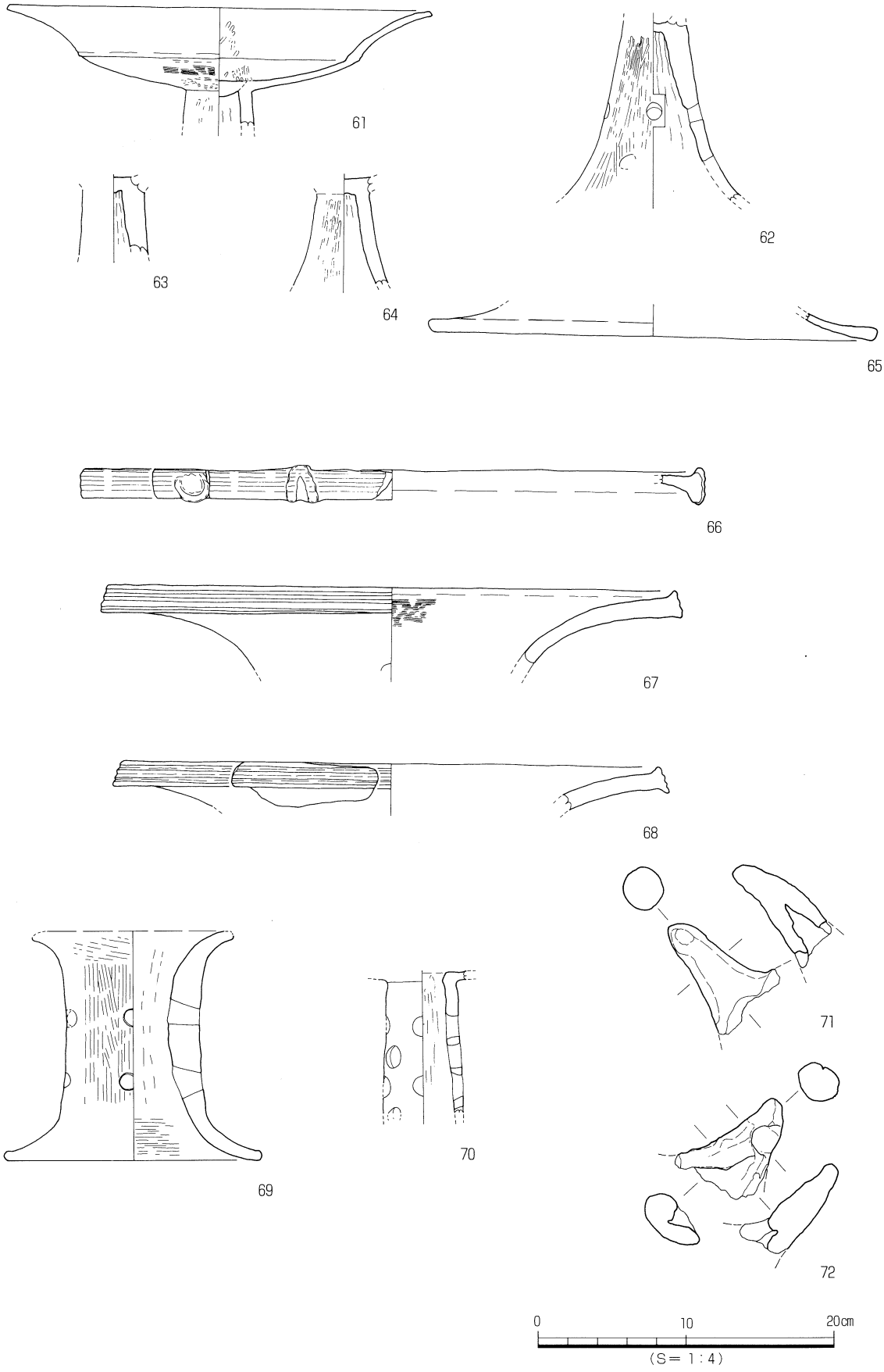
第101図　ＳＢ３出土遺物実測図(1)



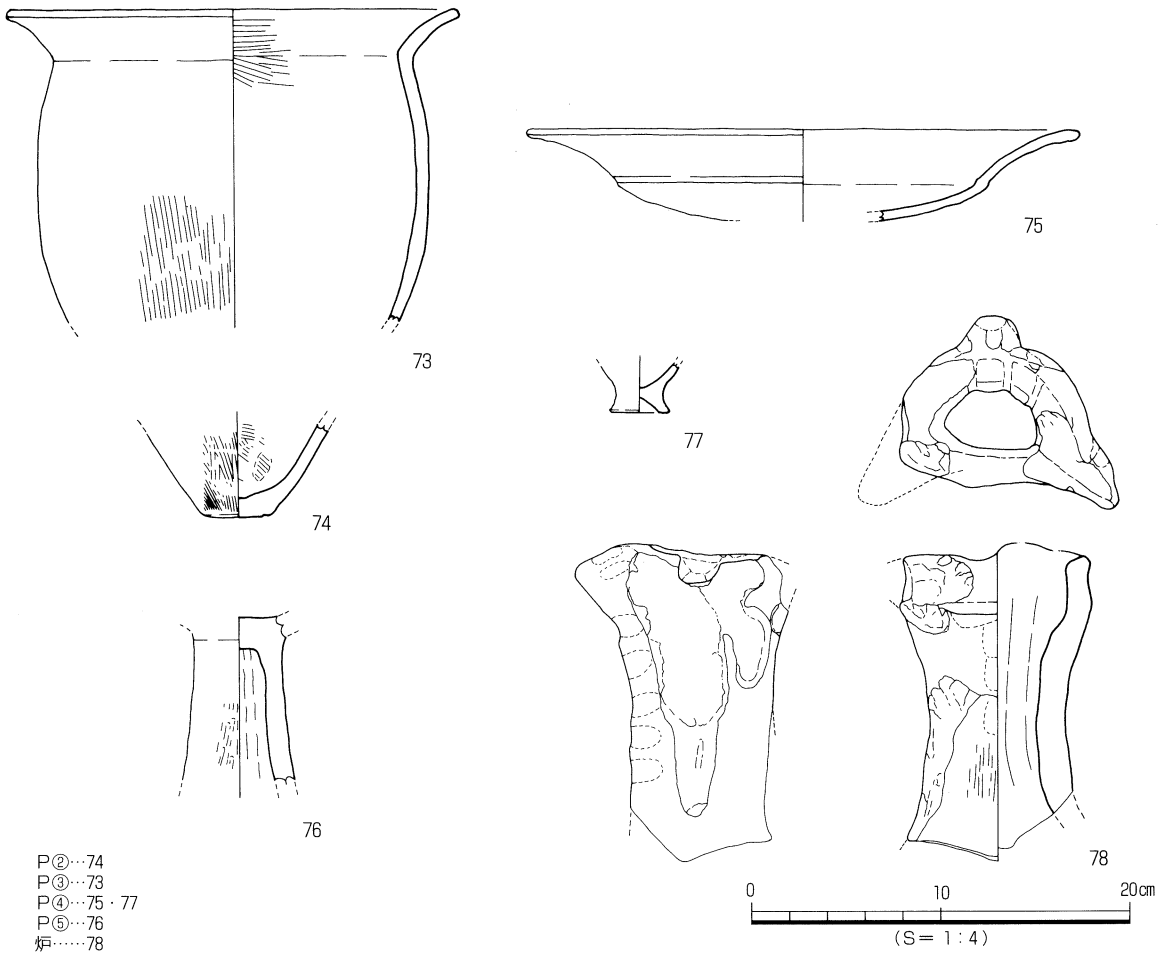
第102図　ＳＢ３出土遺物実測図(2)



第103図　ＳＢ３出土遺物実測図(3)



第104図　ＳＢ３出土遺物実測図(4)



第105図　ＳＢ３出土遺物実測図(5)

②柱穴出土品

73はＰ③、74はＰ②、75・77はＰ④、76はＰ⑤の埋土中から出土した。73と74は甕である。73は大型品で、頸部の締まりは弱く、肩部は張らない。口縁端部は面取りされる。74は立ち上がりをもたない平底になる。75と76は高坏である。75は坏部が大きく外反し、口縁端部は丸くおさまる。77は鉢のミニチュアの可能性がある。

③炉出土品

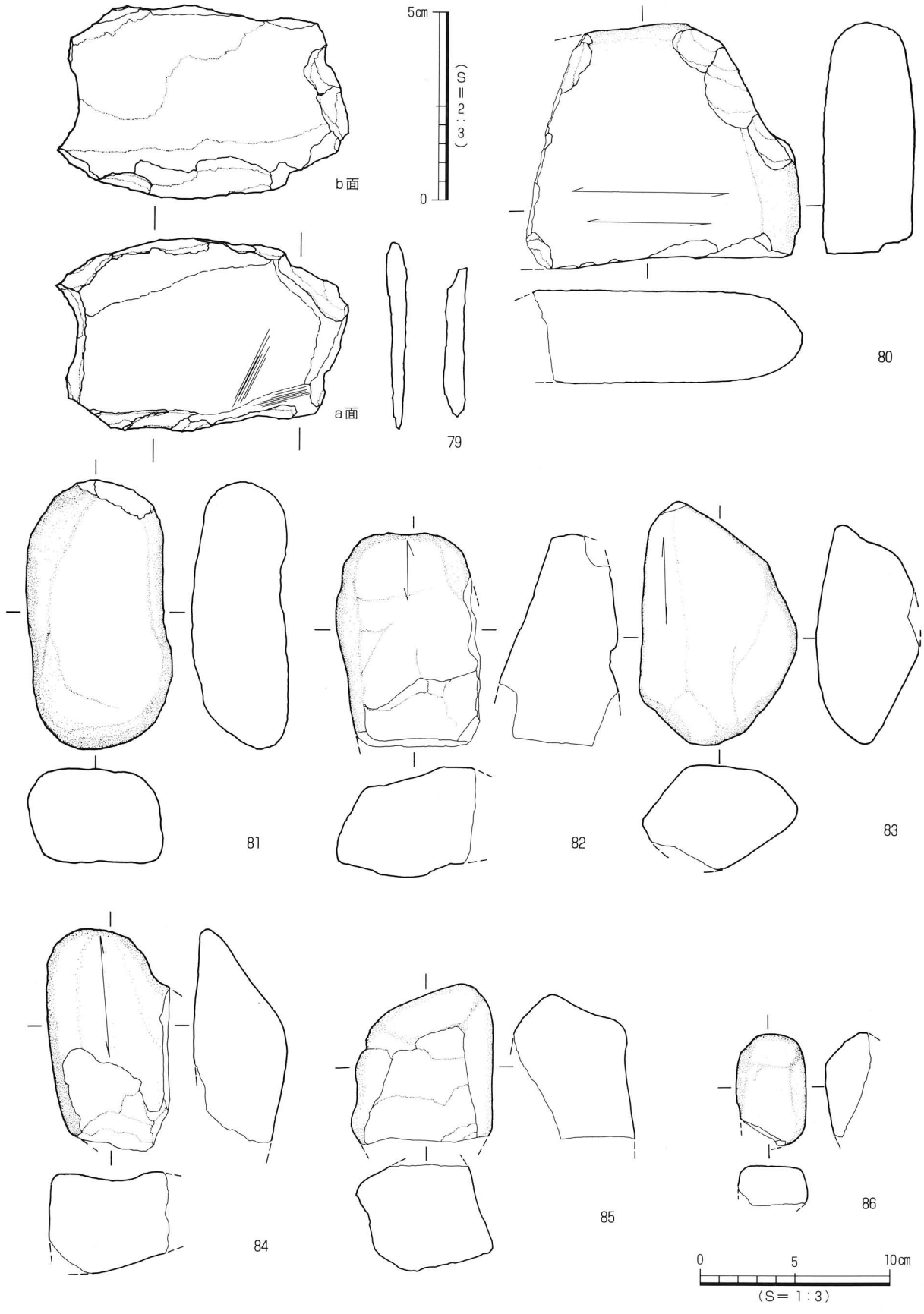
弥生土器には甕と支脚とがあり、甕には図化できない底部片がある。78は支脚である。受部と脚部の一部を欠く。受部は「U」字状の傾斜部をもち、３方向に短い突起がつく。体部は中空である。器面は受熱により一部に黒化がみられ、著しく剝落する箇所がある。

石器（79～103）

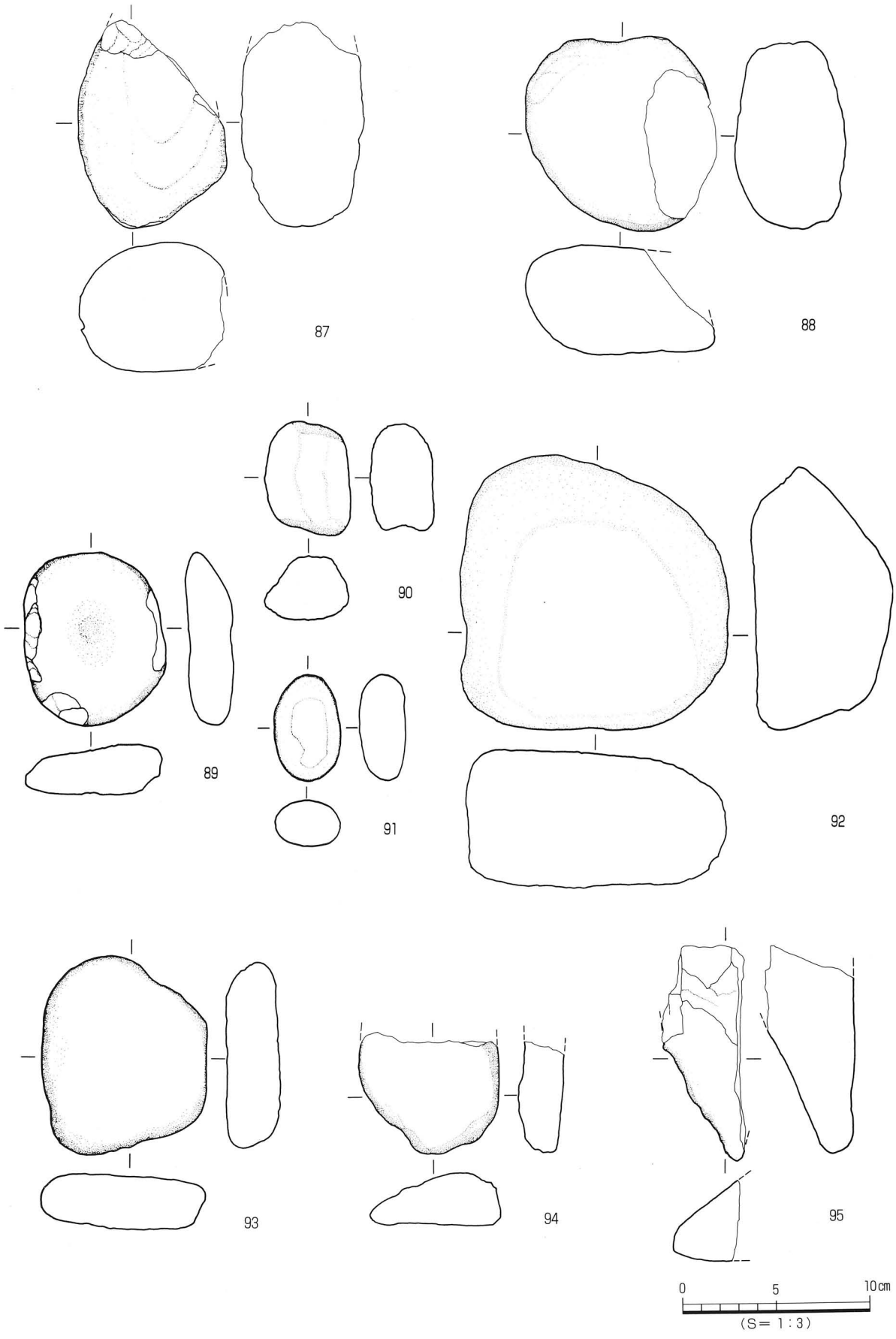
①住居埋土出土品

石器には石庖丁、砥石、台石、敲石の他、小型の礫がある。

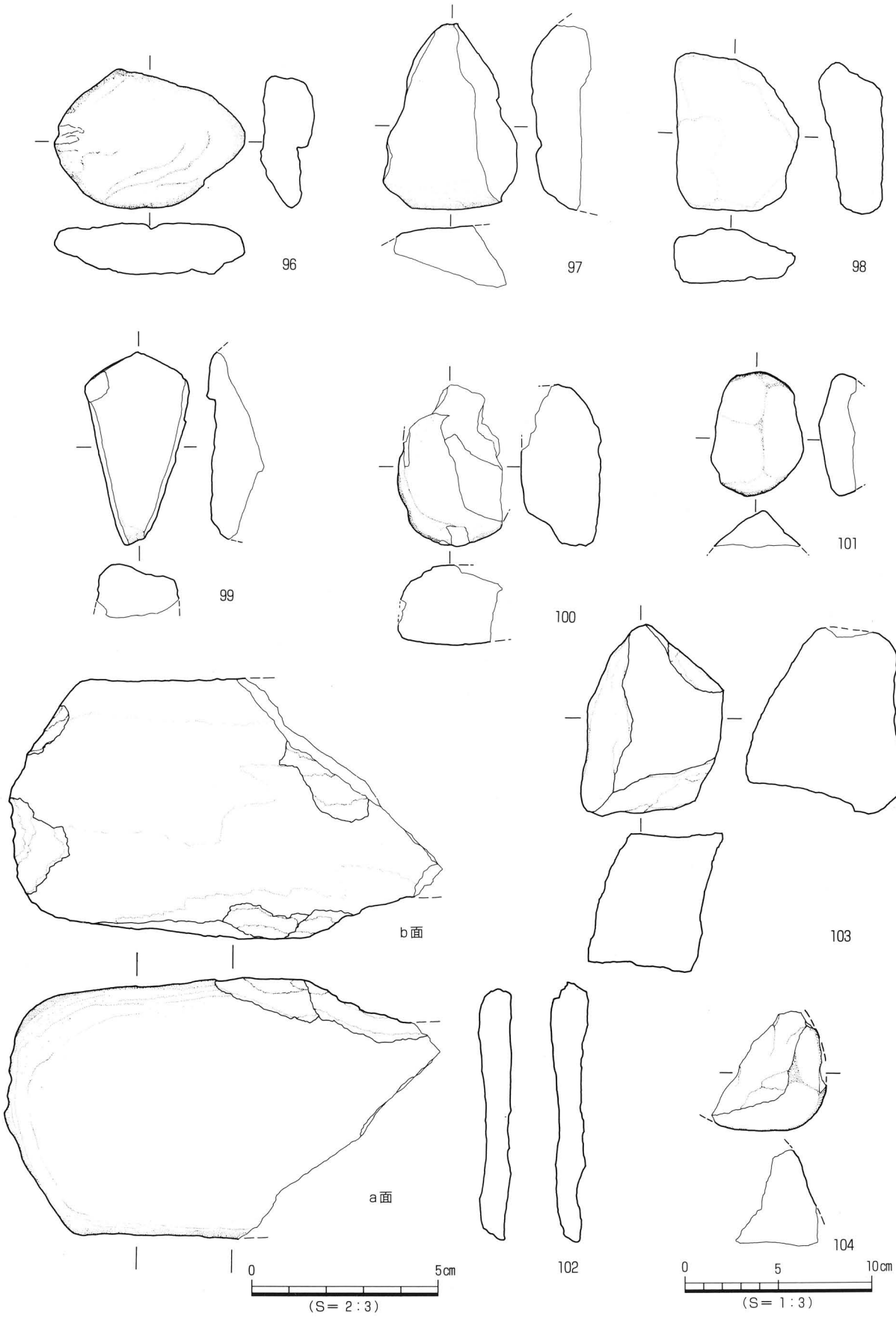
79は石庖丁の成品で、緑色片岩製。円礫から剝離した剝片を素材とする。長方形で両端に抉りをもち、紐掛けの穿孔はない。研磨は刃部を中心に局部的にみられるのみである。80～86は砥石であり、砂岩を多用し、大・中・小がある。87～90は敲石、91は磨石である。92～95は台石であり、花崗岩が多用され、大・小がある。96～101は礫であり、顕著な使用痕、加工痕、鉄分等の付着も認められない。



第106図　ＳＢ３出土遺物実測図(6)



第107図　ＳＢ３出土遺物実測図(7)

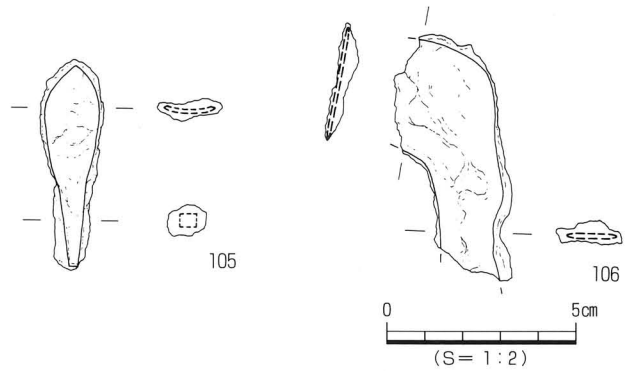


第108図　ＳＢ３出土遺物実測図(8)

②柱穴出土品

102～104はP②から出土した。102は結晶片岩製の石器素材である。a面は自然面、b面は荒割時の剥離面で構成される。石庖丁の打裂段階未成品の可能性がある。

鉄器（105・106）　105は鉋の可能性がある鉄器である。柳葉状を呈し、身にはごく浅い裏すき状の凹みがあり、基部は断面方形状を呈している。106は不整形の鉄板である。鉄塊を延ばしていく過程で生じたものと考えられる。



第109図　ＳＢ３出土遺物実測図(9)

時期：遺物から、弥生時代後期後葉（梅木編年の後期Ⅱ－２）に比定される。

(2)土坑（ＳＫ）

ＳＫ３（第110図、図版14・18）

調査区北東部のＢ４区に位置する。平面形態は、隅丸の長方形を呈し、規模は長軸50cm、短軸39cm、深さ７cmを測る。断面形態は浅い皿状をなす。埋土は黒褐色土（10ＹＲ3/1）である。遺物は石庖丁がある。これは遺構検出時に確認し、土坑の北西部で刃部を下に直立して出土した。

出土遺物：107は杏仁形の石庖丁である。完存品。刃部の弧度に比して背部の弧度は弱い。刃部は扁両刃であるが、鎬は明確ではない。研磨は入念に施され、穿孔は一孔で、両面穿孔による。a面には穿孔途中で中断し放棄された穿孔痕が認められる。法量は長さ8.4cm、幅4.2cm、厚さ0.44cm、重さ23.21ｇである。緑色片岩製。

時期：石庖丁が器身の薄い小型品であることから、弥生時代後期とする。

ＳＫ４（第111図）

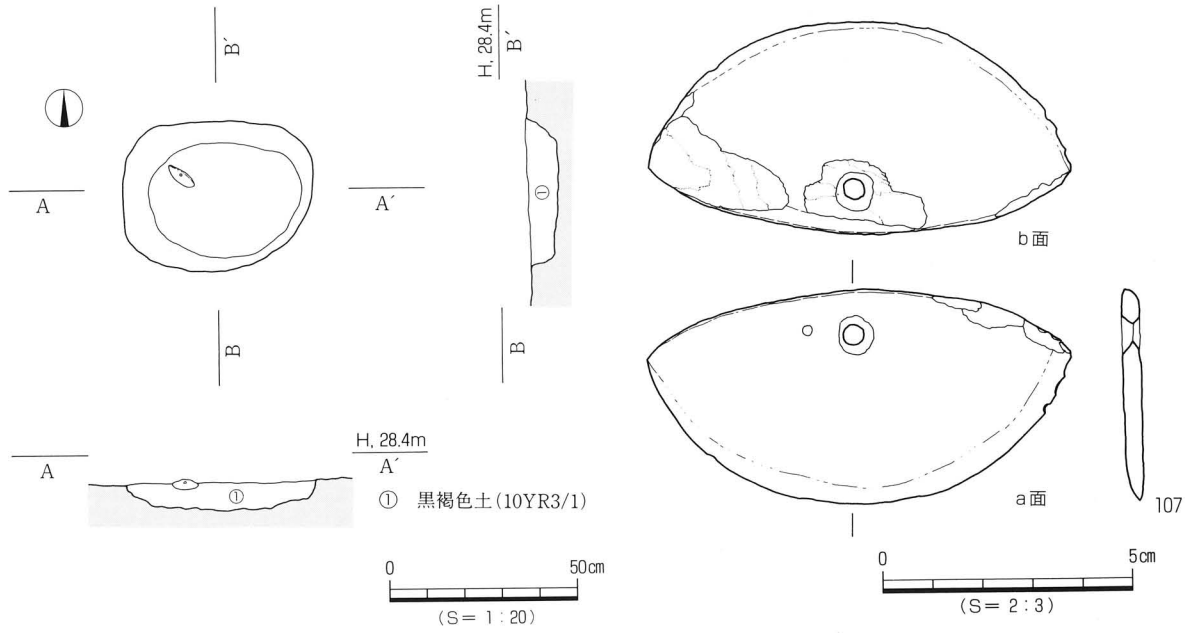
調査区東部のＣ４区に位置する。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.62m、短軸0.97m、深さ12cmを測る。断面形態は縦断と横断とでは異なる。縦断は、二段掘り状を呈し、西半部が深い。横断は浅い皿状を呈する。埋土は二層あり、上層が黒褐色土（10ＹＲ3/1）、下層が褐灰色土（10ＹＲ4/1）である。遺物は、弥生土器と石器がある。

出土遺物：108は壺の底部で、厚手の平底である。109は剥片で、厚みがあり、自然面は残置しない。赤色珪質岩製。

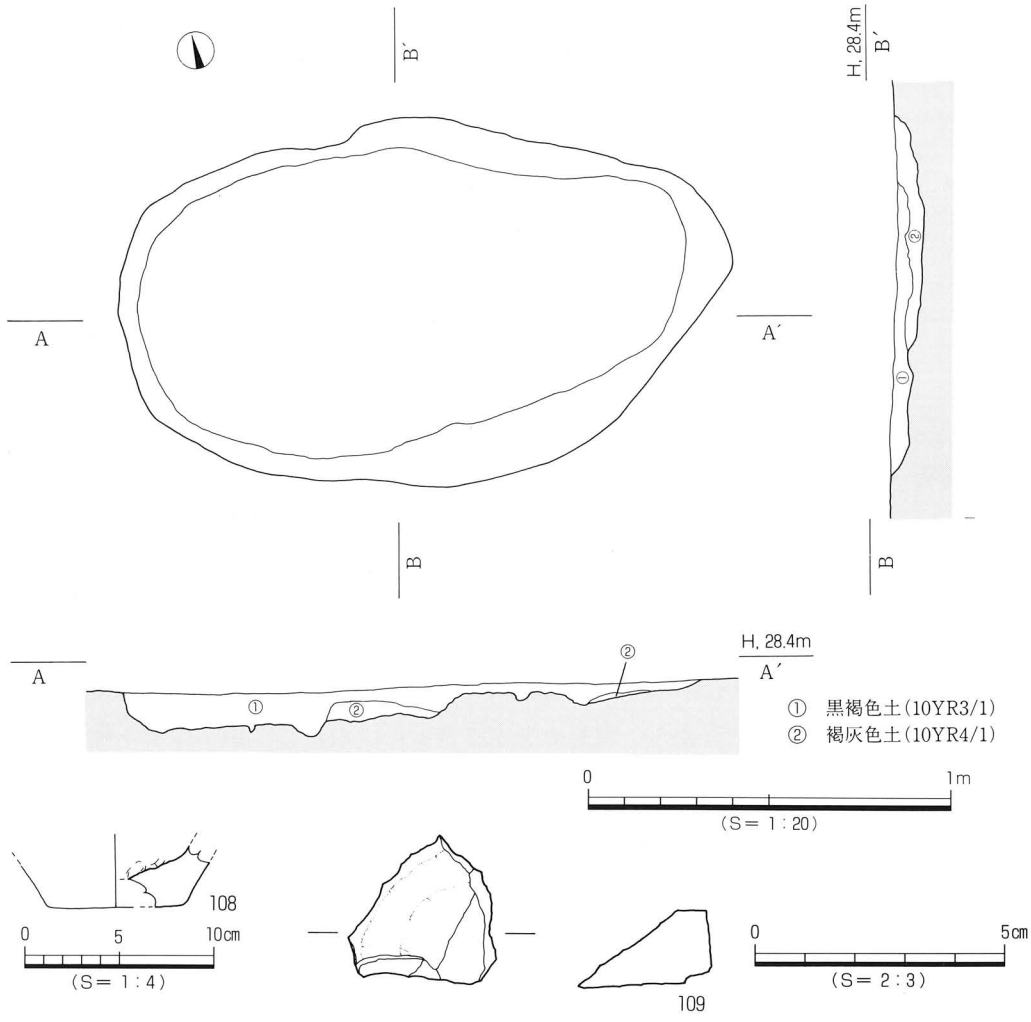
時期：遺物から、弥生時代後期とする。

ＳＫ５（第112図）

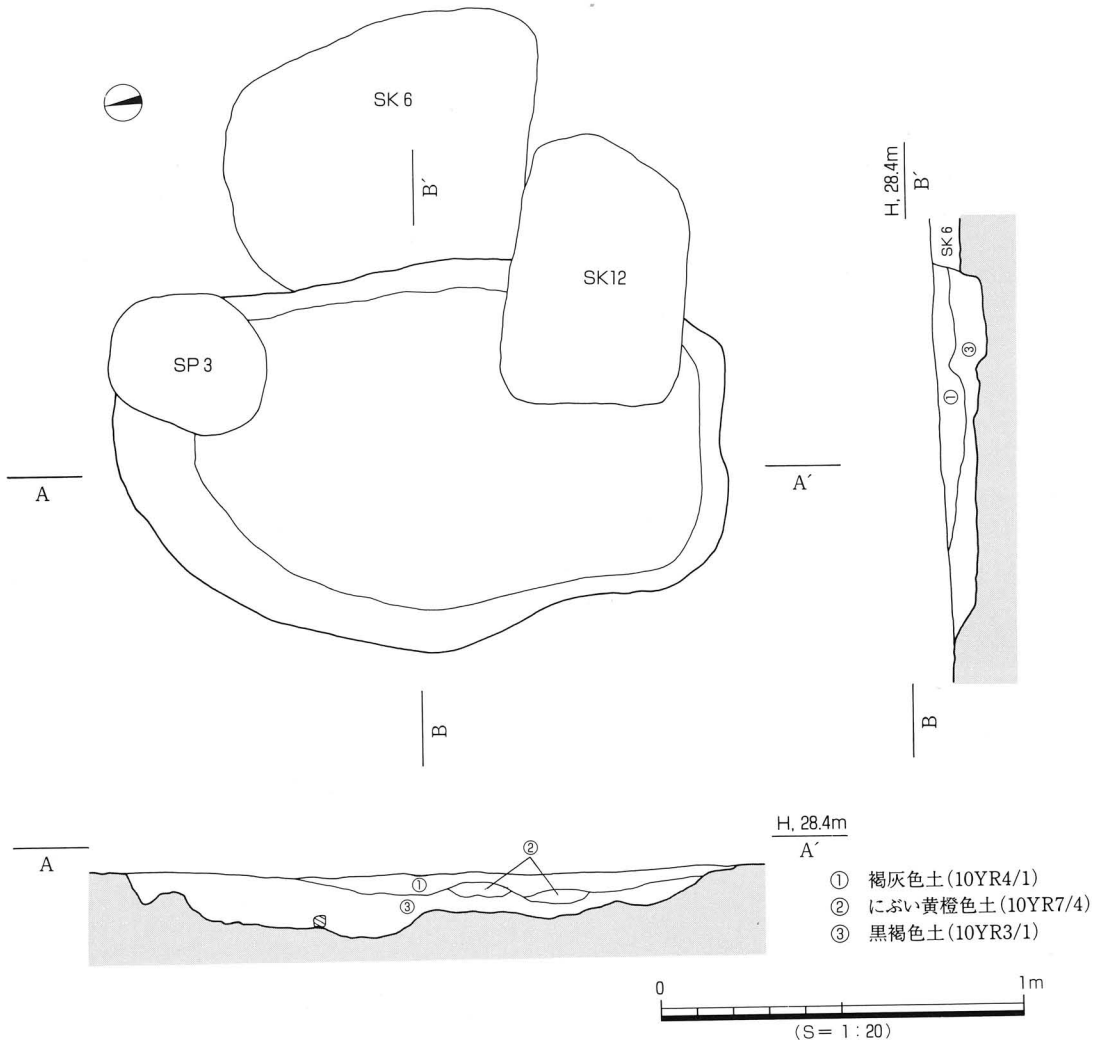
調査区東部のＢ４区に位置する。平面形態は隅丸長方形を呈し、ＳＫ６を切り、ＳＫ12・掘立２のＰ②に切られる。規模は長軸1.60m、短軸1.03m、深さ15cmを測る。断面形態は二段掘り状を呈し、埋土は三層に分けられる。埋土は、上層が褐灰色土（10ＹＲ4/1）、中層がにぶい黄橙色土（10ＹＲ7/4）、下層が黒褐色土（10ＹＲ3/1）である。中層は土坑の南に限られ、局部的に堆積する。遺物は埋土中から弥生土器と石製品が出土した。土器は図化できるものはないが、甕と壺の底部破片がある。



第110図　ＳＫ３測量図及び出土遺物実測図



第111図　ＳＫ４測量図及び出土遺物実測図



第112図　ＳＫ５測量図

石製品は緑色片岩製の棒状の原石がある。

時期：遺物から、弥生時代後期とする。

ＳＫ６（第113図）

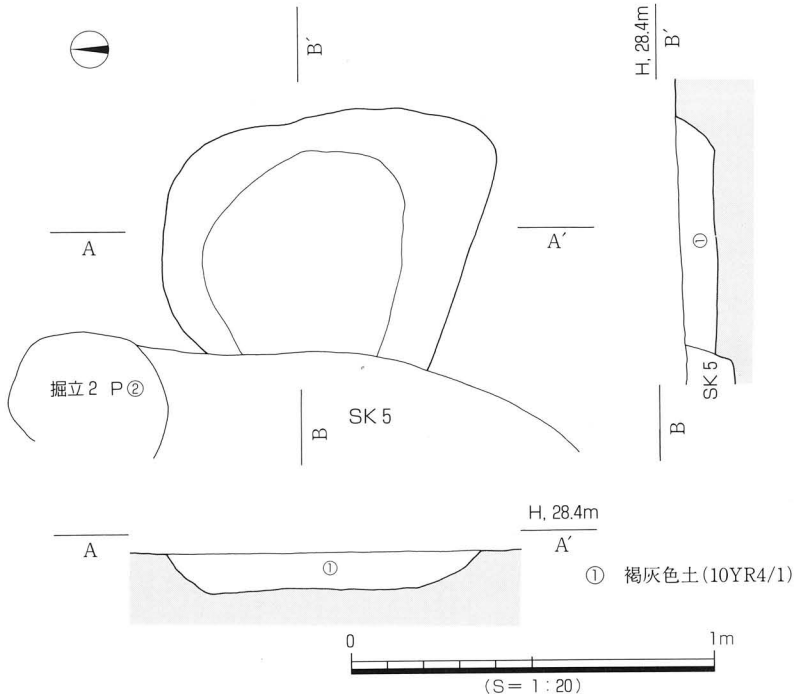
調査区東部のＢ４区に位置し、ＳＫ５に切られ、ＳＫ12と並列する。平面形態は方～長方形を呈するものと考えられる。規模は、長軸83cm、短軸検出長60cm、深さ10cmを測る。断面形態は逆台形を呈し、埋土は褐灰色土（10ＹＲ4/1）である。遺物は埋土中から弥生土器が出土したが、図化できない。

時期：遺物が細片であることから、時期を特定できない。ただし、遺構の切り合い関係からＳＫ５に先行することより、弥生時代後期以前となる。

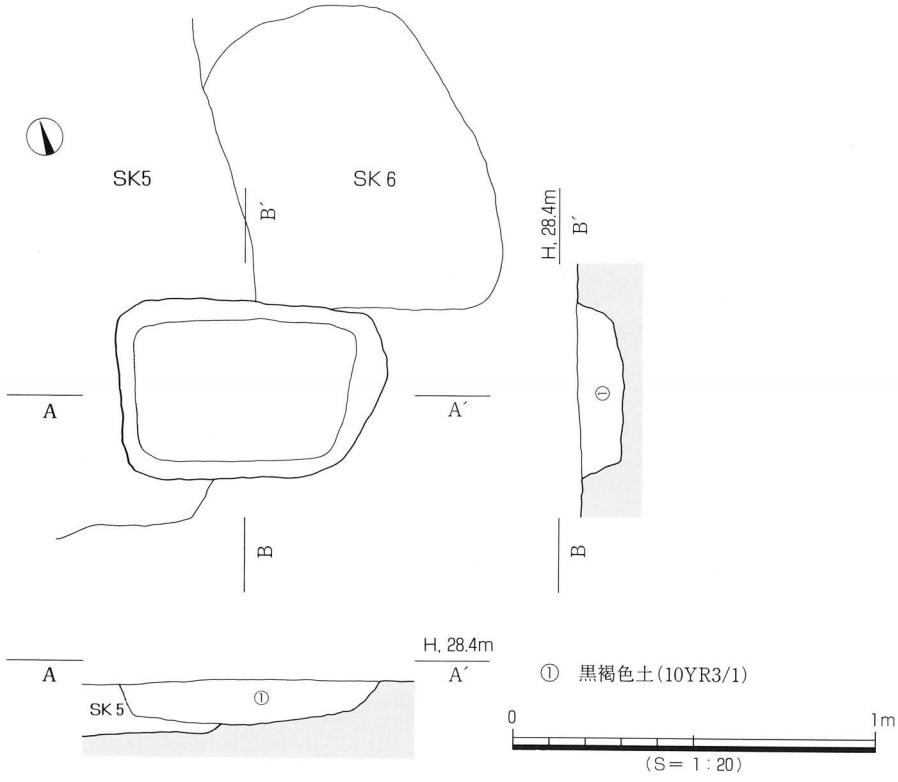
ＳＫ12（第114図）

調査区東部のＢ４区に位置し、ＳＫ５を切る。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸70cm、短軸42cm、深さ12cmを測る。断面形態は逆台形を呈し、埋土は黒褐色土（10ＹＲ3/1）である。遺物は弥生土器があるが、破片のため図化できない。

時期：遺物と遺構の切り合い関係から、弥生時代後期とする。



第113図　ＳＫ６測量図



第114図　ＳＫ12測量図

〔2〕古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、竪穴式住居址2棟（ＳＢ１・４）、掘立柱建物址3棟（掘立１～３）、土坑2基（ＳＫ２・14）、柱穴1基（ＳＰ100）である。

(1)竪穴式住居址（ＳＢ）

ＳＢ１（第115図）

調査区北西部のＢ２・３区に位置し、西側に営まれたＳＢ３を切る。西半部の輪郭は確認できていない。そのため、ＳＢ４との切り合い関係を明らかにできなかった。平面形態は、隅丸の長方形を呈するものと想定される。規模は、東西検出長3.55m、南北4.00m、深さ５cmを測る。北壁の輪郭は住居の外側にやや張り出す。北壁中央はさらに半円形に突出し、竈が構築されている。竈は基底部のみが遺存していた。住居の埋土は、にぶい黄橙色土（10ＹＲ7/2）の親指大ブロックを多量に含む暗褐色土（10ＹＲ3/3）である。主柱を構成する柱穴は2本で、Ｐ①・②である。主柱の外側で検出された2本の小穴（Ｐ③・④）は、支柱の可能性がある。竈は平面形態が瓢箪形を呈し、規模が長さ1.20m、幅0.70m、深さ12cmを測る。埋土は褐灰色土（10ＹＲ4/1）で、炭化物等は認められなかった。

住居の南半部では貼り床を確認した。貼り床は、平面形態が隅丸長方形を呈し、規模は東西3.7m、南北1.7mを測る。貼り床の埋土は住居埋土に色調は類似するが、住居埋土よりはやや軟質である。なお、Ｐ①の輪郭は、貼り床上面で確認している。遺物は、竈の床から須恵器片が１点出土した。

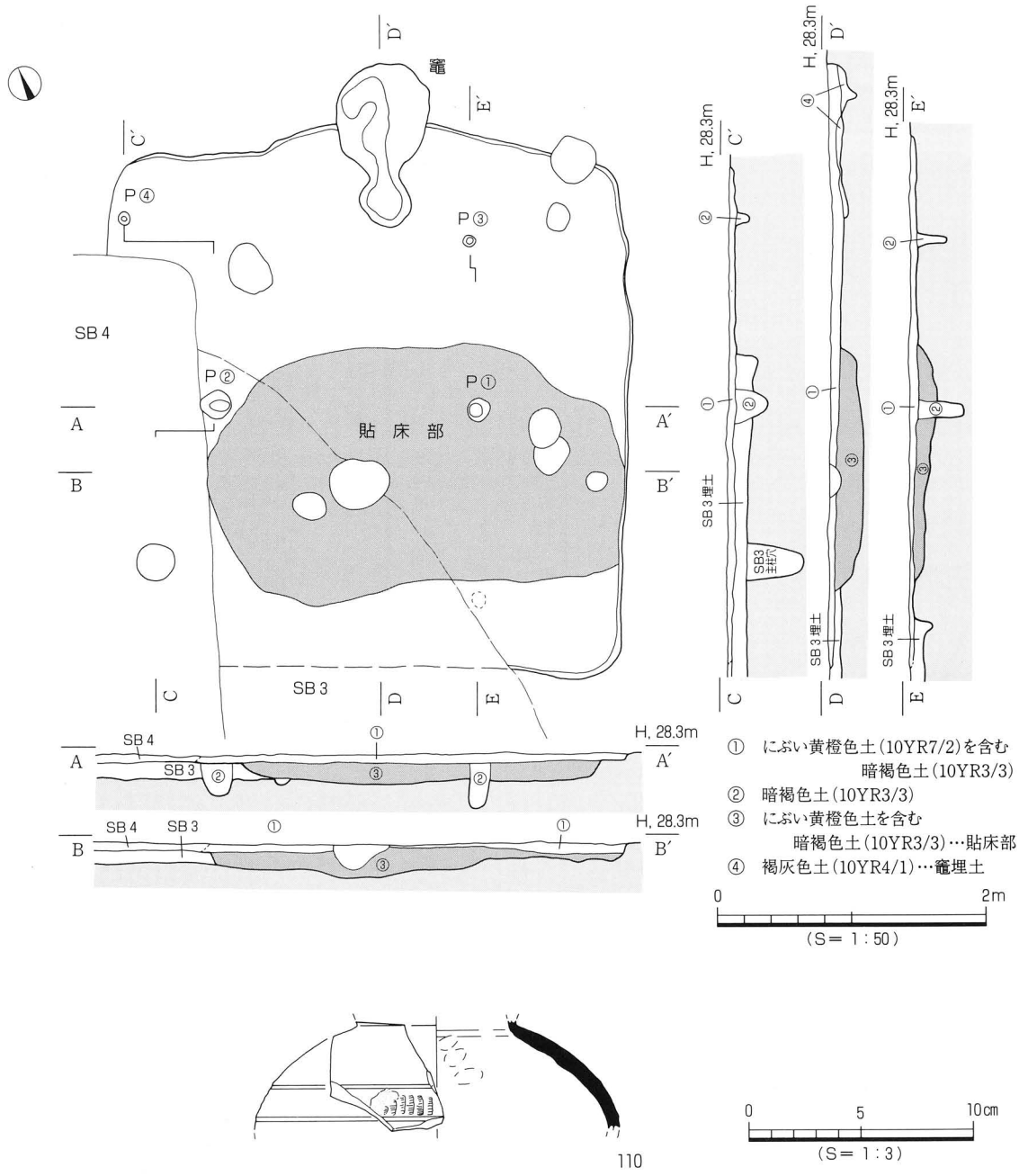
出土遺物：110は甕もしくは壺である。胴上半には2条の沈線間に横引きの刺突文が施される。

時期：遺物から５世紀末～６世紀初頭に比定する。

ＳＢ４（第116・117図、図版18）

調査区北西部のＡ２、Ｂ１・２、Ｃ２区に位置し、ＳＢ３と掘立３を切る。平面形態は西側の輪郭がやや張る方形を呈する。規模は、東西4.56m、南北4.85m、深さ５cmを測る。北壁に沿って、竈が構築されている。住居の埋土は、にぶい黄橙色土（10ＹＲ7/2）の親指大ブロックを多量に含む暗褐色土（10ＹＲ3/3）である。主柱を構成する柱穴は４本で、Ｐ①～④である。柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は直径が26～35cm、深さ28～45cmを測る。埋土は黒色土（5Ｙ2/1）である。住居の北東隅と南西隅にはそれぞれ土坑が構築されている。北東隅の土坑（Ｋ①）は不整方形を呈し、規模は東西0.96m、南北1.12m、深さ９cmを測る。南西隅の土坑（Ｋ②）は、平面形態が不整楕円形を呈し、規模は長軸1.20m、短軸0.9m、深さ13cmを測る。埋土は住居址と同じである。遺物は土師器の細片が数点出土したが、図化できるものはない。北壁沿いに構築された竈は、基底部が遺存したにすぎない。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長軸1.42m、短軸1.05m、深さ16cmを測る。埋土は二層あり、上層が親指大の焼土を多量に含む褐灰色土（10ＹＲ4/1）、下層が黄橙色の土のブロックを含む褐灰色土（10ＹＲ4/1）である。

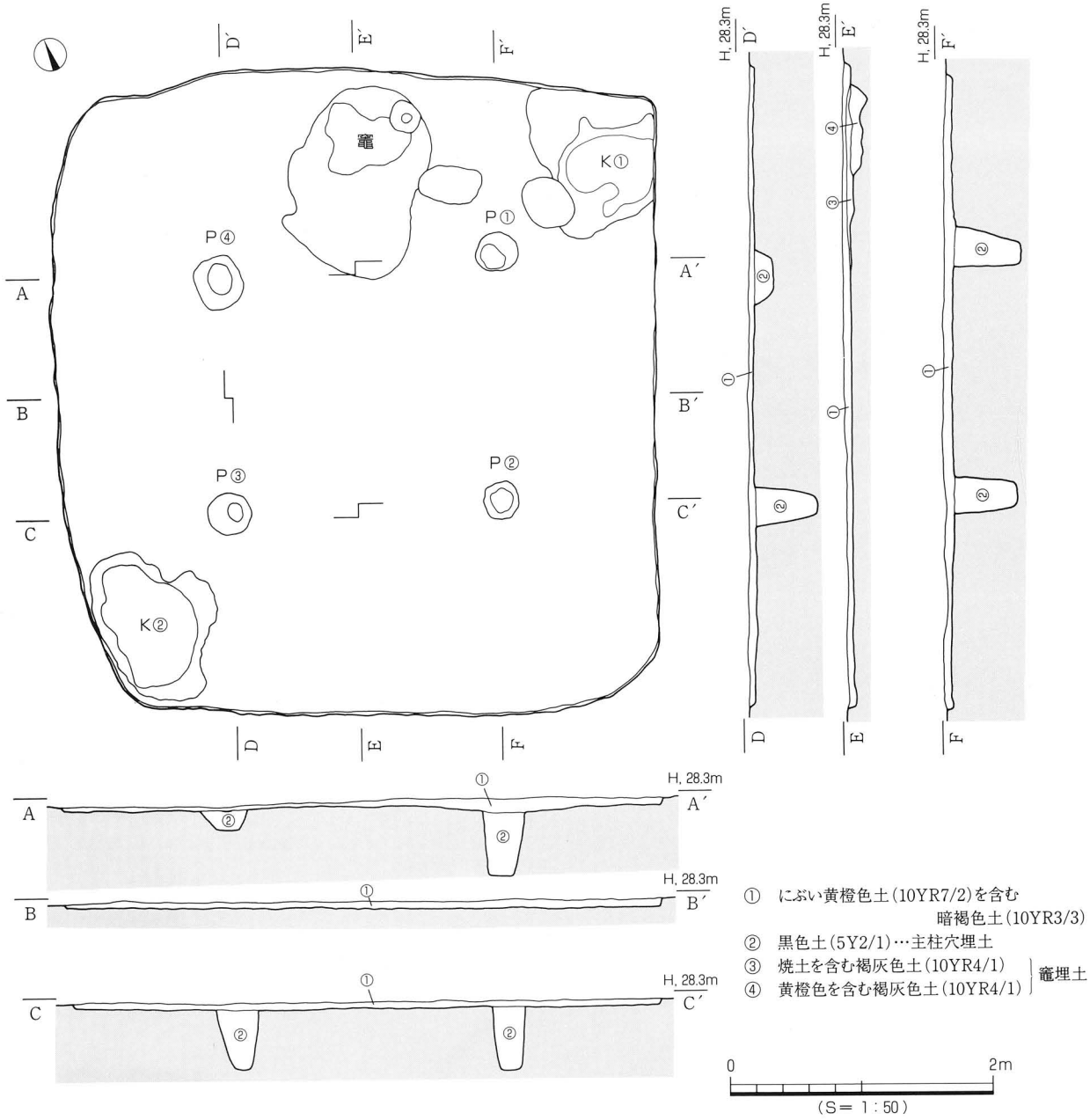
遺物は、住居の埋土・土坑（Ｋ①）・竈から出土した。住居の埋土から出土した遺物は、土師器、須恵器、礫があり、土師器は破片資料である。須恵器は坏身と高坏があり、後者には有蓋高坏を含む。有蓋高坏は、竈に近接した住居址床面から横倒しの状態で出土している。Ｋ①と竈から出土した遺物は、土師器の破片資料である。



第115図　ＳＢ１測量図及び出土遺物実測図

出土遺物：111と112は坏、113～115は有蓋高坏である。111は坏蓋である。天井部はやや丸みをもち、口縁部は垂下する。天井部と口縁部の境界の稜は鋭い。口縁端部は内傾する凹面をなす。112は坏身である。底部は丸みがある。口縁部を欠く。113は高坏の蓋である。中窪みの扁平なつまみをもつ。天井部と口縁部の境界の稜は鈍い。天井部は回転ヘラ削りで、天井部の2/3に及ぶ。114は有蓋高坏である。口縁部はやや内傾して立ち上がり、端部は内傾し弱く凹む。脚裾部の上位には低く鈍い突帯が１条めぐる。長方形の透孔は３方向である。115は脚裾部の上位に高く鋭い突帯が１条めぐる。脚端部は内傾し面をもつ。

時期：遺物から、６世紀初頭に比定する。

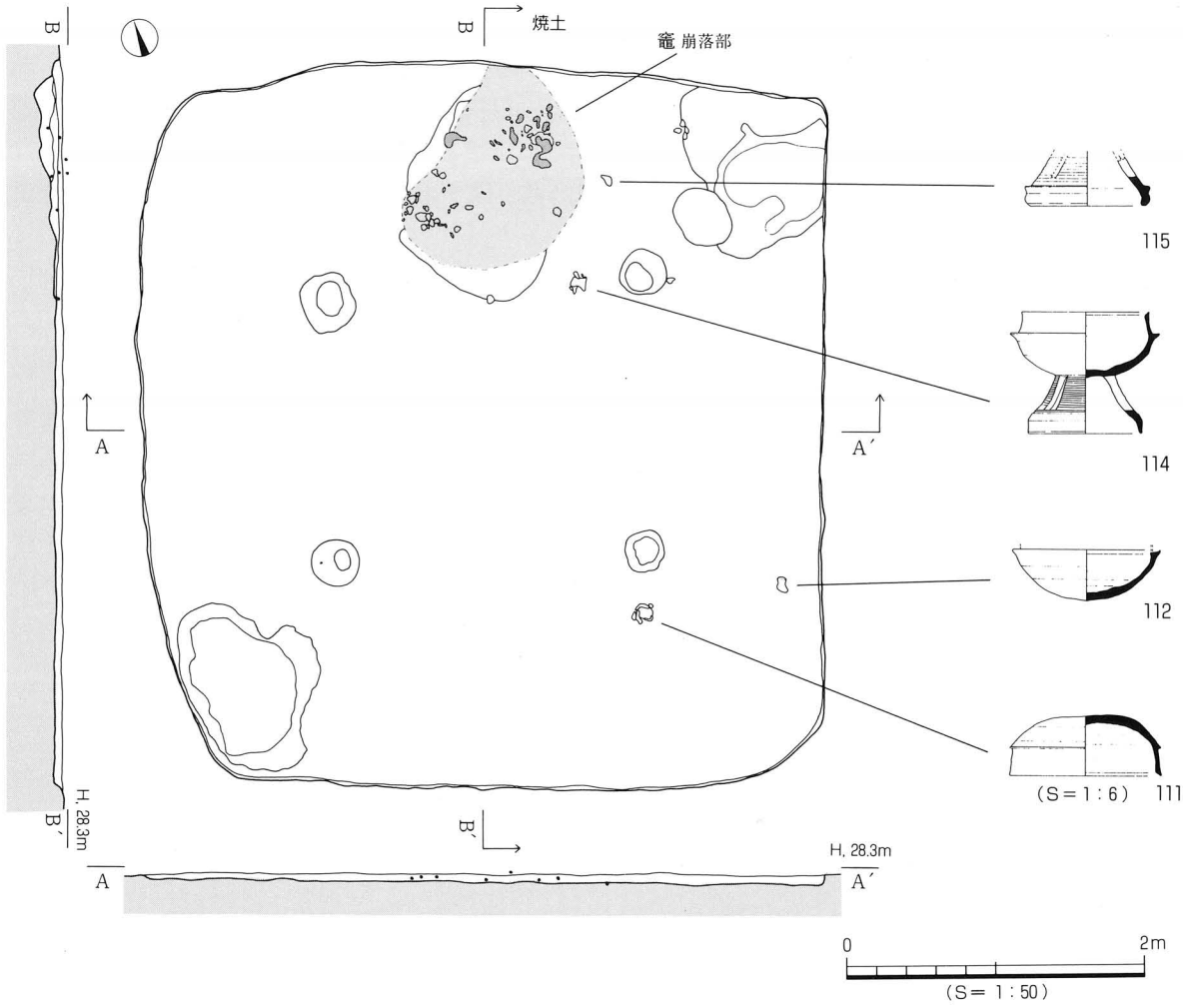


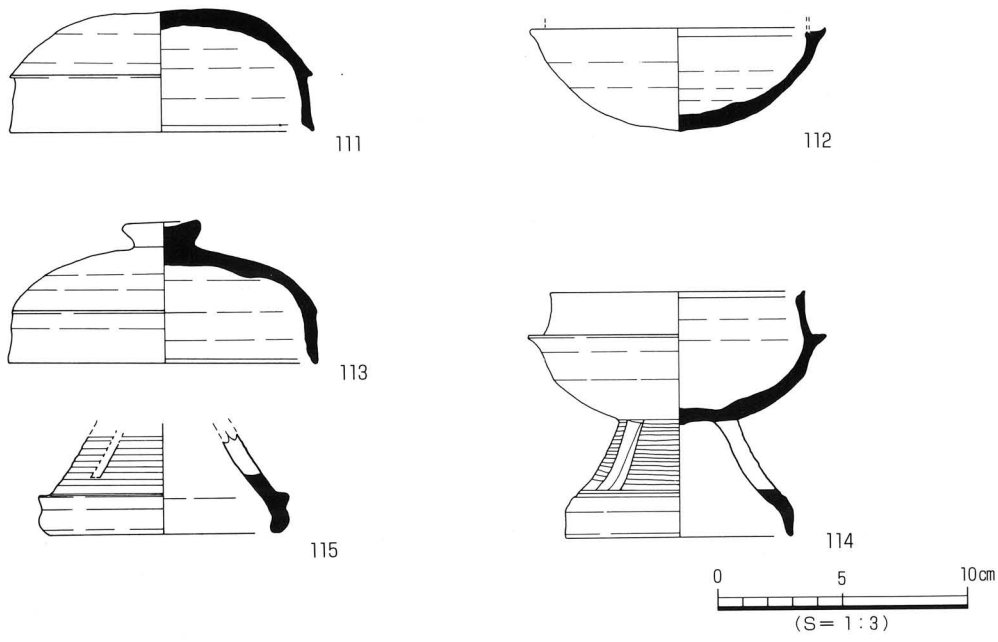
第116図　ＳＢ４測量図

⑵掘立柱建物址（掘立）

掘立１（第118図、図版15）

調査区南部のＣ３・４区に位置する。梁間１間、桁行２間の東西に細長い建物である。柱穴は、Ｐ①～⑥の６基で構成される。Ｐ⑥は、調査区の拡張直前に輪郭が確認出来たため、埋土の精査を進めていない。建物の規模は、梁間の全長が1.55～1.65m、桁行の全長が3.8mである。建物の軸線は、真北から76度西へ振る。柱穴の平面形態は不整円形～隅丸長方形を呈する。柱穴の規模は、径45cm、長軸48～42cm、短軸36cm、深さ10～18cmを測る。埋土は黄橙色土（10ＹＲ8/6）の小ブロックを含む黒褐色土（10ＹＲ3/1）である。柱痕跡は各柱穴で確認した。規模は直径が10～13cmを測り、埋土は黒色土（10ＹＲ1.7/1）である。遺物は柱穴の掘り方埋土と柱痕から出土した。遺物は少量で破片は小





第117図　ＳＢ４遺物出土状況測量図及び出土遺物実測図

さい。掘り方埋土の遺物ではP②出土の砥石（117）、P④出土の須恵器小破片、柱痕の遺物ではP③出土の須恵器片（116）がある。

出土遺物：116はP③柱痕出土の無蓋高坏の坏部である。坏部中位に精緻な櫛描波状文を施す。117はP②出土の砥石である。器面の剝落が著しく、機能面は上部と背部にわずかに遺存する。

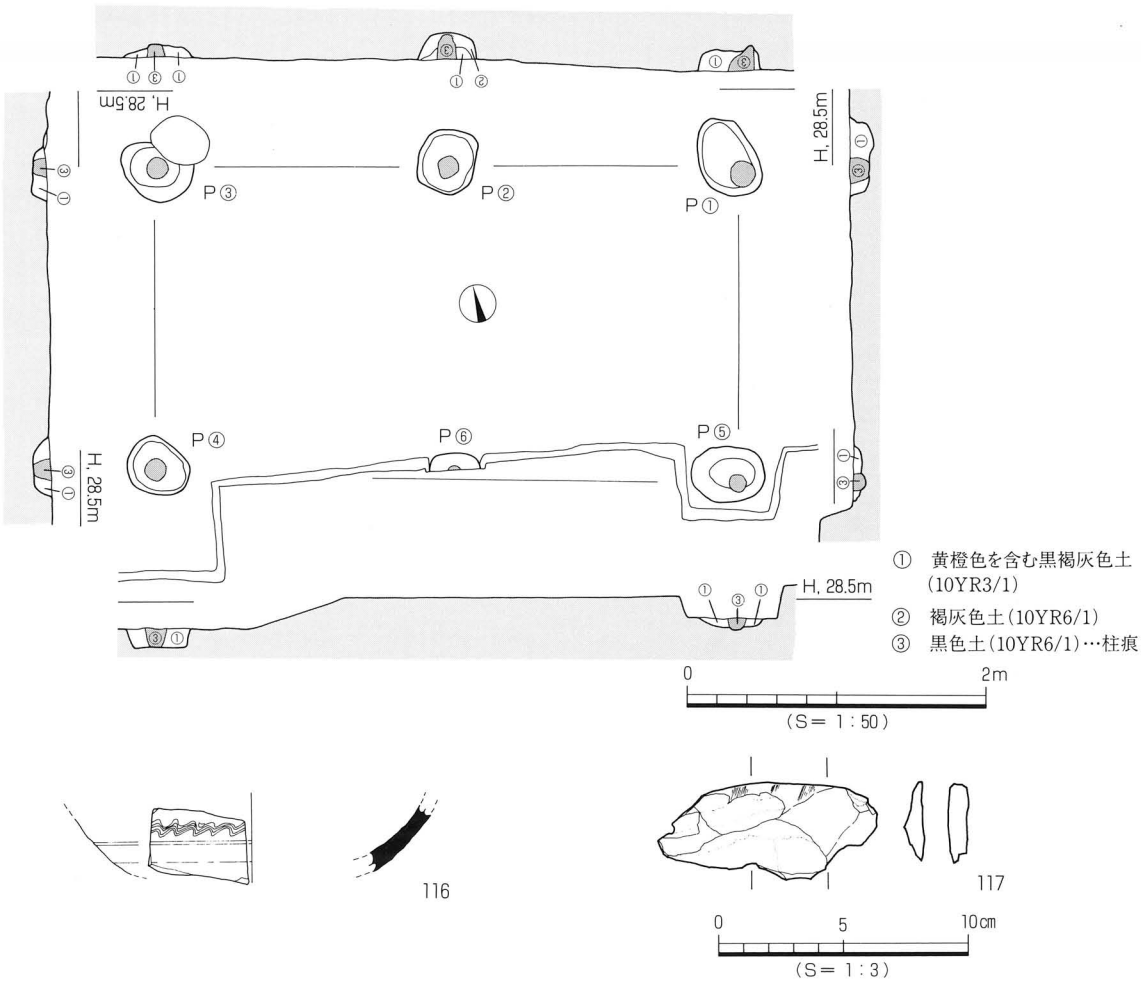
時期：P③の柱痕から出土した116は本遺構の下限時期を示す遺物と考えられる。よって、本遺構の廃棄・埋没時期を6世紀初頭とする。

掘立2（第119図）

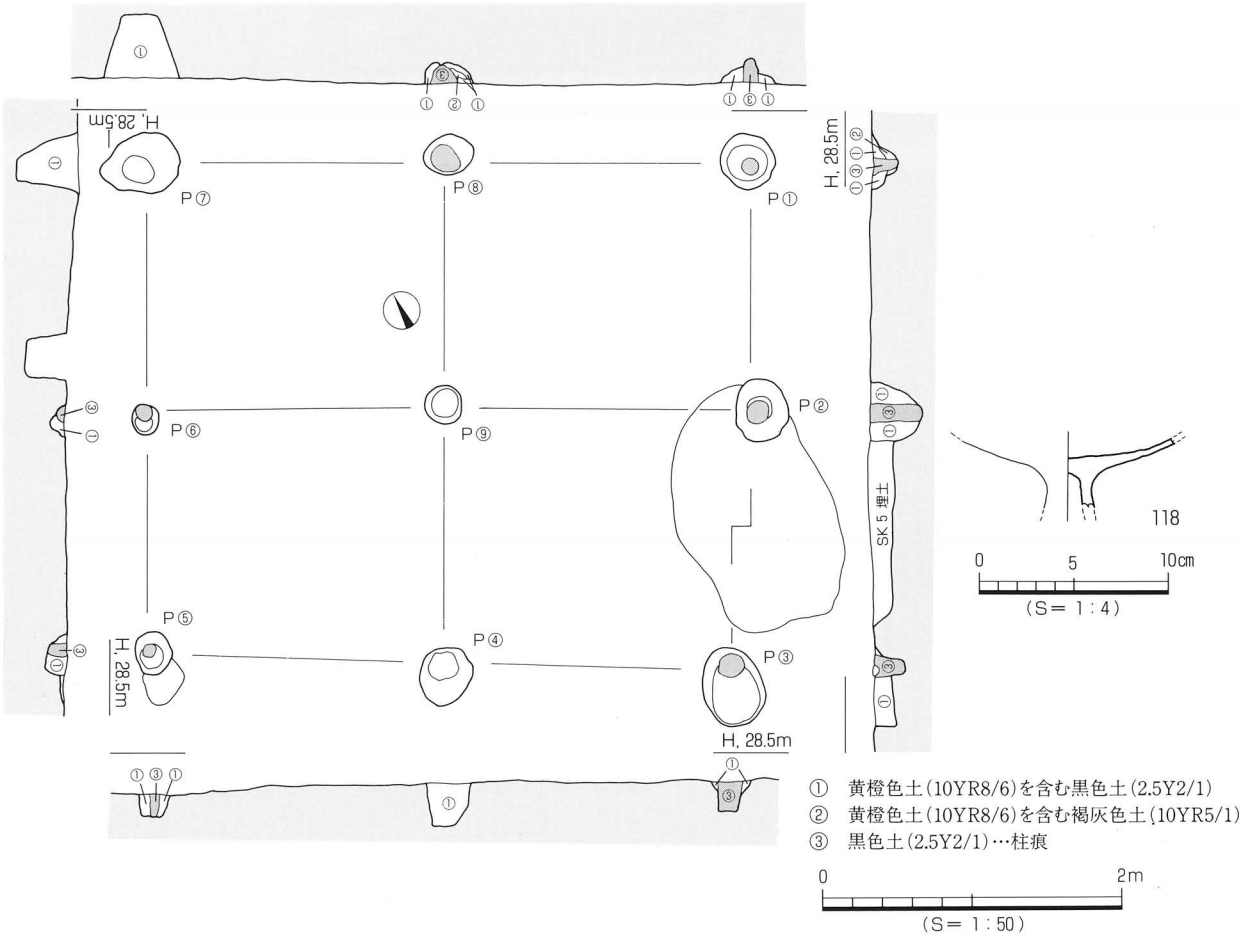
調査区中央部のB3・4区、C4区に位置する。SB1に切られる。梁間と桁行が2間の総柱建物である。柱穴は、P①～⑨の9基で構成される。建物の規模は、梁間の全長が2.9m、桁行の全長が3.6mである。建物の軸線は、真北から62.5度西へ振る。柱穴の平面形態は円形と楕円形である。柱穴の規模は、径15～52cm、深さ15～35cmを測る。埋土は黄橙色土（10YR8/6）の小ブロックを含む黒色土（2.5Y2/1）と褐灰色土（10YR5/1）である。柱痕跡は各柱穴で確認し、規模は径10～15cmを測る。埋土は黒色土（2.5Y2/1）である。遺物は、柱穴の掘り方埋土と柱痕から出土した。遺物はP④掘り方埋土から土師器の高坏（118）が出土した。

出土遺物：118は高坏で、坏部は大きく外反する。器面の摩滅が著しい。

時期：遺物と遺構の切り合い関係から、本遺構の時期を5世紀末～6世紀初頭とする。



第118図　掘立1測量図及び出土遺物実測図



第119図　掘立２測量図及び出土遺物実測図

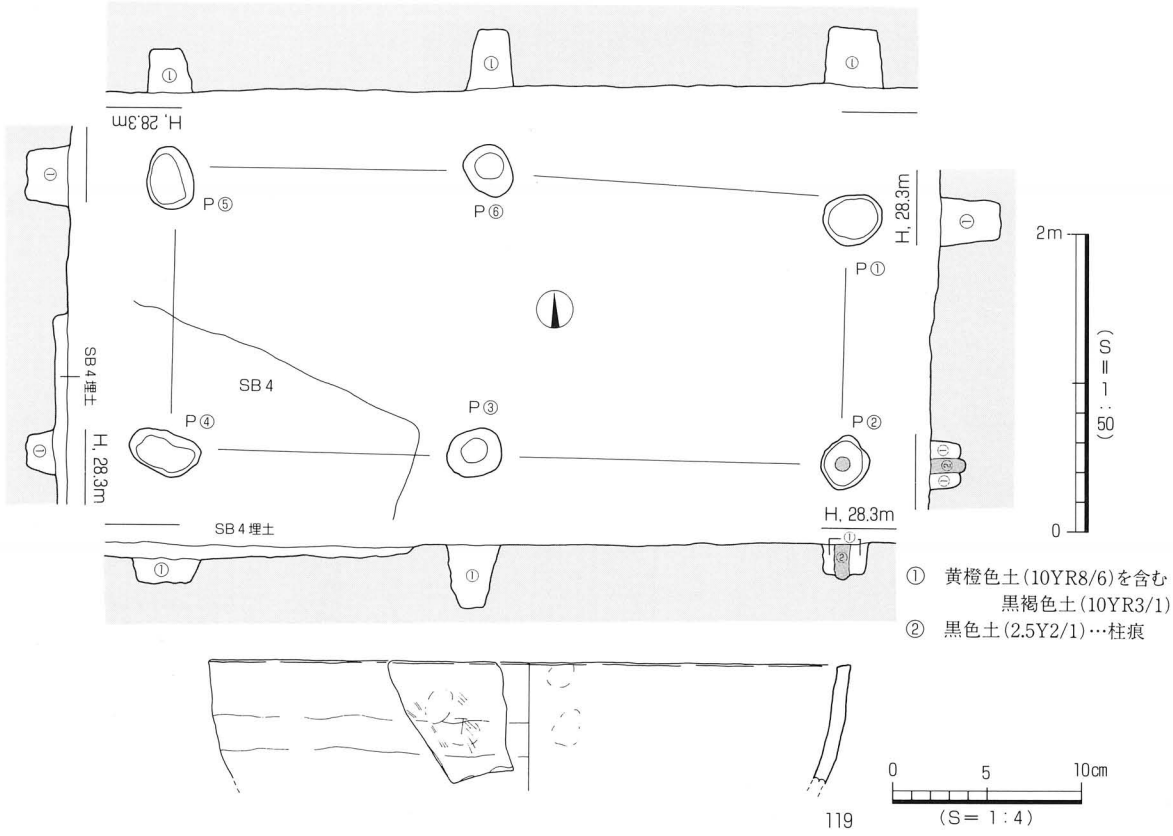
掘立３（第120図、図版15）

調査区北西部のＡ２・３区、Ｂ２・３区に位置する。ＳＢ１・ＳＢ４と重複する。調査時では本遺構がＳＢ１を切り、かつＳＢ４に切られていることを確認した。梁間１間、桁行２間の東西に細長い建物で、柱穴はＰ①～⑥の６基で構成される。建物の規模は、梁間の全長が1.25～1.45m、桁行の全長が4.11～4.15mである。建物の軸線は、真北から87.5度西へ振る。柱穴の平面形態は円形と不整円形である。柱穴の規模は、径30cm、長軸35～48cm、短軸28～34cm、深さ25～41cmを測る。埋土は黄橙色土（10ＹＲ8/6）の小ブロックを含む黒褐色土（10ＹＲ3/1）である。各柱穴において柱痕跡が確認できなかったことから、柱が抜き取られた可能性が高い。

遺物は柱穴の掘り方埋土から出土した。遺物は小破片が大半を占めるが、Ｐ⑤からは土師器の甑の口縁部片（119）が出土した。

出土遺物：119は甑の口縁部で、口径は34cmを測る。口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部は横ナデにより面取りされる。粘土紐の積み上げ後、指押さえによる成形と斜め方向の刷毛目調整により仕上げられる。

時期：遺物から、本遺構の時期を５世紀末～６世紀初頭とする。



第120図　掘立３測量図及び出土遺物実測図

⑶土坑（ＳＫ）

ＳＫ２（第121図、図版18）

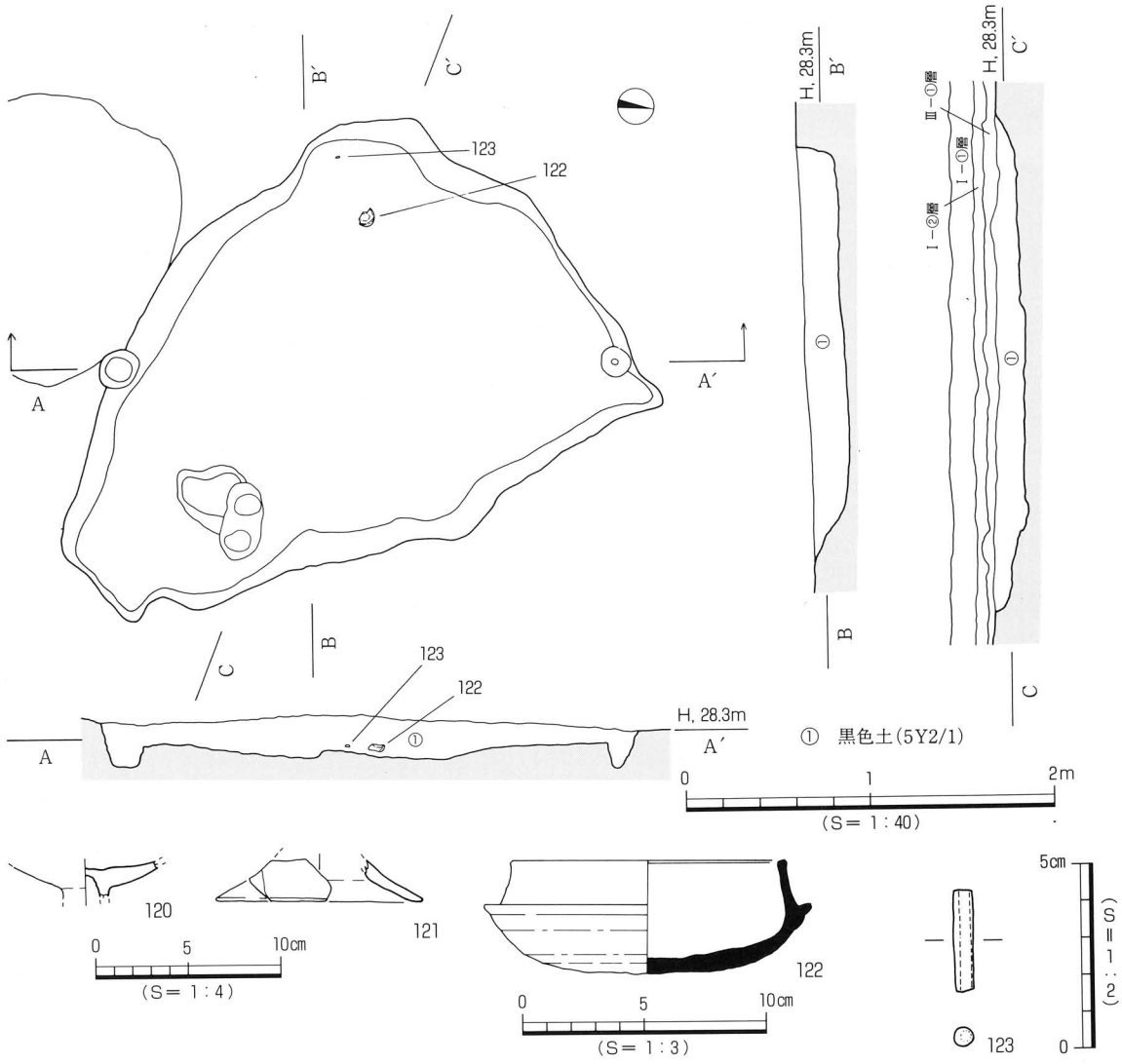
調査区南西部のＣ２区に位置する。平面形態は不整な隅丸状の長方形を呈する。規模は長軸3.15m、短軸2.0m、深さ15cmを測る。断面形態は浅い皿状を呈し、土坑の北と南には小ピットがあるが、調査では土坑に伴うものかは判然としなかった。埋土は、黒色土（5Y2/1）である。遺物は、土師器・須恵器・管玉の他、混入品と考えられる弥生土器がある。須恵器と管玉は床面から遊離して出土したが、位置関係は近接している。

出土遺物：120と121は土師器の高坏である。122は須恵器の坏身である。口縁部はやや内傾して立ち上がり、端部は弱く凹む。底部は丸みが残る扁平で、回転ヘラ削りは底部から2/3に及ぶ。123は碧玉製管玉の完存品である。体部には製作時の穿孔段階で付けられた穴が観察される。なお、穿孔は両面穿孔による。

時期：遺物から、６世紀初頭とする。

ＳＫ14（第122図）

拡張したＴ６とＴ７を繋いだＣ・Ｄ２区に位置する。平面形態は、南が膨らむ隅丸の不整な長方形を呈し、規模は東西（長軸）1.5m、南北（短軸）1.4m、深さ10～15cmである。埋土は黒褐色土（10ＹＲ1.7/1）である。断面形態は浅い逆台形を呈する。遺物は土師器の高坏があり、埋土中から破片で出土した。



第121図　ＳＫ２測量図及び出土遺物実測図

出土遺物：124は坏部で、口縁部との境界には段をもつ。口縁部は外傾して立ち上がる。125は坏部と脚部の接合部である。坏部の内外面はナデ仕上げである。

時期：遺物から、６世紀代としておく。

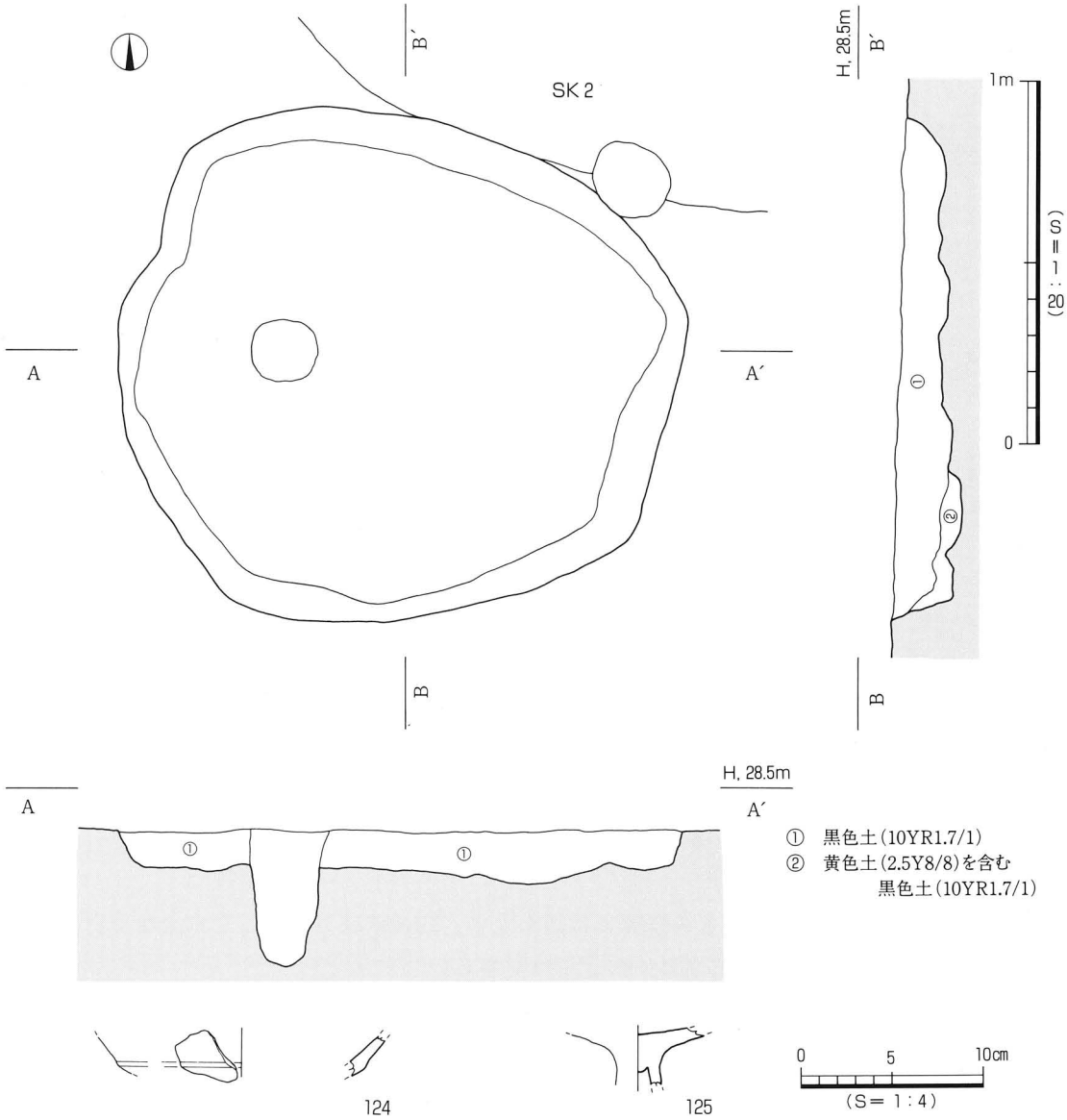
⑷柱穴（ＳＰ）

ＳＰ100（第123図、図版16）

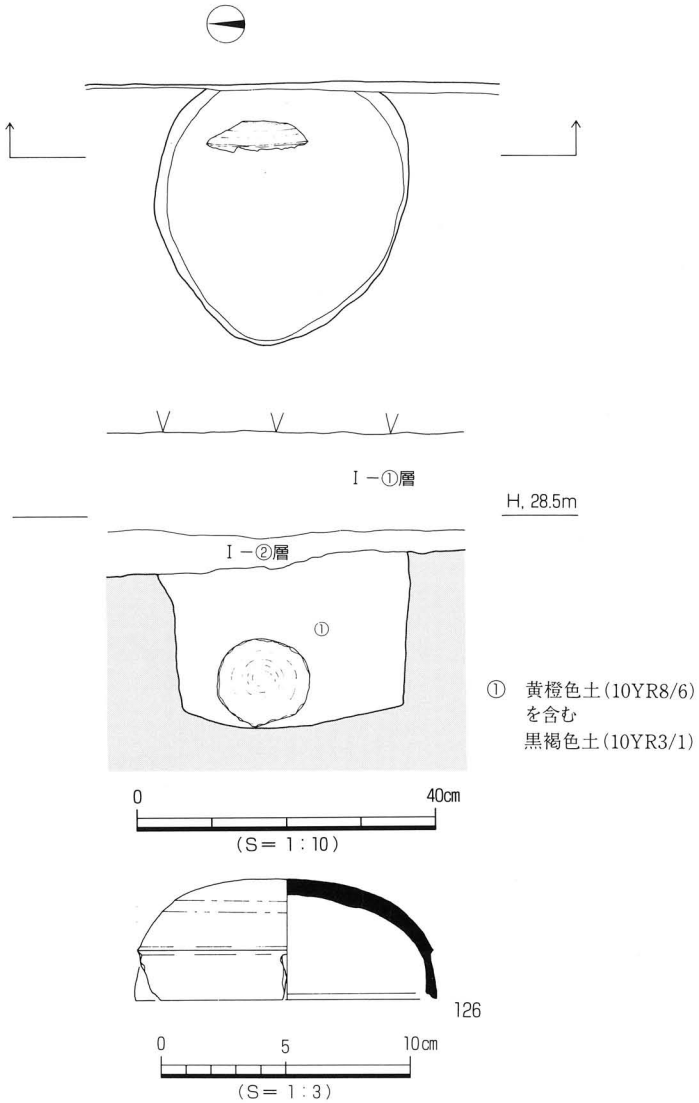
調査区拡張時に設定したＴ７中央の東壁沿い、Ｄ２区に位置する。柱穴の東端部がトレンチ外に続く。平面形態は楕円形を呈するものとみられる。規模は長軸34㎝、短軸33㎝、深さ22㎝を測る。埋土は、黄橙色土（10ＹＲ8/6）の小ブロックを多量に含む黒褐色土（10ＹＲ3/1）である。柱痕は確認していない。柱穴の床は緩やかに凹む。遺物は、須恵器の坏蓋がある。須恵器は柱穴の床面に接して直立し、内面を西側に向けて出土した。

出土遺物：126は口縁部の大半が打ち欠きによって欠失する。天井部には丸みがあり、天井部と口縁部の境界は鈍い。口縁端部は内傾し、弱く凹む。

時期：遺物から、６世紀に比定する。



第122図　ＳＫ14測量図及び出土遺物実測図



第123図　ＳＰ100測量図及び出土遺物実測図

〔３〕その他の遺構

ＳＫ１（第124図）

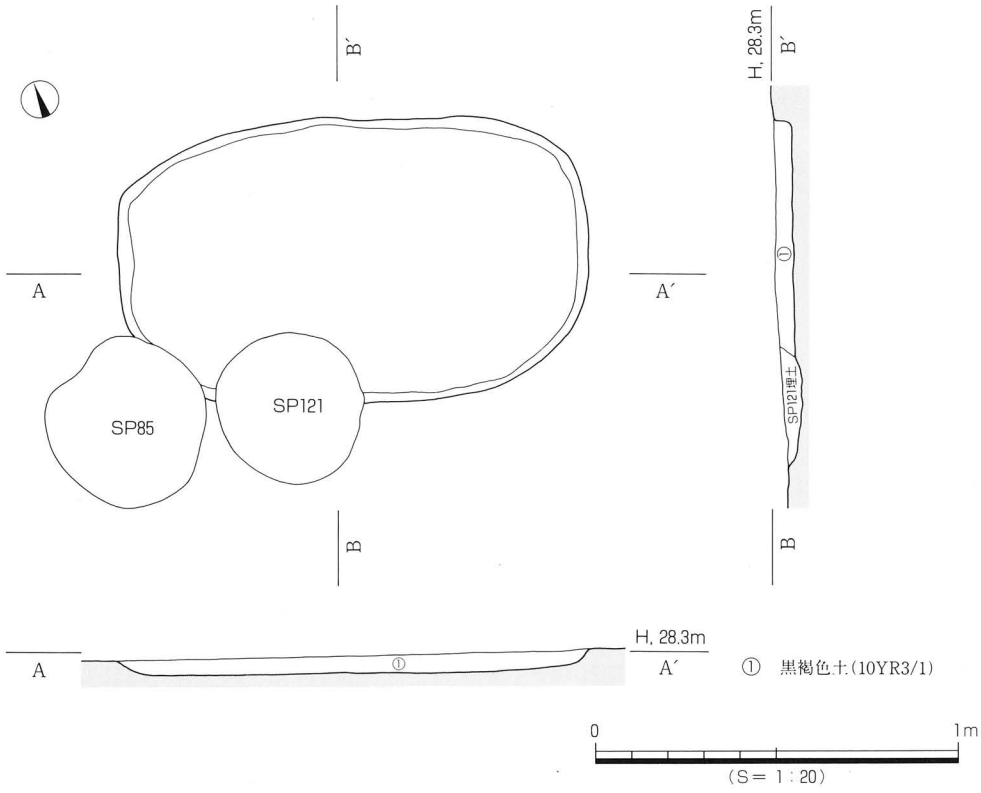
調査区西部のＣ２区に位置する。平面形態は隅丸長方形を呈し、ＳＰ85とＳＰ121に切られる。規模は長軸1.24ｍ、短軸0.75ｍ、深さ５㎝を測る。断面形態は浅い逆台形状を呈し、埋土は黒褐色土（10ＹＲ3/1）である。遺物は埋土中から弥生土器と土師器の細片が出土したものの、図化できるものはない。

時期：遺物がいずれも細片であることから、時期を特定できない。

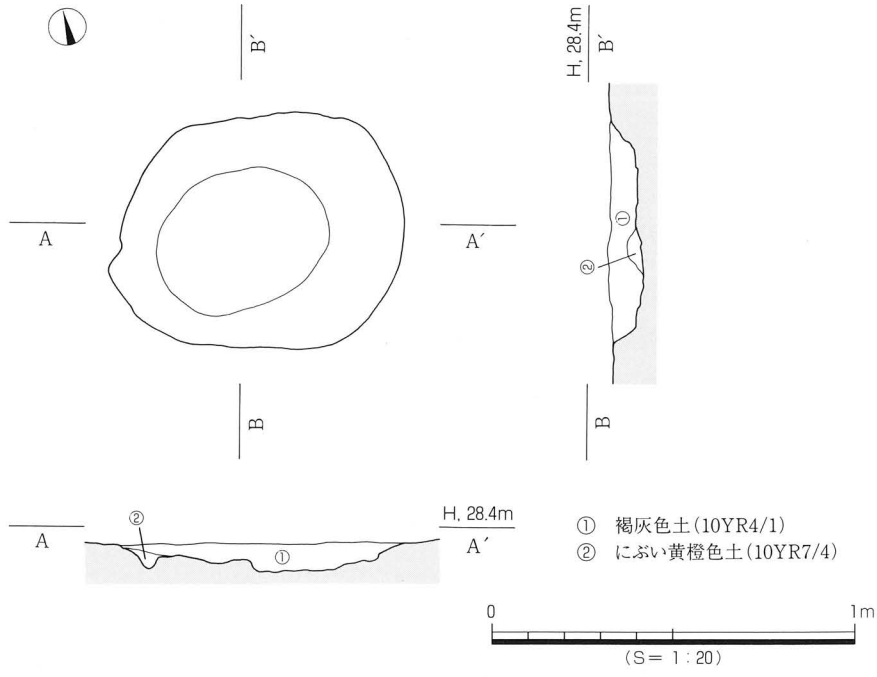
ＳＫ７（第125図）

調査区東部のＢ・Ｃ４区に位置する。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸74㎝、短軸60㎝、深さ８㎝を測る。断面形態は浅い逆台形を呈し、埋土は二層に分けられる。上層は褐灰色土（10ＹＲ4/1）、下層がにぶい黄橙色土（10ＹＲ7/4）である。遺物は出土していない。

時期：遺物が出土していないため、時期を特定できない。



第124図　ＳＫ１測量図

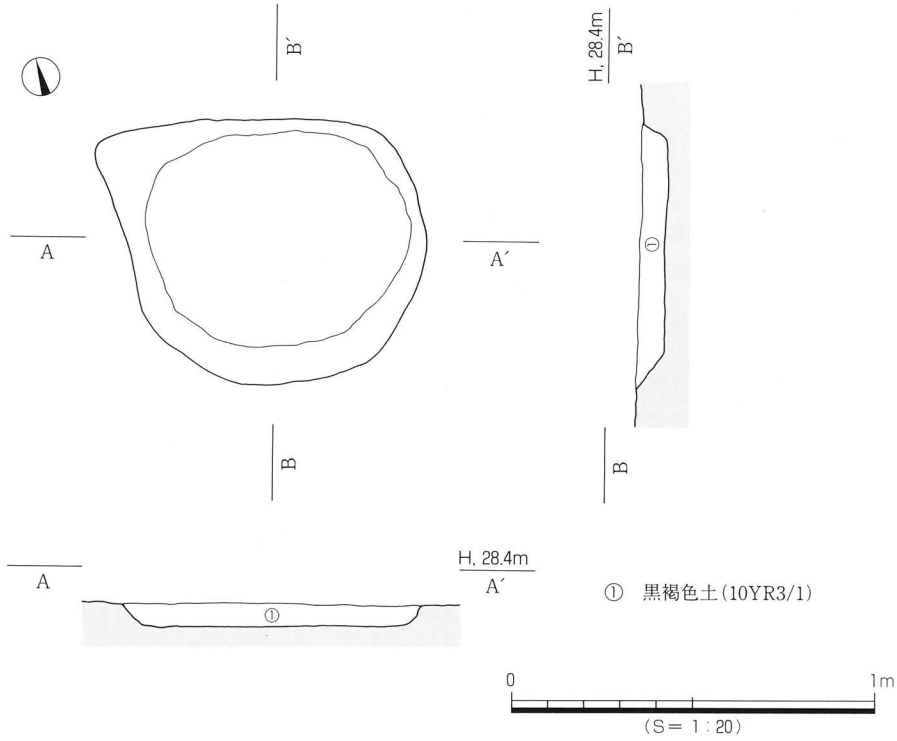


第125図　ＳＫ７測量図

ＳＫ８（第126図）

調査区東部のＣ３・４区に位置する。平面形態は不整方形を呈し、ＳＫ４の西に隣接する。規模は長軸80cm、短軸70cm、深さ６cmを測り、断面形態は浅い逆台形を呈する。埋土は黒褐色土（10ＹＲ3/1）である。遺物は土器片がわずかに出土したが、細片で図化できない。

時期：遺物が細片であることから、時期を特定できない。



第126図　ＳＫ８測量図

４．小結

今回の調査では、弥生時代後期と古墳時代後半期（５世紀末～６世紀）の遺構と遺物を確認した。以下、土層、旧地形、弥生時代の遺構と遺物、古墳時代の遺構と遺物についてまとめをする。

(1)土層

第Ⅲ層は、遺構を覆う褐灰色の土層である。この層は、上部が黒褐色土の砕ブロックを包含する褐灰色土であることから、土壌化が一部進行していた可能性がある。本層の形成は遺構埋没後の6世紀前葉以降になるが、古墳時代後半期の竪穴式住居址の遺存がきわめて悪いことから、第Ⅲ層堆積前に大規模な土地開発がおこなわれたことが分かる。

第Ⅳ層は、遺構が検出された土層である（Ⅳ－①・②層の上面）。本層は、下部に移行するに従い黄色の砂岩小礫が多くなり、粒は大きくなる傾向が認められた。第Ⅴ層は、礫は含まれず、きめの細かい粒の土である。第Ⅵ層は、やや大きく、角がとれた丸い礫を多量に含んだ硬い土である。これらの点から、第Ⅳ層以下の土層は小河川の氾濫や雨水によって再堆積したものと推察される。ただし、これらの層からは人工遺物が出土していないため、形成時期を特定することは差し控えておきたい。

(2)旧地形

遺構検出後に第Ⅳ層上面の地形測量をおこなった。その結果、調査地は南東から北西に向けて傾斜する地形であり、傾斜の高低差は15cmを測る。古墳期の遺構が埋没した後に大規模な土地開発が実施され、削平が遺構検出面にまで及んでいることから、当地の旧地形が良好な形で遺存していたとはいえない。しかし、調査地が南東から北西に展開する微高地の一角にあることは間違いなく、検出した遺構が、竪穴式住居址や掘立柱建物址等の生活に関連するものが多く、かつ遺構密度が高いことは、本調査地が微高地の頂部に立地することを示したものである。

(3)弥生時代の遺構と遺物

当該期の主要な遺構は、竪穴式住居址1棟（ＳＢ3）、土坑5基（ＳＫ3～6・12）である。竪穴式住居址と土坑は一定の間隔をあけて構築されている。ＳＢ3は、4.9×5.1mの四方が膨らむ隅丸の方形プランで、4本柱構造である。松山平野における弥生時代の竪穴式住居址は、円形プランと四角形プランが併存し、後期では後者の数は増加することが指摘されている〔梅木 1991〕。さらに後期の四角形プランのなかでは、隅丸方形が主体を占めることを明らかにしているが、本住居例は、この指摘を追認するものである。ＳＢ3は、中央には炉が設けられ、長軸の片側が段掘りとなる特異な構造をもつ。炉の床面には炭化物が敷かれた状態であり、炉の機能を考える上で興味深い資料になる。主柱穴の遺物には、柱穴掘り方埋土出土（Ｐ①）と、柱穴埋土出土（Ｐ③・④）とがある。前者は住居構築時の柱建ち上げ時、後者は住居廃絶時の柱抜き取り後の遺物と理解できる。

出土遺物の多くは土器資料であり、これは当該期の土器編年（後期Ⅱ－2）を考える上で有効な追加資料である。石器（石庖丁、砥石、敲石等）と鉄器は、当該期の利器の実態を示す事例となる。

土坑は隅丸長方形プランで、規模に大小がある。遺物は数少なく、遺構の性格を復元することは現時点では困難である。

石器資料のうち、ＳＢ3とＳＫ3から出土した石庖丁を取り上げ、前者を資料①、後者を資料②として若干ふれておきたい。ともに、緑色片岩製の完存する成品である。資料①は長方形で両端に抉りを有す。研磨はａ面と、ｂ面の刃部に限られた局部磨製品である。当平野では、局部磨製石庖丁は両端に抉りをもつ長方形にみられ、初現が弥生時代後期であることを指摘しており〔加島 1999〕、本資料はこれを追認するものである。一方、資料②は杏仁形で一孔が穿たれている。研磨は両面の全面に及ぶ磨製品である。類例として、束本遺跡4次調査地ＳＢ502出土資料（弥生後期後葉～末）がある〔高尾 1996〕。これは、背部と刃部の弧度が同じで、二孔が穿たれており、資料②とは平面形態と孔数に違いがみられる。法量的には、類似し小型で薄身である。当平野における石庖丁は、弥生時代後期には小型化・薄身に変化し、仕上げの悪い成品が増加することを、倉員は指摘しており〔倉員 1991〕、資料①と②はこれを追認するものである。

(4)古墳時代の遺構と遺物

当該期の主要な遺構は、竪穴式住居址2棟（ＳＢ1・4）、掘立柱建物址3棟（掘立1～3）、土坑2基（ＳＫ2・14）、柱穴1基（ＳＰ100）である。これらの遺構は、古墳時代後半期（5～6世紀）に帰属する。竪穴式住居址は一辺4m前後の小型（ＳＢ1）と、4.5mを超える中型（ＳＢ4）があり、規模に差異が認められる。筋違遺跡の既往の調査では、古墳時代後半期（5世紀末以降）の竪穴

小　　結

式住居址は14棟が検出されている（筋違Ｆ・Ｈ・Ｋ・Ｌ）。今回検出の住居址には北側に竈が付設されるが、煙道は壁外に出るもの（ＳＢ１）と、出ないもの（ＳＢ４）とがある。愛媛県下の作りつけの竈のうち、当該期の福音寺地区には両者が存在しており〔柴田・梅木 1992〕、本例はこれを追認するものである。

掘立柱建物址は、東西棟の建物で構成され、１×２間（掘立１と３）と、２×２間の総柱（掘立２）とがある。建物の軸線は、１×２間の建物が真北からの振れは大きい傾向にある。遺構の重複関係を根拠に、ＳＢ１→掘立３→ＳＢ４の新旧関係が考えられる。さらに、掘立２がＳＢ１を切ること、掘立２の軸線が2.5mの距離をおいてＳＢ４に並行することから、掘立２とＳＢ４が同時期に存在した可能性がある。したがって、ＳＢ１→掘立３→ＳＢ４・掘立２の時間的先後関係が推定される。さらに、掘立１はこれらの遺構と切り合い関係にないものの、ＳＢ４の建物軸線と並行しており、掘立１がＳＢ４と同時期に存在する可能性は高い。したがって、本調査地の建物は５世紀末～６世紀初頭の短期間に変遷していたことを想定しておく。

土坑は不整の隅丸長方形プランで、規模は弥生期に比べて大きい傾向がある。ＳＫ２出土の須恵器の坏身と管玉は、当該期の集落内における祭祀を考える上でひとつの資料となる。柱穴ではＳＰ100で新たな知見が得られている。すなわち、須恵器の坏蓋を用いた柱穴祭祀を確認できたことである。坏蓋は意図的に口縁部の大半が打ち欠かれ、柱抜き取り後に坏蓋を直立状態で据え置いたことが調査によって明らかにできた。本柱穴によって構成される建物は明らかではないものの、当時の祭祀行為を確認できたことは注目される。今後の類例を期待したい。

以上、本調査の若干のまとめを試みた。本遺跡がある福音寺地区の北側微高地には、筋違Ｅ・Ｆ・Ｈ・Ｉ・Ｋ・Ｌが立地する。これらの調査では、弥生時代前期の土坑６基（筋違Ｆ・Ｌ）、後期の竪穴式住居址２棟（筋違Ｆ）が検出されており、弥生時代前期に集落が存在した可能性があり、後期には本格的に集落が経営され始めている〔梅木 1996、河野 1998〕。

本調査の成果は、既往の調査を追認する資料を得たことである。また、古墳時代後半期の生活関連遺構が数多く検出されたことは、当該期に集落の経営は充実し、かつ当地を含めた周辺が集落における居住域の中心地帯の一角であったことを示すものである。当地区の北側微高地における居住域の北端を確認できたことは、集落の広がりを考える上で参考となる。さらには、本調査地周辺の現地形とあわせると、調査地が微高地北西部の一角に位置し、現地表面の標高29～28mのコンターラインを結んだ、東西300m、南北150mの範囲が当地区における主要な居住域として設定できる。今後の調査で検証を進めていきたい。

【参考文献】

梅木謙一　1991　「松山平野の竪穴式住居址（Ⅰ）」『松山大学構内遺跡第２次調査』松山市文化財調査報告書20

加島次郎　1999　「竹本コレクションを見て」松山市考古館平成10年度新収蔵品展記念フォーラム資料

髙尾和長　1996　『束本遺跡４次調査』松山市文化財調査報告書54

倉員伸明　1991　「道後平野の石庖丁の展開」『文京遺跡第10次調査』愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ

柴田昌児・梅木謙一 1992　「愛媛県」『古墳時代の竈を考える』第32回埋蔵文化財研究集会